飯倉唐木遺跡

—飯倉C遺跡第2次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第387集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

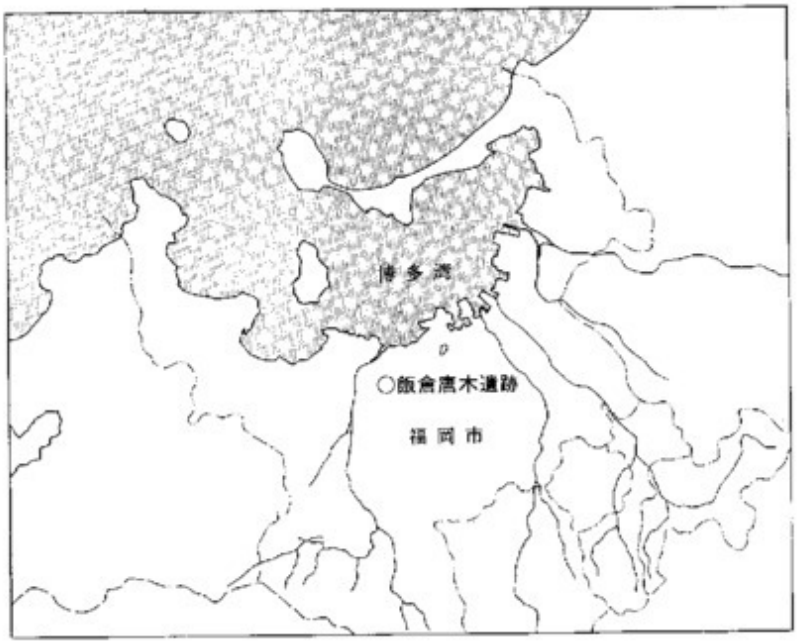
1994

福岡市教育委員会

いいくらからさ

飯倉唐木遺跡

―飯倉C遺跡第2次調査―



遺跡略号　IKR-C-2

遺跡調査番号　9063

1994

福岡市教育委員会

題字は杉山悦子氏の揮毫による

序

早良平野の東縁には、油山の西麓から派生した低丘陵が北へ長くのび、丘陵上には縄文時代から歴史時代の遺跡が数多く点在しています。

飯倉唐木遺跡は、この七隈から飯倉へと続く低丘陵の中央部にあり、昭和38年には崩落した甕棺墓から副葬された細形銅剣が発見されていました。

今回の調査では、細形銅剣や素環頭鉄刀などを副葬した甕棺墓と古墳時代の低墳丘墳や竪穴住居跡群を検出しました。殊に、銅剣や鉄刀を副葬した甕棺墓の発見は早良平野の開口部に望む飯倉唐木遺跡の重要性を如実に物語っています。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導、ご協力をいただきました。殊に、三王システム株式会社の妹尾政幸氏をはじめとする関係各位には多大の助力を賜りました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区飯倉六丁目における分譲住宅造成に先立って、1991年（平成3年）3月から8月に緊急調査した飯倉遺跡（飯倉遺跡C地区第2次調査）の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は呼称を記号化し、竪穴住居跡をSC、甕棺墓をST、土壙墓をSR、土壙をSK、古墳をSO、ピットをSPとし、その後に遺構Noを各遺構毎に付した。
4．本書に掲載した遺構と遺物の実測は、小林義彦・大塚紀宣・尾園　晃・八丁出香・木次谷尚子・黒田和生・矢　豪之が分担してあたった。
5．本書に掲載した遺構・遺物の製図は、小林・大塚・八丁と藤村佳公夫が分担して浄書した。
6．本書に掲載した写真は遺構・遺物とも小林が撮影した。
7．本書の執筆は、Ⅳ-2を大塚が執筆し、その外は小林が担当した。Ⅳ-3は本田光子氏に分析を依頼し、原稿をいただいた。
8．本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
9．本書の編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：9063	遺跡略号：IKR-C	分布地図番号：73-A-3
調査地籍：福岡市早良区飯倉六丁目15番2		
工事面積：4,243㎡	調査対象面積：1,605㎡	調査実施面積：1,861㎡
調査期間：1991年3月11日～8月27日		

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査にいたるまで …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．立地と歴史的環境 …… 3
　1．立地と歴史的環境 …… 3
　2．これまでの調査 …… 6
Ⅲ．調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　2．弥生時代の調査 …… 9
　　竪穴住居跡 …… 10
　　甕棺墓 …… 12
　　土壙墓 …… 50
　3．古墳時代の調査 …… 63
　　竪穴住居跡 …… 64
　　掘立柱建物跡 …… 91
　　土壙墓 …… 93
　　土壙 …… 94
　　古墳 …… 96
　4．中世の調査 …… 103
　　土壙墓 …… 104
　　火葬墓 …… 106
　5．その外の遺構と包含層出土の遺物 …… 108
Ⅳ．おわりに …… 112
　1．弥生墳墓の構造と変遷 …… 112
　2．甕棺の形態的分析とその編年的考察 …… 115
　3．飯倉唐木遺跡出土の赤色顔料について …… 123

挿図目次

Fig. 1．周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 2
Fig. 2．飯倉唐木遺跡周辺地形図（明治33年、1/25,000） …… 4
Fig. 3．飯倉唐木遺跡位置図（1/5,000） …… 5
Fig. 4．調査区周辺現況図（1/1,500） …… 6
Fig. 5．現況測量図（1/400） …… 8
Fig. 6．弥生時代の遺構配置図（1/500） …… 9
Fig. 7．8・15・28号住居跡実測図（1/80） …… 10

Fig. 8. 15・28号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 11
Fig. 9. 1号甕棺墓実測図（1/30） …… 12
Fig. 10. 1号甕棺実測図（1/12） …… 13
Fig. 11. 1号甕棺墓出土鉄刀実測図（1/3） …… 13
Fig. 12. 2～6号甕棺墓実測図（1/30） …… 14
Fig. 13. 2・4号甕棺実測図（1/12） …… 15
Fig. 14. 5・6号甕棺実測図（1/12） …… 16
Fig. 15. 7～10号甕棺墓実測図（1/30） …… 17
Fig. 16. 7・8号甕棺実測図（1/12） …… 18
Fig. 17. 9号甕棺実測図（1/6） …… 18
Fig. 18. 10号甕棺実測図（1/6） …… 19
Fig. 19. 10号甕棺墓副葬銅剣実測図（1/2） …… 19
Fig. 20. 11・13～17号甕棺墓実測図（1/30） …… 20
Fig. 21. 11・15号甕棺実測図（1/6） …… 21
Fig. 22. 12～14・16・17号甕棺実測図（1/12） …… 22
Fig. 23. 7・15～17号甕棺墓副葬小壺実測図（1/4） …… 23
Fig. 24. 18～23号甕棺墓実測図（1/30） …… 24
Fig. 25. 18・21・22号甕棺実測図（1/12） …… 25
Fig. 26. 19・20号甕棺実測図（1/6） …… 26
Fig. 27. 23号甕棺実測図（1/6） …… 27
Fig. 28. 24～27号甕棺墓実測図（1/30） …… 28
Fig. 29. 24～27号甕棺実測図（1/12） …… 29
Fig. 30. 28～32号甕棺墓実測図（1/30） …… 30
Fig. 31. 28～31号甕棺実測図（1/12） …… 31
Fig. 32. 25・30・48号甕棺墓副葬小壺実測図（1/4） …… 32
Fig. 33. 33～36号甕棺墓実測図（1/30） …… 33
Fig. 34. 32～35号甕棺実測図（1/12） …… 35
Fig. 35. 36号甕棺実測図（1/12） …… 36
Fig. 36. 36号甕棺墓副葬管玉・石器実測図（1/1） …… 36
Fig. 37. 37～42号甕棺墓実測図（1/30） …… 37
Fig. 38. 37～39号甕棺実測図（1/12） …… 38
Fig. 39. 40・42号甕棺実測図（1/6） …… 39
Fig. 40. 43～46号甕棺墓実測図（1/30） …… 40
Fig. 41. 43・44号甕棺実測図（1/12） …… 41
Fig. 42. 45・46号甕棺実測図（1/12） …… 42
Fig. 43. 45号甕棺墓副葬石製品実測図（1/1） …… 43
Fig. 44. 47～49号甕棺墓実測図（1/30） …… 43
Fig. 45. 47～49号甕棺実測図（1/12） …… 44
Fig. 46. 50号甕棺墓実測図（1/30） …… 45
Fig. 47. 51号甕棺墓実測図（1/30） …… 46

Fig. 48.　50・51号甕棺実測図（1/12）…… 47
Fig. 49.　52～54号甕棺墓実測図（1/30）…… 48
Fig. 50.　52～54号甕棺実測図（1/12）…… 49
Fig. 51.　1・2・4号土壙墓実測図（1/40）…… 51
Fig. 52.　5・7・8号土壙墓実測図（1/40）…… 52
Fig. 53.　9～14号土壙墓実測図（1/40）…… 53
Fig. 54.　9号土壙墓出土石器実測図（1/1）…… 54
Fig. 55.　15～17号土壙墓実測図（1/40）…… 55
Fig. 56.　18～24号土壙墓実測図（1/40）…… 56
Fig. 57.　25・26号土壙墓実測図（1/60）…… 58
Fig. 58.　27～32号土壙墓実測図（1/40）…… 59
Fig. 59.　11・26・27号土壙墓出土土器実測図（1/4）…… 60
Fig. 60.　29号土壙墓出土石器実測図（1/1）…… 60
Fig. 61.　33～38号土壙墓実測図（1/40）…… 62
Fig. 62.　古墳時代の遺構配置図（1/500）…… 63
Fig. 63.　1号住居跡実測図（1/80）…… 64
Fig. 64.　1号住居跡出土土器・石器実測図（1/4・1/2）…… 64
Fig. 65.　2・3号住居跡実測図（1/80）…… 65
Fig. 66.　2号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 66
Fig. 67.　2号住居跡出土石器実測図（1/1・1/2）…… 67
Fig. 68.　3号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 67
Fig. 69.　3号住居跡出土石製品・石器実測図（1/1・1/2）…… 68
Fig. 70.　4号住居跡実測図（1/80）…… 69
Fig. 71.　4号住居跡竈実測図（1/20）…… 69
Fig. 72.　4号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 70
Fig. 73.　4号住居跡出土石器・玉実測図（1/3・1/1）…… 71
Fig. 74.　5号住居跡実測図（1/80）…… 72
Fig. 75.　5号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 73
Fig. 76.　6・7号住居跡実測図（1/80）…… 74
Fig. 77.　6・7号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 75
Fig. 78.　9・10号住居跡実測図（1/80）…… 75
Fig. 79.　11・12号住居跡実測図（1/80）…… 76
Fig. 80.　9・11・12号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 76
Fig. 81.　5～7・12号住居跡出土石製品・土製品実測図（1/3）…… 77
Fig. 82.　13・14号住居跡実測図（1/80）…… 78
Fig. 83.　14号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 79
Fig. 84.　14号住居跡出土石製品実測図（1/2）…… 80
Fig. 85.　16・17号住居跡実測図（1/80）…… 80
Fig. 86.　16・17号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 81
Fig. 87.　17号住居跡出土石器実測図（1/1）…… 81

Fig. 88. 18～20号住居跡実測図（1/80） …… 82
Fig. 89. 18・19号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 83
Fig. 90. 21・22号住居跡実測図（1/80） …… 84
Fig. 91. 22号住居跡出土土器・石器実測図（1/4） …… 85
Fig. 92. 23～27号住居跡実測図（1/80） …… 85
Fig. 93. 23～27号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 86
Fig. 94. 24・26号住居跡出土土製品・玉実測図（1/2・1/1） …… 87
Fig. 95. 29号住居跡実測図（1/80） …… 87
Fig. 96. 29号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 88
Fig. 97. 29号住居跡出土石製品・石器実測図（1/1・1/3） …… 88
Fig. 98. 31～33号住居跡実測図（1/80） …… 89
Fig. 99. 30・33号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 90
Fig.100. 1～4号掘立柱建物跡実測図（1/100） …… 91
Fig.101. 5～7号掘立柱建物跡実測図（1/100） …… 92
Fig.102. 1号掘立柱建物跡出土石製品実測図（1/1） …… 93
Fig.103. 6号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4） …… 93
Fig.104. 6号土壙墓実測図（1/40） …… 94
Fig.105. 6号土壙墓出土土器実測図（1/4） …… 94
Fig.106. 1～3号土壙実測図（1/30） …… 95
Fig.107. 1号土壙土器・玉実測図（1/2・1/1） …… 95
Fig.108. 1～4号墳墳丘現況測量図（1/200） …… 96
Fig.109. 1号墳地山整形測量図（1/200） …… 97
Fig.110. 1号墳出土土器実測図（1/4） …… 98
Fig.111. 1号墳出土鉄器実測図（1/3） …… 98
Fig.112. 2号墳地山整形測量図（1/200） …… 99
Fig.113. 2号墳出土土器実測図（1/4） …… 99
Fig.114. 1・2号墳出土石器実測図（1/1） …… 99
Fig.115. 3号墳地山整形測量図（1/200） …… 100
Fig.116. 4号墳地山整形実測図（1/200） …… 100
Fig.117. 4号墳周溝内遺物出土状況図（1/20） …… 101
Fig.118. 4号墳出土土器実測図（1/4） …… 102
Fig.119. 中世の遺構配置図（1/500） …… 103
Fig.120. 3号土壙墓実測図（1/30） …… 104
Fig.121. 3号土壙墓出土土器実測図（1/4） …… 104
Fig.122. 3号土壙墓出土釘実測図（1/2） …… 105
Fig.123. 1・2号火葬墓実測図（1/30） …… 106
Fig.124. 3・12号火葬墓実測図（1/40） …… 107
Fig.125. 土壙・ピット出土土器実測図（1/4） …… 108
Fig.126. 包含層出土土器実測図（1/4） …… 109
Fig.127. 包含層出土土器実測図（1/4） …… 110
Fig.128. 包含層出土石器実測図（1/1） …… 111

Fig.129. 飯倉唐木遺跡出土銅剣実測図（1/4）……112
Fig.130. 早良平野における青銅武器の分布状況……113
Fig.131. 飯倉唐木遺跡甕棺分布図（1/300）……116
Fig.132. 弥生前期～中期初頭甕棺編年図（甕棺縮尺は1/24）……119

図版目次

PL. 1. (1). 調査区近景（南西より）　(2). II区全景（北東より）
PL. 2. I区全景（西より）
PL. 3. (1). 8号住居跡（東より）　(2). 14・15号住居跡（東より）
(3). 甕棺墓群全景（北より）　(4). 1号甕棺墓（東より）
(5). 1号甕棺墓鉄刀出土状況（東より）　(6). 2号甕棺墓（北より））
PL. 4. (1). 3号甕棺墓（西より）　(2). 4～8号甕棺墓（東より）
(3). 5～6号甕棺墓（東より）　(4). 7号甕棺墓（東より）
(5). 8号甕棺墓（東より）　(6). 9号甕棺墓（南西より）
PL. 5. (1). 10・11号甕棺墓（西より）　(2). 12号甕棺墓（南より）
(3). 13～16号甕棺墓（北より）　(4). 15号甕棺墓（西より）
(5). 16号甕棺墓（東より）　(6). 16号甕棺墓墓壙内副葬土器（西より）
PL. 6. (1). 17～20号甕棺墓（東より）　(2). 17号甕棺墓（西より）
(3). 18号甕棺墓（北東より）　(4). 20号甕棺墓（東より）
(5). 21・22号甕棺墓（北より）　(6). 23号甕棺墓（東より）
PL. 7. (1). 24号甕棺墓（西より）　(2). 25～27号甕棺墓（北より）
(3). 25号甕棺墓（東より）　(4). 25号甕棺墓断面（西より）
(5). 26号甕棺墓（西より）　(6). 27号甕棺墓（西より）
PL. 8. (1). 28号甕棺墓（西より）　(2). 29号甕棺墓（北東より）
(3). 30号甕棺墓（西より）　(4). 31号甕棺墓（南より）
(5). 32号甕棺墓（東より）　(6). 33～36号甕棺墓（北より）
PL. 9. (1). 33号甕棺墓（西より）　(2). 34号甕棺墓（西より）
(3). 35号甕棺墓（東より）　(4). 36・48号甕棺墓（北より）
(5). 36号甕棺墓（西より）　(6). 36号甕棺墓断面（西より）
PL.10. (1). 37号甕棺墓（西より）　(2). 38号甕棺墓（東より）
(3). 23・24・29・41～43号甕棺墓（西より）　(4). 42号甕棺墓（東より）
(5). 43号甕棺墓（東より）　(6). 44号甕棺墓（西より）
PL.11. (1). 7・45・46号甕棺墓（西より）　(2). 45号甕棺墓（西より）
(3). 46号甕棺墓（西より）　(4). 47号甕棺墓（東より）
(5). 48号甕棺墓（西より）　(6). 50号甕棺墓（東より）
PL.12. (1). 51号甕棺墓（南より）　(2). 52号甕棺墓（西より）
(3). 53号甕棺墓（東より）　(4). 1号土壙墓（西より）
(5). 2号土壙墓（東より）　(6). 3～5号土壙墓（北より）
PL.13. (1). 7・8号土壙墓（西より）　(2). 9・10号土壙墓（西より）
(3). 11号土壙墓（西より）　(4). 12号土壙墓（東より）
(5). 13・14号土壙墓（北より）　(6). 15号土壙墓（北より）

PL.14. (1). 16・17号土壙墓（西より）　(2). 18号土壙墓（北より）
(3). 19号土壙墓（北より）　(4). 20号土壙墓（東より）
(5). 21号土壙墓（北より）　(6). 22～24号土壙墓（北より）
PL.15. (1). 25～27号土壙墓（南より）　(2). 25号土壙墓（北より）
(3). 26号土壙墓（東より）　(4). 29号土壙墓（北より）
(5). 30号土壙墓（東より）　(6). 31号土壙墓（東より）
PL.16. (1). 32号土壙墓（南より）　(2). 33号土壙墓（北より）
(3). 34号土壙墓（西より）　(4). 35・36号土壙墓（南東より）
(5). 37号土壙墓（南より）　(6). 38号土壙墓（東より）
PL.17. (1). 1号住居跡（西より）　(2). 1号住居跡遺物出土状況（北より）
(3). 2・3号住居跡（東より）　(4). 2号住居跡（東より）
(5). 4号住居跡（東より）　(6). 4号住居跡竈土層断面（東より）
PL.18. (1). 東斜面住居跡群（東より）　(2). 5～7号住居跡（東より）
(3). 5号住居跡（東より）　(4). 5号住居跡遺物出土状況（東より）
(5). 5号住居跡遺物出土状況（北より）　(6). 6号住居跡（東より）
PL.19. (1). 8～10号住居跡（東より）　(2). 11・12号住居跡（東より）
(3). 13号住居跡（東より）　(4). 14・15号住居跡（北より）
(5). 14号住居跡竈（北より）　(6). 14号住居跡竈断面（南より）
PL.20. (1). 16・17号住居跡（東より）　(2). 16号住居跡竈断面（南より）
(3). 17号住居跡（西より）　(4). 19・20号住居跡（南より）
(5). 18号住居跡（東より）　(6). 18号住居跡遺物出土状況（南より）
PL.21. (1). 19～22号住居跡（北東より）　(2). 22号住居跡（南より）
(3). 23～28号住居跡（北より）　(4). 23～28号住居跡（西より）
(5). 29号住居跡（北より）　(6). 31～33号住居跡（東より）
PL.22. (1). 1号掘立柱建物跡（西より）　(2). 2・3号掘立柱建物跡（西より）
(3). 4号掘立柱建物跡（南より）　(4). 5号掘立柱建物跡（南より）
(5). 7号掘立柱建物跡（北より）　(6). 6号土壙（北より）
PL.23. (1). 1～4号墳（南より）　(2). 1～4号墳（西より）
(3). 1号墳（西より）　(4). 1・3号墳（東より）
(5). 1号墳周溝内遺物出土状況（北より）　(6). 1号墳周溝内遺物出土状況（南東より）
PL.24. (1). 2～4号墳（西より）　(2). 2号墳（南より）
(3). 3号墳（西より）　(4). 4号墳（西より）
(5). 4号墳周溝内遺物出土状況（東より）　(6). 1・3・4号墳土層断面（西より）
PL.25. (1). 3号土壙墓（東より）　(2). 3号土壙墓遺物出土状況（南より）
(3). 1号火葬墓（東より）　(4). 2号火葬墓（東より）
(5). 3～8号火葬墓（西より）　(6). 9～12号火葬墓（東より）
PL.26. 出土甕棺（1／8・1／16）
PL.27. 出土甕棺（1／16）
PL.28. 出土甕棺（1／16）
PL.29. 出土遺物（1／4）
PL.30. 鉄器（1／2）、青銅器（1／2）、石製品（1／1・1／2）

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたるまで

福岡市西部に拡がる早良平野の東縁には、油山の西麓から派生した低丘陵が長くのび、その眼下には青々とした水田が拡がる豊かな田園地帯でした。しかし、急速にすすむ人口の増加は郊外の市街化を推し進め、丘陵上や平野は次々と宅地化している。

本遺跡のある飯倉六丁目も例外ではなく、旧船越栄一氏宅の裏山を除く一帯には家々が建ち並んでいる。三王システム株式会社では、旧宅を含む丘陵一帯を分譲住宅として開発する計画が立案され、その旨の申請が1990（平成3）年に埋蔵文化財課に提出された。しかし、申請地は1963（昭和38）年に船越氏宅の建設に際して細形銅剣を副葬した甕棺墓が発見されており、「飯倉唐木遺跡」として著名な遺跡であった。現地踏査の結果、丘陵の南側崖面や緩斜面上で数基の甕棺墓が確認されたが、開発計画の変更が不可避なことから発掘調査による記録保存を図った。

発掘調査では、弥生時代前期～中期後半の甕棺墓や土壙墓、古墳時代の竪穴住居跡群や低墳丘墳など予想を遥かに越える遺構群を検出した。なかでも甕棺墓には細形銅剣や素環頭鉄刀、碧玉製管玉等が副葬されていた。合わせて3月末から7月中旬には例年にない長雨が続き、調査の進捗に支障をきたしたが、三王システム株式会社の妹尾政幸氏を初めとする関係各位のご理解を得て8月末日に発掘調査は終了した。ここに記して謝意を表します。

2．発掘調査の組織

調査委託　三王システム株式会社　妹尾政幸

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

庶務担当　第1係長　飛高憲雄（前任）　横山邦継（現任）　吉田麻由美

調査担当　小林義彦

調 査 員　尾園晃（現桂川町教育委員会）大塚紀宜（九州大学大学院）八丁由香　藤村佳公恵

調査・整理作業　木次谷尚子（奈良大学）大瀬良省吾　尾崎達也　金子啓佑　百武義隆
植木由紀子　大瀬良清子　尾崎八重　海津宏子　金子由利子　金子ヨシ子
菊地栄子　久保喜代子　坂田美佐子　柴田タツ子　柴田常人　正崎由須子
高塚知江　土斐崎孝子　中山稔子　馬場イツ子　林嘉子　平野ミサオ　堀ウメ子
松本藤子　三栗野明美　村嶋里子　村田悦子　門司弘子　矢川みどり
家迫千代　矢富富士子　和田裕見子

また、発掘調査・整理報告では、後藤直　山崎澄男　力武卓二　松村道博　浜石哲也　杉山富雄氏のほか多くの方々のご指導と助言を得た。記して謝意を表します。

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1．飯倉唐木遺跡
2．百新町遺跡
3．藤崎遺跡
4．有田・小山部遺跡群
5．原峡俵遺跡
6．原遺跡
7．飯倉遺跡
8．原深町遺跡
9．飯介A遺跡
10．千隈遺跡
11．剣山町遺跡
12．梅林古墳群
13．七隈古墳群

Ⅱ．立地と歴史的環境

1．立地と歴史的環境

早良平野は福岡市の西部に拡がる狭小な平野で、南は背振山地に囲まれ、北は博多湾にむかって開口する。また、東は油山山塊に福岡平野と、西は飯盛山から長垂山とつづく山塊によって糸島平野と遮られている。この平野は、背振山地から流れ出した室見川によって造り出された沖積地と海岸砂丘からなり、平野内には第三紀丘陵と洪積台地が点在している。

この早良平野の東縁には、油山の西麓から派生した低丘陵がある。この丘陵は、干隈から飯倉にかけて狭小な谷を造りながら北へむかって八ツ手状に長くのびる。飯倉唐木遺跡は、この飯倉丘陵中央部の西縁にあり、丘陵から西方の平野にむかって舌状に短く突き出した支丘の緩斜面上に立地する。

飯倉丘陵から西油山の西麓を中心とする早良平野東縁は、「(七隈原には)古き塚多し。窟あり。」や「野芥村には石窟廿五ケ所あり。国俗鬼塚と云。」、「西油山には鬼塚とて石窟廿許あり。」などと貝原益軒著の「筑前國続風土記」に記され、多くの遺跡が古くから知られていた。早良平野での本格的発掘調査は、1967(昭和42)年の有田遺跡の調査に始まり、開発に伴う緊急発掘調査の増加とともに旧石器時代から中世まで多くの遺跡が知られるようになった。

旧石器時代の遺物包含層や遺構は明らかでないが、丘陵上に立地するカルメル修道院遺跡や干隈熊添(飯倉E)遺跡、五ケ村池遺跡から尖頭器やナイフ型石器が出土している。

縄文時代では、前期の曽畑式土器が出土した五ケ村池遺跡のほかに熊添(飯倉E)遺跡、梅林七夕(飯倉G)遺跡、クエゾノ遺跡等があり、重留古墳群の調査でも前期や後期の土器が出土している。また、室見川右岸の四箇遺跡や田村遺跡では早期から晩期の遺構や遺物が確認されており、遺跡は早良平野の沖積地全域に拡大していく。

弥生時代になると、早良王墓として著名な吉武遺跡群を頂点として遺跡は平野全域に急速に拡大していく。田村遺跡や重留遺跡では、前期初頭の墳墓や集落跡が確認され、油山西麓の岩隈遺跡や浦田遺跡では前期末から中期末の甕棺墓や土壙墓が調査されている。飯倉丘陵上では中期後半の甕棺墓に錫銅を副葬したカルメル修道院遺跡がある。「飯倉唐木」遺跡では、1963(昭和38)年に出土した細形銅剣に加えて前期末の甕棺墓には細形銅剣と碧玉製管玉が、中期後葉の甕棺墓には素環頭鉄刀が副葬されていた。後期には木棺墓に小型仿製鏡を副葬した干隈(飯倉G)遺跡がある。また、西方の有田遺跡で銅戈が、南方の東入部遺跡では細形銅剣や銅鏃、素環頭刀子などの鉄製武器が前期末から中期後半の甕棺墓や土壙墓に副葬されている。しかし、室見川左岸の吉武遺跡群の土壙墓、甕棺墓とは隔世の感があり、平野内における両者の関係を如実に物語っている。

古墳時代になると、丘陵上や平野部に集落跡が営まれる。飯倉F遺跡では、前期の竪穴住居跡が、飯倉C・G遺跡や野芥遺跡では後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙などが確認されている。また、平野内の東入部遺跡や田村遺跡、四筒遺跡では、前期の竪穴住居跡やその生産活動に伴う水田の水利施設などが確認されている。

一方、首長墓としての古墳は、前期には前方後方墳の京の隈古墳と前方後円墳の拝塚古墳がある。京の隈古墳の埋葬主体は木棺直葬の粘土槨であり、拝塚古墳の墳丘上に円筒、壺形、朝顔形の埴輪や家形、囲形、楯、鞆、草摺、武人などの形象埴輪が巡らされていた。後期の前方後円墳には、神松寺古墳や梅林古墳があり、早良平野の東部域を支配する首長墓が継続的に造墓されている。また、後期には小円墳からなる群集墳がいくつも造営される。丘陵上には干隈古墳群や七隈古墳群があり、西油山山麓には駄ケ原古墳群、影塚古墳群、縛ケ滝古墳群、重留古墳群、三郎丸古墳群などが点在している。また、飯倉丘陵上には、6群7基からなる飯倉古墳群があるがD群を除いてはいずれも単独墳である。

古代から中世にかけては＝伊鄕、野芥荘と云われ、飯倉C・F遺跡で奈良時代から中世の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。また、飯倉G遺跡では奈良時代の鍛冶炉や土壙墓、干隈(飯倉E)遺跡では中世末の火葬墓が調査されているが、遺跡の中心は田村遺跡や重留遺跡などの平野部に移ってゆき、丘陵上は生産や墳墓の地として利用されていくにすぎなくなる。

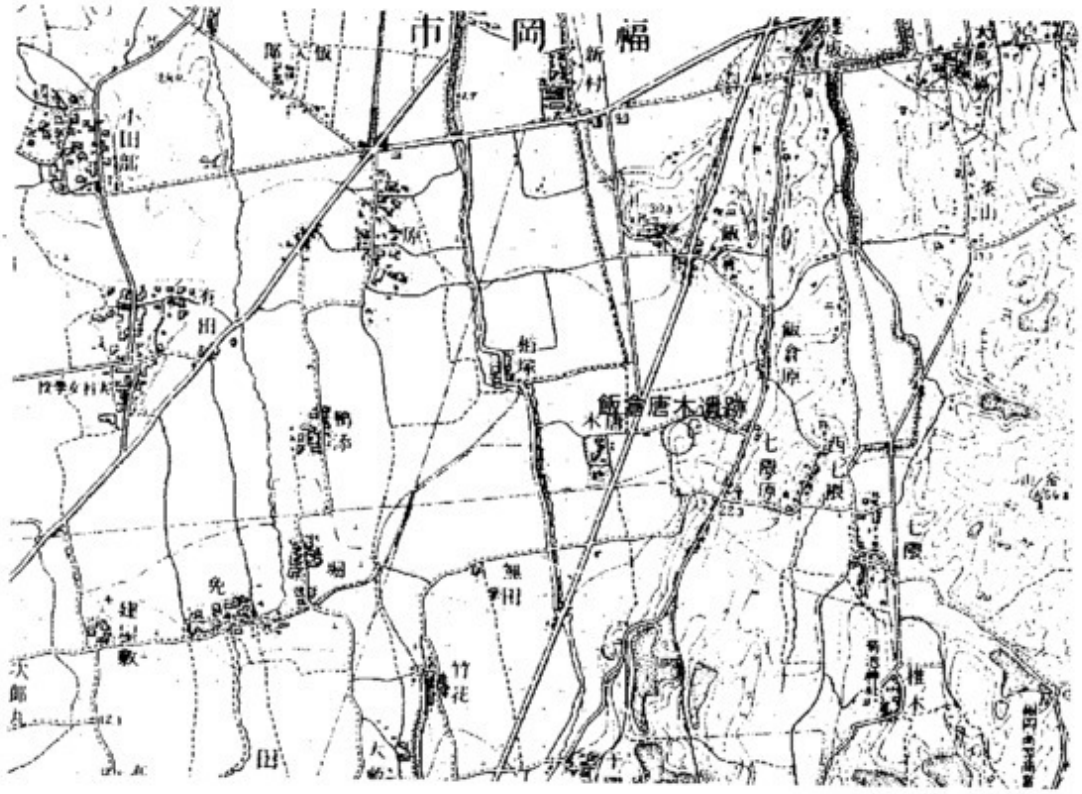


Fig.2 飯倉唐木遺跡周辺地形図（明治33年、1/25,000）

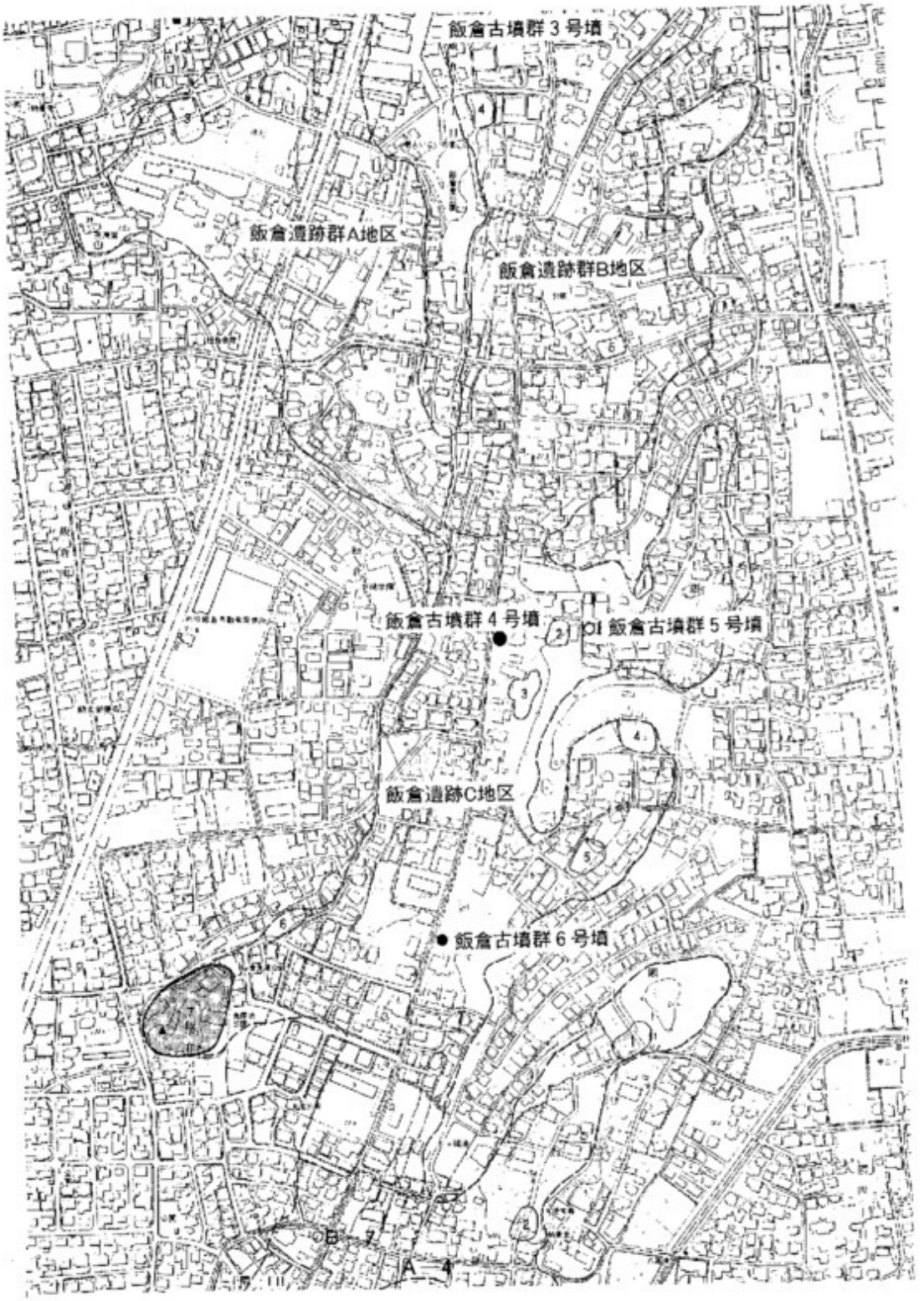


Fig.3 飯倉唐木遺跡位置図（1/5,000）

2．これまでの調査

干隈から飯倉とへつづく丘陵上には縄文時代から中世の遺構群が拡がっているが、丘陵上の宅地化が昭和30年代から進み、1978（昭和53）年の分布調査時にはその実体は明らかでなかった。しかし、近年の宅地開発や公園建設に伴う緊急発掘の増加で、その様相は次第に明らかになりつつある。飯倉F遺跡では、1989（平成1）年からの3次に亘る調査で、弥生時代中～後期の竪穴住居跡と甕棺墓、古墳時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、奈良時代の竪穴住居跡、溝、焼土壙などが確認されている。飯倉G遺跡でも1989（平成1）年から3次の発掘調査が実施され、弥生時代の土壙墓と小型仿製鏡を副葬した木棺墓、古墳時代の竪穴住居跡と溝、土壙、古代～中世の掘立柱建物跡、土壙墓、鍛冶炉などが検出されている。また、飯倉H遺跡でも1989（平成1）年に発掘調査され、弥生時代中期の甕棺墓と前方後円墳（梅林古墳）が確認されている。

1963（昭和38）に飯倉唐木（飯倉C遺跡第2次調査区）遺跡から出土した細形銅剣はこのような状況下での発見である。しかし、近年の宅地開発や公園建設に伴う緊急発掘の増加で、その様相は次第に明らかになりつつある。

第1次調査（1989）；飯倉丘陵の中央部東側の緩斜面上に立地する。弥生時代の溝、古墳時代後期の竪穴住居跡と土壙墓のほかに古墳時代～中世の掘立柱建物跡が確認されている。

第2次調査（1991）；飯倉唐木遺跡。1963（昭和38）年に甕棺墓と細形銅剣が発見されている。

第3次調査（1991）；第1次調査区の北方120mの緩斜面上にあり、東側には狭い谷が北から貫入している。弥生時代中期後半の土壙と古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡、溝が確認されている。

Fig.4 調査区周辺現況図（1/1,500）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の記録

飯倉唐木遺跡は、早良平野東縁に細長くのびる低丘陵の中央部にあたり、丘陵尾根から平野にむかって短く舌状に突き出した支丘上に立地する。この丘陵の尾根筋には6群7基の小円墳が点在するが、1978（昭和53）年の分布調査時には既に宅地化して、詳細は明らかではなかった。

飯倉唐木遺跡は、福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）により「飯倉遺跡群C地区」として周知化された遺跡中に含まれるが、その初現は1963（昭和38）年の細形銅剣を副葬する甕棺墓の発見に始まる。しかし、遺跡の引用例によっては飯倉丸尾遺跡、飯倉原遺跡などと呼称に混乱が生じており、改めて飯倉遺跡群C地区第2次調査区を「飯倉唐木遺跡」として呼称の統一を図りたい。

調査区は、丘陵尾根から短く突き出した舌状丘陵の北西端にあたり、現況は雑木林となっていた。丘陵の東側と南側は宅地造成による開削で旧状を留めていないが、元来は南北370m、東西170mほどの支丘が平野にむかって小さく突き出していた（Fig.2）。また、調査区の北西部は東西25m、南北30mに亘って弧状に削平されている。これは1963（昭和38）年の宅地造成によるもので、弥生時代前期末～中期の甕棺とともに発見された細形銅剣は、この時のものである。

発掘調査前の所見によれば、南西側の崖面には甕棺墓が露呈し、緩斜面上では須恵器や土師器片が採集され、古墳時代の竪穴住居跡などの存在も予想された。また、西側には宅地造成による削平を免れた舌状丘陵の西端部が遺存していた。

発掘調査は、丘陵上（Ⅰ区）と申請地西部の緩斜面（Ⅱ区）の2区画に分けて実施した。初めに調査に先立って丘陵上に繁茂する雑木の伐採を行い、その伐開後にⅡ区の調査、次に丘陵上のⅠ区の調査とつづけて実施した。その結果、Ⅱ区ではピット等を検出したが、遺構の遺存状況は希薄であった。Ⅰ区では丘陵全域で弥生時代中期後半の竪穴住居跡3棟、弥生時代前期後半～中期末の甕棺墓54基、土壙墓36基、古墳時代後期の竪穴住居跡30棟、掘立柱建物跡7棟、土壙墓1基、円墳1基と中期の方墳3基のほかに中世の土壙墓1基と火葬墓2基など事前の予想を遙かに凌ぐ多くの遺構を検出した。なかでも細形銅剣（10号甕棺墓）や素環頭鉄刀（1号甕棺墓）、碧玉製管玉（36号甕棺墓）を副葬する甕棺墓の検出は、1963（昭和38）年に発見された細形銅剣とともに早良平野における弥生時代の国家形成のプロセスを示す一証左となろう。竪穴住居跡は、丘陵上と西側緩斜面のほか削平が予想された東側斜面でも検出され、丘陵面における集落域の展開と開発の在り様の一端を窺わせる。また、調査区の北側では埋葬主体部の消失した円墳（1号墳）を検出した。この円墳は方墳（3号墳）の墳丘上に築造された古墳であることが判明し、南北に並ぶ低墳丘の方墳（2・4号墳）と合わせて古墳は4基を検出した。現況測量時には4号墳が円形に僅かに起伏し、1号墳は北側が1段低くなっていたのみで古墳の存在はまったく予想されなかった。このような成果を挙げて、8月27日に発掘調査はすべて終了した。

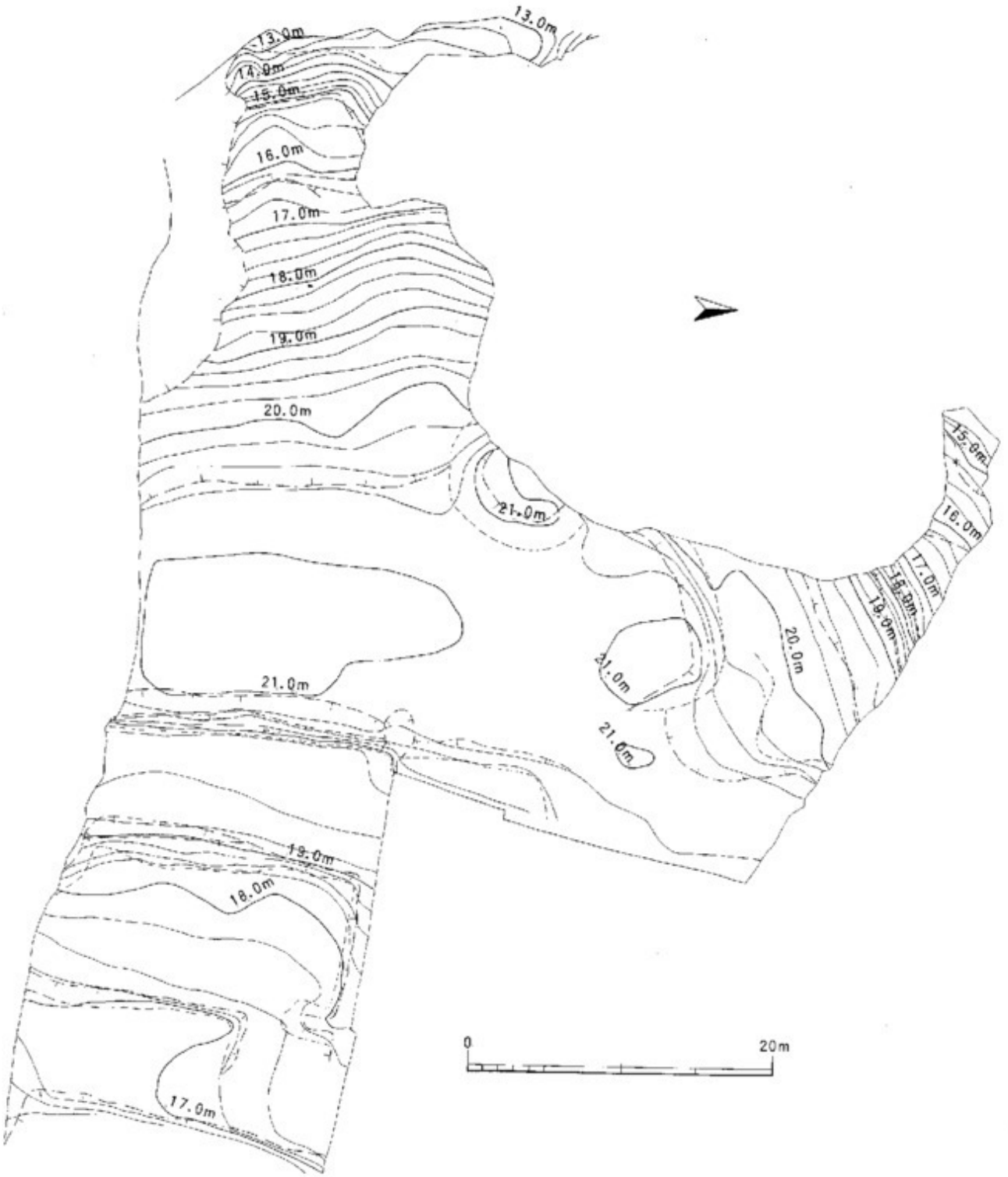


Fig. 5. 現況測量図（1／400）

2．弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡3棟、甕棺墓54基、土壙墓36基と土壙1基を検出した。これらの遺構は調査区全域にわたって密に分布するが、各遺構間には時間的な差異も作用してやや異なった在り方を示す。

これらの遺構のなかでは墳墓域をなす甕棺墓と土壙墓が特徴的な分布状況をなす。甕棺墓と土壙墓は旧丸尾池に面した東側の緩斜面上には占地せず、丘陵上とその外縁をなす西側の緩斜面上に並んで占地している。時間的な推移としては、前期後半には緩斜面上に墓域を作る。次に中期になると墓域は次第に緩斜面の上位に移行し、中期後半には丘陵上に単独的に占地し時間の下降に従って数的な減少を示す。土壙墓も甕棺墓と同じ占地傾向を示すが、時間的には甕棺墓群に先行して造墓活動がなされている。

一方、竪穴住居跡は中期後半のもので、丘陵上と東西の緩斜面上に其々1棟ずつあり、その分布は散漫な在り様をなしている。本来的には消失した南側の丘陵上にも拡がっていたと推測され、占地的には古墳時代の住居群と大差ない様相を示している。また、この期の甕棺墓は竪穴住居跡に近接した丘陵上に占地しているが、前期のそれに比べて数的に少ない。

Fig 6. 弥生時代の遺構配置図（1／500）

竪穴住居跡（SC）

弥生時代の竪穴住居跡は、3棟を検出した。これらの竪穴住居跡は丘陵上と東西の緩斜面上に其々単基で占地し、きわめて散漫な集落分布を示す。本来的には南にのびる丘陵上にも広く分布していたものと想われるが、地形的な制約を勘案すると密な拡がりをもつとは云いがたく、当該期の典型的な集落構成を示すものであったろう。竪穴住居跡はいずれも円形で古墳時代の住居跡群と重複し、かつ占地的な制約からその全容を知り得るものはなく遺物もきわめて少ないために詳細な時期は明らかではない。

8号竪穴住居跡（Fig.6. PL.3）

丘陵の東側緩斜面上に立地する円形の竪穴住居跡で、北東隅は9号住居跡に切られている。また、住居跡の東半部は丘陵の東斜面に占地する制約から消失しているが、平面形は長軸5.5m、短軸3.5mの楕円形プランに復原できよう。直立する壁面は高さ40cmで、壁下には周溝が巡る。床面は貼床状に固く、中央部に円形の炉がある。

15号竪穴住居跡（Fig.6. PL.3）

調査区の中央にのびる尾根の南東端に位置する円形住居で、南側は14号住居跡に切られている。平面形は直径が6.0～6.5mの円形をなそう。直立する壁下には周溝が巡り、壁際からは2本の柱穴が検出された。

出土遺物（Fig.7）

1は袋状口縁壺で口径は15.6cm。短い頸部に扁球形の胴部がつこう。

2は径6cmの蓋の摘みで天井は凹む。

3～12は甕形土器である。4～7は底部で、底径は6.6～8.8cm。8～12は口縁部が逆「L」字状をなし、上唇が水平なもの(8)と外反するもの(9～12)とがある。口径は8が26cm、9が27.2cm、10が28.6cm、11が26.8cm、12が30.2

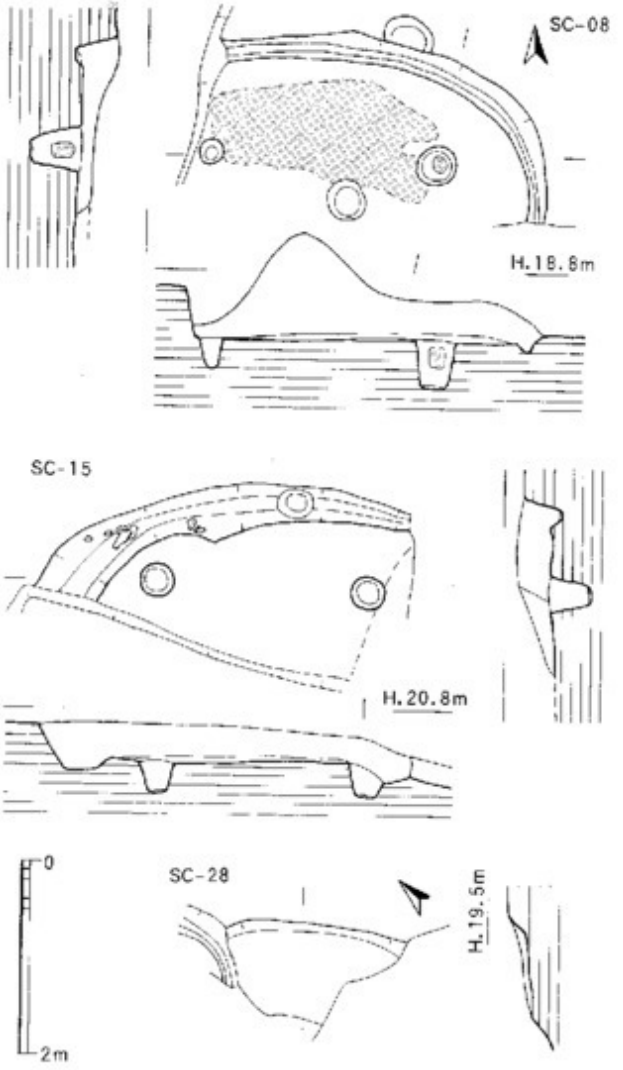


Fig. 7. 08・15・28号住居跡実測図（1／80）

cm。調整は外面がハケ目(?)、内面はナデ。胎土には砂粒を含む。

13は底径14cmの器台。脚部はラッパ状に拡がり、脚裾は小さく外反する。内外面ともにナデ。

28号竪穴住居跡（Fig.6. PL.21）

丘陵西側斜面の中位に立地する住居跡で、西側は25・26号住居跡に切られている。また、南側は宅造によって消失しているが、平面形は直径が5m程の円形プランをなそう。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。

出土遺物（Fig.7）

15は底径11.6cmの壺型土器、胴部は扁球形をなそう。調整は内外面ともにナデ。

14・16は甕。14は口径12.2cmの小甕で、逆「L」字状の口縁部は上唇を水平に折り返す。

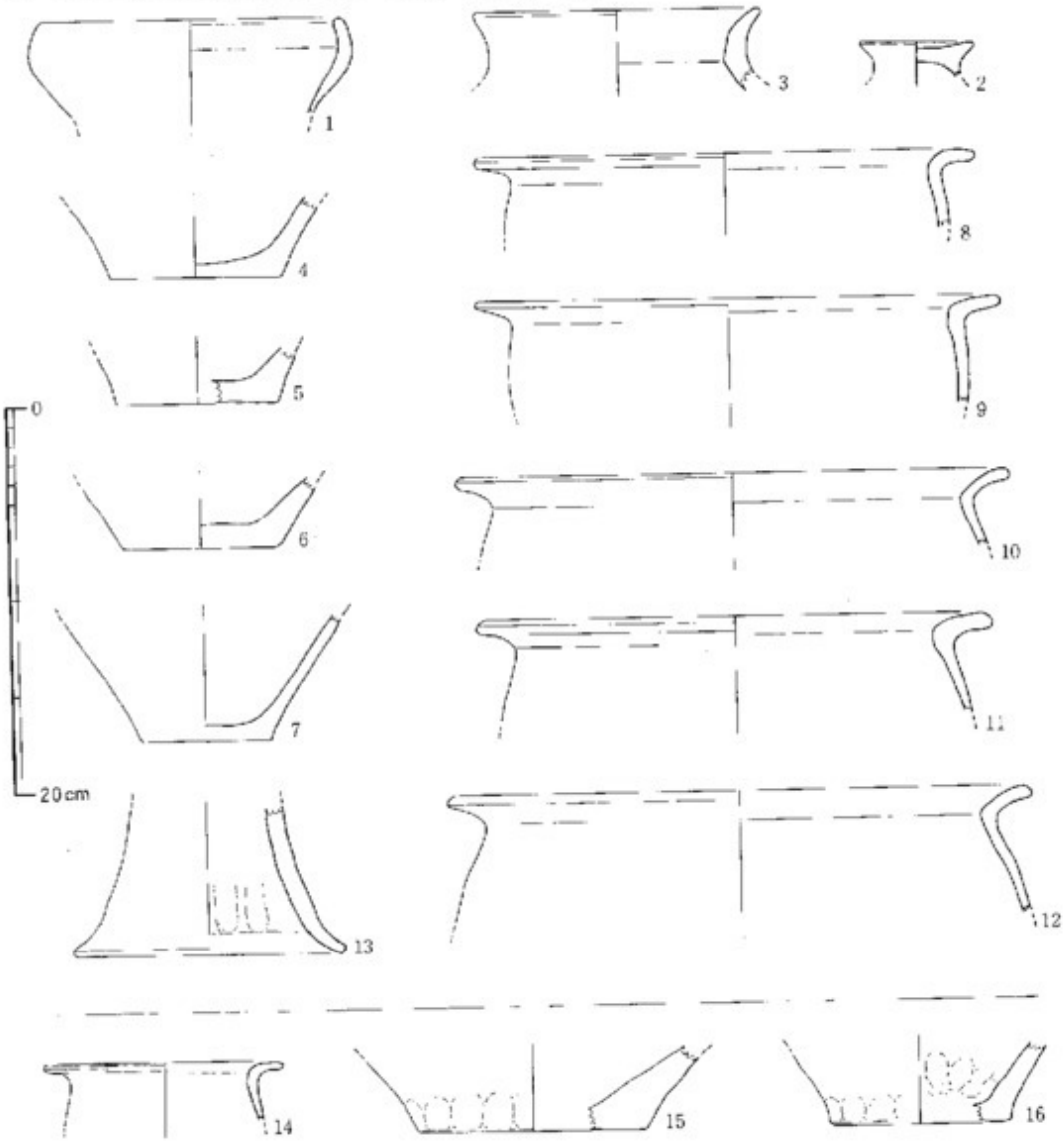


Fig. 8. 15・28号住居跡出土土器実測図（1／4）

甕 棺 墓（ST）

甕棺墓は、調査区の全域で54基を検出したが、すでに消失したものを加えれば100基を越えよう。墓域の拡がりは1号甕棺墓を北限として丘陵上と西側の緩斜面上に分布し、旧丸尾池に面した東側の緩斜面上には拡がらない。1963（昭和38）年に発見された細形銅剣を副葬する甕棺墓は、この西側の緩斜面上に埋葬されていたものである。時間的には前期中頃に造墓が開始され、中期の後半まで造営されるが、数的には前期末から中期初頭のものが多数を占める。墓域は前期末の初現期には丘陵外縁の西側緩斜面に沿って拡がる。つづいて中期になると次第に丘陵の上縁に移り、後半期には丘陵上に単葬的に占地する。また、細形銅剣と碧玉製管玉を副葬する前期末の甕棺墓と素環頭鉄刀を副葬する中期後葉の甕棺墓が新たに発見された。細形銅剣を副葬する前期末の甕棺墓は群中にあって特定の墓域は造らないが、素環頭鉄刀を副葬する中期後葉の甕棺墓は単独に占地している。

1号甕棺墓（Fig.9・10. Pl.3）

調査区北側の尾根上に単独で立地する呑口式の成人墓で、上面は1・3号墳の周溝に切られている。甕棺は上下甕とも甕形土器を用いている。墓壙は初めに隅丸方形プランの竪穴を掘り、その東側に緩やかな斜坑に続いた横穴を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺はこの墓壙内に主軸方位をN－44°－Wにとってほぼ水平に埋置されている。甕棺内には接口部近くに柄を置き棺奥に刃先をむけた素環頭鉄刀が1振副葬されていた。また、棺奥の棺床上には25cmの範囲に

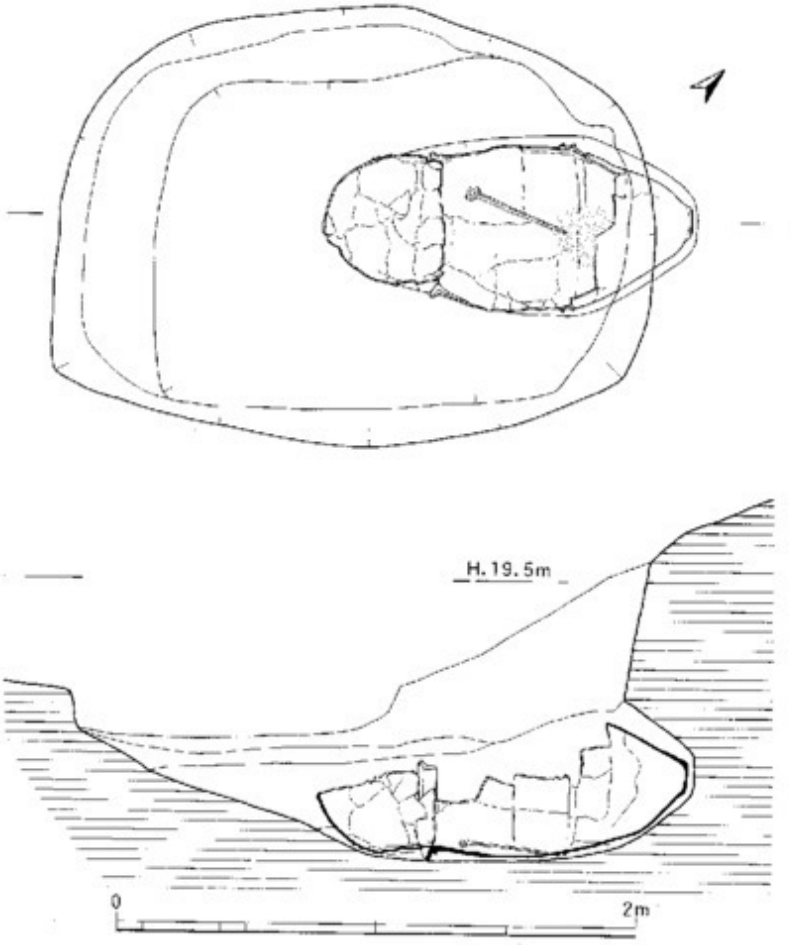


Fig. 9. 1号甕棺墓実測図（1／30）

亘って水銀朱が散布され、その覆土中からは頭蓋骨片等が検出された。これらからすると被葬者は棺奥を頭位とする仰臥屈葬で、右腹部に鉄刀を添え顔面には水銀朱を振りかけて埋葬されたものである。時期は中期後半である。

上甕(17)は、胴部上半を打ち欠いた大型甕で底径10.6cm、現高53cmを測る。砲弾形をなす胴部の下半にはややだれた「コ」字凸帯が2条巡り、器壁は厚い。外面は縦ハケ目をナデ消し、内面はナデ調整で底面には指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰白色。

下甕(18)は、口径65.5cm、底径12.5cm、器高101.2cmの大型甕である。口縁部は肥厚した逆「L」字状をなす。胴部は砲弾形を呈し、口縁部下には1条の三角凸帯、中位には2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外面ともにナデで、底面には強い指頭押圧痕が残る。胎土には石英砂を多く含む。上下甕ともVI類に属する。

出土遺物

〔Fig.11. PL.26・30〕

素環頭鉄刀(19) 全長が42.2cmの共づくりの鉄刀で、刃部長は29.8cm、柄は12.4cmでこれに素環頭がつく。刃部はストレートにのび、背厚は5～7mmで鋒にむかって薄くなる。身幅は柄近くで2.5cmを測る。柄はやや内反りぎみになり刃部との境にはかすかな関をつくる。柄幅は反りのある中央部が2.2cm、環頭側が2.7cmである。環頭はこの柄端から造り出し、背側から刃部側へ曲げている。環頭は外径が4.2～5.2cmの楕円形をなし、鉄芯の断面形は1.1～1.2cmの円形を呈する。

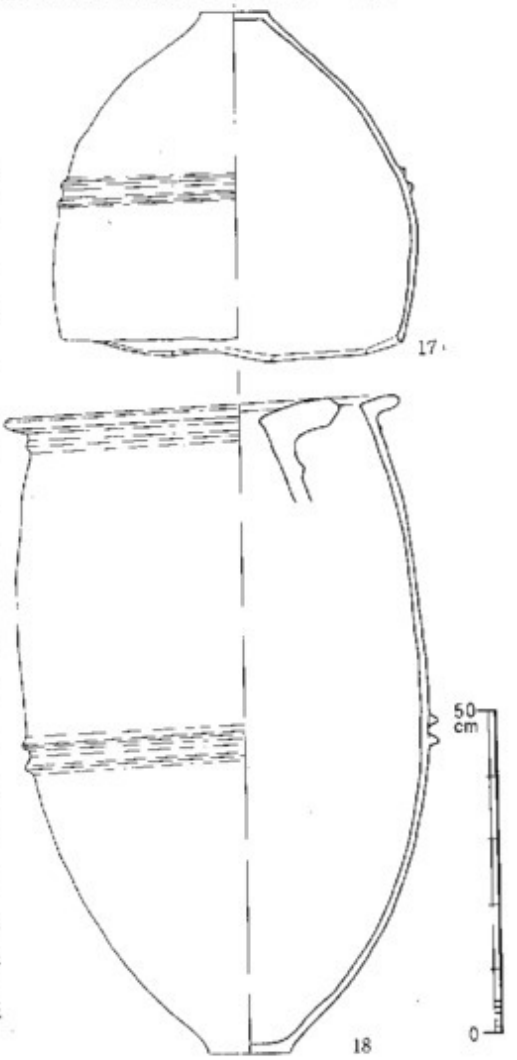


Fig. 10. 1号甕棺実測図 (1／12)

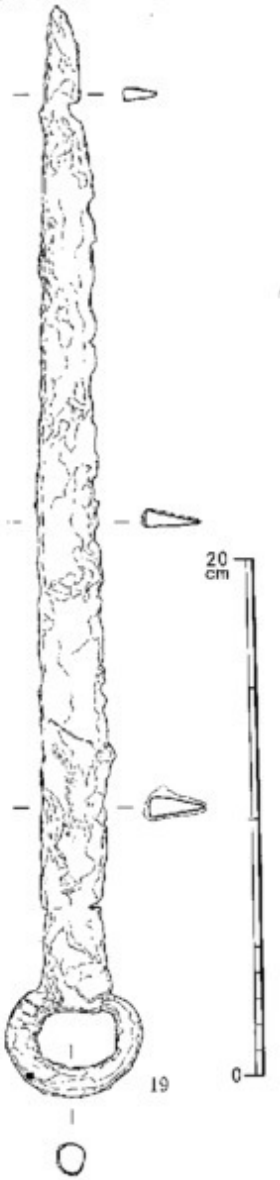


Fig. 11. 1号甕墓出土鉄刀実測図 (1／3)

2号甕棺墓（Fig.12・13. PL.3）

西側緩斜面の上縁に立地する甕＋壺の覆口式の甕棺墓である。甕棺墓は22号住居跡の北東に隣接して位置し、削平による消失が著しい。甕棺はN－63°－Eに主軸方位をとり、30°の傾斜をもって埋置されている。墓壙は甕に沿った円～楕円形をなそう。

甕(20)は、底径10.4cmを測る大型の壺型土器で、口径は42cm、器高は70cmに復原できよう。胴部はやや肩の張る倒卵形をなす。小さな1条の三角凸帯を巡らす頸部は緩やかに外反して立ち上がり、口縁部は外唇に粘土紐を貼りつけて段を形成する。調整は内面がナデ、外面は研磨状の丁寧なナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は褐～暗褐色。Ⅰ類に属する。

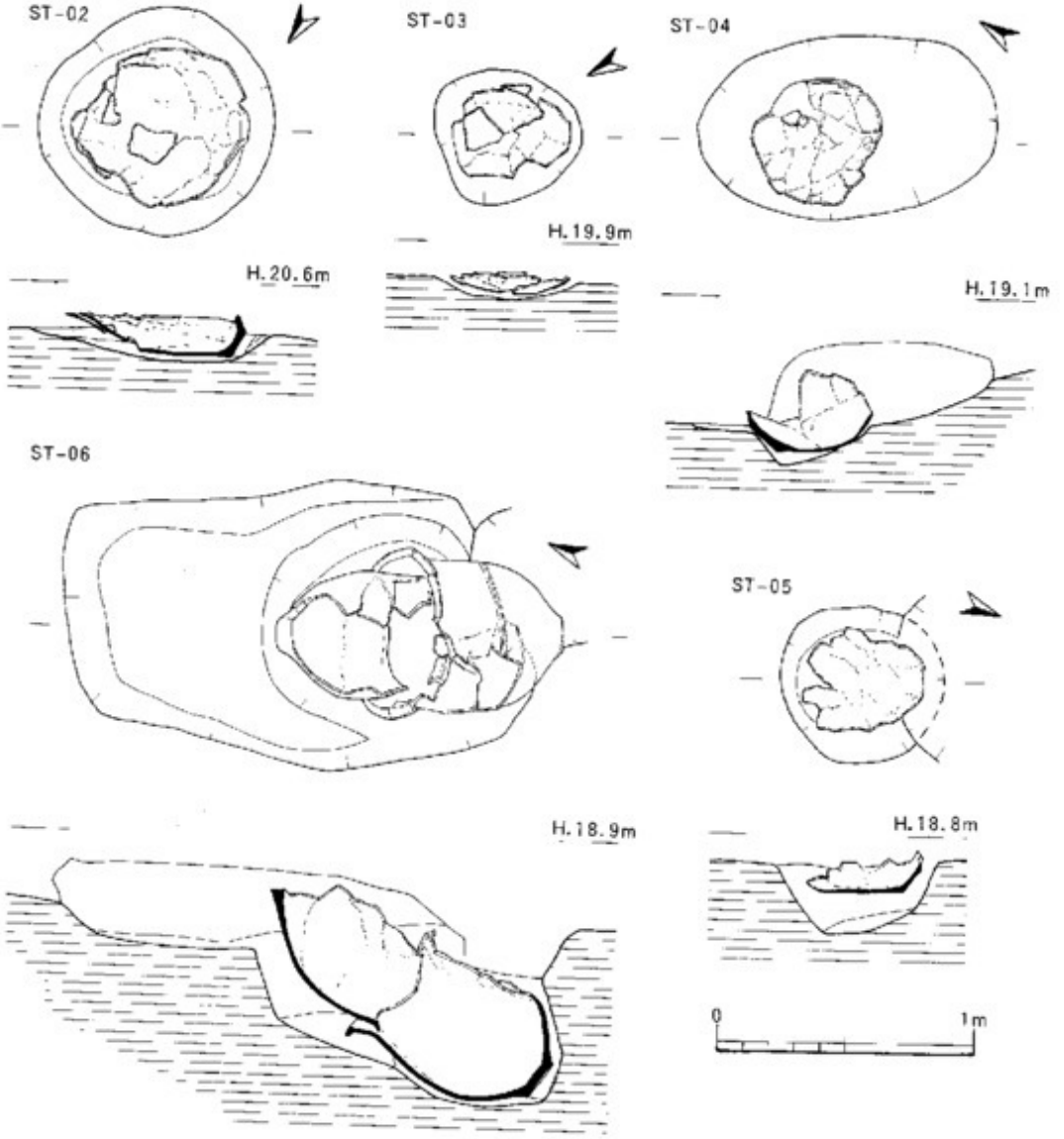


Fig. 12. 2～6号甕棺墓実測図（1／30）

3号甕棺墓（Fig.12. PL.4）

西側緩斜面の南側上縁部に立地する甕棺墓で、24号土壙墓のすぐ東に位置する。甕棺墓は削平による消失が著しく詳細は明らかでない。甕は砲弾形の胴部をもつ甕である。

4号甕棺墓（Fig.12・13. PL.4）

調査区南縁の緩斜面中段に立地する合口式の甕棺墓で、7号甕棺墓のすぐ東に位置する。墓壙は、竪穴を掘った後に北側に浅い斜坑を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺は、この墓壙内に48°の傾斜をもって埋置されている。主軸方位はN－37° Wにとる。

上甕(21)は、底径16cmの甕型土器で、胴部は倒卵形をなそう。内面はナデ調整で、底面には指頭押圧痕が明瞭に残る。胎土には砂粒と雲母微細を含み、内面は赤褐色で外面は淡黄褐色。

下甕(22)は、底径15.5cmの壺型土器で、球形の胴部は最大径が56.4cmを測る。内面の調整はナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は内面が明褐色～灰褐色、外面は淡灰褐色を呈する。

5号甕棺墓（Fig.12・14. PL.4）

調査区南側の緩斜面中段に立地する単口式の小児墓で、6号甕棺墓上に掘り込まれている。甕棺は、主軸方位をN－19°－Eにとり、39°の角度で埋置されている。削平による消失が著しく、単口式か否かは判然としない。

甕(23)は、底径13cmを測る大型の甕型土器で、胴部は倒卵形をなす。内外面ともにナデ調整で、底面には強い指頭押圧痕が残る。また、内面には煤様の黒色顔料が付着している。胎土には砂粒を多く含み、色調は灰褐色。

6号甕棺墓（Fig.12・14. PL.4・26）

調査区南側の緩斜面中段に立地する合口式の成人墓で、上面は5号甕棺墓に切られている。墓壙は初めに浅めの竪穴を掘り、その南側に60cm程の斜坑を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺はこの墓壙内に37°の傾斜をもって埋置されている。上下甕ともに大型の甕を用い、主軸方位はN－18°－Wにとる。時期は前期末であろう。

上甕(24)は、口径54cmの甕型土器で、器高は55cmになろう。口縁部は小さく外反し上端に粘土紐を貼り付けている。形態的には壺の特徴を残し、内傾ぎみに立ち上がる胴部上半には口縁部下と中位に其々3条の横凹線が巡る。調整は内面が押圧ナデ、外面は縦ハケ目後にナデてハケ目を消している。底部は大きく、器壁は分厚い。色調は黄橙色。

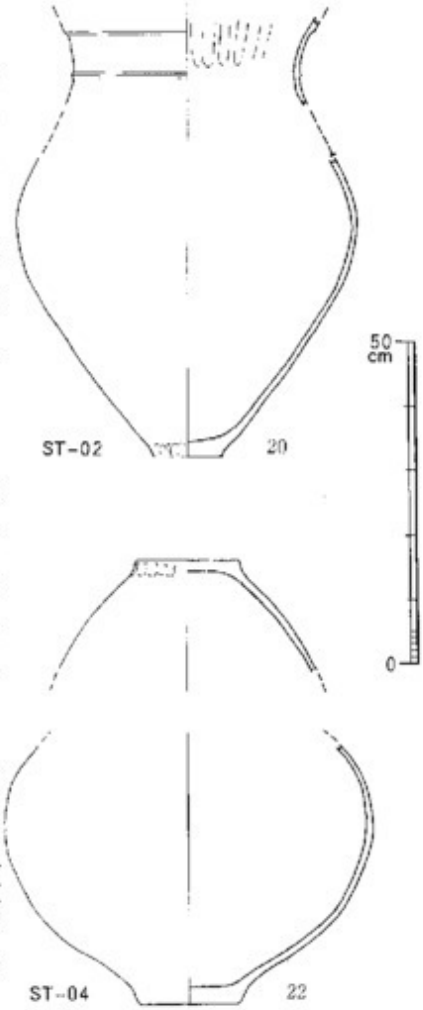


Fig. 13. 2・4号甕棺実測図（1／12）

下甕(25)は、口径61～67.8cm、底径13.4cm、器高70.2cmの大型の甕形土器である。胴部上半部は直口ぎみに立ち上がり、小さく外反した口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて厚く整えている。口縁部下と胴部中位に其々3条の横凹線が巡る。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。口縁部内面には横ハケ目が残る。胎土は石英砂と雲母を含み、明黄褐色。上下甕ともⅢ類。

7号甕棺墓（Fig.15・16. PL.4・26）

調査区南側の緩斜面中段に立地する呑口式の成人墓で、4号甕棺墓のすぐ西に位置する。上甕は鉢、下甕は甕であるが、上甕の鉢は下甕内に転落している。甕棺は円形の斜坑内に38°の傾斜で埋置されているが、墓壙はその形状から浅い2段掘りの構造をなしていたとも考えられる。この墓壙上面には小型壺が副葬されていた。時期は前期後半になろう。

上甕(26)は、口径57.2cm、底径10.2cm、器高33.2cmの大型の鉢型土器。逆「L」字状をなす口縁部はわずかに外傾し、半球形の胴部上位にはシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデのほかはナデ。胎土には砂粒を多く含む。

下甕(27)は、口径66cm、底径12.8cm、器高73.8cmの大型甕で、形態的には壺の特徴を強く残す。口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、平坦に整えた端部は内斜を小さく上方に摘み上げている。口縁部下と胴部中位には其々3条の横凹線を巡らし、底部は大きく分厚い。外面は研磨状の丁寧なナデ、内面はナデ。胎土は砂粒を含み、淡褐～橙褐色。上下甕ともⅡ類。

出土遺物（Fig.23.）

47は、底径5cmの小型壺で、球形の胴部がつくものであろう。胎土には砂粒を多く含み、淡赤褐色。

8号甕棺墓（Fig.15・16. PL.4・26）

調査区南部の緩斜面中段に立地する覆口式の成人墓で、7号甕棺墓のすぐ北に位置する。甕棺は上下甕とも甕形土器を用い、下甕は口縁部を打ち欠いている。甕棺は楕円形の斜坑内に53°の急傾斜をもって埋置され、主軸方位をN－32°－Wにとる。

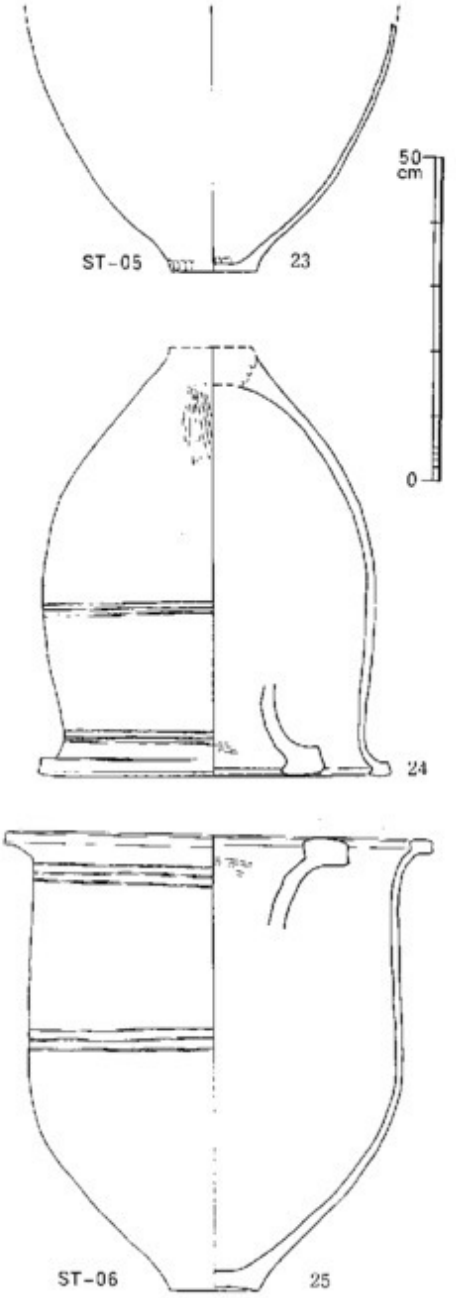


Fig. 14. 5・6号甕棺実測図（1／12）

上甕(28)は、口径62.8cmの大型の甕型土器で口縁部は小さく外反して立ち上がる。胴部は底部から大きく膨らんで立ち上がり下半から口縁部にかけてはストレートにのびる。胴部中位に2条の横凹線が巡る。内外面ともナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐～褐色。

下甕(29)は、口頸部を打ち欠いた大型の甕で、底径は17.6cm、器高は76.6cm。形態的には壺の特徴を留め、上甕と同じプロポーションになろう。底部は大きく、胴部中位には横凹線が2条巡る。調整は内外面ともに丁寧なナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色～赤褐色。

9号甕棺墓 (Fig.15・17. PL.4)

調査区南側の緩斜面中段にある小児墓で、西側は24号住居跡に切られて消失が著しい。

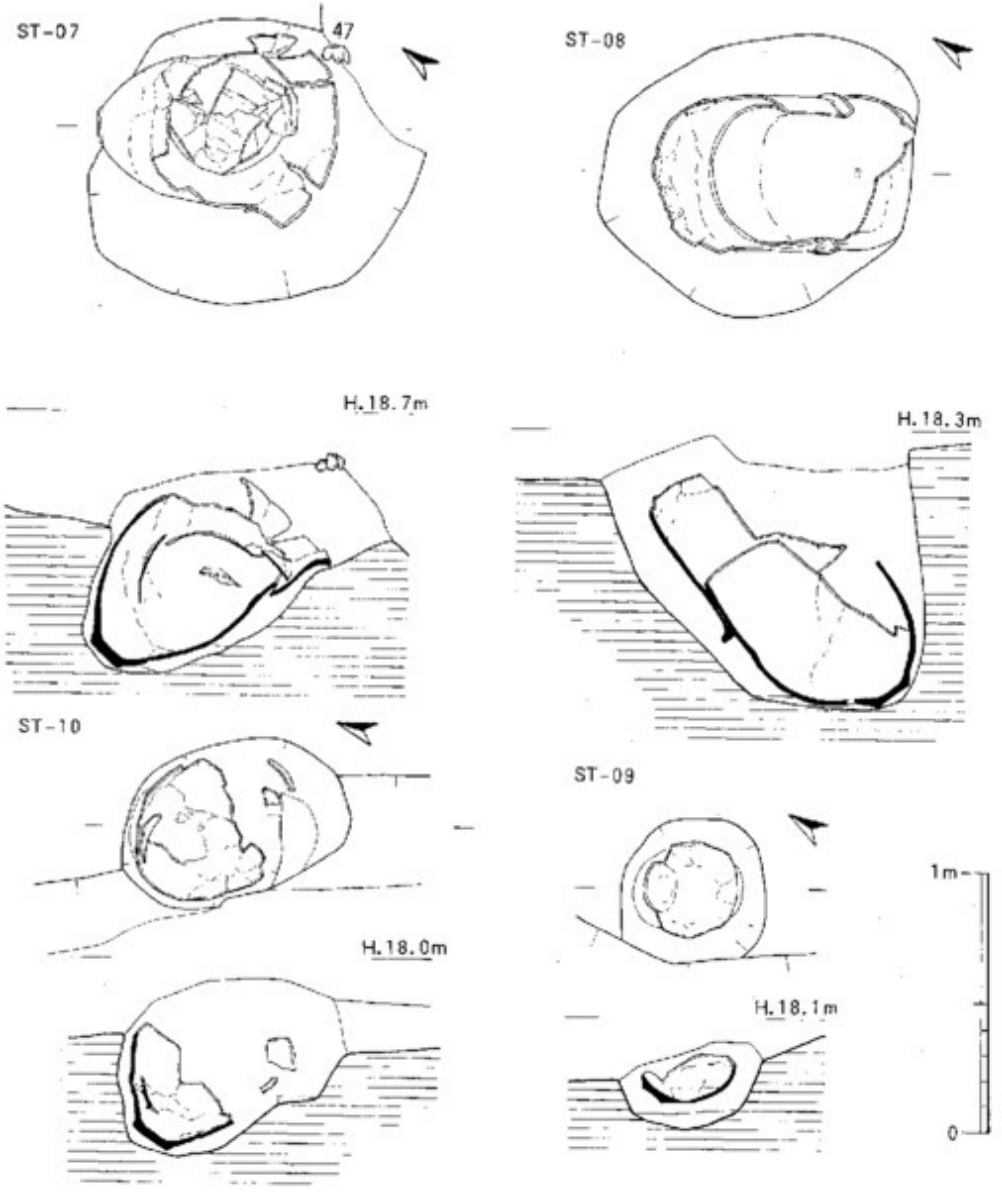


Fig. 15. 7～10号甕棺墓実測図 (1／30)

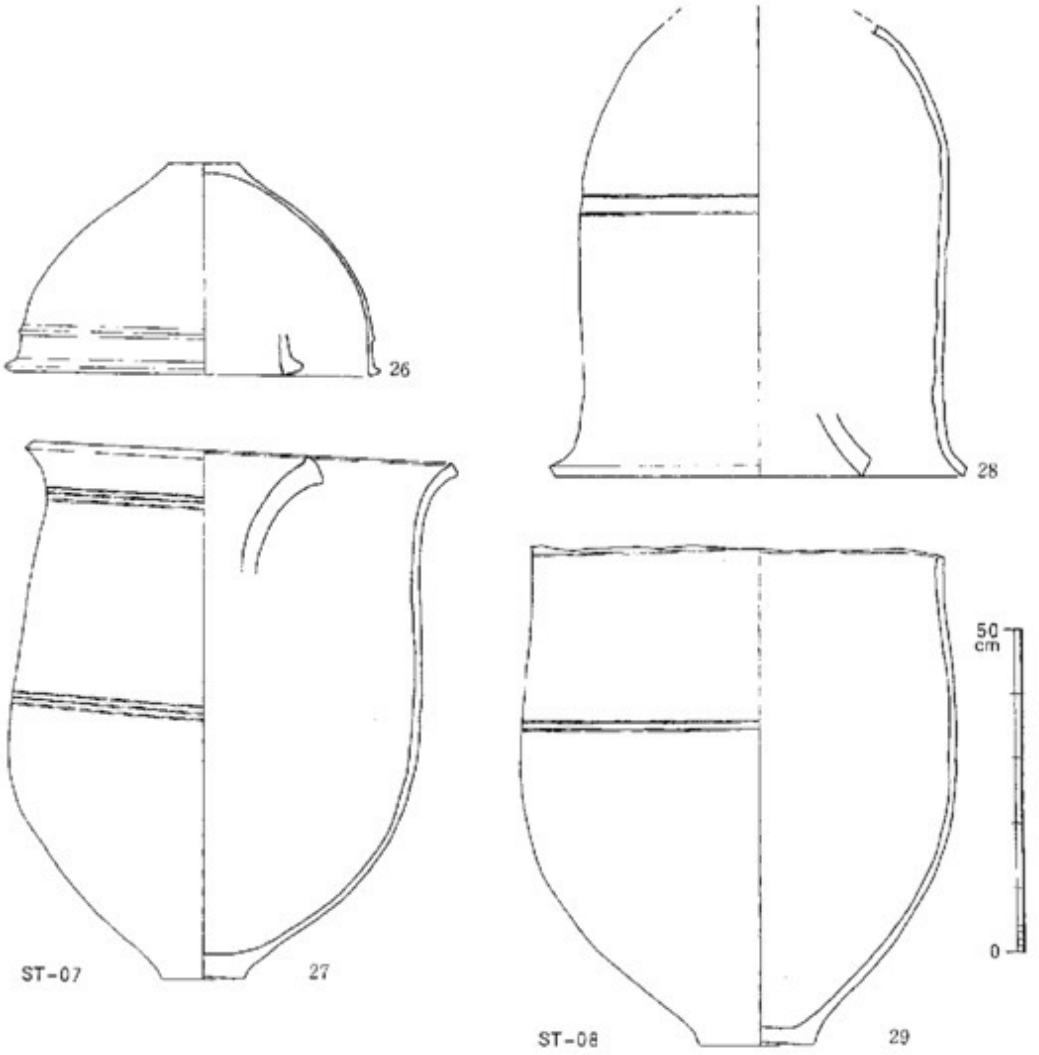


Fig. 16. 7・8号甕棺実測図（1／12）

甕棺は、円形の墓壙内に52°の傾斜で埋置され、主軸方位をN－33.5°－Wにとる。

甕(30・31)は、30が底径7.2cmの甕であろう。底面はやや上げ底状をなす。調整は外面が研磨状の丁寧なナデ、内面はナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は内面が淡褐色、外面は暗赤褐色。31は底径9.6cmの甕であろう。胴部は大きく膨らんで立ち上がるもので祭祀的特徴を強く留めるものであろう。外面は縦ハケ目後にナデ、内面はナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、色調は濃赤褐色。

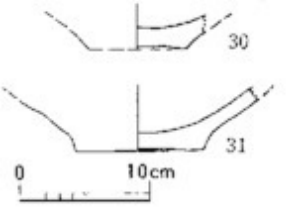


Fig. 17. 9号甕棺実測図（1／6）

10号甕棺墓（Fig.15・18. PL.5・26）

調査区南側の緩斜面中段にある甕棺墓で、上甕に鉢、下甕には甕を用いている。甕棺墓は11号甕棺墓のすぐ南に位置し、西半は24号住居

跡に削平されて消失が著しい。墓壙は初めに竪穴を掘り、その北側に斜抗を穿つ所謂2段掘りの構造をなす。甕棺はこの斜抗に56°の急角度をもって埋置されている。甕棺の埋置には壙床に黄白色粘土を敷いて棺の安定を図っている。主軸方位はN－15°－Wにとる。棺底からは細形銅剣片が出土した。銅剣は破砕した小片で消失が著しくその埋納状況は明らかでない。

上甕(32)は、口径54.6cm、底径8.8cmの鉢型土器で器高は30.5cmになろう。口縁部は三角凸帯様に粘土紐を貼り付けて小さな逆「L」字状をなし、胴部は半球形を呈する。口縁部下にはシャープな三角凸帯が1条巡る。内外面ともにナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は内面が暗赤褐色、外面が暗褐色。

下甕(33)は、口径60.4cm、底径14.6cm、器高78.8cmの大型の壺型土器。如意状に立ち上がる口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて段を形成し、外唇には刻み目を施文する。口縁部下に3条、胴部上位には2条の横凹線を巡らす。調整は外面が研磨状の丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土には砂粒を含み、色調は褐～灰褐色。Ⅳ類にあたる。

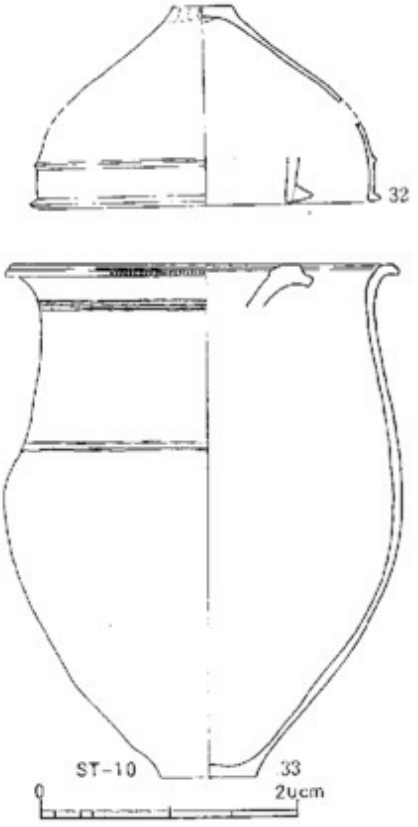


Fig. 18. 10号甕棺実測図（1／6）

出土遺物（Fig.19. PL.30）

細形銅剣(34)　有背式の銅剣で、茎から刳込部と鋒の大半を欠き遺存状況はきわめて悪い。現長は7.8cm、両翼幅は2.65cm、背の厚さは7.5mmで、銅剣の中位部にあたろう。背には鎬があり、断面形は扁平な八角形をなす。1963(昭和38)年に発見された銅剣と同型式のものであろう。

11号甕棺墓（Fig.20・21. PL.5）

調査区南側の緩斜面中段に立地する覆口式の小児墓で、南は10号甕棺墓に、西は24号住居跡に切られている。上下甕には甕形土器を用い、上甕は下甕の中程まで覆っている。甕棺はN－21.5°－Wに主軸方位をとり、楕円形の斜抗に50°の傾斜で埋置されている。墓壙は上甕下に幅10cm程の小さなフラット面を造り、一見2段掘り状をなす。

上甕(35)は、口径34cmの甕形土器である。口縁部は肉厚で小さく「く」字状に外反し、胴部は緩やかに内傾して立ち上がる。プロポーション的には壺の特徴を留めている。調整は口縁部がヨコナデ、外面は研磨状のナデ、内面は押圧

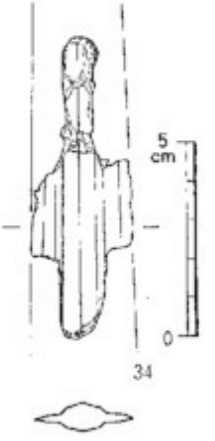


Fig. 19. 10号甕棺墓
副葬銅剣実測図（1／2）

ナデである。口縁部下の内外面には煤様の黒色顔料があり、全体に塗布されていた可能性がある。胎土は砂粒と雲母を含み、内面は明黄褐色、外面は淡赤褐色。

下甕(36)は、口径37cm、底径8.6cm、器高37.8cmの壷型土器である。口縁部は肉厚で緩やかに外反し、全体に壷的形態を強く残す。胴部上位は肩部様に張り、横凹線を1条巡らす。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面は研磨状の丁寧なナデ調整。内外面には全体に黒色顔料が塗布されている。胎土には砂粒と赤褐色粒を含み、色調は淡黄褐色。

12号甕棺墓 (Fig.22. PL.5)

西側緩斜面南端の中段に立地する合口式の成人墓で、7号甕棺墓のすぐ南に位置する。甕棺は墓上に繁茂する楠木の根に取り込まれているために実測できなかった。

上甕(38)は、口径49.6cmの甕形土器である。口縁部は緩やかに外反し、上唇には粘土紐を貼

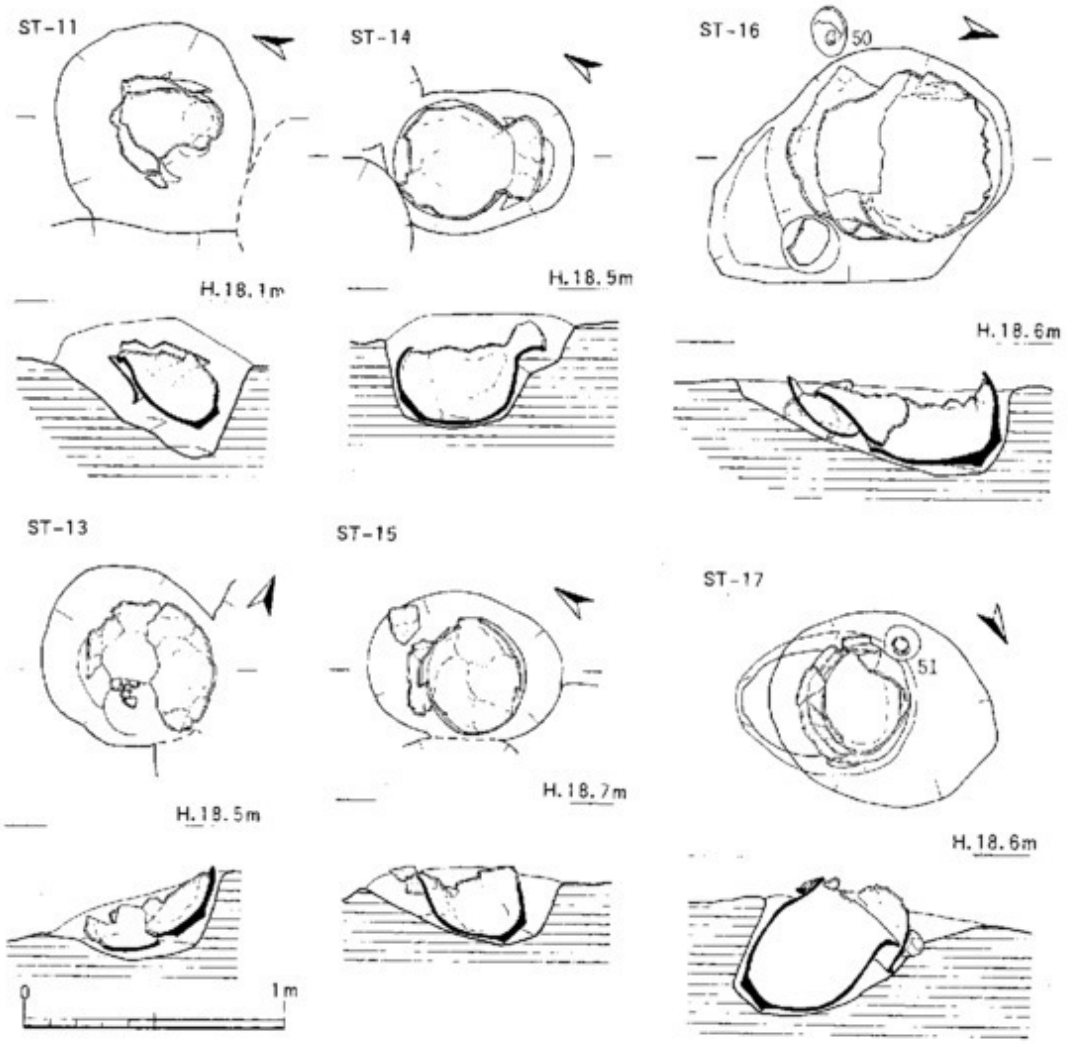


Fig. 20. 11.13～17号甕棺墓実測図 (1／30)

り付けて段を形成する。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡褐色～赤褐色。

下甕(39)は、口径58.6cm、底径10.8cmの大型の甕で、器高は60cmになろう。口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて段を形成し、外唇の上下両端には刻み目を施す。口縁部下には2条の横凹線を巡らす。形態的には壺的要素を留め、底部は大きくて分厚い。調整は内面がナデ、外面は丁寧な研磨状のナデ。胎土は砂粒と赤褐色粒を含み、色調は褐～淡褐色。Ⅲ類にあたる。

13号甕棺墓 (Fig.20・22, PL.5)

西側緩斜面中段の南部にある合口式の甕棺墓で、14号甕棺墓より新しく、15号甕棺墓よりも古い。甕棺墓は消失が著しく、下甕下半を留めるのみであったが棺内には上甕底部片が転入しており、上甕に甕、下甕に壺を用いていたことが窺える。甕はN－63°－Eに主軸方位をとり、円形プランの斜抗に55°の傾斜をもって埋置されている。

上甕(40)は、底径11.6cmの甕で、胴部は膨らんで立ち上がり、底部は分厚い。

下甕(41)は、底径12.4cmの大型の甕。底部は大きくて分厚く、胴部は大きく膨らんで立ち上がる。内外面ともナデ調整。胎土は少量の砂粒を含み、色調は明褐色～明黄褐色。

14号甕棺墓 (Fig.20・22, PL.5・26)

調査区南西側の緩斜面中段に立地する単口式の小児墓で、重複する13～15号甕棺墓中で最も古い。墓壙は初めに小さな楕円形の竪穴を掘り、更にその北側に深めの竪穴を穿つ2段掘の構造をなす。甕棺は2段目の竪穴に接して埋置し、口縁部を1段目のフラット面上に据えている。この口縁部下に別個体の甕はなく、木蓋を

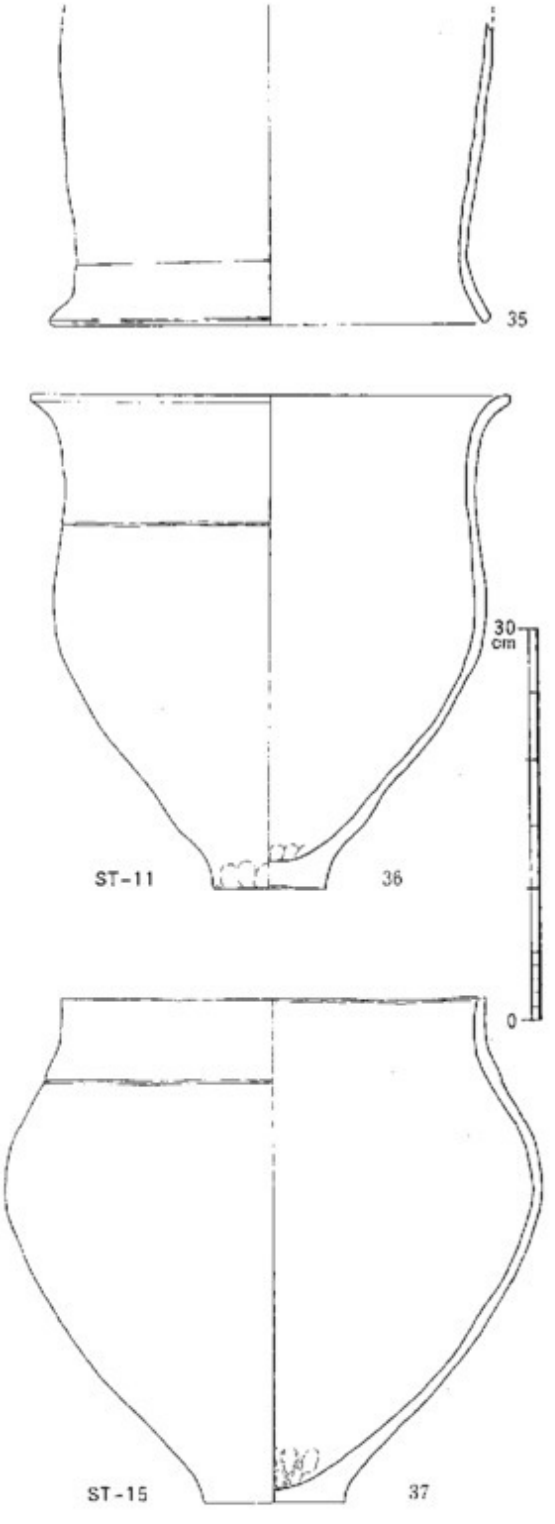


Fig. 21. 11・15号甕棺実測図 (1／6)

もって棺口を覆ったものであろう。主軸方位はN－35°－W、埋置角は43°である。

甕(42)は、口径31.6cm、底径11.4cm、器高54.4cmの大型の壺。外反する口縁部の内唇には粘土紐を貼り付けて浅い段を形成する。球形の胴部と頸部の境に1条のシャープな三角凸帯が巡る。内外面ともに丁寧にナデ、分厚い底面には強い指頭押圧痕が残る。胎土は良質で、白褐色。Ⅰ類。

15号甕棺墓 (Fig.20・21. PL.5・26)

西側緩斜面中段の南部にある覆口式の小児墓で、重複する13～15号甕棺墓中で最も新しい。甕棺は上甕に甕、下甕に壺を用い、楕円形の斜抗内に42°の傾斜で埋置されている。墓壙北側の上甕下には小型壺が副葬されていた。主軸方位はN－36.5°－W。時期は前期中頃。

甕(37)は、口縁部を打ち欠いた壺型土器で、底径10.8cm、器高は38.9cm。胴部は扁球形で肩が張り、頸部との境には浅い横凹線を1条巡らす。調整は外面が丁寧な研磨状のナデ、内面はナデで底面には強い指頭押圧痕が残る。胎土には砂粒と雲母を含み、色調は黄橙色。Ⅲ類にあたる。

出土遺物

(Fig.23. PL.29)

48は、底径6cmの小型壺である。球形

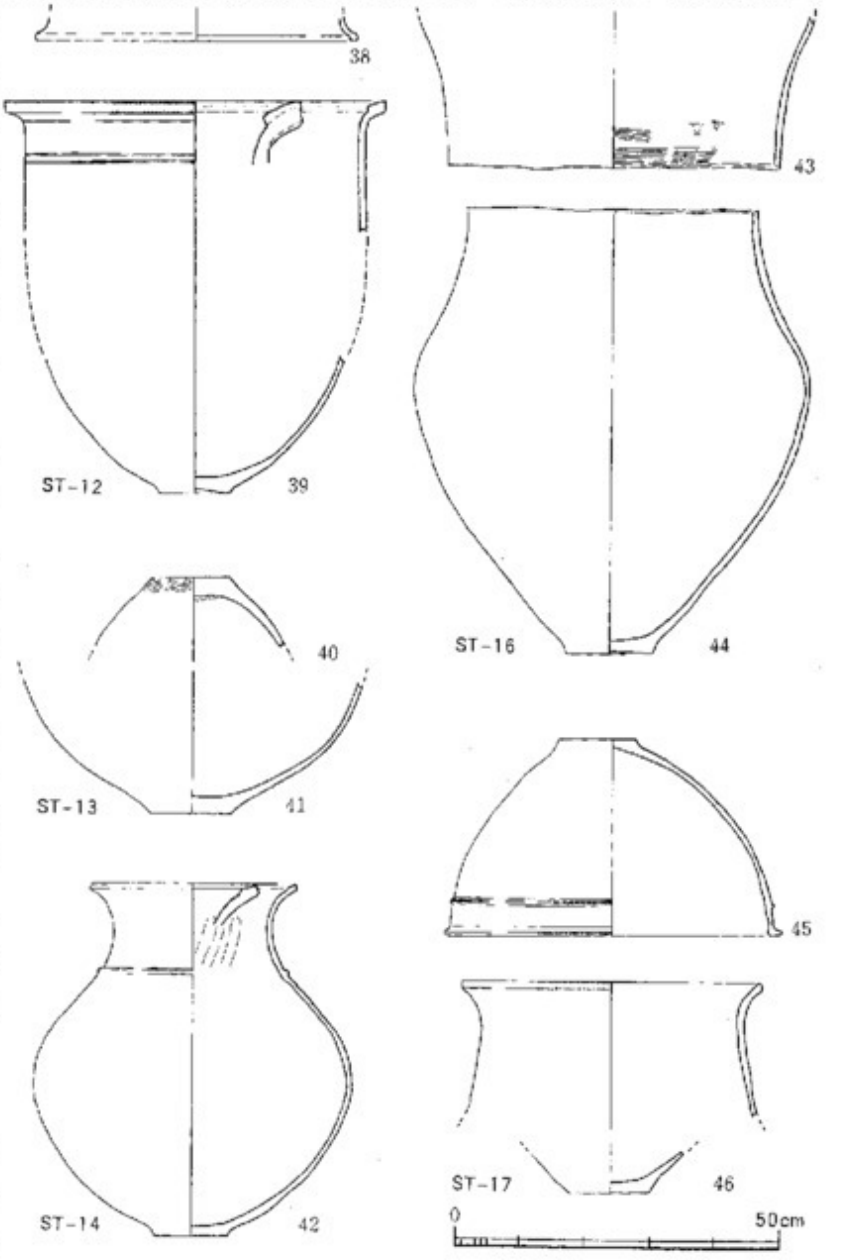


Fig. 22. 12～14・16・17号甕棺実測図 (1／12)

をなす胴部は最大径が16.6cmで、器壁はやや厚い。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土は中～粗砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈する。

16号甕棺墓（Fig.20・22. PL.5・26）

西側緩斜面南部の中段に立地する覆口式の成人墓で、6号甕棺墓の北に隣接している。甕棺は上下とも口縁部を打ち欠いた壺を用いている。甕棺は竪穴の北側に斜抗を掘った2段掘りの墓壙に46°の傾斜をもって埋置されている。甕棺はN－6.5°－Wに主軸方位をとり、棺床には径3cmの穿孔がある。墓壙東端の上甕下と西側の墓壙上端には小型壺が対位して副葬されていた。

上甕(43)は、口縁部を打ち欠いた大型の甕で、胴部上半は壺の特徴を留めている。調整は外面が丁寧な研磨状のナデ、内面はナデ、頸部に横ハケ目が残る。胎土は石英砂を含み、淡褐色。

下甕(44)は、口縁部を打ち欠いた大型壺で、底径13.6cm、器高は48.2cm。胴部は扁球形で肩が張り、頸部は反りぎみに内傾して立ち上がる。調整は内面が押圧ナデ、外面は研磨状に丁寧にナデて仕上げる。胎土には砂粒、雲母、赤褐色粒を含む。色調は黄橙色。上下甕とも1類。

出土遺物（Fig.23. PL.29）

49は、底径6cmの小型壺である。胴部は肩の張った扁球形をなし内傾する頸部がつこう。肩部にはヘラ描きによる有軸の羽状文を施文している。内面は押圧ナデ調整。胎土には中～粗砂粒を含み、色調は淡褐色。50は、口縁部を小型壺で、底径4.6cm。球形の胴部と内傾する小さな頸部との間には1条の三角凸帯を巡らしている。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土には砂粒を多く含み、色調は外面が淡赤褐色、内面は黒褐色。

17号甕棺墓

（Fig.20・22. PL.6）

西側緩斜面の中段南部に立地する覆口式の小児墓で、上甕は鉢、下甕には壺を用いている。甕棺は浅い凹レンズ状の竪穴を掘り、その東側に斜抗を穿つ2段掘りの墓壙に37°の傾斜をもって埋置している。墓壙南側の上甕横には小型壺が副葬されていた。主軸

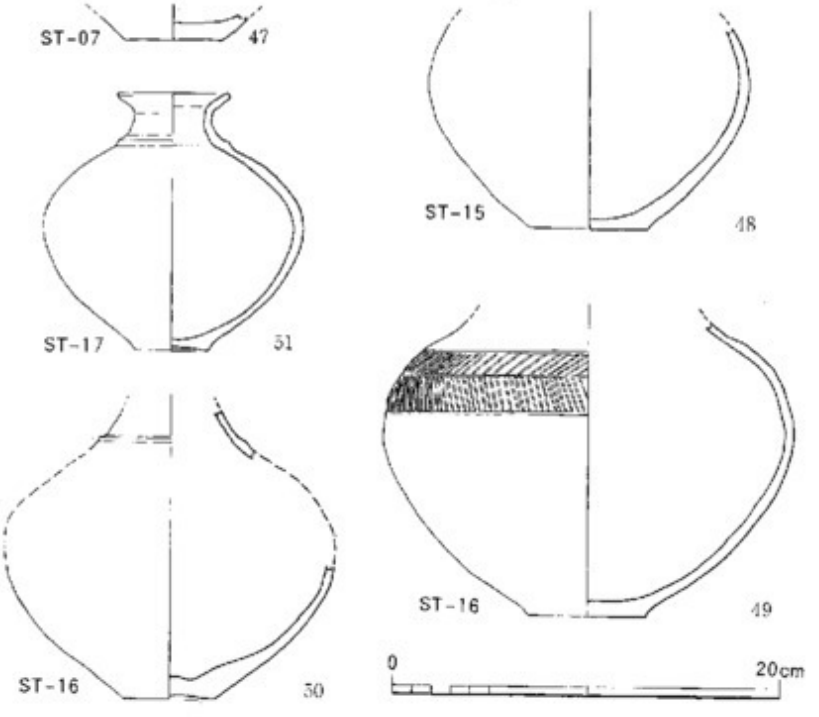


Fig. 23. 7・15～17号甕棺墓副葬小壺実測図（1／4）

方位はN－65°－Wにとる。時期は前期中葉になろう。

上甕(45)は、口径51.4cmの大型の鉢。口縁部は外唇に粘土紐を貼り付けて逆「L」字状をなす。胴部は半球形を呈し、口縁部下に巡らす1条の三角凸帯と口縁部端には刻み目を施している。口縁～凸帯部がヨコナデのほかはナデ調整。胎土には多くの砂粒と雲母を含む。

下甕(46)は、口径46cm、底径11.6cmの甕で器高は57cm程になろう。口縁部はゆるやに外反し、口縁の上下両端には刻み目を施す。胴部は肩の張った扁球形で形態的には壺の特徴を強く留めている。内外面ともにナデ調整。胎土は石英、長石粒を多く含む。褐色～灰白色でⅡ類。

出土遺物（Fig.23. PL.3・29）

51は、口径5.8cm、底径3.8cm、器高13.3cmの小型壺である。口縁部は短く立ち上がる頸部からのびて大きく外反する。胴部はやや肩の張った球形で、頸部との境には三角凸帯が1条巡っている。内面は押圧ナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、色調は黒褐色。

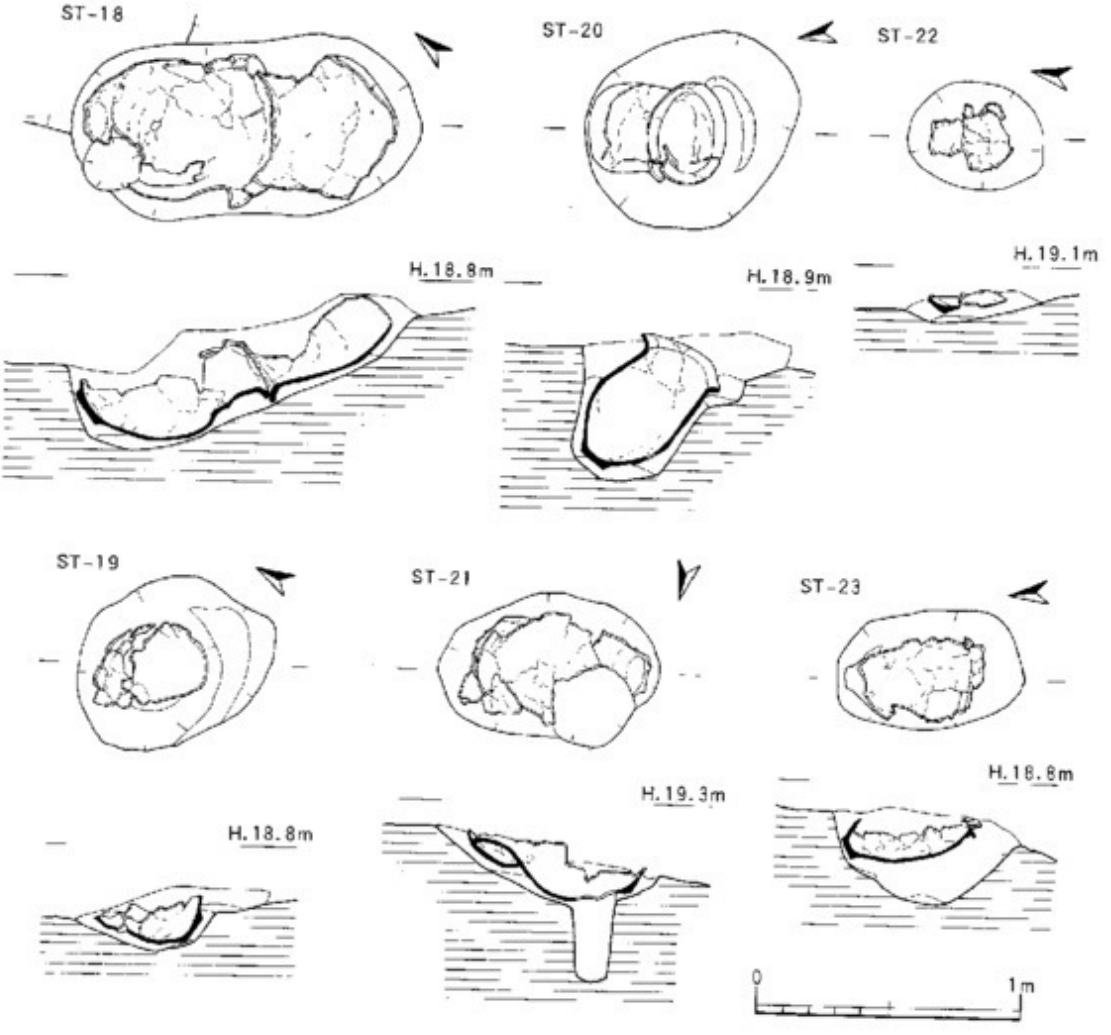


Fig. 24. 18～23号甕棺墓実測図（1／30）

18号甕棺墓（Fig.24・25. PL.6）

西側緩斜面中段の中央に立地する接口式の成人墓で、17号甕棺墓のすぐ北に位置する。甕棺は大型の壺をして上下甕とする。墓壙は竪穴の壙底からそのまま斜抗を穿つ2段掘り状をなす。甕棺はこの墓壙底に接して35°の傾斜で埋置し、主軸方位をN－38°－Wにとる。前期末。

上甕(52)は、口径54.4cmの大型の壺で、大きく外反する口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて段を形成する。胴部はやや肩の張る球形で、頸部との境には横凹線が巡り、内面には緩い段を造る。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。内面には煤様の黒色顔料が付着している。Ⅱ類。

下甕(53)は、口径50cm、底径13.6cmの大型壺で、器高は60cmになろう。口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて段を形成し、外唇の上下両端にはヘラ状工具による刻み目を施す。口縁部下に1条、胴部と頸部の境に2条の横凹線を巡らしている。胴部は球形をなし、底部は大きくて分厚い。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土には砂粒と雲母を含み、色調は赤褐色。Ⅲ類。

19号甕棺墓（Fig.24・26. PL.6）

西側緩斜面の中段南側に立地する被口式の小児墓で、17号甕棺墓より新しい。甕棺は上甕に甕、下甕に壺を用い、楕円形の斜抗に35°の傾斜をもって埋置している。主軸方位はN－29°－W。時期は前期後半になろう。

上甕(58)は、口径36cmの甕形土器である。口縁部は短く如意状に外反する。調整は口縁部がヨコナデ、外面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土には砂粒と雲母粒を含み、褐色～明褐色。

下甕(59)は、底径11.4cmの壺型土器である。底部は上げ底状で、胴部は扁球形をなす。調整は外面が研磨状の丁寧なナデ、内面は押圧ナデ、内底面に指頭押圧痕が残る。胎土は石英砂と雲母を含む。上下甕ともⅡ類。

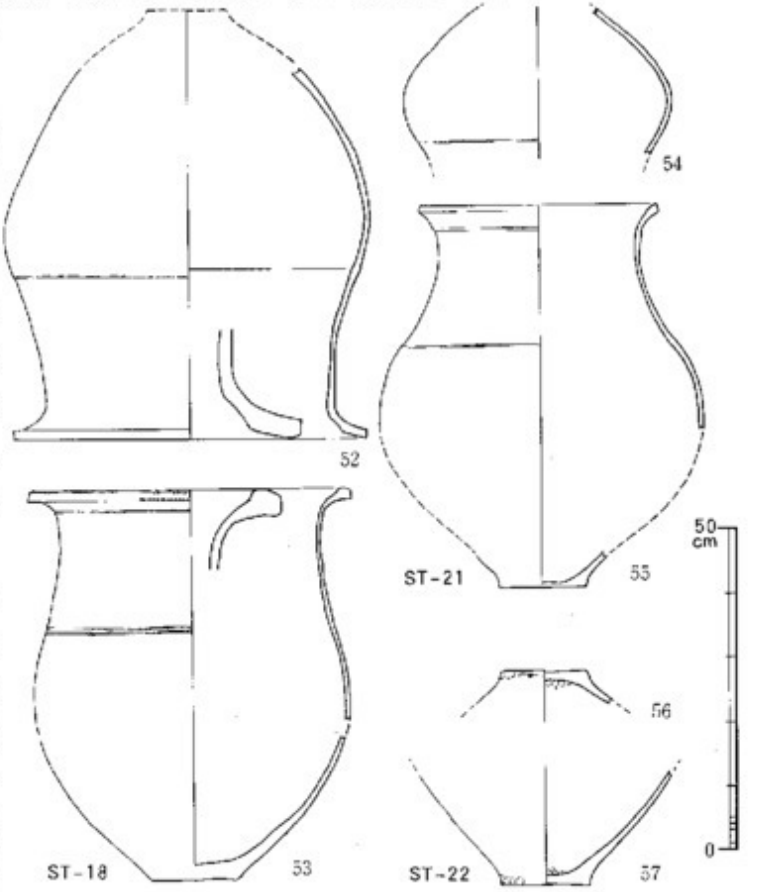


Fig. 25. 18・21・22号甕棺実測図（1／12）

20号甕棺墓（Fig.24・26. PL.6）

西側緩斜面中段の中央にある単口式の小児墓で、東側は10号土壙墓を切っている。甕棺は2段掘りの構造をなす楕円形の墓壙内に50°の急角度をもって埋置している。甕棺は1段目の小さなフラット面に口縁部を載せ、木蓋をもって棺口を覆ったと考えられる。主軸方位はN－10.5°－E。前期中葉に比定される。

甕(60)は、口径40cm、底径11.6cm、器高54.3cmの壺型土器である。口縁部は如意状に外反し、外唇を下方に小さく摘み出している。胴部は緩やかな卵形をなし、分厚い底部が付く。内面は強い押圧ナデで口縁部には細かいハケ目が残る。外面は丁寧なナデ調整。胎土は砂粒と雲母を多く含み、色調は赤褐色。Ⅰ類にあたる。

21号甕棺墓（Fig.24・25. PL.6）

西側緩斜面の中央部上位に立地する覆口式の甕棺墓で、20号住居跡と5号掘立柱建物跡によって大きく削られている。甕棺は上下甕に壺を用い、上甕は口頸部を打ち欠いている。墓壙は楕円形の斜抗を穿ち、甕棺は壙底に密着して33°の傾斜をもって埋置している。主軸方位はN－77°－E。前期中葉であろう。

上甕(54)は、口縁部と底部を欠く壺である。胴部は扁球形をなし、頸部との境にはあまいヘラ描きの横凹線が巡る。調整は外面がヘラ研磨、内面はナデ。胎土は石英砂を含み、色調は灰白～白褐色。

下甕(55)は、口径36cm、底径13.4cmの壺型土器で、器高は約60cmに復原されよう。

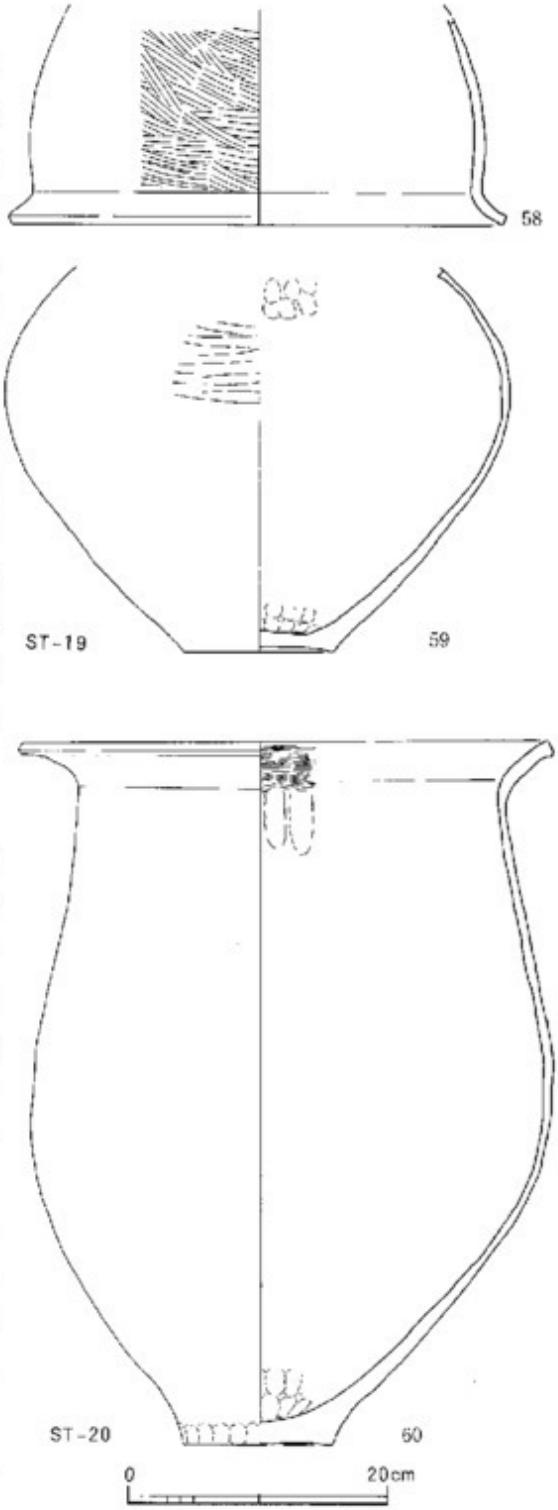


Fig. 26. 19・20号甕棺実測図（1／6）

如意状の口縁部は外唇に薄い粘土紐を貼り付けて弱い段を形成している。胴部はやや肩が張り、内傾して立ち上がる頸部は口縁下で直口する。胴部と頸部との境には横凹線が巡る。調整は外面がヘラ研磨、内面はナデ。胎土は石英砂を多く含み、色調は淡褐色～灰白色。上・下とも I 類。

22号甕棺墓（Fig.24・25. PL.6）

西側緩斜面の中央部上位に立地する成人墓で、21号甕棺墓のすぐ北に位置する。甕棺は20号住居跡による削平が著しいが、棺内からは別個体の底部が出土しており合口式の甕棺墓と思われる。甕棺は上下甕とも甕で、楕円形の墓壙内に57°の傾きをもって埋置されている。主軸方位はN－14°－Wにとる。

上甕(56)は、口縁部～胴部を欠く甕型土器で、底径13.4cm。底部は大きく分厚い。外面は丁寧なナデ、内面はナデ調整。胎土は小～中砂粒と雲母を含み、色調は明赤褐色。

下甕(57)は、口縁部～胴部上半を欠く甕型土器で、底径は13.6cm。分厚く大きい底部に卵形の胴部が付くものであろう。内外ともにナデ調整。胎土は粗く砂粒と雲母を含む。淡褐色。

23号甕棺墓（Fig.24・27. PL.6）

西側緩斜面中段の北側に立地する接口式の小児墓で、24・43号甕棺墓に新出する。甕棺は上下甕とも甕を用い、上甕は口縁部を打ち欠いている。墓壙は初めに竪穴を掘り、その中央に摺り鉢状の穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺は墓壙の1段目まで真砂土混じりの暗褐色土を敷詰め、その上に24°の角度で埋置している。主軸方位はN－7.5°－E。時期は中期前半。

甕(61)は、口径38.9cm、底径8.8cm、器高は43.8cmの甕。口縁部は逆「L」字状をなし、上唇を平坦に整えている。胴部は倒卵形をなし、口縁部直下にはシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は外面が縦ハケ目、内面はナデ。外面には煤様の黒色物が付着している。胎土には砂粒と雲母を含み、色調は淡黄褐色。V類にあたる。

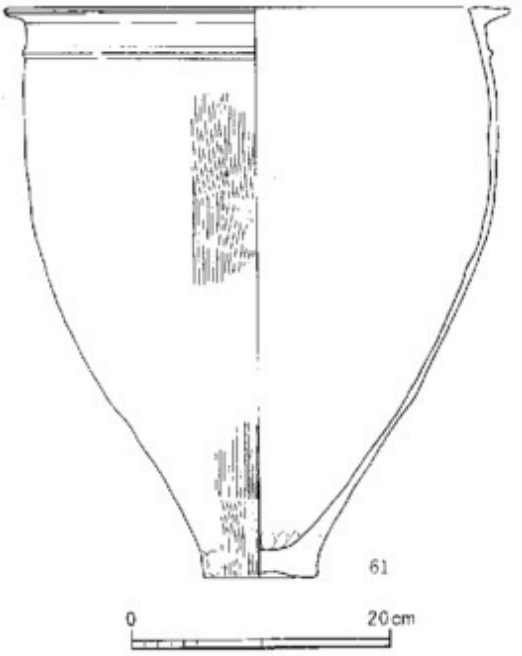


Fig. 27. 23号甕棺実測図（1／6）

24号甕棺墓（Fig.28・29. PL.7）

西側緩斜面中段の北側に立地する接口式の成人墓で、23号甕棺墓よりも古い。甕棺は上下甕とも甕である。墓壙は竪穴を掘り、その北半に浅い斜坑を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺はこの墓壙に47°の傾斜をもって埋置され、主軸方位をN－2°－Wにとる。壙底上には真砂土混じりの暗褐色土を敷き詰めて棺を安定させてい

る。時期は中期前半。

上甕(62)は、口径75.5cmの大型甕で、胴部下半を欠く。口縁部は逆「L」字状をなし、胴部は砲弾状をなそう。調整は口縁部がヨコナデ、外面は粗い縦ハケ目、内面はナデ。胎土は良質で少量の小砂粒を含む。内面は褐色、外面は淡黄色。Ⅳ類にあたる。

下甕(63)は、口径59.6cm、底径11cm、器高82.2cmの大型甕。逆「L」字状の口縁部は上端に粘土紐を張り付けて厚くし、内唇は強く張り出す。胴部は砲弾形をなし、中位にシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は内面がナデ、外面は粗い縦ハケ目で下半部はナデ消している。器壁は厚く、底部は殊に分厚い。胎土は砂粒を含み、外面は暗褐～灰褐色、内面は褐～赤褐色。Ⅴ類。

25号甕棺墓

(Fig.28·29.PL.7·27)

西側緩斜面中段の中央部に立地する覆口式の成人墓である。25～27号甕棺墓で一群をなし、26号甕棺墓に切られている。上甕には甕、下甕に壺を用いている。甕棺は初めに竪穴を掘り、その南側に斜抗を穿つ2段掘りの墓壙に51°の傾斜で埋置さ

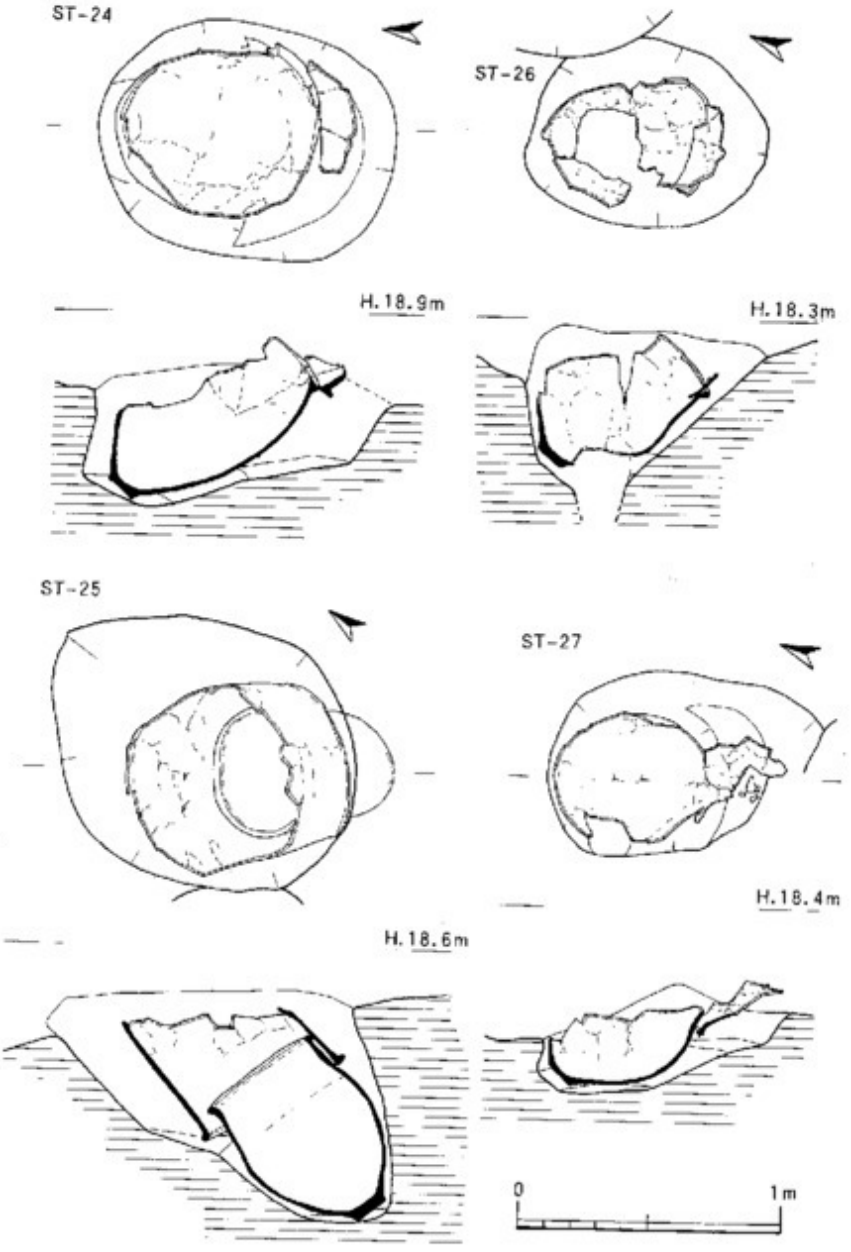


Fig. 28. 24～27号甕棺墓実測図 (1／30)

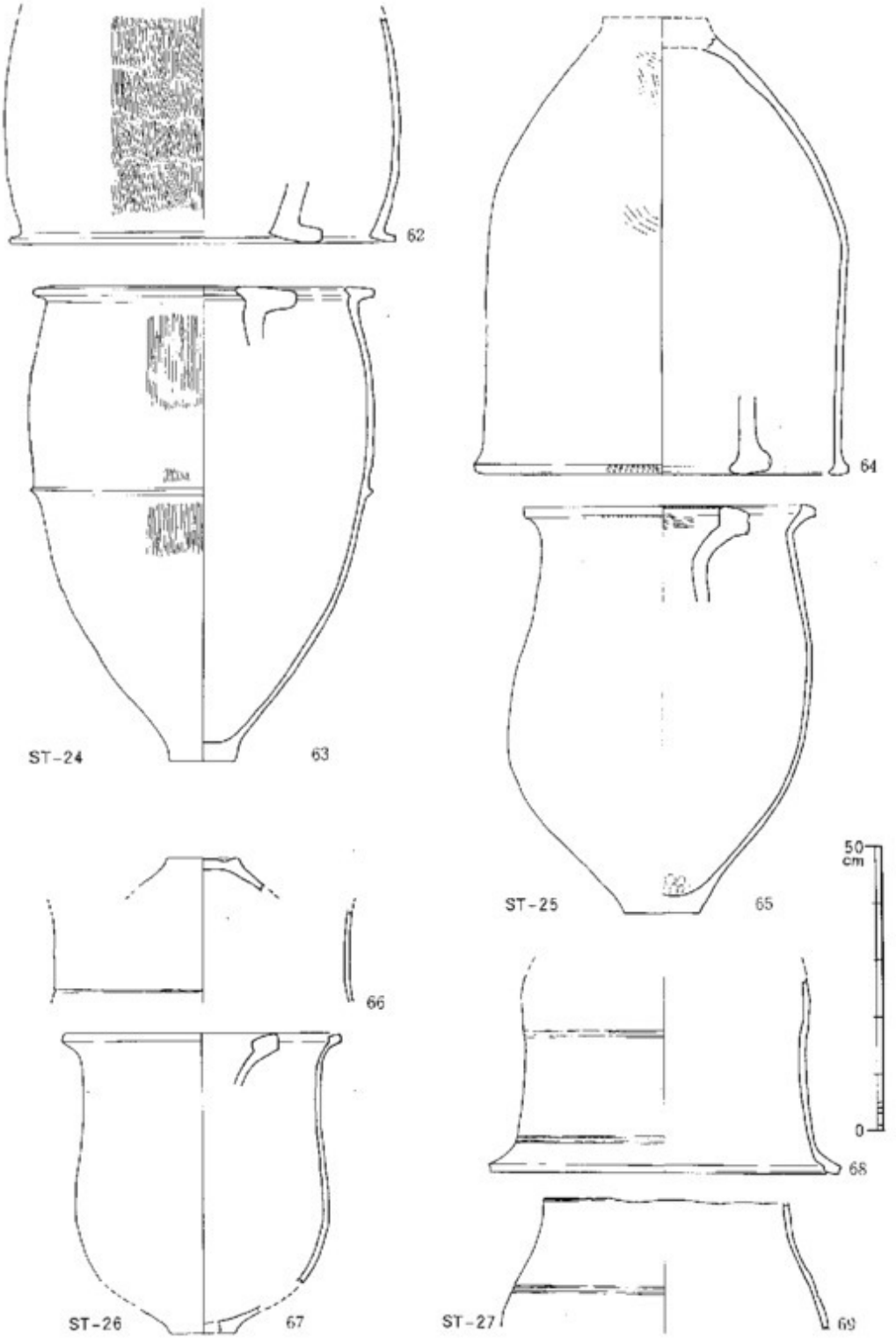


Fig. 29. 24～27 号甕棺実測図（1／12）

れている。主軸方位はN－35°－W。時期は前期末。

上甕(64)は、口径66.4cmの大型甕で、器高は80cmになろう。口縁部は内外唇に粘土紐を貼り付けて小さな「T」字状をなし、外唇に刻み目を施す。砲弾形をなす胴部は上半が直口して立ち上がる。調整は外面がハケ目後にナデ、内面は押圧ナデ。胎土は粗く砂粒と雲母を含む。Ⅳ類。

下甕(65)は、口径51cm、底径13.4cm、器高71.4cmの甕である。如意状に開く口縁部は上面に粘土紐を貼り付けて段を形成する。口縁部外唇の下端と内唇にはヘラ工具による刻み目を施している。底部は分厚く、壷の形態的特徴を留めている。調整は内面が押圧ナデで口縁部には横ハケ目が残る。また、内面には煤様の黒色顔料が遺存し、外面全体に塗布されていたことも考えられる。胎土には砂粒、雲母、赤褐色粒を含み、色調は明赤褐色。Ⅲ類。

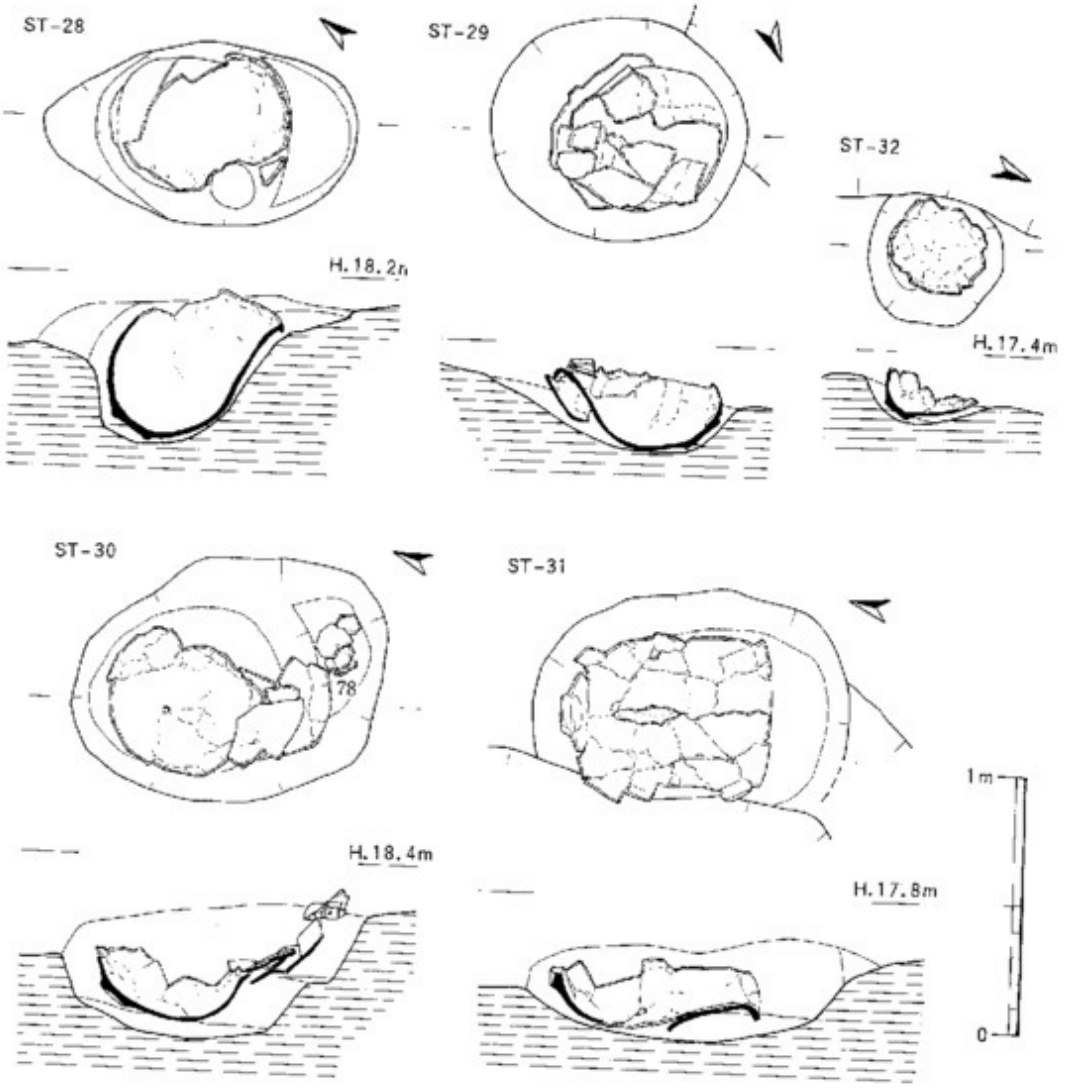


Fig. 30. 28～32号甕棺墓実測図（1／30）

出土遺物(Fig.32.PL.29)

77は、底径5.1cmの小型壺である。胴部は肩の張った扁球形をなし、最大径は17.4cmを測る。内外面ともにナデ調整。胎土には砂粒を多く含む。

26号甕棺墓

(Fig.28・29. PL.7)

西側緩斜面中段の中央部に立地する呑口式の成人墓で、25号甕棺墓よりも新しい。上甕は口頸部を打ち欠いた壺、下甕には甕である。甕は楕円形の斜抗内に46°の傾斜をもって埋置され、主軸方位をN－22°－Wにとる。時期は前期末。

上甕(66)は、口縁部と胴部を欠く大型の甕で、頸部の上位には浅い横凹線が巡る。壺的な特徴を残すものであろう。胎土は石英粗砂を多く含み、色調は淡褐色。

下甕(67)は、口径50cm、底径11.2cmの大型甕で、器高は53cmになろう。口縁部は如意状に外反し、上唇は粘土紐を貼り付けて段を形成している。胴部は下膨れ状に内弯し、壺の

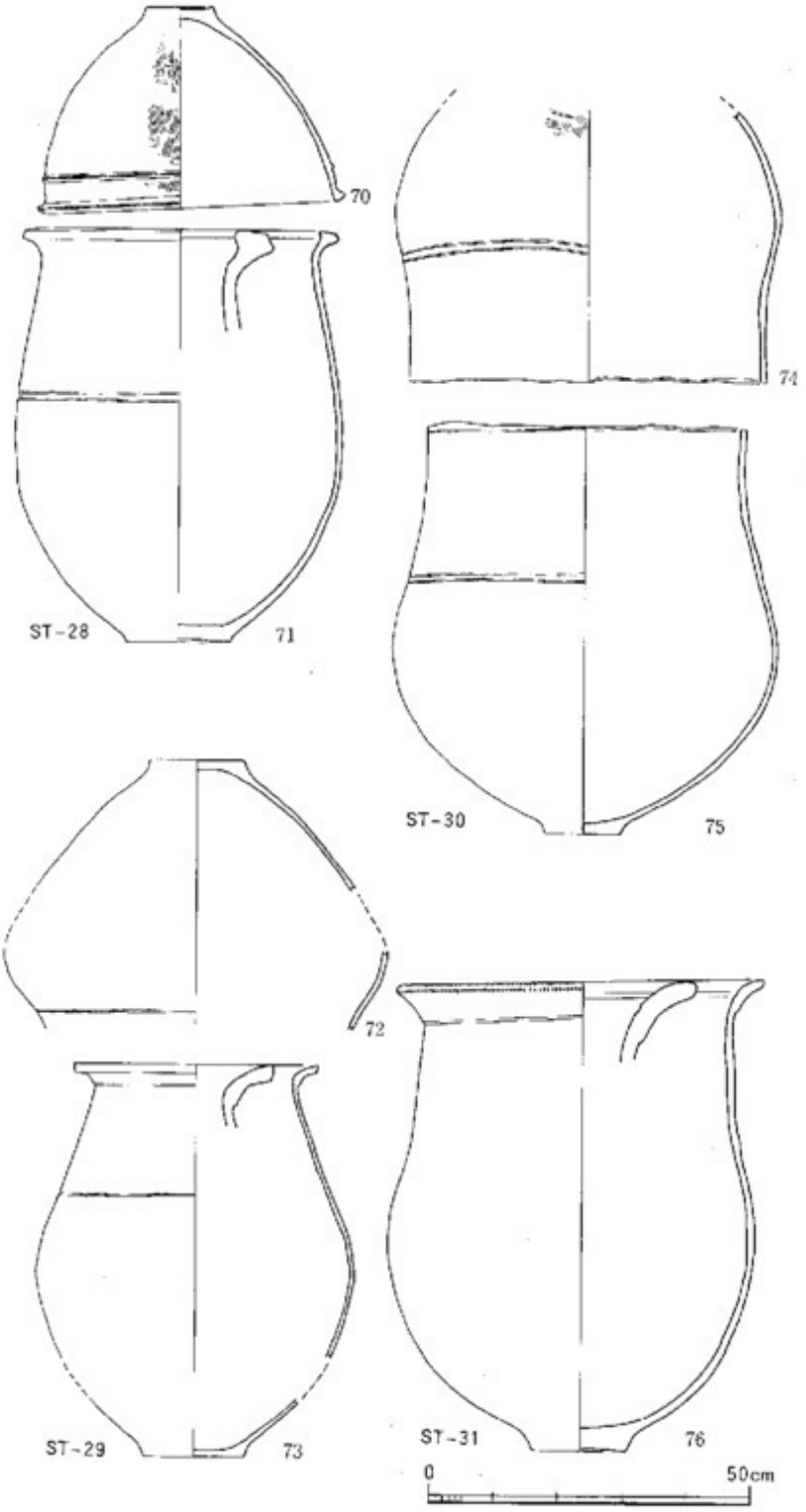


Fig. 31. 28～31号甕棺実測図 (1／12)

形態を強く留めている。調整は内面がナデ、外面は口縁部下に縦ハケ目が残る。上・下ともⅢ類。

27号甕棺墓（Fig.28・29. PL.7）

西側緩斜面中段の中央部に立地する覆口式の成人墓で、25・26号甕棺墓と一群をなす。甕棺は上下甕とも壺を用いる。墓壙は竪穴の北半に斜抗を穿つ2段掘りの構造をなし、45°の傾斜で埋置されている。主軸方位はN－21°－Wにとる。時期は前期末に比定されよう。

上甕(68)は、胴部下半を欠く大型甕で口径61.4cm。如意状の口縁部は上唇に粘土紐を貼り付けて段を形成する。胴部と頸部との境には小さな段を造り、壺的な特徴を留めている。口縁部下と胴部と頸部の境にヘラ描きの横凹線を其々2条巡らす。胎土は中～粗砂粒を多く含む。Ⅲ類。

下甕(69)は、口縁部を打ち欠いた大型の壺で、胴部と頸部との境にヘラ描きの横凹線を2条巡らし、打ち欠き下にも1条の横凹線残っている。上甕より壺の特徴を強く残す。内面はナデ、外面は研磨状の丁寧なナデ調整。胎土は石英・長石砂を多く含み、色調は白褐色～淡褐色。Ⅱ類。

28号甕棺墓（Fig.30・31. PL.8・27）

西側緩斜面中段の北側に立地する成人墓で、15号土壙墓を切っている。甕棺内には鉢が転入しており、上甕に鉢、下甕に甕を用いた合口式と考えられる。甕棺は竪穴を掘った後に斜抗を穿つ2段掘りの墓壙に56°の傾斜で密着して埋置している。主軸はN－36°－W。前期末。

上甕(70)は、口径47cm、底径10.4cm、器高32.4cmの大型の鉢である。口縁部は外唇に三角凸帯様の粘土紐を貼り付けて小さな逆「L」字状をなす。胴部は半球形で、口縁部下には三角凸帯を1条巡らす。口縁部外唇と凸帯には刻み目を施している。調整は外面がハケ目、内面はナデ。

下甕(71)は、口径48.6cm、底径16.2cm、器高63.7cmの大型甕である。口縁部は短く如意状に開き、上唇には粘土紐を貼り付けて段を形成する。胴部は短い砲弾状をなし、中位には横凹線を2条巡らす。プロポーション的には壺の特徴を強く残している。内面は押圧ナデ調整。上・下ともⅢ類。

29号甕棺墓（Fig.30・31. PL.8）

西側緩斜面の中段北側にある覆口式の成人墓で、26号土壙墓よりも新しい。甕棺は上下甕に壺を用い、斜抗に49°の傾斜をもって埋置している。主軸方位はN－68°－W。時期は前期中葉。

上甕(72)は、口頸部を打ち欠いた壺で、底径は14.5cm。胴部は肩の張った扁球形をなし、頸部との境には浅いヘラ描きの横凹線が巡る。調整は外面が丁寧な研

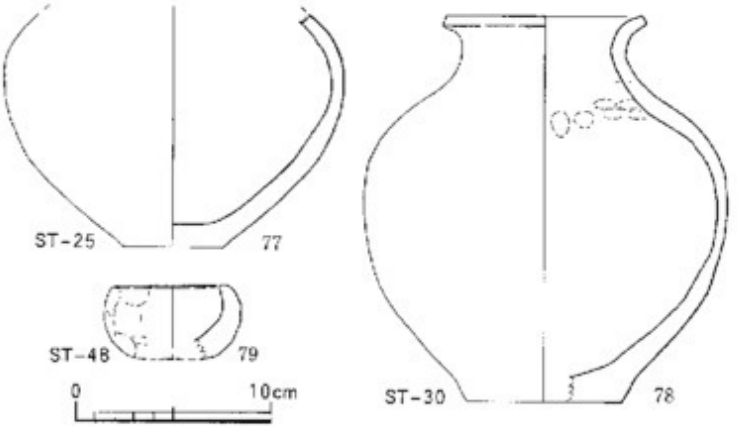


Fig. 32. 25・30・48号甕棺墓副葬小壺実測図（1／4）

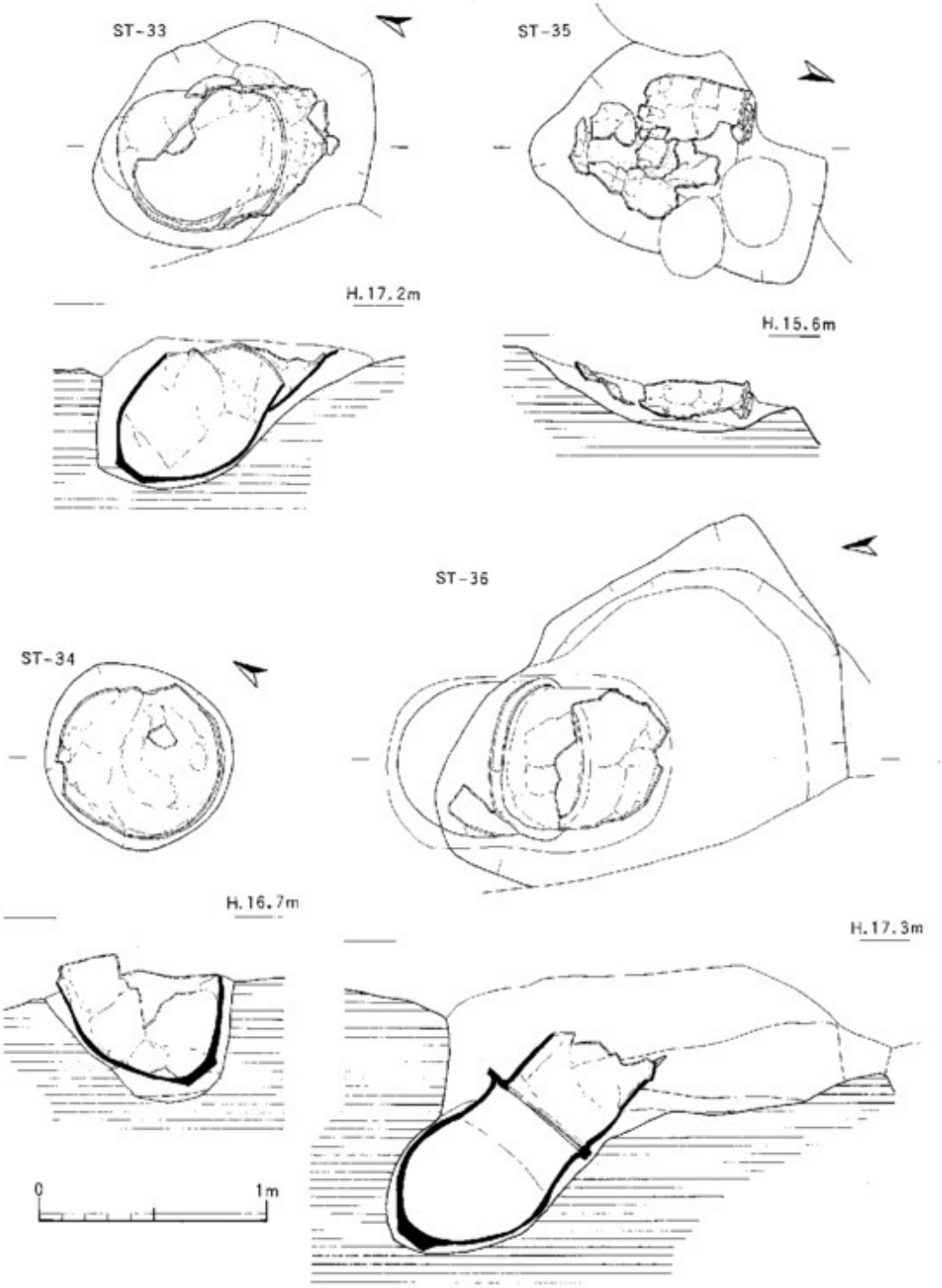


Fig. 33. 33～36 号甕棺墓実測図（1／30）

磨状のナデ、内面はナデ。胎土は石英と長石砂を多く含み、淡褐～褐色。

下甕(73)は、口径37.8cm、底径16cmの壺型土器で、器高は61cmに復原できよう。口縁部は如意状に外反し、外唇には粘土紐を薄く貼り付けて段を形成する。底部は大きく、胴部と頸部の境には浅い横凹線を巡る。調整は外面が研磨状の丁寧なナデ、内面はナデ。上・下ともⅠ類。

30号甕棺墓（Fig.30・31. PL.8）

西側緩斜面中段の北端に立地する覆口式の成人墓で、26号土壙墓の北3.5mにある。甕棺は上下甕とも口縁部を打ち欠いた壺で、2段掘りの墓壙に48°の傾斜をもって埋置している。墓壙東側の上甕脇には小型壺が副葬されていた。主軸方位はN－20°－W。時期は前期後半。

上甕(74)は、口縁部を打ち欠いた大型の壺。小さく肩の張る胴部に直口する頸部が付き、甕的な形態を窺わせる。胴部と頸部との境には2条の横凹線を巡らせる。調整は内面が押圧ナデ、外面はハケ目後に丁寧な研磨状のナデ。胎土には石英と長石砂を多く含み、色調は赤褐色。

下甕(75)は、口縁部を打ち欠く大型の壺で、底径は11.4cm、器高は62.4cm。球形の胴部から直口ぎみに立ち上がる頸部は壺の形態的特徴を強く留めている。底部は大きくて分厚い。胴部と頸部の境に2条、打ち欠き部に1条の横凹線が巡るが、口縁部下にも2条の横凹線が巡っていたろう。外面は粗い研磨状のナデ、内面は指頭押圧ナデ。上・下甕ともにⅡ類。

出土遺物（Fig.32. PL.29）

78は、口径10.4cm、底径8cm、器高19.8cmの小型壺。如意状の口縁部は短い頸部からのびて外反し、球形の胴部は肩が張る。器壁は厚く、底部は殊に顕著である。調整は内面が押圧ナデ、外面は研磨状の丁寧なナデ。胎土は砂粒を少量含む。

31号甕棺墓（Fig.30・31. PL.8・27）

西側緩斜面中段の北西端に立地する単口式の成人墓で、西側は7号土壙に切られる。甕棺は壺で、楕円形の墓壙内に主軸方位をN－13°－Wにとり水平に埋置されている。前期後半。

甕(76)は、口径56.2cm、底径14.2cm、器高74cmの大型の壺。如意状の口縁部は外唇に粘土紐を薄く貼って段を形成し、端部の上下両端には刻み目を施す。頸部は球形の胴部からストレートに立ち上がり、甕的な形態に近くなる。底部は大きくて分厚い。調整は外面がハケ目後に研磨状の丁寧なナデ、内面はナデ。色調は外面が明褐色～黄褐色、内面は白褐色～灰白色。Ⅱ類。

32号甕棺墓（Fig.30・34. PL.8）

西側緩斜面中段の北西側に立地する成人墓で、31号甕棺墓のすぐ南に位置する。甕棺には壺を用い、46°の傾斜で埋置しているが、削平が著しく詳細は不明。主軸方位はN－18.5°－W。

甕(80)は、底径は10.6cmの壺で、胴部は卵形をなす。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧ナデで底面には強い指頭圧痕が残る。胎土は砂粒を含み、外面が暗赤褐色、内面は灰赤褐色。

33号甕棺墓（Fig.33・34. PL.9）

西側緩斜面の北西部中段に立地する覆口式の成人墓で、36号甕棺墓のすぐ北にある。甕棺は

口縁部を打ち欠いた甕を上下甕とし、斜抗に47°の傾斜で埋置している。甕は棺床を墳底に密着し、軟らかい真砂土を充填している。主軸方位はN－14.5°－Wにとる。時期は前期後半。

上甕(81)は、口縁部を打ち欠く大型の甕で、底径は18.2cm。胴部上半は直口ぎみに立ち上がり、2条の浅い横凹線が巡る。内外面ともナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、白褐色～淡褐色。

下甕(82)は、口縁部を打ち欠く大型の甕で、底径13.8cm、器高は75.2cm。球形の胴部は上半が小さく屈曲してストレートにのび、形態的には壺の特徴を留めている。内面はナデ調整。胎土は石英砂を多く含む。色調は外面が灰褐色～褐色、内面は灰褐色～黒褐色。上下甕ともⅡ類。

34号甕棺墓（Fig.33・34. PL.9・27）

西側緩斜面中段の北西端に立地する成人墓で、33号甕棺墓の西に隣接して位置する。甕棺は小さめの斜抗に52°の急傾斜で密着して埋置しているが、削平が著しく単甕か合わせ甕かは判然としない。主軸方位はN－28°－Wにとる。時期は前期後半に比定される。

甕(83)は、底径18.9cmの大型甕。胴部はずんぐりとした砲弾形で、上半はストレートに立ち

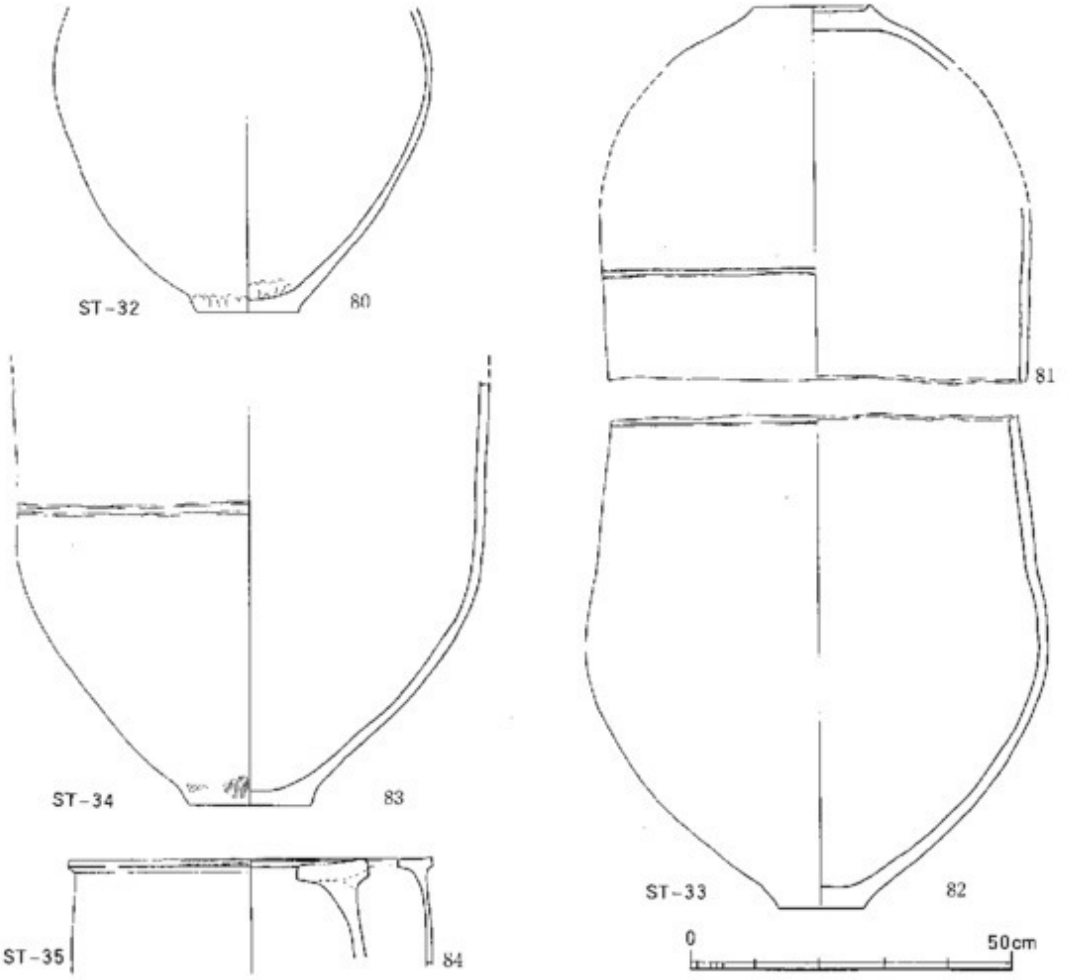


Fig. 34. 32～35甕棺実測図（1／12）

上がり中位に2条の横凹線を巡らしている。底部は分厚くて大きい。調整は外面がハケ目後にナデ、内面はナデ。胎土には石英と長石砂を多く含む。内面は淡褐色、外面は灰褐色～灰赤褐色。Ⅱ類。

35号甕棺墓（Fig.33・34. PL.9）

西側緩斜面中段の西端に立地する接口式の成人墓で、36号甕棺墓の西2mに位置する。甕棺は上下甕とも甕で、消失が著しい。甕棺は楕円形の墓壙に主軸方位をN－21°－Wにとり、水平に埋置されている。時期は中期前半に比定されよう。

下甕(84)は、胴下半を欠く大型甕で口径は55.6cm。「T」字状の口縁部は内唇が強く張り出し、外唇の上下端には刻み目を巡らしている。胴部は砲弾形をなそう。調整は外面がハケ目後にナデ、内面はナデ。胎土は石英と長石砂を多く含む。上甕も下甕と同形態を示すが、実測はできなかった。V類にあたる。

36号甕棺墓（Fig.33・35. PL.9・27）

西側斜面中段の北西部に立地する接口式の成人墓で、33号甕棺墓のすぐ南に位置する。甕棺は上下甕ともに甕を用いている。墓壙は初めに大きめの竪穴を掘り、その北半に小さめの斜抗を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺はこの斜抗に密着して58°の傾斜で埋納している。棺底からは黒曜石製打製石鏃1点が出土した。また、上甕内からは碧玉製管玉3点が出土し、埋葬時に副葬されたものと考えられる。主軸方位はN－3.5°－E。前期末に比定される。

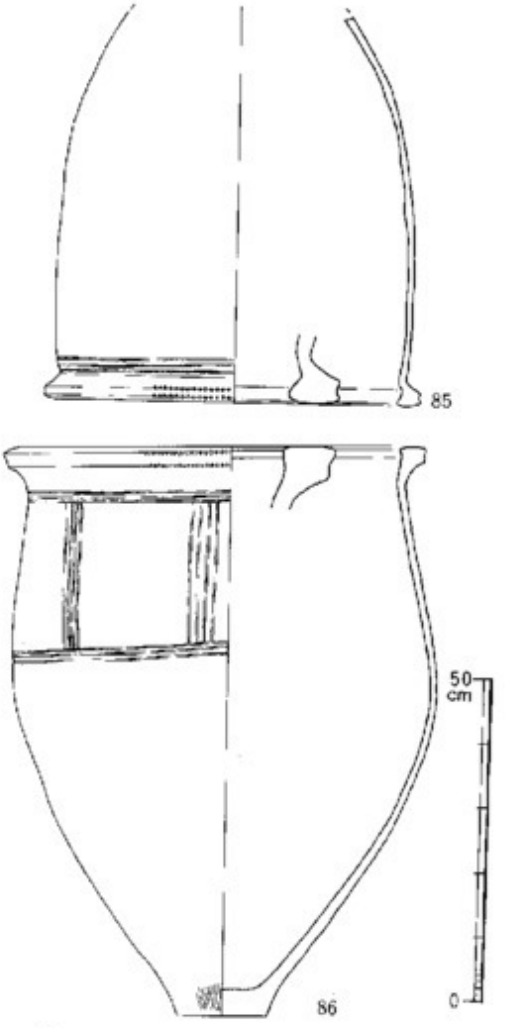


Fig. 35. 36号甕棺実測図（1／12）

上甕(85)は、口径58cmの大型の甕。如意状に摘み出した口縁部は上面に粘土紐を貼り付けて段を形成し、外唇の上下両端には刻み目を施している。胴部は短い砲弾形をなし、口縁部下には横凹線を3条巡らしている。胎土は砂粒を多く含み、外面が赤褐色、内面は黄橙色。

下甕(86)は、口径65cm、底径14cm、器高87.2cmの大型甕である。如意状のひらく口縁部の上面には粘土紐を貼り付けて段を造り、外唇の上下両端には刻み目を施す。倒卵形をなす

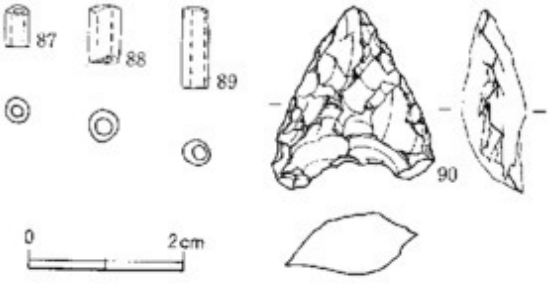


Fig. 36. 36号甕棺墓副葬管玉・石器実測図（1／1）

胴部中位と口縁部下には其々3条の横凹線を巡らし、その間に4条を一単位とする縦凹線を20cmの間隔で描いている。底部は大きくて分厚い。外面は縦ハケ目後にナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、色調は明赤褐色。上・下甕ともにⅢ類に属する。

出土遺物（Fig.36. PL.30）

87～89は青白色の碧玉製管玉である。87は長さ5.4mm、幅31mm、孔径は17mm。88は長さ73mm、幅40mm、孔径は20mm。89は長さ107mm、幅33mm、孔径は16mm。87と89はよく類似し、折損後に小口面を磨ぎ直した可能性が考えられる。

90は、黒曜石の打製石鏃で、基部の一端を欠いている。長さ2.4cm、基部幅は2.1cm。

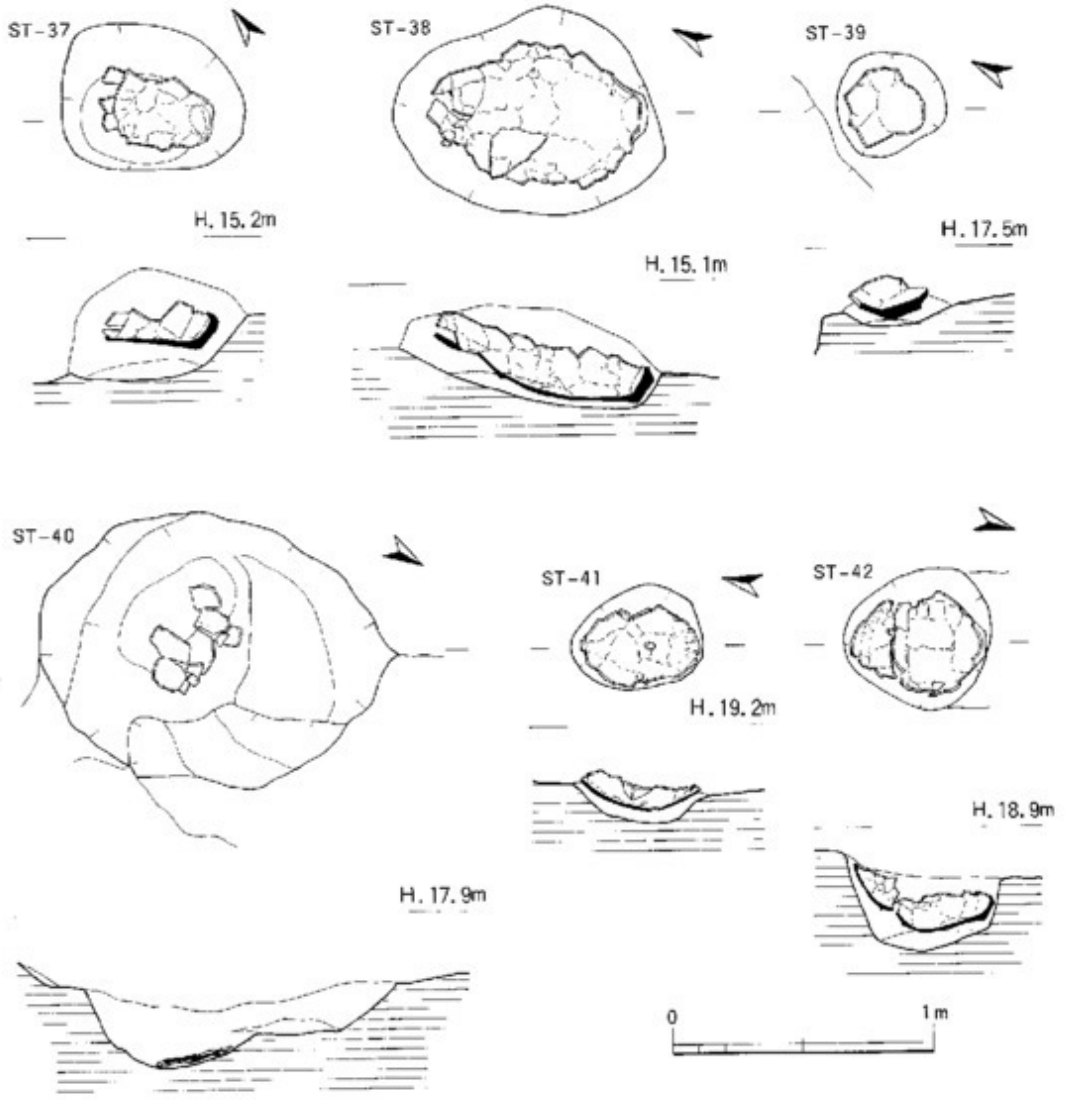


Fig. 37. 37～42号甕棺墓実測図（1／30）

37号甕棺墓（Fig.37・38. PL.10）

西側斜面西端の下段に立地する成人墓で、38号甕棺墓の北3mの距離にある。甕棺は削平が著しく単口式か否か等の詳細は明らかでない。甕棺は甕形土器を用い、44°の傾斜をもって埋置されている。主軸方位はN－56°－Wにとる。

甕(91)は、胴部上半を欠く大型の甕で、底径は12.4cm。胴部はスマートな砲弾形をなす。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土には砂粒と雲母を含み、色調は淡褐色。

38号甕棺墓（Fig.37・38. PL.10）

西側斜面下段の南西端に立地する成人墓で、37号甕棺墓の南3mの距離にある。甕棺には甕を用いるが、削平による消失が著しく単口式か合口式かは明らかでない。甕棺は主軸方位をN－21°－Wにとり、斜抗内に44°の傾斜をもって埋置されている。時期は中期初頭。

甕(92)は、口縁部～胴部上半を欠く大型の甕で、底径は12cm。胴部はスマートな砲弾形をなし、中位下半にはシャープな三角凸帯が1条巡る。底部は分厚い。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土は砂粒を含み、色調は暗赤褐色。Ⅳ類であろう。

39号甕棺墓（Fig.37・38. PL.10）

西側緩斜面中段の中央部に立地する成人墓で、13号土壙墓の西に隣接して位置する。甕棺は消失が著しく、底部を残すのみで詳細は明らかでないが、直立に近い75°の急角度をもって埋置されている。時期は前期末になろうか。

甕(93)は、底径12cmを測る大型の壺である。底部は分厚く、胴部は球形をなす。内外面ともにナデ調整で、底面には強い指頭押圧痕が残っている。胎土は粗く石英砂を多く含む。色調は明黄橙色。

40号甕棺墓（Fig.37・39. PL.10）

西側緩斜面中段の北部に立地する小児墓。36号甕棺墓のすぐ東に位置し、16号土壙墓よりも新しい。墓壙は木痕等による撹乱を受けて原状を留めておらず、詳細は明らかでない。甕棺には壺を用いている。時期は前期末に比定されよう。

甕(94)は、胴部の上半部を欠く壺型土器で、底径は14cm。球形の胴部に分厚い底部がつくものである。外面はナデ、内面は指頭押圧後にナデ調整。底面には指頭押圧痕が強く残る。胎土には多くの石英砂と雲母を含み、色調は明赤褐色。Ⅲ類に属するものと思われる。

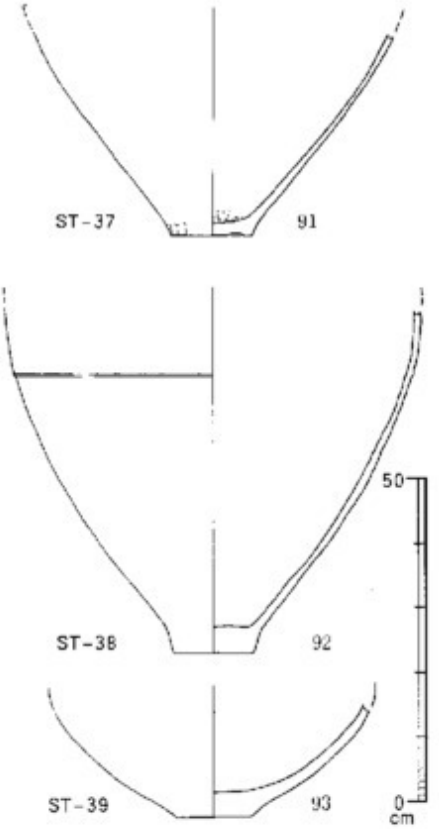


Fig. 38. 37～39号甕棺実測図（1／12）

41号甕棺墓（Fig.37. PL.10）

西側緩斜面中段の北側に立地する甕棺墓で、42号甕棺墓のすぐ東に位置する。甕棺は削平による消失が著しく詳細は明らかでないが、甕を用いた小児墓で棺床には水抜きの穿孔がある。甕棺は実測できなかった。

42号甕棺墓（Fig.37・39. PL.10）

西側緩斜面北側の中段に立地する接口式の小児墓で、43号甕棺墓を切っている。甕棺は口頸部を打ち欠いた壺を上下甕に用いている。墓壙はピット状の小さな竪穴で、甕棺はこの墓壙に34°の傾斜で埋置されている。主軸方位はN－11.5°　Wにとる。時期は中期後半に比定される。

上甕(95)は、小型の壺型土器である。胴部は倒卵形をなし、最大径部には「コ」字凸帯が1条巡る。調整は外面がナデ、内面は押圧後にナデ。胎土は多量の小砂粒と雲母を含む。色調は内面が黒色、外面は明赤褐色。

下甕(96)は、口頸部を打ち欠いた小型の壺で、底径は8.4cm。器高は36.8cm。倒卵形をなす胴部の最大径部には三角凸帯、その上位には「M」字凸帯が其々1条巡る。調整は外面が丁寧なナデ、内面は押圧後にナデで底面には指頭押圧痕が強く残る。外面には煤様の黒色顔料が塗布されている。胎土は砂粒を多く含む。VI類。

43号甕棺墓（Fig.40・41. PL.10・27）

西側緩斜面北側の中段に立地する呑口式の成人墓で、33号土壙墓より新しく42号甕棺墓よりも古い。甕棺は上下甕に甕を用い、楕円形の墓壙内に主軸をN　15°－Eにとって水平に埋置されている。上下甕の接合部には灰白色の粘土で口貼りがされていた。時期は中期前半に比定されよう。

上甕(97)は、口径57.2cm、底径13.2cm、器

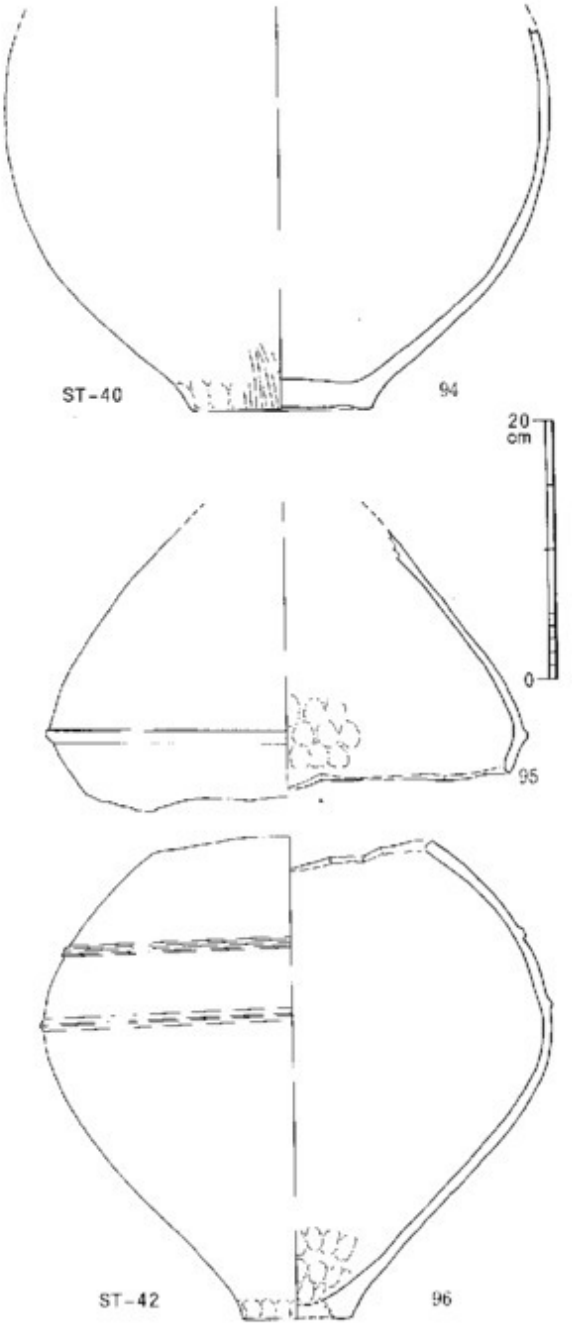


Fig. 39. 40. 42号甕棺実測図（1／6）

高70cmの大型甕である。口縁部は肥厚した逆「L」字状をなし、水平に小さく摘み出した端部には刻み目を施している。胴部は短い砲弾状をなし、形態的には壺の特徴を残している。外面はハケ目後にナデ、内面はナデ調整。外面には煤様の黒色顔料の塗布痕がある。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰赤褐色。Ⅵ類にあたる。

下甕(98)は、口径69.2cm、底径18.8cm、器高87.4cmの大型甕。逆「L」字状の口縁部は外

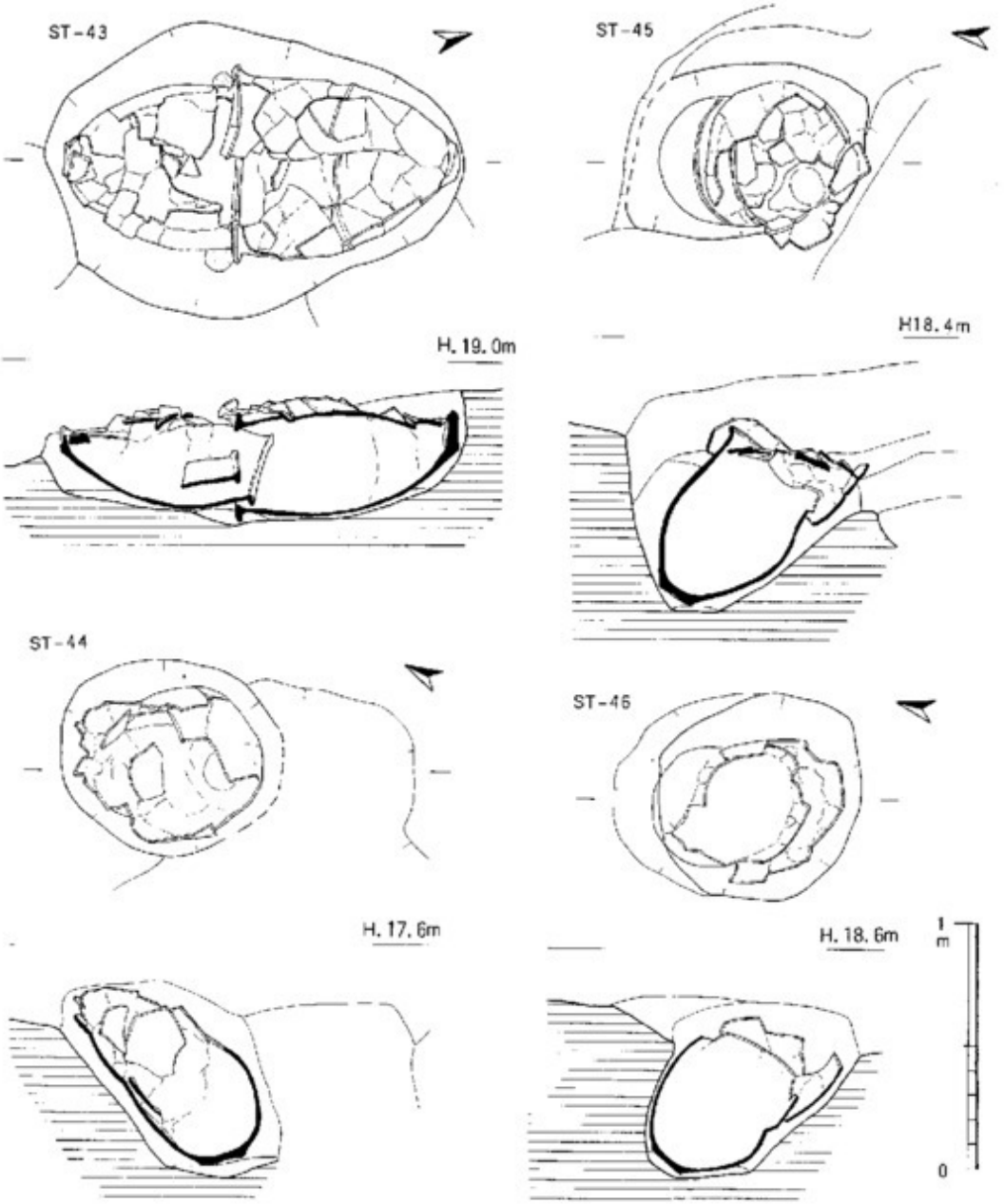


Fig. 40. 43～46号甕棺墓実測図（1／30）

唇の上下両端に刻み目を施している。胴部は短い砲弾形をなし、下半には2条の三角凸帯が巡る。調整は外面が粗いハケ目後にナデ、内面はナデ。胎土は砂粒を含み、灰赤褐色～赤褐色。V類。

44号甕棺墓（Fig.40・41. PL.10・27）

西側緩斜面中央部の中段に立地する谷口式の成人墓で、14号土壙墓のすぐ西に位置する。甕棺は上下甕には口縁部を打ち欠いた甕を用いている。墓壙は小さめの円形の斜抗を掘り、壙底に真砂土を敷いて甕棺を直立ぎみに64°の傾きで埋置している。主軸方位はN－24°－Wにとる。時期は前期後半に比定されよう。

上甕(99)は、口縁部を打ち欠いた大型の甕で、底径13.2cm、器高は61.2cm。小さく肩の張った胴部は上半が直口ぎみに立ち上がり、壺の形態的特徴を留めている。調整は外面がハケ目

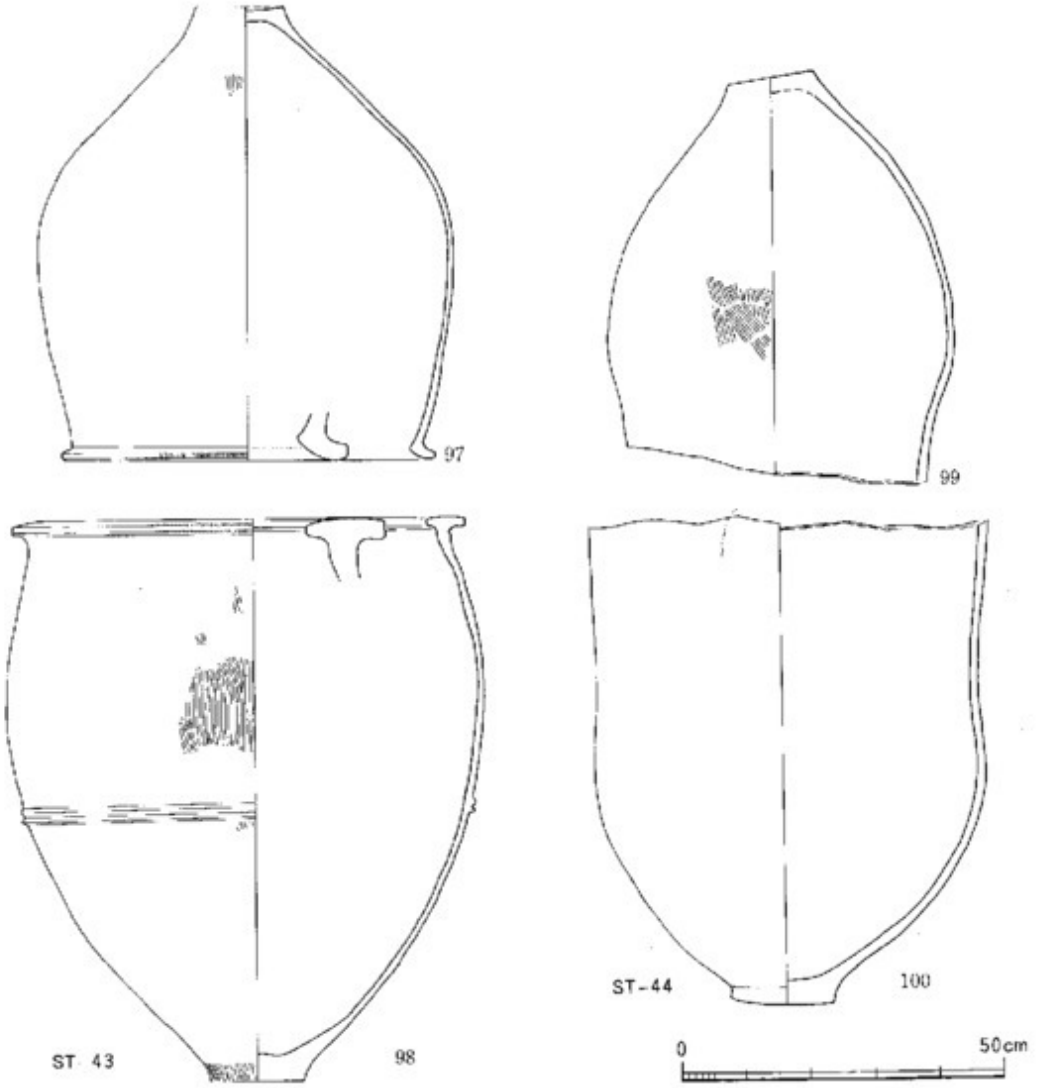


Fig. 41. 43・44号甕棺実測図（1／12）

後に粗い研磨状のナデ、内面はナデ。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色～淡赤褐色。Ⅰ類と思われる。

下甕(100)は、口縁部を打ち欠いた大型の甕で、底径17cm、器高は73.6cmを測る。胴部上半は直口して立ち上がり、底部は大きくて分厚い。内外面ともナデ調整。胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色～茶褐色。Ⅱ類。

45号甕棺墓 (Fig.40・42. PL.11・28)

西側緩斜面の中段南部に立地する覆口式の成人墓で、7号甕棺墓のすぐ西にある。甕棺は上甕に口縁部を打ち欠いた壺、下甕には甕を用いている。甕棺は墳底が斜行する楕円形の竪穴に54°の傾斜をもって埋置している。主軸方位はN－6°－Wにとる。時期は前期末に比定されよう。

上甕(101)は、口頸部～胴部上半を打ち欠いた大型の壺で、底径14.2cm、器高は41.8cm。胴部は玉葱状の扁球形をなし、底部は分厚い。胎土は砂粒を多く含む。色調は外面が褐色～赤褐色、内面は黄褐色。Ⅱ類。

下甕(102)は、底径14cm、器高68.1cmの大型甕で、口径は63cmになろう。口縁部は如意状に短く外反し、粘土紐を貼りつけて段を形成する上端は小さく外傾する。胴部は卵形状に小さく肩が張り、壺的な形態を残している。口縁部下と中位にはヘラ描きの横凹線を其々3条巡らしている。内面はナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色。Ⅲ類にあたる。

出土遺物 (Fig.43. PL.30)

105は、二等辺三角形状の鏃的な形状をなす滑石製の石製品で、現長3.15cm、幅1.3cm、厚さは3mmである。側縁は両端から粗く磨ぎ出す。

46号甕棺墓 (Fig.40・42. PL.11・28)

西側緩斜面南端の中段に立地する覆口式の成人墓で、47号甕棺墓の北にあり、上面は18号住居跡に削平されている。甕棺は上下甕とも口縁部を打ち欠いた甕。墓壙は小さな斜抗で甕棺は50°の傾斜で密着して埋置されている。主軸方位はN－8°－W。時期は前期後半であ

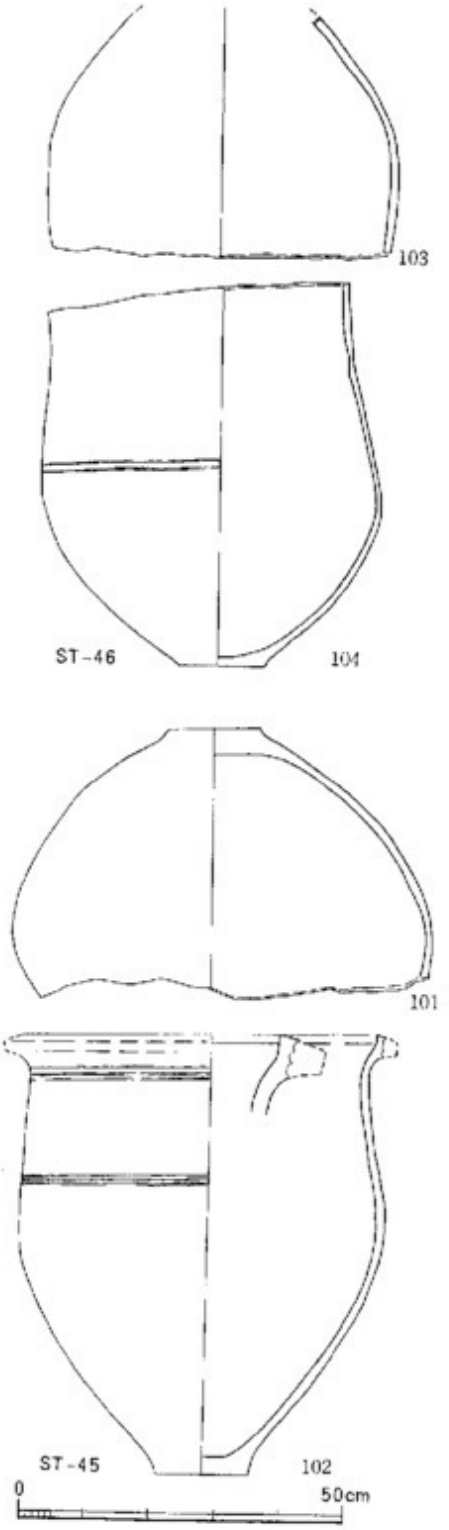


Fig. 42. 45・46号甕棺実測図 (1／12)

ろう。

上甕(103)は、口縁部から胴部上半を打ち欠いた大型の甕で、胴部上半が直口ぎみに立ち上がるものであろう。器壁は厚い。胎土は石英砂を多く含み、色調は灰白色～褐色。

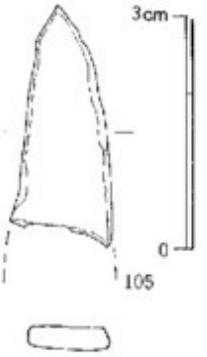


Fig. 43. 45号甕棺墓副葬石製品実測図 (1／1)

下甕(104)は、口縁部を打ち欠いた大型の甕で、底径13cm、器高は59.1cm。胴部上半はやや内傾ぎみに直口し、壺的な形状を留めている。胴部中位には2条のヘラ描きの横凹線が巡り、口縁部下にも1条の横凹線が遺存する。調整は外面がハケ目後に研磨状のナデ、内面は押圧ナデ。胎土は石英砂を多く含み、灰赤褐色～灰橙色。上下甕ともII類。

47号甕棺墓(Fig.44・45. PL.11・28)

西側緩斜面南端の中段に立地する接口式の成人墓で、46号甕棺墓のすぐ南に位置する。甕棺は上下甕ともに甕で、上甕は大半が消失している。下甕は窪み状の斜抗に15°の傾斜で埋置されており、墓壙は斜抗の浅い2段掘りになろう。主軸方位はN－20°－Wにとる。時期は中期中葉であろう。

上甕(106)は、口径65.5cmの大型甕で、胴部下半を欠失する。「T」字状の口縁部はわずかに外傾し、内

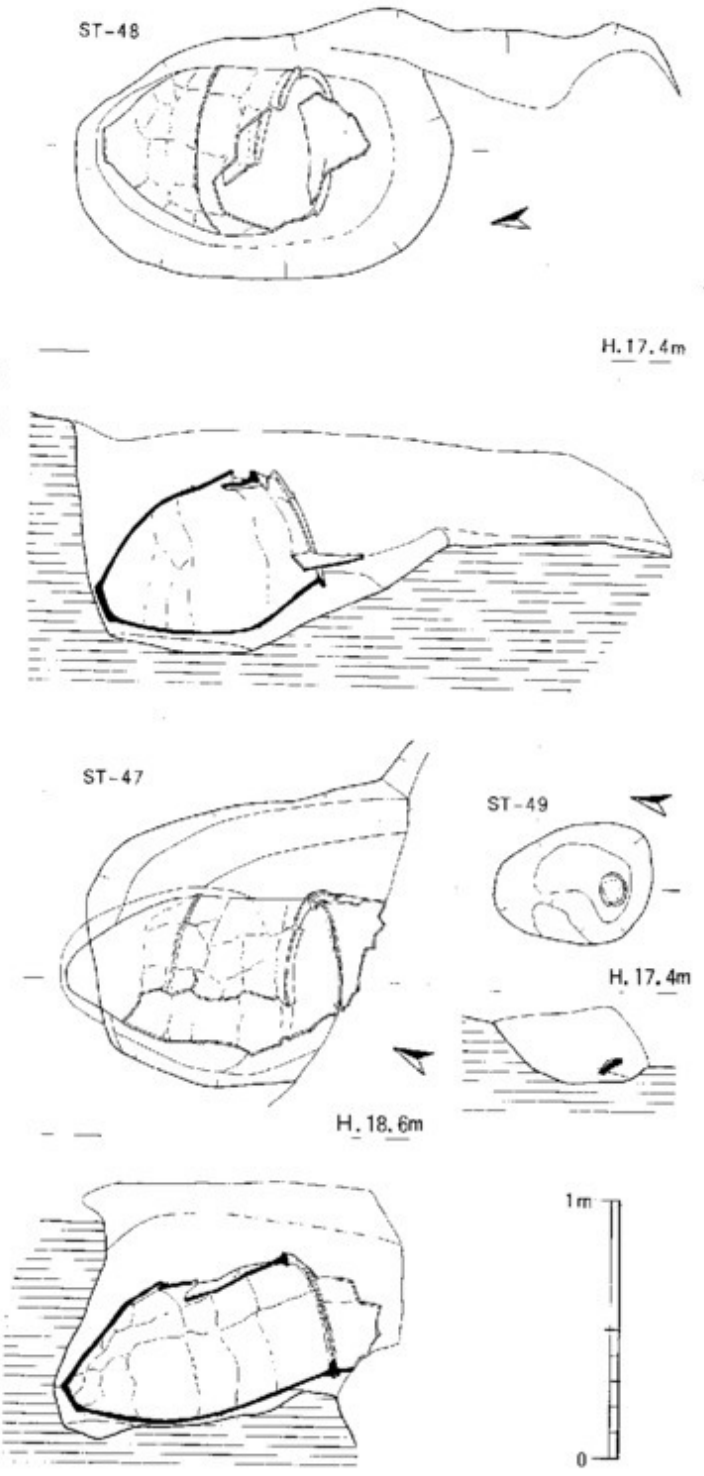


Fig. 44. 47～49号甕棺墓実測図 (1／30)

唇は肥厚して強く張り出す。胴部はスマートな砲弾状をなし、口縁部下には1条の「コ」字凸帯が巡る。内外面ともナデ調整。胎土は石英砂、雲母、赤褐色粒を含み、色調は明赤橙色。

下甕(107)は、口径61cm、底径12cm、器高90cmの大型甕である。口縁部は「T」字状をなし、肥厚して張り出す内唇は小さく外傾する。砲弾形の胴部は上半が開放ぎみに立ち上がり、中位よりやや下に連続する2条の三角凸帯が巡る。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土は多量の砂粒と雲母を含み、色調は赤橙色～明褐色。上下甕ともV類にあたる。

48号甕棺墓（Fig.44・45. PL.11）

西側緩斜面中央部の中段に立地する呑口式の甕棺墓で、36号甕棺墓のすぐ南に位置する。甕棺は上甕に打ち欠きの甕、下甕には甕を用いているが、上甕は大半が消失している。甕棺は初めに大きな竪穴を掘り、その北側に緩やかな斜抗を穿つ2段掘りの墓壙に22°の傾斜をもって埋置している。土軸方位はN－11.5°－Eにとる。時期は中期初頭になろう。Ⅲ類にあたる。

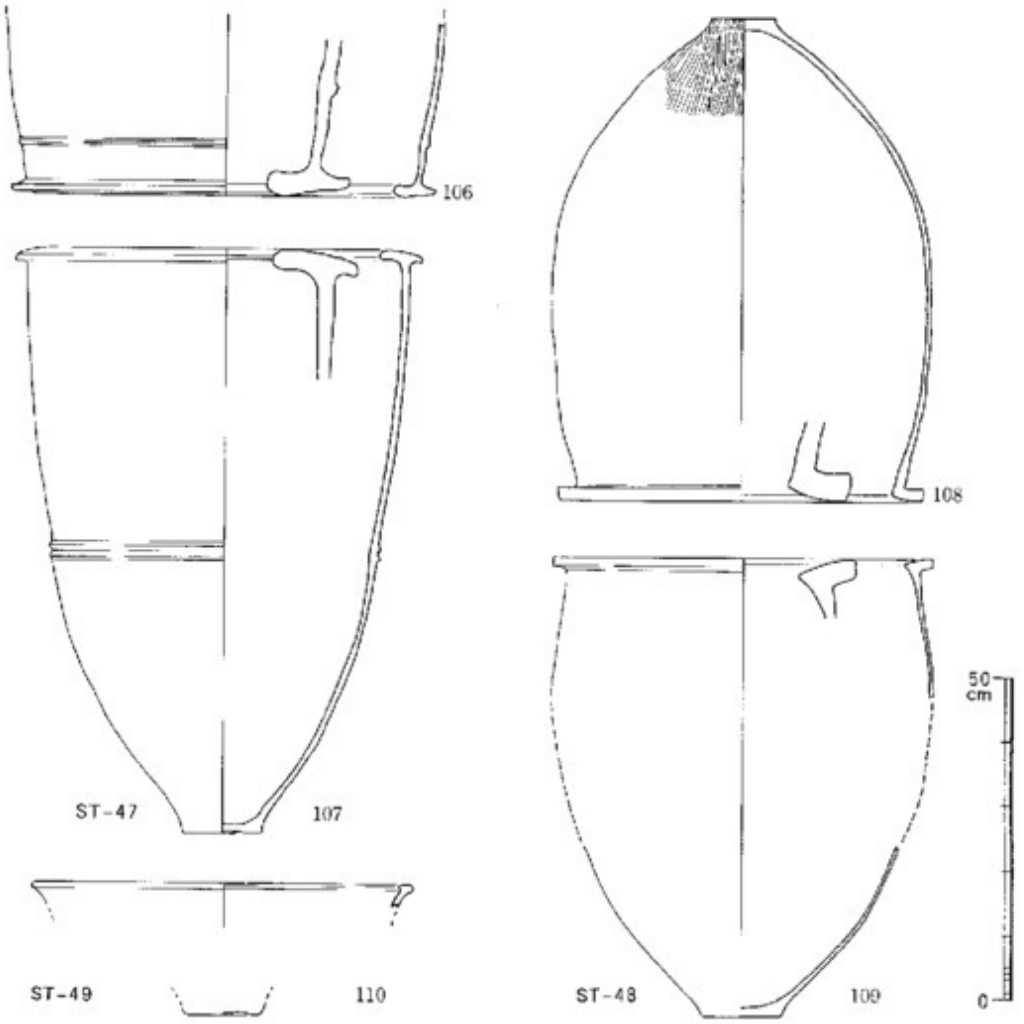


Fig. 45. 47～49号甕棺実測図（1／12）

上甕(108)は、口径56cm、底径9.6cm、器高74cmの大型甕である。逆「L」字状の口縁部は端部を平坦に整え、胴部はずんぐりとした砲弾形をなす。器表の風化が著しいが、外面には粗いハケ目が残る。内面はナデ調整。胎土は石英砂を多く含み、色調は明赤褐色。

下甕(109)は、口径58cm、底径11.6cmの大型甕で、器高は70cmになろう。口縁部は逆「L」字状で、胴部は砲弾形をなす。内外面ともナデ調整。胎土は石英砂を含み、色調は外面が明褐色、内面は灰青色～淡褐色。

出土遺物（Fig.32）

79は、手捏ね土器で、口径6cm、器高は3.8cm。内外両面から指頭押圧を加えて整形している。

49号甕棺墓（Fig.44・45）

西側斜面中央の中段に立地する成人墓で、13号土壙墓の西南に位置する。甕棺は底部を残して消失しており詳細は明らかでないが、斜抗に59°の傾斜で埋置されていた。前期後半。

甕(110)は、口径58cmの甕である。如意状の口縁部は内唇に粘土紐を貼りつけて段を形成している。胎土は石英粗砂を多く含み、色調は明褐色～暗灰色。Ⅲ類にあたる。

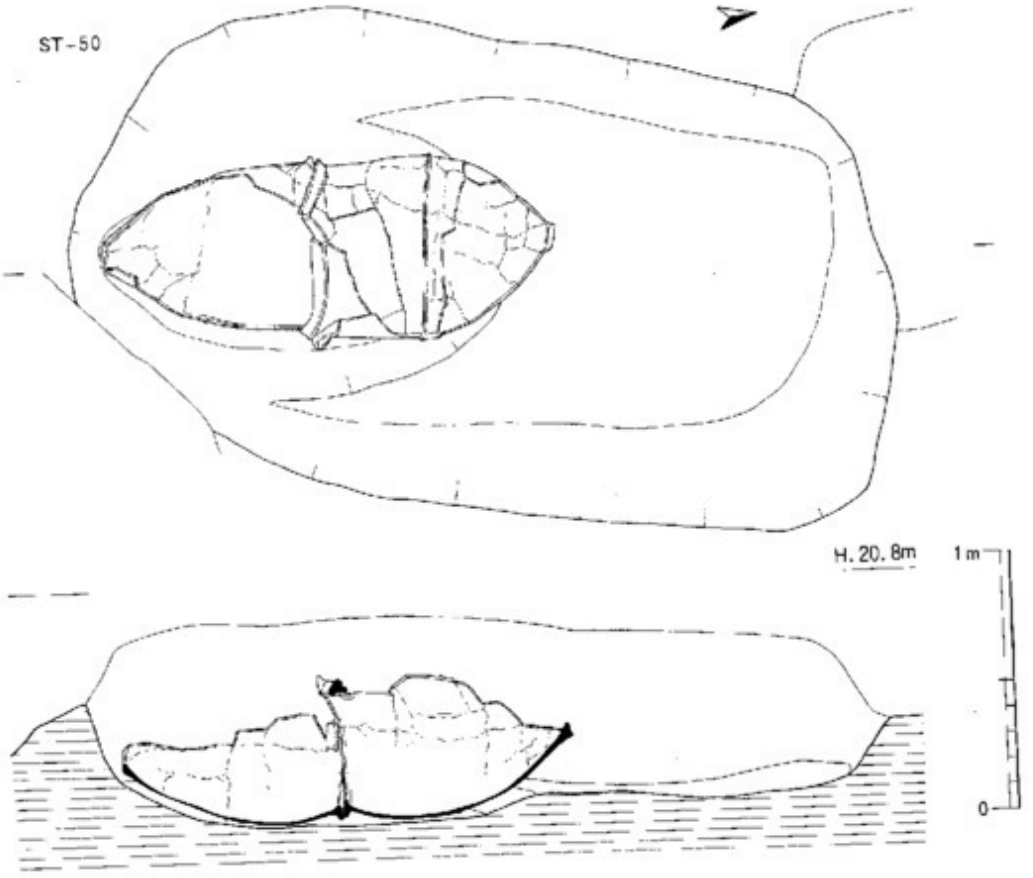


Fig. 46. 50号甕棺墓実測図（1／30）

50号甕棺墓（Fig.46・48. PL.11・28）

丘陵尾根の中央に立地する接口式の成人墓で、上面を4号墳の周溝に削平されている。甕棺は上下甕ともに甕である。墓壙は大きな楕円形の竪穴を掘り、その南半に浅い窪みを掘り込んでいる。甕棺はこの窪みに密着して水平に埋置している。主軸方位はN－9°－E。中期初頭。

上甕(111)は、口径63.5～67.4cm、底径13cm、器高100cmの大型甕である。逆「L」字状の口縁部は外唇の張り出しが短くわずかに内傾する。胴部はずんぐりとした砲弾形をなし、中位にシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ。胎土には多量の石英砂と若干量の赤褐色粒を含む。色調は淡黄色～明橙色。

下甕(112)は、口径62cm、底径11.2cm、器高83cmの甕である。口縁部は逆「L」字状をなし、倒卵形の胴部中位にはシャープな三角凸帯が1条巡っている。内外ともにナデ調整。胎土は多量の石英砂と若干量の雲母、赤褐色粒を含む。色調は明赤褐色。上下甕ともにⅣ類。

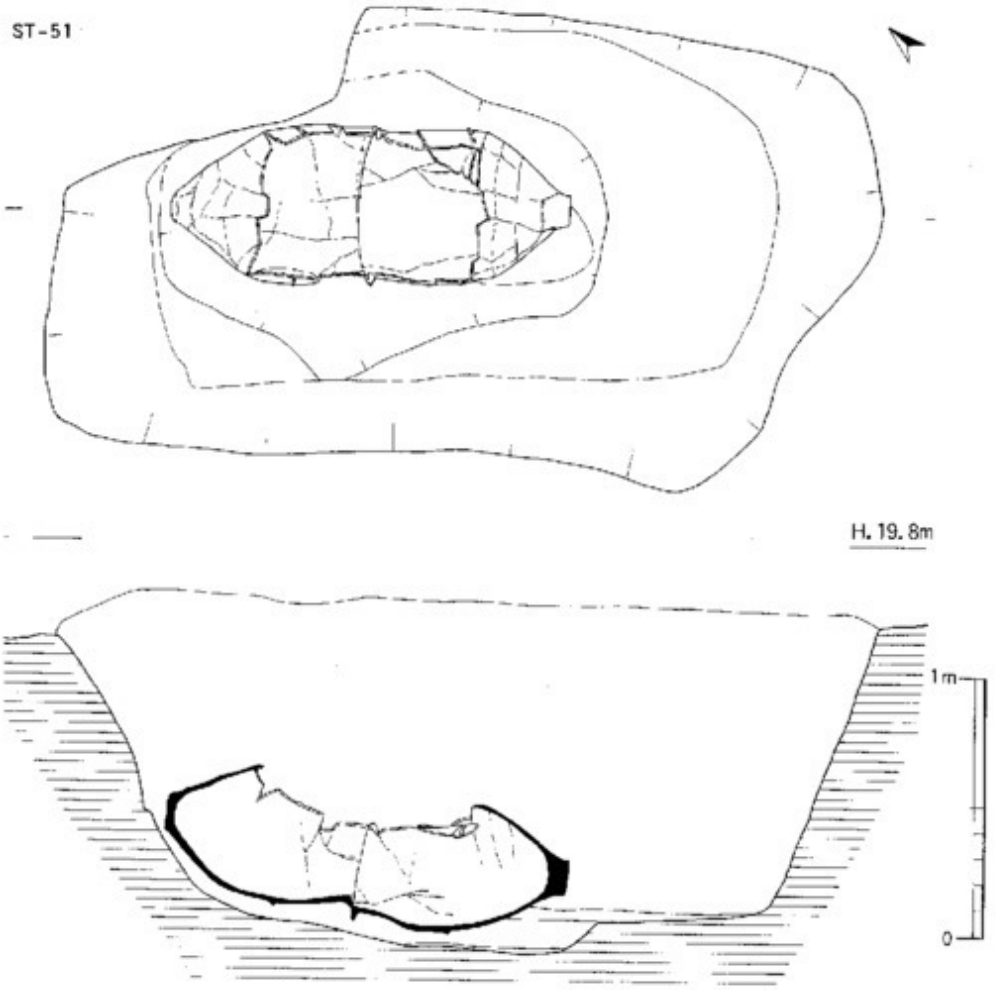


Fig. 47. 51号甕棺墓実測図（1／30）

51号甕棺墓（Fig.47・48. PL.12・28）

西側緩斜面北端の上縁に立地する接口式の成人墓で、西側は25号土壙墓を切っている。甕棺は上下甕とも甕である。隅丸長方形の墓壙は大きくて深く、壙底の西側に浅い窪みを掘り込んでいる。甕棺はこの窪みに8°の傾斜で埋置されている。主軸方位はN－40°－W。中期初頭。

上甕(113)は、口径52cm、器高75.7cmの甕。口縁部は逆「L」字状をなし、倒卵形の胴部中位にシャープな三角凸帯が1条巡る。内外ともナデ調整。胎土は石英、長石砂を含み、赤褐色。

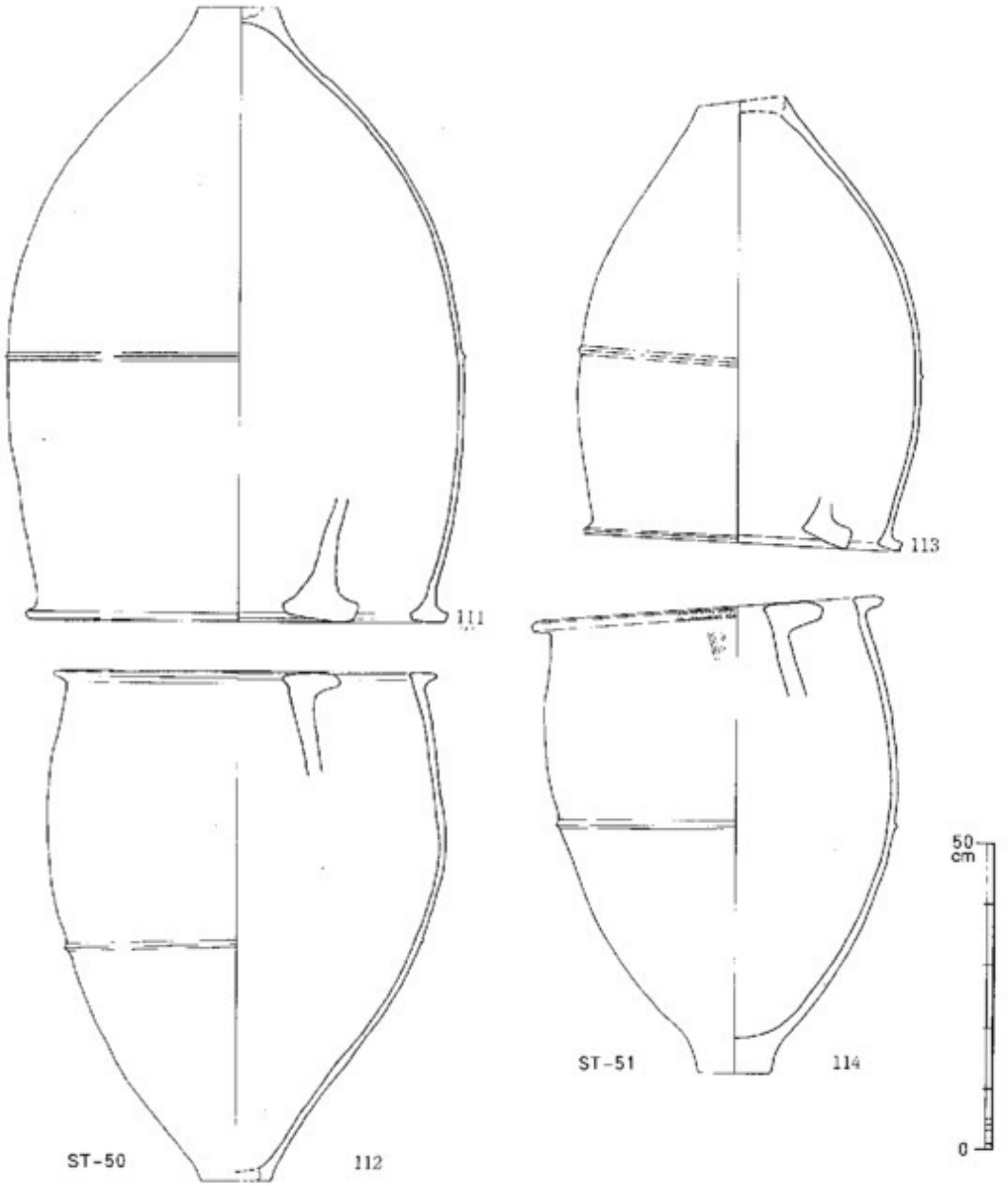


Fig. 48. 50・51号甕棺実測図（1／12）

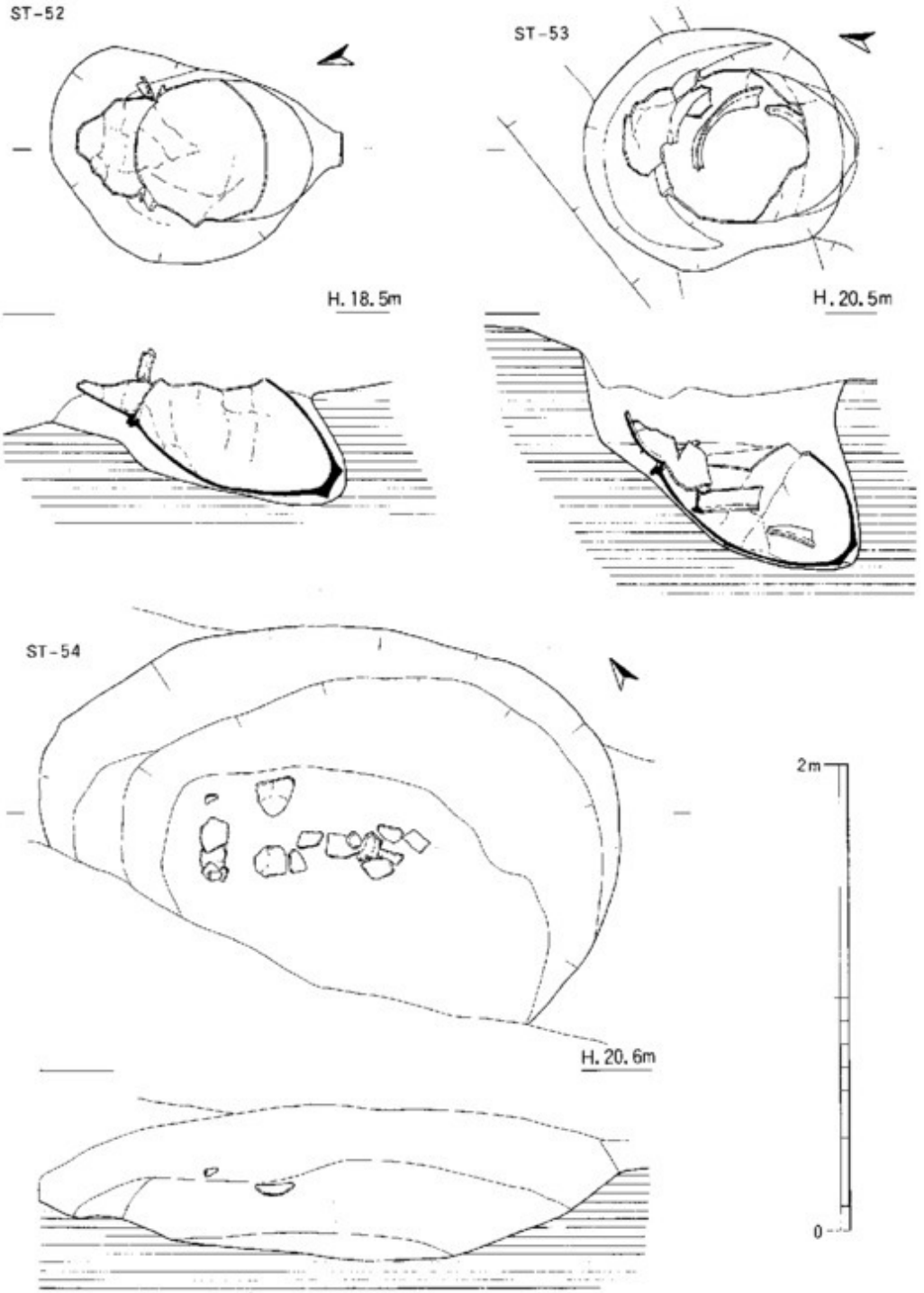


Fig. 49. 52～54 号甕棺墓実測図（1／30）

下甕(114)は、口径58cm、底径11.6cm、器高77.8cmの甕。口縁部は逆「L」字状の外唇の上下両端には刻み目を施す。胴部は倒卵形を呈し、中位に1条の三角凸帯を巡らせる。底部は5.9cmと異様に厚い。調整は外面がハケ目後にナデ、内面は押圧ナデ。底面には指頭押圧痕が明瞭に残る。胎土は石英砂を多く含み、色調は明褐色。上下甕ともにⅣ類。

52号甕棺墓 (Fig.49・50. PL.12・28)

丘陵尾根の中央に立地する接口式の成人墓で、4号墳に切られている。甕棺は上下甕ともに甕。墓壙は竪穴を掘った後に一段下がって緩い斜抗を穿つ2段掘りで、甕棺はこの斜抗に36°の傾斜をもって密着して埋置している。主軸方位はN－12°－Eにとる。時期は中期初頭。

上甕(115)は、口径54.8cm、底径12cmの甕で、器高は72.6cmになろう。口縁部は逆「L」字状をなし、上端は水平に整える。胴部は卵形に膨らみ、中位には1条の三角凸帯が巡る。底部

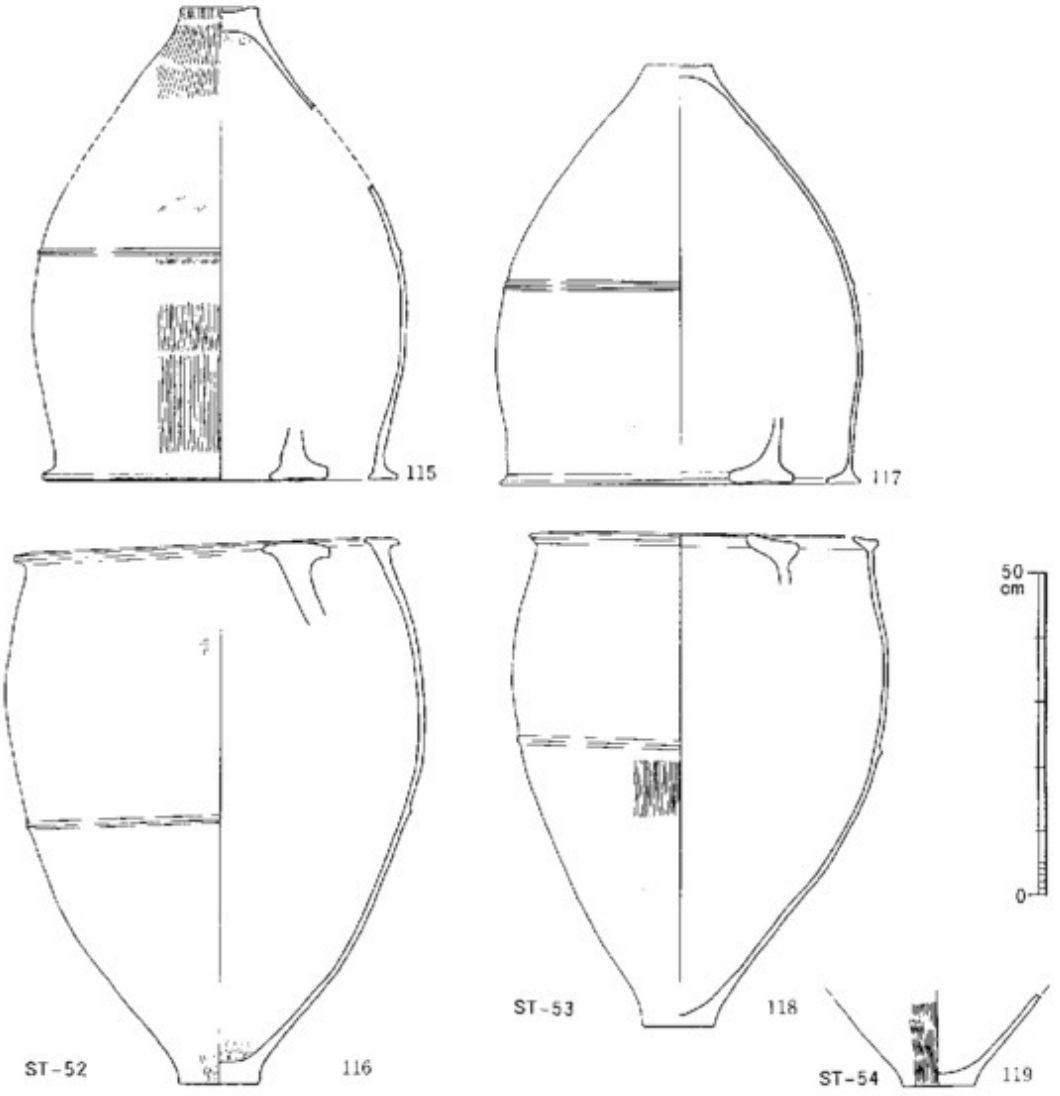


Fig. 50. 52～54号甕棺実測図 (1／12)

は分厚く上げ底状になる。調整は外面がハケ目、内面は押圧ナデ。胎土は砂粒を含み、赤褐色。

下甕(116)は、口径60cm、底径12.4cm、器高84cmの大型の甕である。逆「L」字状の口縁部は内唇が小さく張り出し、倒卵形に膨らむ胴部の中位には1条の三角凸帯を巡らしている。外面はハケ目後にナデ調整、内面はナデ。底部には強い指頭押圧痕が残る。胎土は石英砂と若干量の赤褐色粒を含む。色調は外面が明赤橙色、内面は淡黄褐色。上下甕ともⅣ類にあたる。

53号甕棺墓（Fig.49・50. PL.12）

丘陵尾根の中央部西縁にある呑口式の成人墓で、上甕は4号墳に削平されている。甕は上下甕ともに甕。墓壙は小さな竪穴を掘り、壙底から更に斜抗を穿つ2段掘りの構造をなす。甕棺はこの斜抗に41°の傾斜で密着して埋置され、主軸方位をN－15.5°－Wにとる。中期前半。

上甕(117)は、口径56cm、底径10.4cm、器高64.4cmの大型の甕。口縁部は内唇が強く張り出した「T」字状をなし、上端は水平に整える。胴部はずんぐりとした砲弾形をなし、中位には三角凸帯を連続して2条巡らす。内外面ともナデ調整。胎土は砂粒を含み、淡褐色～淡赤褐色。

下甕(118)は、口径54cm、底径11.5cm、器高76cmの大型の甕。口縁部は内唇が大きく張り出した「T」字状で外唇の発達は弱く、僅かに外傾する。胴部は短い砲弾形で、中位にはシャープな三角凸帯が1条巡る。外面はハケ目後にナデ、内面はナデ。胎土は石英、長石砂を含む。Ⅴ類。

54号甕棺墓（Fig.49・50）

丘陵尾根の北西端に立地する成人墓である。4号墳の周溝に大きく削平されて原状を留めず詳細は明らかでない。楕円形の墓壙は南東側に小さなフラット面を造る2段掘り状をなす。

甕(119)は、底径11.2cmの甕で、胴部はスマートな砲弾形をなそう。調整は外面がハケ目、内面はナデで底面には強い指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒と雲母を含み、色調は赤褐色。Ⅴ類。

土　壙　墓（SR）

弥生時代の土壙墓は、調査区の全域で甕棺墓群と重複して36基を検出した。宅地化によって消失したものを加えれば50基を越えると思われる。土壙墓には、素掘りの土壙墓と木棺埋設の痕跡を示す木棺墓がある。墓域の拡がりは1号墳の墳丘下に造営された35～37号土壙墓を北限として丘陵の尾根上と西側に残る緩斜面上に広く分布する。丘陵尾根上に占地する土壙墓はまとまった群構成を示さず、単基的に散在する傾向にある。これに対して緩斜面上に占地する土壙墓は斜面に沿って一定の空域をもって並列した在り方を示す。土壙墓の時期は、数基を除いて副葬遺物がないために明らかでないが、重複する甕棺墓との切り合い関係から甕棺墓群に先行して造営され、甕棺墓群の最も盛行する前期末には造墓活動は終了していたと考えられる。

一方、旧丸尾池に面した東側の緩斜面上には分布しない。このことは後出して造営される甕棺墓と同じ様相を示し、北に開口する小谷に面した緩斜面が墓域として利用されなかったことを示すものであろう。

1号土壙墓（Fig.51. PL.12）

丘陵尾根の東縁に立地する木棺墓で、1号住居跡の西に隣接して位置する。墓壙は長軸239cm、短軸77cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はN－21°－E。深さ48cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。南側小口には小口板を固定した裏込めと思われる灰白色粘土塊と側板の隅痕があることから木棺墓とした。墓壙の南東部上縁には小型壺が副葬されていた。時期は前期後半になろう。

2号土壙墓（Fig.51. PL.12）

丘陵尾根の中央部東縁に立地する木棺墓で、1号土壙墓の北4mに並置している。墓壙は長軸127cm、短軸68cmの隅丸長方形プランをなし、深さは67cm。壁面は急峻で、断面形は箱形をなす。両小口部には側壁に沿って板材の掘り込み痕があり、同時に土層断面でも幅3～5cmの腐食物層が観察された。遺物は出土していない。

4号土壙墓（Fig.51. PL.12）

丘陵尾根の中央部に立地する土壙墓で、5号土壙墓のすぐ北に並置している。墓壙は長軸180cm、短軸73cmの長方形を呈し、深さは32cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は

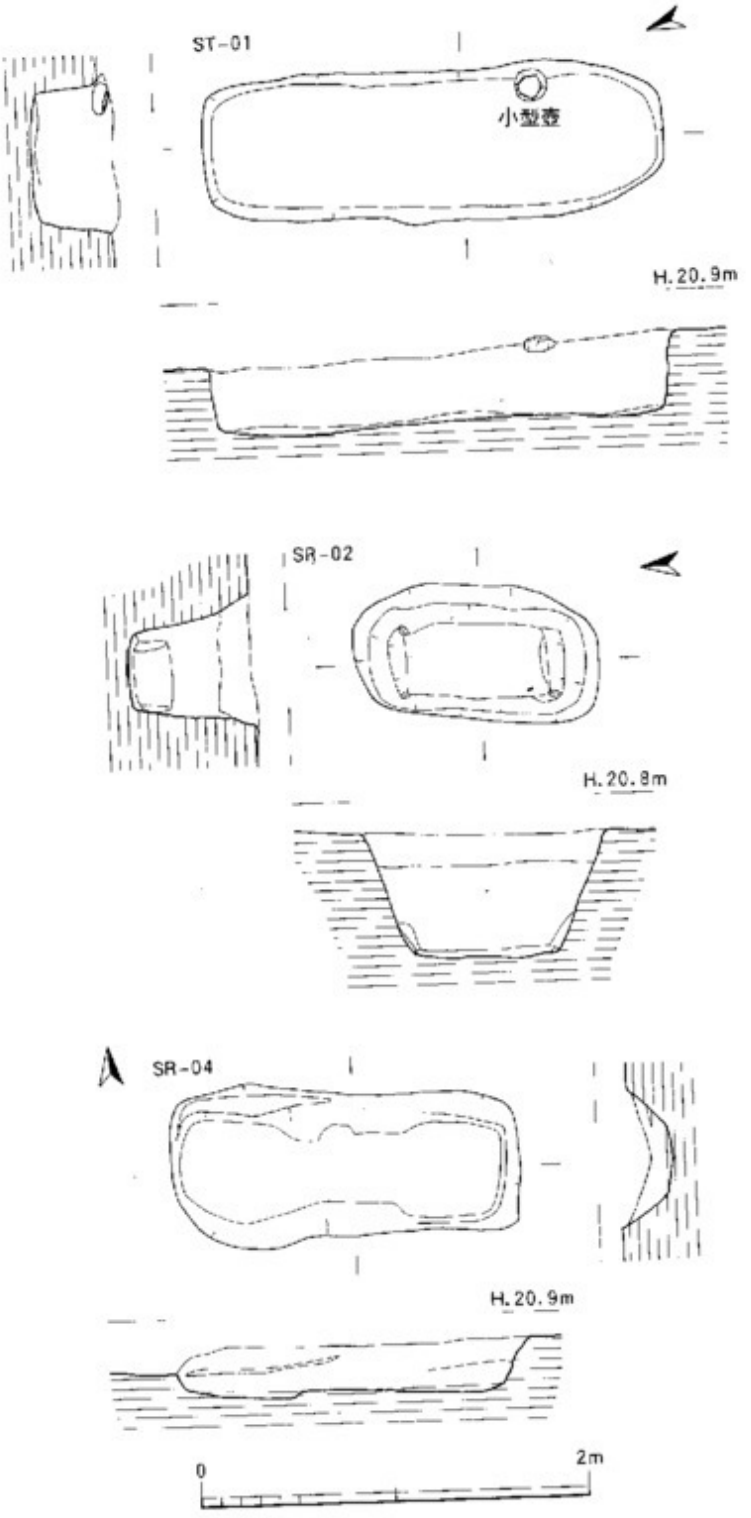


Fig. 51. 1・2・4号土壙墓実測図（1／40）

舟底状をなす。壙底は平坦で西側小口部が一段低くなる。遺物は未検出。

5号土壙墓 (Fig.52. PL.12)

丘陵尾根の中央部に立地する土壙墓で、4号土壙墓の南に並置し、南東側は1号住居跡と3号土壙墓に切られている。墓壙は長軸240cm、短軸95cmの隅丸長方形になろう。壁面は急峻に立ち上がり、西方に緩傾斜する壙底の中央部には浅い凹みがある。深さは36cmで、主軸方位はN－76°－Wにとる。

7号土壙墓 (Fig.52. PL.13)

西側緩斜面中段の中央部に立地する木棺墓で、8号土壙墓の東にあり7～10号土壙墓と並置して一群をなす。北側の小口は攪乱で消失しているが、平面形は長軸220cm、短軸85cmの長方形プランになろう。緩やかに立ち上がる壁面は深さ40cmで断面形は逆台形をなす。土層断面では粘性の腐食物層が側壁に沿って立位していることから木棺墓と考えられる。遺物は未出土。

8号土壙墓 (Fig.52. PL.13)

西側緩斜面中段の中央に立地する木棺墓で、7号土壙墓の西にあり7～10号土壙墓と並置して一群をなす。墓壙は長軸195cm、短軸68cm、深さ33cmの長方形

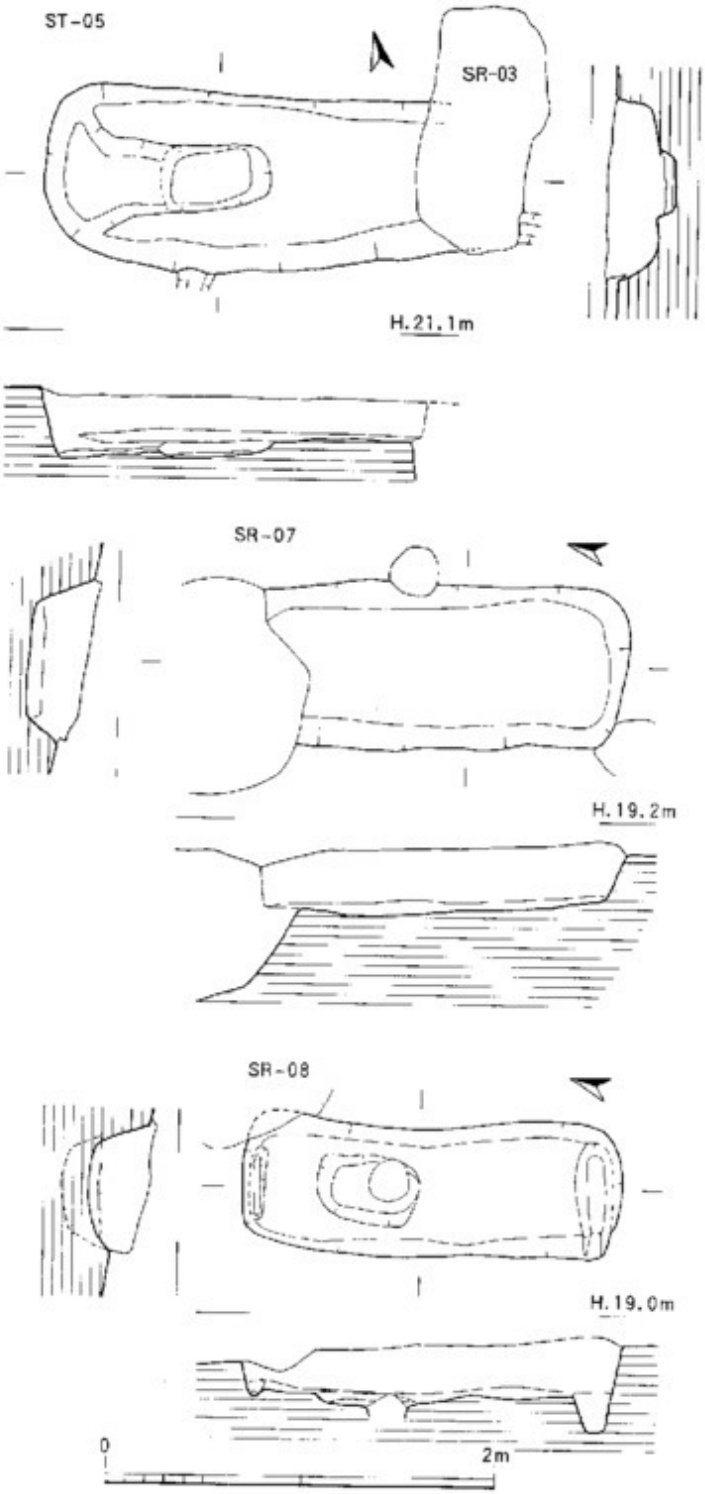


Fig. 52. 5・7・8号土壙墓実測図 (1／40)

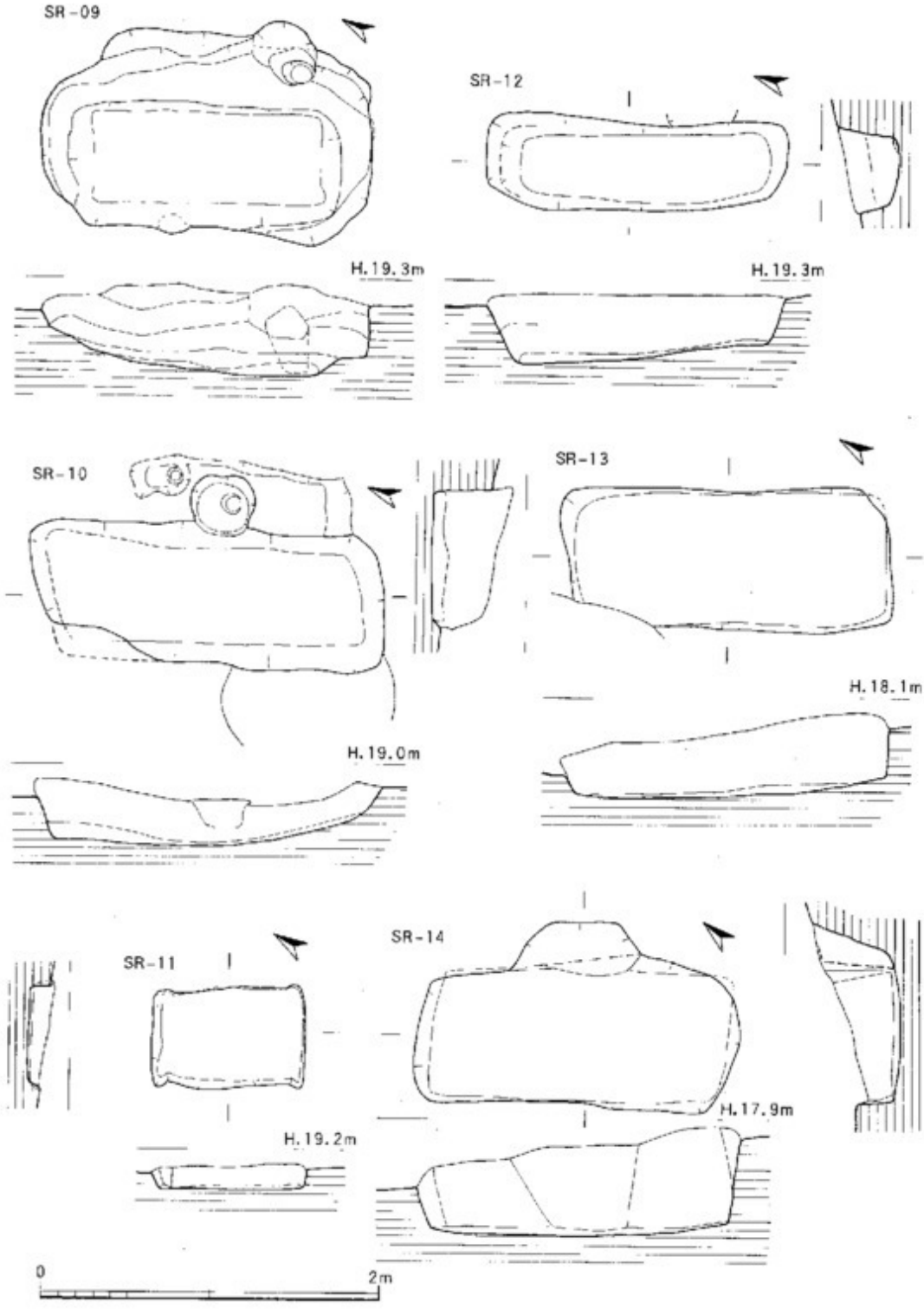


Fig. 53. 9～14号土壙墓実測図（1／40）

プランをなし、N－15°－Wに主軸方位をとる。壙底には小口壁に沿って幅8～15cmの溝状の掘り込みがあり、溝内は真砂土が堅く詰められていた。内側に密着して小口板を立てたものだろう。北側の小口溝と側壁の間には隙間があり、小口板を側板で挟み込むタイプになろう。

9号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の中央部に立地する土壙墓で、10号土壙墓の東に並置している。土壙墓は長軸195cm、短軸140cmの隅丸長方形プランをなす1段目の墓壙中央に長軸162cm、短軸60cmの2段目の墓壙を掘り込む2段掘りの構造をなす。墓壙東側壁の両隅部には抉り込み状のわずかな凹みがあり、木棺墓の可能性も考えられる。主軸方位はN－16°－Wにとる。覆土中からは弥生土器の壺、甕片のほかに磨製石鏃が出土した。

出土遺物（Fig.54. PL.30）

120は基部を欠く磨製石鏃で、現長3.05cm、厚さ2.8mm。側縁の磨ぎ出しはあまく鋲は不明瞭。

10号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の中央に立地する土壙墓で、東側には9号土壙墓が並置している。墓壙は長軸210cm、短軸84cm、深さ37cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN－17°－Wにとる。墓壙上縁の東南側にフラットな面があり、本来は2段掘りであったとも考えられる。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなす。覆土中からは弥生土器小片が僅かに出土した。

11号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の南側に立地する小型の木棺墓で、10号土壙墓のすぐ南に位置する。墓壙は長軸91cm、短軸59cmの長方形プランをなし、主軸方位をN－30°－Wにとる。両小口には板材を＝め込んだ抉り込みの溝が側壁よりも数センチほど張り出してあり、側板を小口板で挟み込むタイプの木棺墓と考えられる。壙底は平坦で、壁面は直口して立ち上がる。

出土遺物（Fig.59）

121は小型壺の底部で、底径6cm。内外面ともナデ調整。胎土は砂粒と雲母を含み、赤褐色。

12号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の南端に立地する土壙墓で、7～11号土壙墓群と縦列し、18号住居跡のすぐ北に位置する。墓壙は長軸178cm、短軸53cm、深さ40cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN－18°－Wにとる。壙底は北側が1段低くなる。壁面は急峻で断面形は舟底状をなす。遺物は未出土。

13号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の南西部に立地する土壙墓で、

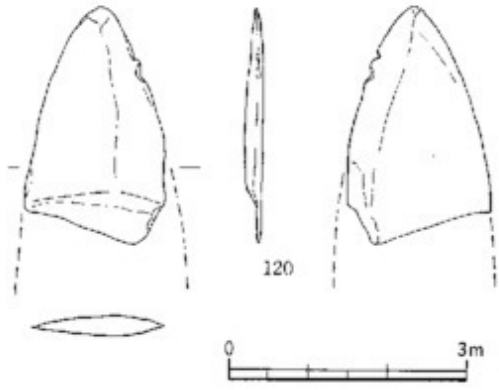


Fig. 54. 9号土壙墓出土石器実測図（1／1）

14号土壙墓の南に縦列して位置する。墓壙は長軸197cm、短軸82cm、深さ50cmの長方形プランをなし、N－28°－Wに主軸方位をとる。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形をなす。壙底は平坦で、北へむかって緩やかに傾斜する。遺物は未出土。

14号土壙墓（Fig.53. PL.13）

西側緩斜面中段の西端に立地する土壙墓で、13号土壙墓の北に接して位置する。墓壙は長軸192cm、短軸80cmの長方形を呈し、主軸方位をN－38°－Wにとる。深さ65cmの壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形をなす。壙底は平坦で、中央部が浅い凹レンズ状をなす。壙中からは弥生時代の小壺小片が僅かに出土している。

15号土壙墓（Fig.55. PL.13）

西側緩斜面中段の北西部に立地する土壙墓で、西半は16号土壙墓に切られる。墓壙は長軸176cmの長方形プランをなし、短軸は70cmほどになろう。深さ20cmの壁面は直口し、断面形は箱形をなす。壙底は平坦で、N－22°－Wに主軸方位をとる。遺物は弥生土器小片が少量出土。

16号土壙墓（Fig.55. PL.14）

西側緩斜面中段の北西部に立地する土壙墓で、15号土壙墓よりも新しい。土壙墓は長軸185cm、短軸110cm、深さ25cmの1段目の墓壙中央に長軸165cm、短軸55cm、深さ32cmの墓壙を

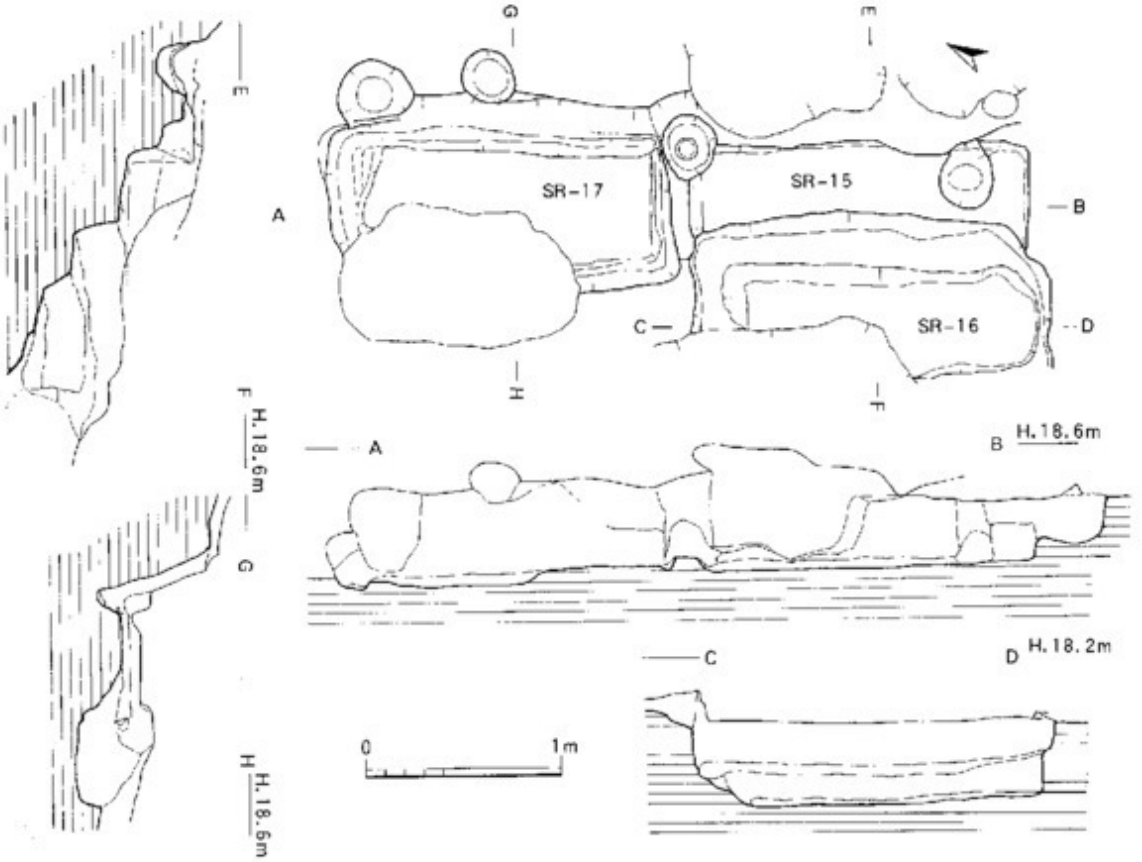


Fig. 55. 15～17号土壙墓実測図（1／40）

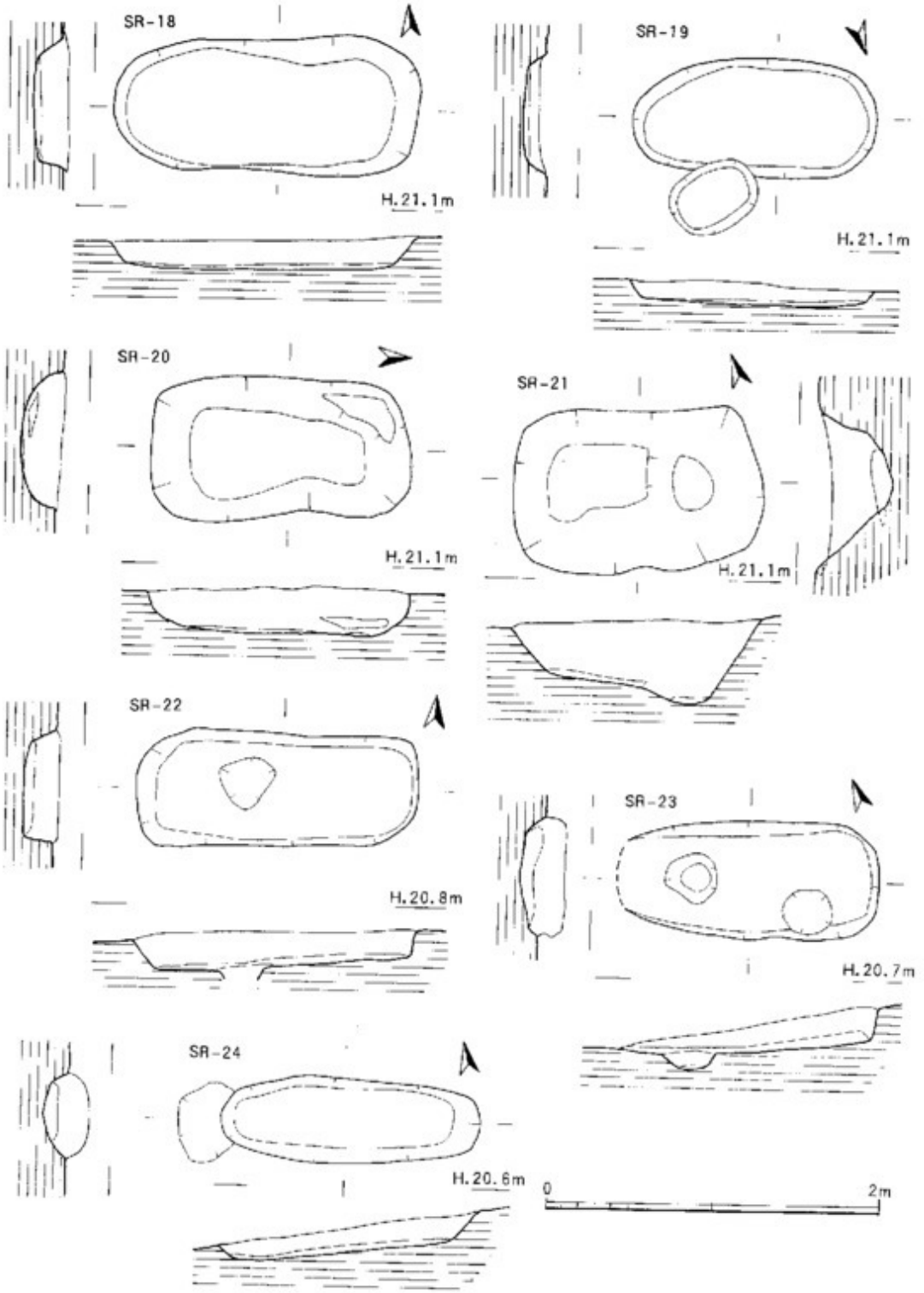


Fig. 56. 18～24号土壙墓実測図（1／40）

掘り込む2段掘りの構造をなす。壁面は急峻に立ち上がり、箱形の断面形をなす。2段目の墓壙はやや浅く、壙底は平坦である。主軸方位はN－22°－Wにとる。遺物は未出土。

17号土壙墓（Fig.55. PL.14）

西側緩斜面中段の北西端に立地する木棺墓で、重複する15～17号土壙墓中で最も北に位置する。墓壙は長軸175cm、短軸100cm、深さ46cmの長方形プランをなし、N－25°－Wに主軸方位をとる。壁面は急峻に立ち上がり、壁下には幅5～10cm、深さ10cm程の溝が巡る。この溝の南東隅は側壁側が小口側を止める形状をなすことから側板が小口板を挟み込むタイプのものであろう。壙底は平坦で、真砂土が薄く敷き硬められていた。遺物は未出土。

18号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南部に立地する土壙墓で、21号土壙墓の南2mの距離に位置する。墓壙は長軸183cm、短軸78cm、深さ23cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はN－86°－W。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は浅い凹レンズ状をなす。遺物は未出土。

19号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南端部に立地する土壙墓で、19号土壙墓の南3mの距離にある。墓壙は長軸146cm、短軸72cm、深さ15cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－70°－Wにとる。緩やかに立ち上がる壁面は断面形が逆台形をなし、壙底は浅い凹レンズ状をなす。遺物は未出土。

20号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南東端に立地する土壙墓で、19号土壙墓の東3mの距離に位置し7号建物跡と重複する。墓壙は長軸156cm、短軸85cm、深さ29cmの長方形プランをなし、N－3°－Eに主軸方位をとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。北西隅の壁面下位には小さなフラット面を造る。壙底は中央部が浅く凹む。遺物は未出土。

21号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南部に立地する土壙墓で、18号土壙墓のすぐ北に位置する。墓壙は長軸150cm、短軸98cmの長方形を呈し、主軸方位をN－67°－Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がるが、東側は壙底から更に凹レンズ状に1段下がる。壁高は壙底までが62cm、最深部で99cmを測り、断面形は舟底状をなす。遺物は未出土。

22号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南西縁に立地する土壙墓で、24号土壙墓のすぐ東に位置する。墓壙は長軸170cm、短軸67cm、深さ24cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN－88°－Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、箱形の断面形をなす。壙底は緩やかに西へ傾斜する。遺物は未出土。

23号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の南西縁に立地する土壙墓で、24号土壙墓の北に位置する。墓壙は長軸157cm、短軸71cm、深さ27cmの長方形プランを呈し、西側小口は消失している。壁面は緩やかで舟底状

の断面形をなし、壙底は中央部が浅く凹む。主軸方位はN－66°－Wにとる。覆土中からは弥生土器の小片が数点出土した。

24号土壙墓（Fig.56. PL.14）

丘陵尾根の西縁に立地する土壙墓で、19号住居跡のすぐ東に位置する。墓壙は長軸155cm、短軸50cm、深さ33cmの長方形プランを呈し、N－80°－Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。壙底は平坦で西側は緩斜面に沿って緩やかに傾斜する。

25号土壙墓（Fig.57. PL.15）

西側緩斜面北側の上段に立地する大型の土壙墓で、N－25°－Wに主軸方位をとる。西には26号土壙墓が並列し、東縁は51号甕棺墓に切られている。土壙墓は初めに長軸405cm、短軸245cmの大きな1段目の墓壙を浅く掘り、次に西壁に沿って長軸245cm、短軸170cmの長方形プランの墓壙を掘り込む2段掘りの構造をなす。2段目の墓壙は深さ60～74cmで、壁面は西壁を除いてやや緩やかに立ち上がる。壙底は平坦で、断面形は箱形をなす。覆土からは甕棺片等の弥生土器片が出土。

26号土壙墓

（Fig.57. PL.15）

西側緩斜面北端の上段に立地する大型の土壙墓で、主軸方位をN－24°－Wにとる。東には25号

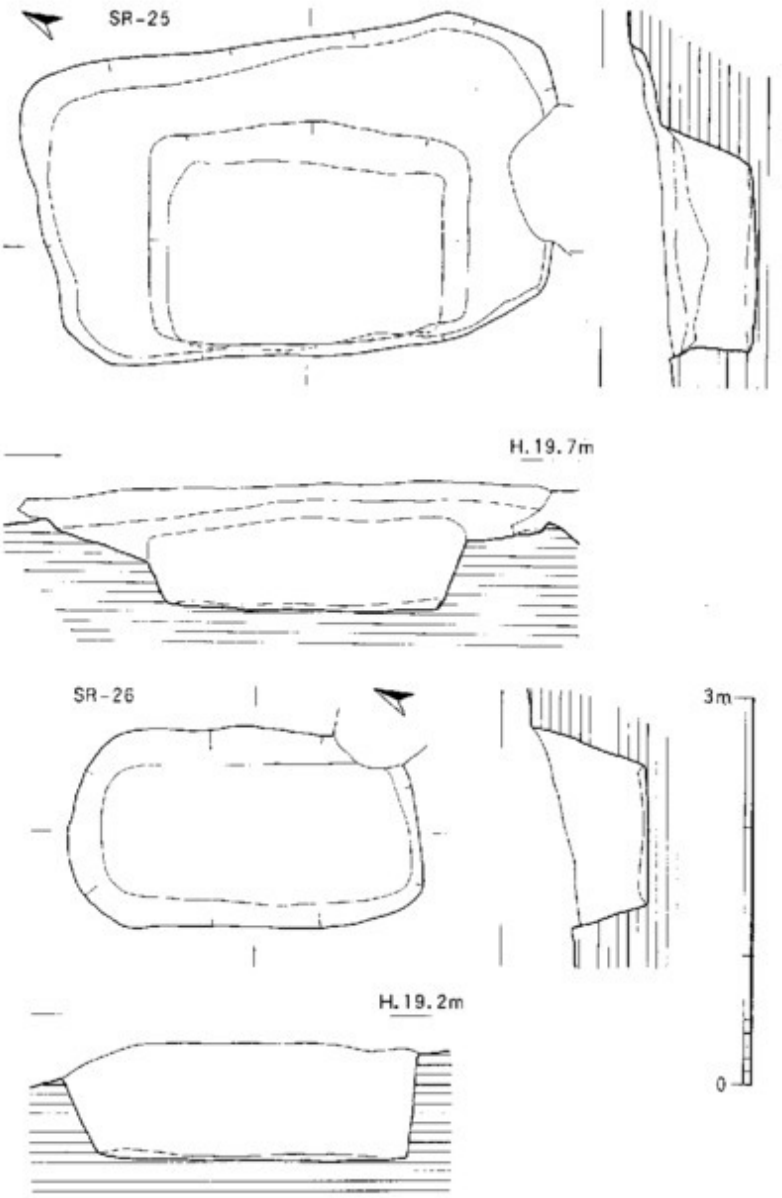


Fig. 57. 25・26号土壙墓実測図（1／60）

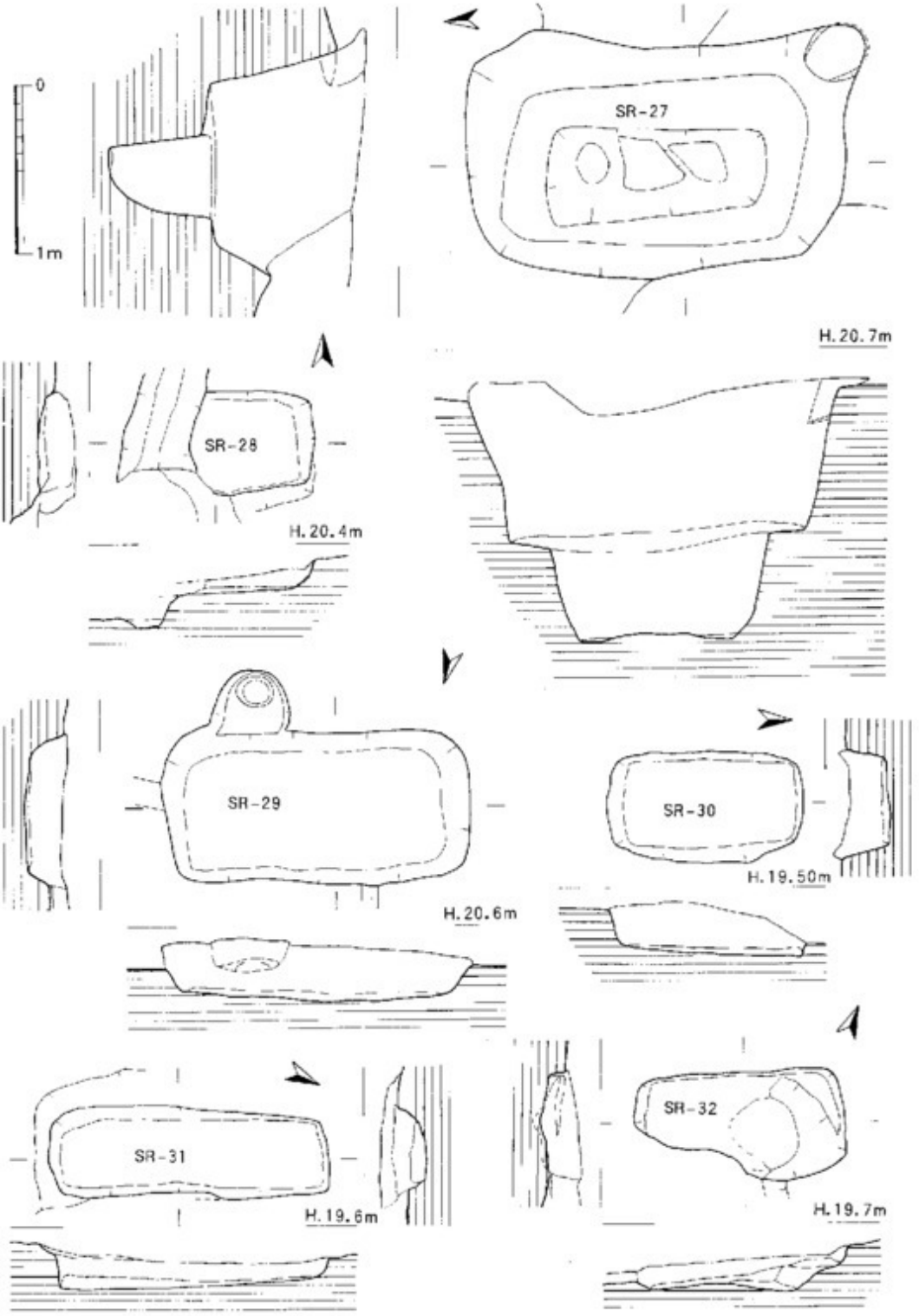


Fig. 58. 27～32号土壙墓実測図（1／40）

土壙墓が並列し、南東隅は29号甕棺墓に切られている。墓壙は長軸270cm、短軸165cmの長方形プランを呈し、深さは55～95cmを測る。壁面は南小口が急峻なほかはやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。土壙墓に伴う遺物はないが、覆土上層には須恵器が混入していた。

出土遺物（Fig.59）

122は須恵器の高坏で脚部は短くラッパ状に開く。体部下半がヘラケズリ、脚部はナデ。胎土は精良で、淡灰色。

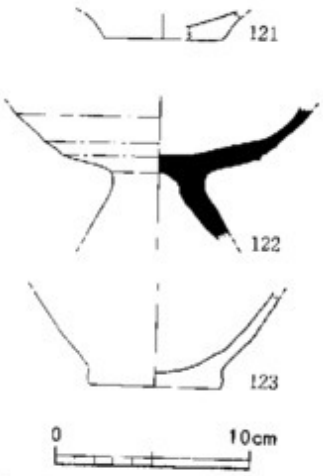


Fig. 59. 11・26・27号土壙墓出土土器実測図（1／4）

27号土壙墓（Fig.58. PL.15）

西側緩斜面北部の上段に立地する土壙墓で、25号土壙墓の南に隣接している。土壙墓は初めに長軸225cm、短軸145cmの1段目の墓壙を90cmの深さまで掘り、その中央に長軸130cm、短軸60cmの長方形プランの2段目の墓壙を55cm掘り込んでいる。壙底の標高は18.96m。壁面は1段目がやや緩やかに、2段目は急峻に立ち上がる。断面形は舟底状をなすが、両小口側は1段低くなる。主軸方位はN－2°－Eにとる。1段目墓壙の下面から小型壺の底部が出土した。

出土遺物（Fig.59）

123は底径6.6cmの小型壺である。内外ともナデ調整。胎土は小砂を多く含み、淡褐～褐色。

28号土壙墓（Fig.58）

西側緩斜面中央部の上縁に立地する土壙墓で、主軸方位をN－88°－Eにとる。西半部は22号住居跡に切られている。墓壙は短軸が62cmで平面形は長方形プランをなそう。緩やかに立ち上がる壁面は21cmが遺存し、断面形は逆台形をなす。壙底は浅い凹レンズ状をなし、西にむかって緩やかに傾斜する。遺物は未出土。

29号土壙墓（Fig.58. PL.15）

西側緩斜面中央部の上縁に立地する土壙墓で、29号土壙墓の東に位置する。墓壙は長軸180cm、短軸90cmの長方形プランを呈し、N－75°－Eに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは削平により32cmと浅い。壙底は平坦で断面形は逆台形を呈するが、中央部は浅い凹レンズ状をなす。壙底に接して打製石鏃が1点出土した。

出土遺物（Fig.60）

124は黒曜石の無茎凹基の打製石鏃。側縁は鋸歯状をなす。茎部幅は1.35cm、長さは2.05cm。

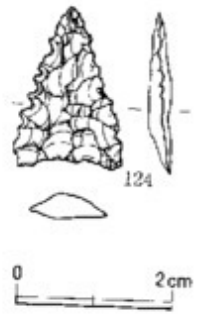


Fig. 60. 29号土壙墓出土石器実測図（1／1）

30号土壙墓（Fig.58. PL.15）

西側緩斜面北部の上段に立地する土壙墓で、主軸方位をN－2°－Wにとる。31号土壙墓の北東に並列し、上面は21号住居跡に

削平されている。墓壙は長軸116cm、短軸66cm、深さ33cmの長方形プランを呈する。壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。遺物は未出土。

31号土壙墓（Fig.58. PL.15）

西側緩斜面北部の上段に立地する土壙墓で、30号土壙墓の南に並列する。墓壙は長軸165cm、短軸52cmの長方形プランをなし、主軸方位をN－25°－Wにとる。壁面は深さ27cmでやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。墓壙の南東側には上縁に緩斜面があり、2段掘りの構造をなしていた可能性も考えられる。遺物は1点も出土しなかった。

32号土壙墓（Fig.58. PL.16）

西側緩斜面北東端の上段に立地し、30号土壙墓の北に直交して位置する。墓壙は南西隅が消失しているが、長軸125cm、短軸67cmの長方形を呈し、主軸方位をN－67°－Eにとる。壁面は急峻で断面形は箱形をなす。壙底は斜面に沿って西に傾斜している。遺物は未出土。

33号土壙墓（Fig.61. PL.16）

西側緩斜面の中央部上段に立地し、西側小口は43号甕棺墓に切られている。墓壙はN－80°－Eに主軸をとる長方形プランで、短軸は90cm、深さは40cm。壁面は緩やかに立ち上がる。

34号土壙墓（Fig.61. PL.16）

丘陵尾根の南端に立地する2段掘りの土壙墓で、16号住居跡よりも古い。土壙墓は初めに1段目の墓壙を45cmの深さまで掘り、更にその中央に2段目の墓壙を10～15cm掘り込んでいる。墓壙は長方形プランを呈し、断面形は壁面が急峻に立ち上がる箱形をなす。遺物は未出土。

35号土壙墓（Fig.61. PL.16）

丘陵尾根北端の1号墳墳丘下に立地する土壙墓で、36号土壙墓よりも新しい。墓壙は長軸117cm、短軸55cm、深さ28cmの長方形プランを呈する。壁面は急峻で断面形は箱形をなし、壙底は中央部が凹レンズ状に浅く窪む。主軸方位はN－32°－E。遺物は未出土。

36号土壙墓（Fig.61. PL.16）

丘陵尾根北端の1号墳墳丘下に立地し、35号土壙墓よりも古い。墓壙は長方形をなし、短軸62cm、深さ8cmで長軸は105cmになろう。主軸方位はN－85°－E。遺物は未出土。

37号土壙墓（Fig.61. PL.16）

丘陵尾根北端の1号墳墳丘下に立地する土壙墓で、35号土壙墓に西に並置している。墓壙は長軸148cm、短軸58cm、深さ25cmの長楕円形プランを呈し、N－36°－Eに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。遺物は未出土。

38号土壙墓（Fig.61. PL.16）

西側緩斜面の中央部上縁に立地する土壙墓で、上面は20号住居跡に削平されている。墓壙は長軸203cm、短軸101cm、深さ46cmの長方形プランを呈し、N－9°－Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は北方に緩傾斜する。遺物は未出土。

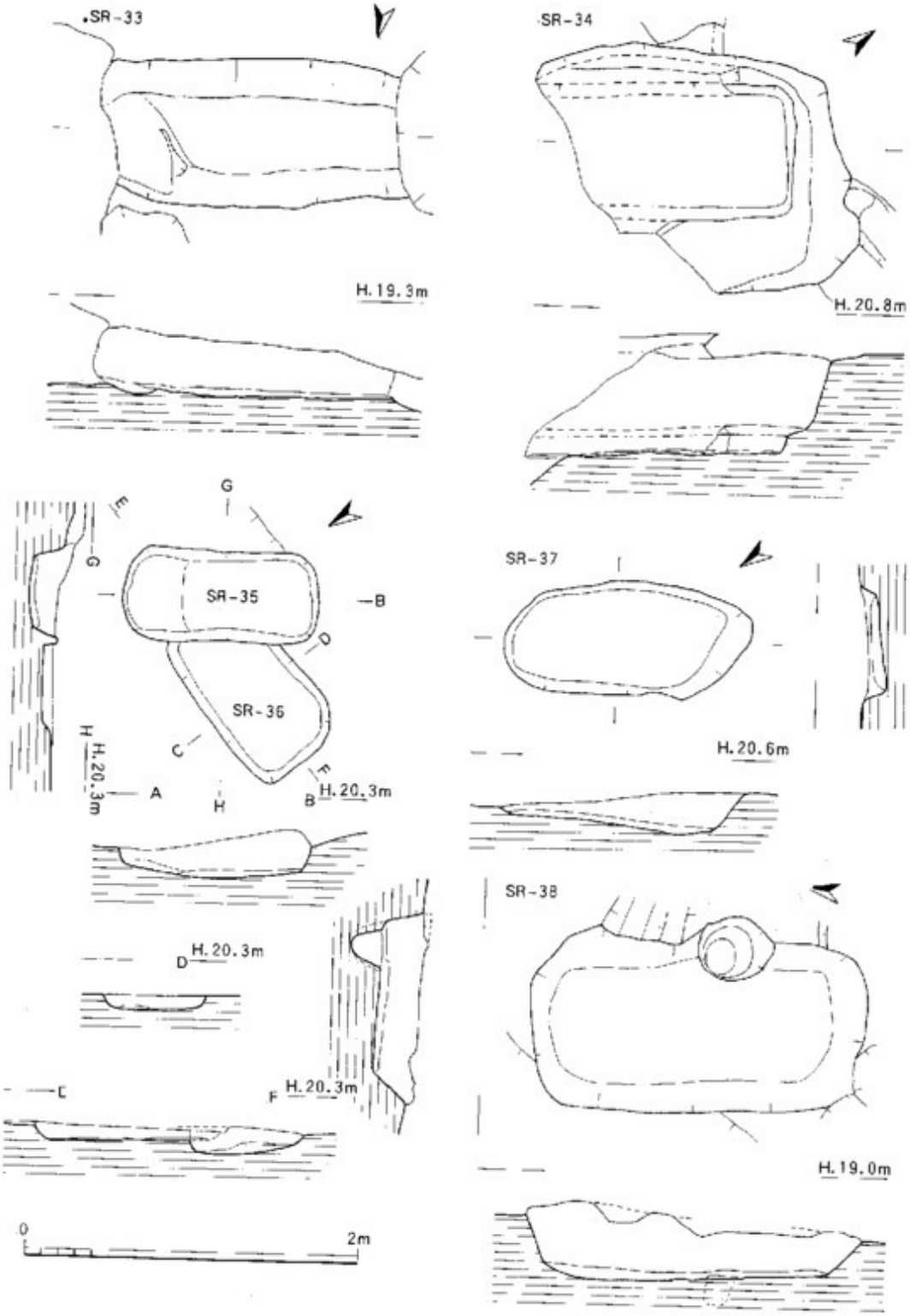


Fig. 61. 33～38号土壙墓実測図（1／40）

3．古墳時代の調査

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡30棟、掘立柱建物跡7棟、土壙6基の集落に伴う生活遺構と方墳3基、円墳1基、土壙墓1基の墳墓遺構を検出した。これらの遺構のうち、集落を構成する生活遺構は丘陵上と緩斜面上の調査区全域に亘って密に分布するが、1号墳以北の丘陵先端部には拡がらない。なかでも竪穴住居跡は丘陵上や緩斜面上に占地して広く分布し、弥生時代の住居跡群と同様の在り方を示す。これらの竪穴住居跡群は古墳時代後期のもので、その重複関係等から少なくとも3期に区分されよう。また、掘立柱建物跡はいずれも棟を同じくして一定の空間域を保って占地している。これら建物跡は竪穴住居跡群と時間的に共有し、幾棟かの住居跡に伴って一体的に存立したものであろう。

一方、古墳と土壙墓は丘陵上にのみ分布する。4基の古墳は丘陵の北西縁に沿って占地している。殊に1・3号墳は西側斜面上の周溝が尾根筋のものに比べてはるかに深く開削されている。このことは平野から望む低墳丘の古墳をより大きく見せんがための占地的制約によるものと考えられる。時間的には初めに2～4号墳が丘陵の北西縁に造営される。その後に住居跡群が展開し、その終焉に前後して3号墳上に1号墳が造営されている。

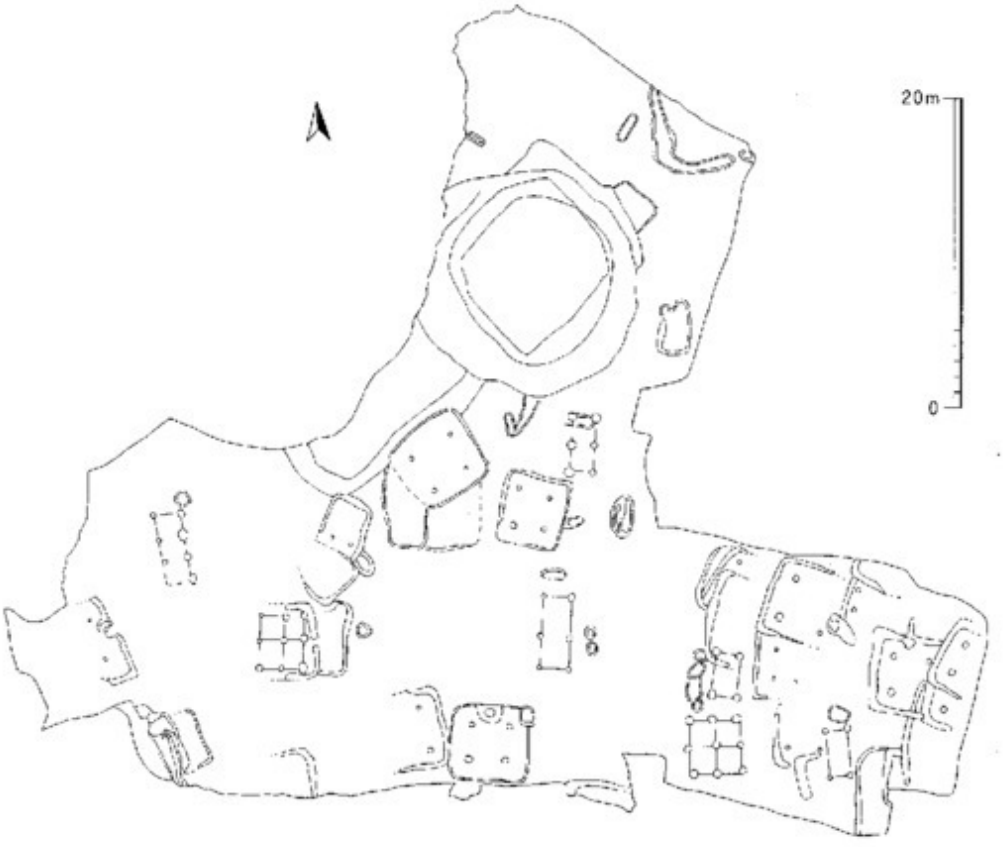


Fig. 62. 古墳時代の遺構配置図（1／500）

竪穴住居跡（SC）

古墳時代の竪穴住居跡は、総てで30棟を検出した。これらの竪穴住居跡は丘陵上と東西の緩斜面上に占地し、密な集落分布を示す。本来的には南にのびていた丘陵上にも広く展開していたものと思われる。竪穴住居跡群は重複してあり、集落が数期に亘って維持されたことが窺われる。この住居跡に近接して掘立柱建物跡が占地し、数棟の住居跡と建物跡が一体となって集落を構成しており、丘陵上に占地する当該期の集落構成と展開を考える一証左となろう。また、構造的には4本柱を主柱穴とする方形のもので、住居内に竈を構築するものとそうでないものがある。

1号住居跡（Fig.63. PL.17）

丘陵尾根の中央部に立地する住居跡で、4号住居跡のすぐ東に位置する。北西隅は土壙墓と重複し、5号土壙墓より新しく3号土壙墓よりも古い。平面形は一辺が4.2～4.6mの方形プランを呈する。壁面は削平によって消失しているが、東壁と南西隅を除く壁下には幅10cm、深さ3～5cmの浅い周溝が巡る。床面は掘り方上に5～8cmの粘土を敷き固めて貼床を作り、壁際の床上には竈を示す焼痕はなかった。柱穴は2～2.3mの柱間をとる4本柱で、30～40cmの柱穴内からは径15程の柱痕跡が確認された。遺物は少ないが、壁際からは須恵器坏や土師器甕のほか磨製石鏃片が出土している。

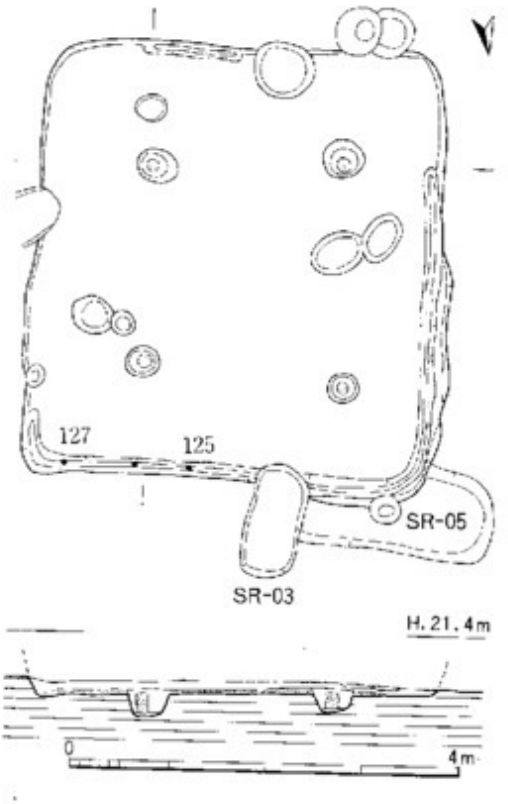


Fig. 63. 1号住居跡実測図（1／80）

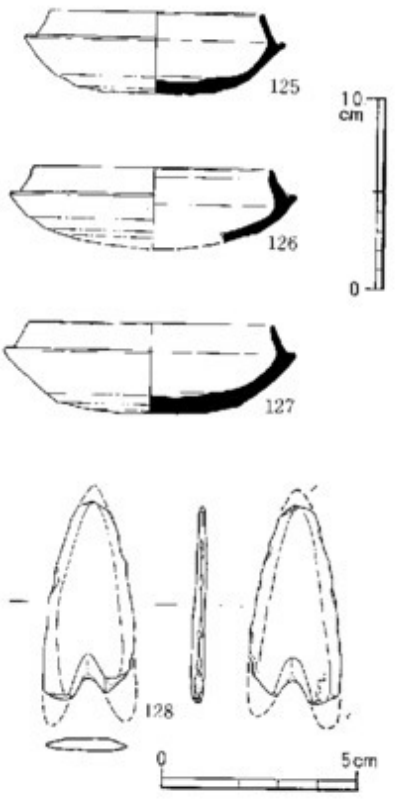


Fig. 64. 1号住居跡出土土器・石器実測図（1／4・1／2）

出土遺物（Fig.64. PL.30）

125～127は須恵器坏身。125は口径11cm、器高4.2cm。126は口径12.2cm。127は口径12.6cm、器高4.6cm。口縁部は受け部から内傾してストレートに立ち上がるが、126は端部が小さく屈曲して直口する。調整は口縁部がヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。125の内底面には叩き痕が残る。胎土は精良で、色調は灰色～灰紫色。

128は基部と鋒を欠く磨製石鏃である。刃部は両側辺から薄く丁寧に磨ぎ出す。石剣鋒の再利用であろう。

2号住居跡（Fig.65. PL.17）

東側緩斜面の上段に立地し、南壁側は3号住居跡を切っている。東壁が消失するが、平面形は一辺が5.1mの方形プランをなそう。壁面は深さ60cmで垂直に立ち上がり、壁下には幅10～15cm、深さ10cmの周溝が巡る。床面は黄褐色粘土を5cm程敷き固めて貼床としている。主柱穴は柱間が東西2.6m、南北2.8mの4本柱で、平面形は径40～45cm、深さ45～75cmである。竈の付設を示唆する焼土塊は遺存する床面上からは検出されなかった。

出土遺物（Fig.66・67. PL.29）

129・130は弥生土器である。129は鋤先状の口縁部をもつ壺で、口径は20.4cm。頸部はラッ

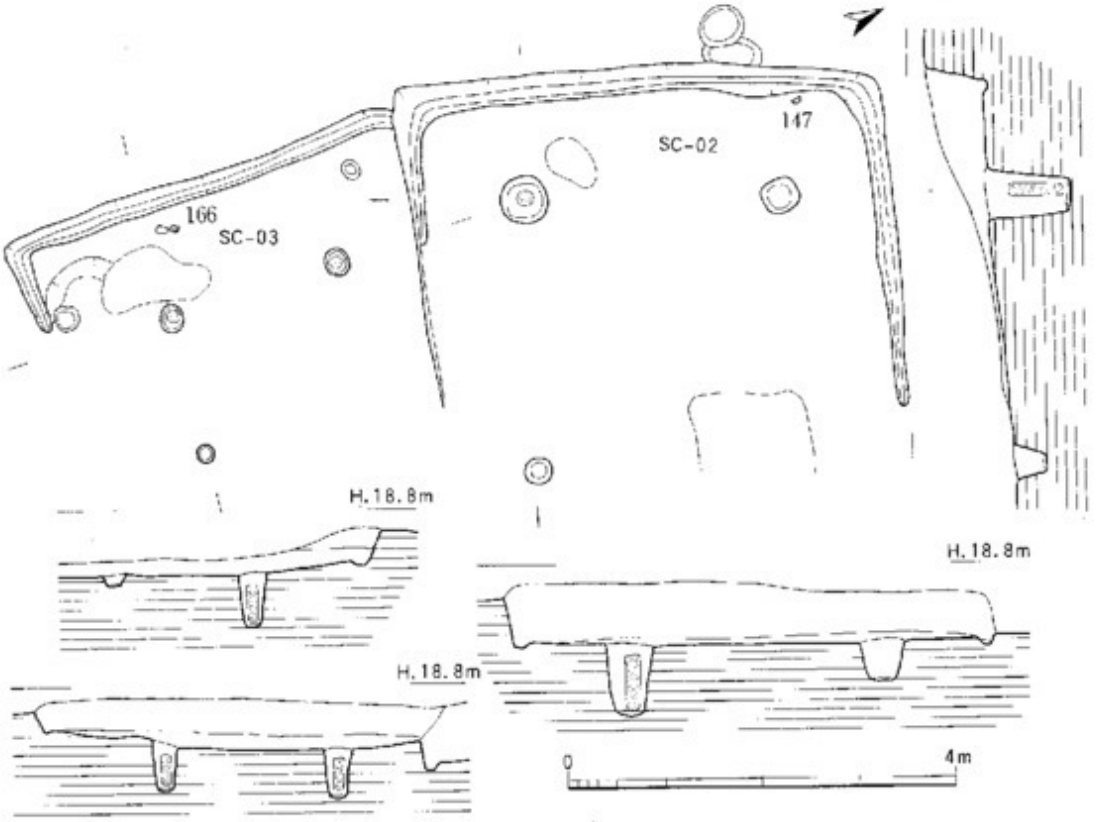


Fig. 65. 2・3号住居跡実測図（1／80）

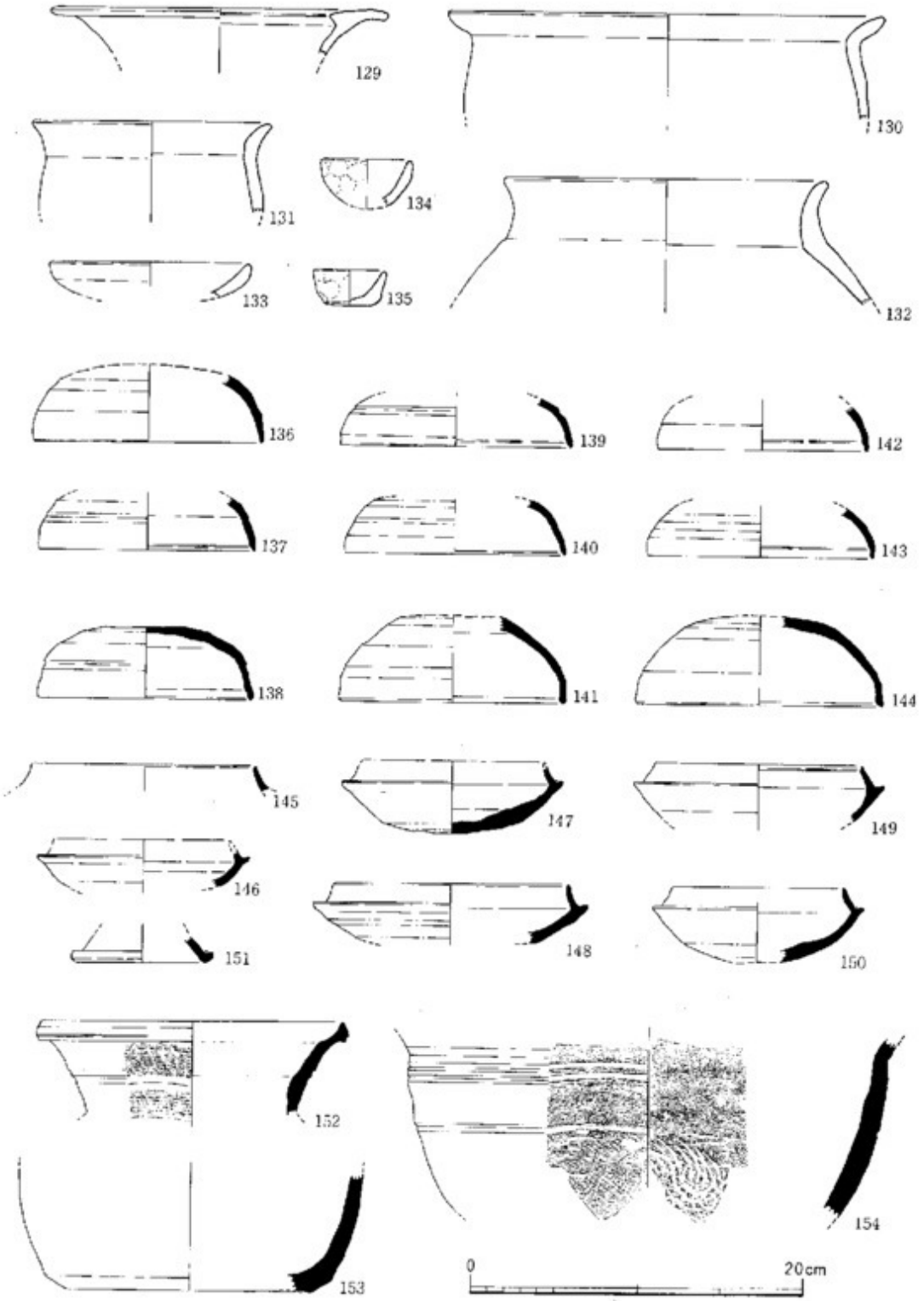


Fig. 66. 2号住居跡出土土器実測図（1／4）

パ状に外反し、水平な口縁部は上唇に粘土紐を張りつけて内側への貼り出しが強い。胎土は砂粒と雲母を含み、明黄褐色。130は甕で、口径26.4cm。口縁部は「く」字状に短く外反する。内外ともにナデ調整。胎土は砂粒を含む。

131～135は土師器である。131・132は甕。131は口径14.4cm。口縁部は小さく外反する。132は口径19.6cm。直口して立ち上がる口縁部は小さく外反し、胴部は球形をなす。133は口径12.2cmの鉢。体部は薄い扁球形をな

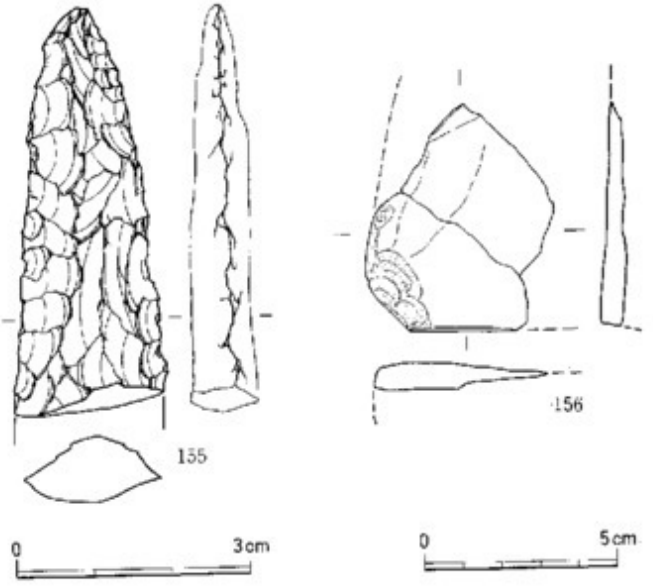


Fig. 67. 2号住居跡出土石器実測図（1／1・1／2）

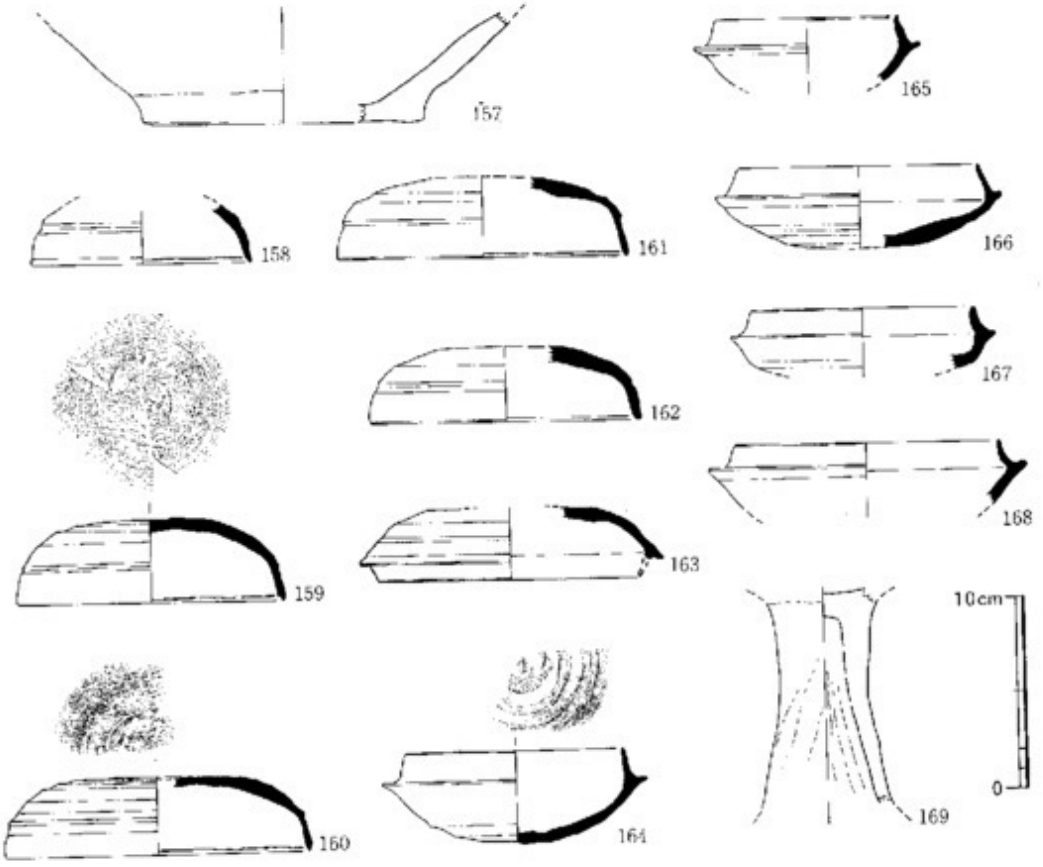


Fig. 68. 3号住居跡出土土器実測図（1／4）

し、脚が付くかもしれない。胎土は良質で、色調は灰茶褐色。134・135はミニチュア土器。134は口径5.4cm。体部は半球形をなし、口縁部は直口する。135は口径4.4cm、器高3.2cmで底径2.2cmの平底の底部がつく。調整は押圧ナデ。胎土は良質で砂粒を含む。

136～154は須恵器である。136～144は坏蓋で、口径は12.6～14.6cm。直口する口縁部は内脣に小さな段を作るもの(137・140・142・143)と丸く納めるもの(136・138・139・141・144)があり、口縁部と体部との境には稜を形成する。145～150は坏身で、口径は10.4～13.4cm。149は内脣に小さな稜を作る。147・148・150は内傾する口縁部は端部が直口ぎみに立ち上がる。蓋身とも調整は天井部外面がヘラケズリ、内面はナデ。胎土は精良で、灰色～灰紫色。151は底径8.6cmの高坏脚。端部は大きく跳ね上がる。152・153は甕。153は口径18cmで頸部上段はヘラ描きの波状文を施し、下段はカキメ調整。154は器台。体部には横凹線を巡らす。外面は格子目、内面は青海波の叩き目調整。

155は安山岩製の槍先形尖頭器である。細身で横断面が厚い凸レンズ状になる。

156は砂岩質の砥石片である。表面と側面、小口面に砥面が残る。

3号住居跡 (Fig.65. PL.17)

東側緩斜面の上段に立地する住居跡で、北壁側は2号住居跡に切られている。西壁と南壁の一部が遺存し、平面形は一辺が4.2～4.5mの方形になろう。垂直に立ち上がる壁面は深さ35cmで、壁下には幅10～13cm、深さ3～8cmの周溝が巡る。床面は粘土を薄く敷き固めた貼床が残っていた。主柱穴は北東部が欠失するが4本柱であろう。柱間は1.5～1.8m。柱穴は25～30cmの円形で、深さは60cmで柱痕跡が残る。西壁下の覆土中から滑石の白玉がまとまって出土した。

出土遺物 (Fig.68·69. PL.29·30)

157は弥生前期の壺で、底径は14.4cm。内外ともナデ調整。胎土は砂粒を含み、暗赤褐色。

158～168は須恵器である。158～162は坏蓋で、口径は11.6～15.6cm。口縁部と体部の境には横凹線状の稜がつく。口縁部は内弯ぎみに直口し、内脣には段がつく(158～159)。159・160は天井部にヘラ記号がある。163～168は坏身。164は口径13.6cm、器高4.8cm。

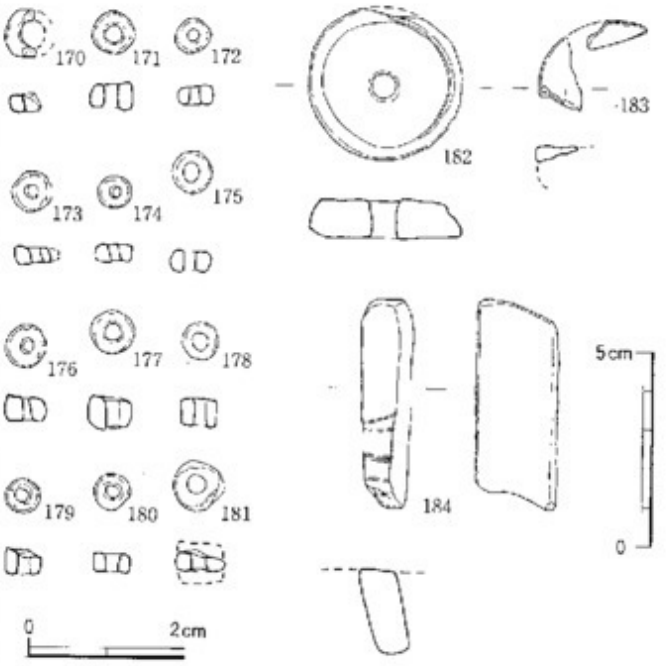


Fig. 69. 3号住居跡出土石製品・石器実測図 (1／1・1／2)

体部は半球形状で立ち上がりは直口し、内底面には叩き目が残る。165～168は口径9.4～13.6cmで、立ち上がりは内傾する。167は器壁が厚く体部は平底状をなす。調整は蓋身とも口縁部はヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面はナデ。胎土は精良で細砂粒を含み、色調は灰色～灰紫色。

169は土師器高坏の脚。脚部は長くラッパ状に開く。内外面に絞り痕が残る。胎土は小砂粒と雲母を含み、明橙褐色。

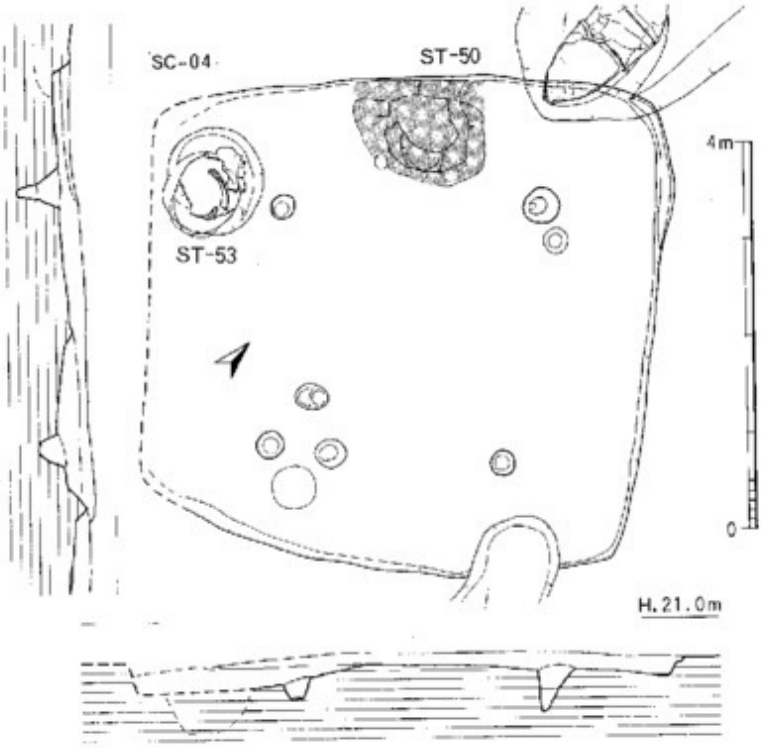


Fig. 70. 4号住居跡実測図（1／80）

170～181は滑石製の白玉である。直径は4.4～6.5mm、厚さは1.9～3.3mmで孔径は1.1～2.2mm。整形や磨ぎはやや粗い。

182・183は滑石製の紡錘車である。182は上径2.3cm、下径3.4cm、厚さ1cm、孔径6.5mmで上縁の片側には抉り込み状の段がつく。

184は片刃石斧片で、後背面には浅い横凹線が5条ある。

4号住居跡（Fig.70・71. PL.17）

丘陵尾根の中央部西寄りに立地し、4号住居跡のすぐ西に位置する。西壁側は4号墳の周溝上に築かれ、南壁は土壙に切られて消失している。平面形は一辺が5.1～5.3mの方形プランをなすが、南壁が北壁よりも1m程短い矩形になる。壁面は垂直で、壁下に周溝は巡らない。主柱穴は径25～40cm、深さ30～40cmの4本柱からなり、柱間は北東側が2.6m、西南側が2.4mである。竈は北壁の中央に付設されていた。竈は床面を凹レンズ状に15cm程掘り下げて火床を作り、その両脇に幅15～20cmの袖部を弧状に築いている。火床の中央には花崗岩の棒石を立てて支脚となしてい

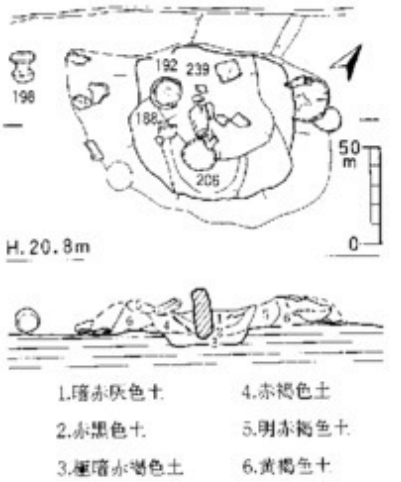


Fig. 71. 4号住居跡・竈実測図（1／20）

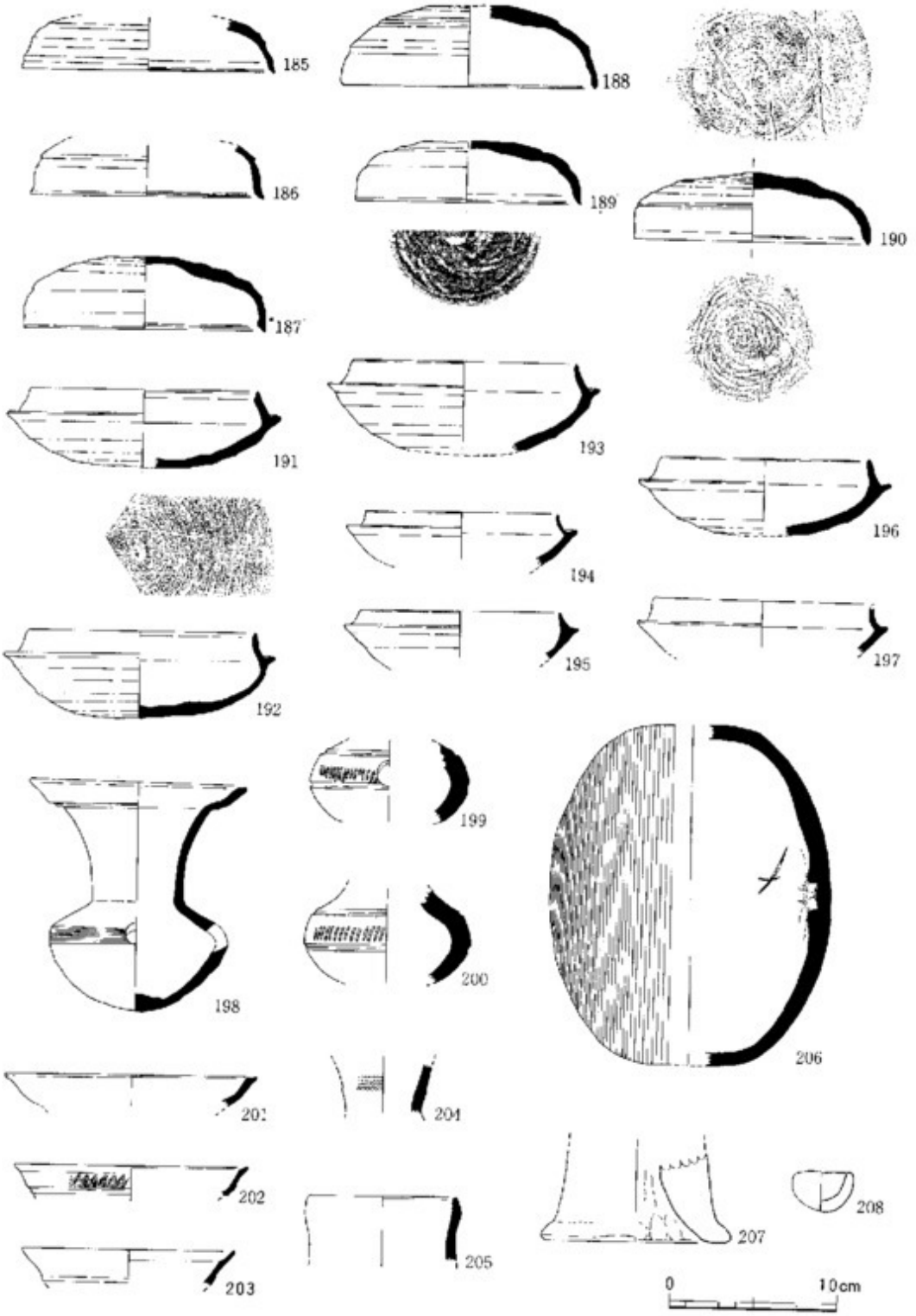


Fig. 72. 4号住居跡出土土器実測図（1／4）

る。遺物は竈周辺から須恵器や土師器が出土した。

出土遺物（Fig.72・73. PL.29・30）

185～205は須恵器である。185～190は坏蓋。口径は13.4～15cm、器高は3.7～4.9cm。口縁部は直口して立ち上がり、内面に段を作る。外面は体部との間に稜か横凹線をめぐらして境とする。191～197は坏身。口径は11.4～13.4cm、器高は4.6～5.6cm。口縁部は立ち上がりがストレートに内傾するもの(193・195・196)と端部が直口するもの(191・192・194・197)とがある。蓋身とも口縁部はヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。190・191は外面にヘラ記号が、189・190の内底面にはタタキ目が残る。198～204は甕。198は口径12.6cm、器高13.7cm。頸部はラッパ状に外反し、外方に大きく屈曲して稜を作る。口縁部は内弯ぎみに立ち上がって外方に小さく摘み出す。扁球形をなす体部の肩には円孔を穿つ。199・200は体部に貝殻条文を施文する。202は口径13.8cm。口縁部下にはヘラ描きの波状文を施文する。204は頸部に櫛描きの波状文を施文する。205・206は提瓶。205は口径8.8cm。口縁部は小さく内傾する。206は扁平な体部の内面にヘラ記号があり、外面はカキ目調整を施す。内面はナデ。

207・208は土師器である。207は底径11.4cmの器台。内外ともナデ調整。胎土は砂粒と雲母、赤褐色粒を含む。色調は明橙色。208は口径3.1cm、器高2.4cmのミニチュア土器。押圧ナデ調整。胎土は良質で砂粒を含み、色調は赤褐色。

209は玄武岩の石斧未製品である。210は磨製石斧で長さ10.6cm。刃部は両側から丁寧に磨ぎ出す。玄武岩製。

211は滑石製の臼玉である。直径は9.2mm、厚さは4.1mm、孔径は2mm。整形、研磨はやや粗い。

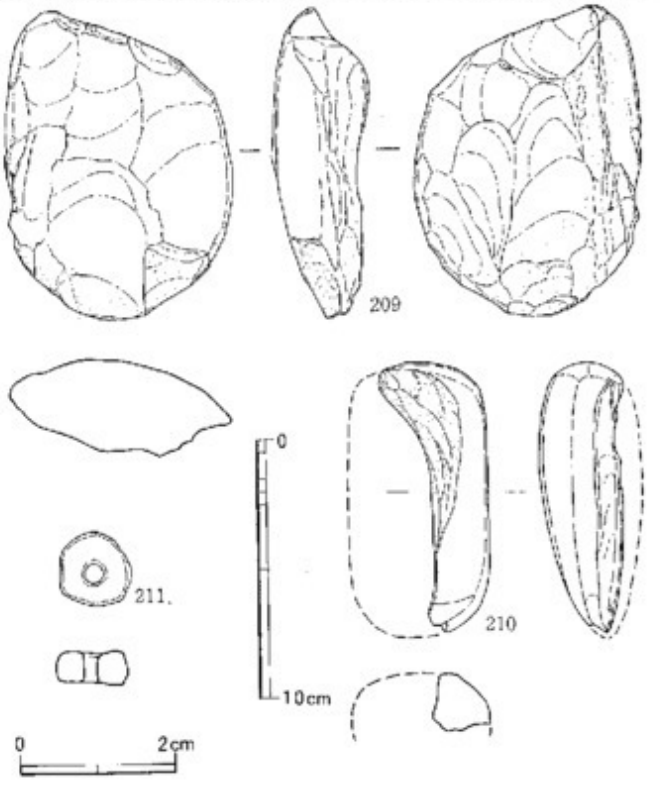


Fig. 73. 4号住居跡出土石器・玉実測図（1／3・1／1）

5号住居跡（Fig.74. PL.18）

東側緩斜面の下段に立地する住居跡で、6・7号住居跡より新しい。東壁が消失しているが、平面形は一辺が5.2mの方形になろう。壁面は急峻で壁高は90cmと深く、壁下には幅15～20cmの周溝が巡る。床面は真砂土を10cm程敷き固めて貼床を造り、6・7号住居跡上は

殊に厚い。主柱穴は柱間2.2～2.5mの4本柱で、西側の柱穴は壁下の周溝にむかって浅い溝がのびている。柱穴は40～50cm、深さ65～75cmで径15cmの柱痕跡が確認された。北壁には竈が付設され、壁外に煙道がのびている。遺物は床面上に須恵器や土師器が散乱していた。

出土遺物（Fig.75・81. PL.30）

212は弥生中期の蓋である。摘み部径5.8cm。体部はストレートにのびて笠鉢状になろう。胎土は砂粒と雲母を含み、明赤褐色。

213～221は土師器である。213～217は甕。213は口径16.4cm。「く」字状に外反する口縁部に倒卵形の胴部がつく。明黄橙色。214は口径19.2cm。口縁部は直口した後に小さく外反し、胴部は球形をなす。明黄褐色～淡灰黄色。215は口径15.8cmで、肥厚した口縁部は短く直口する。胴部は倒卵形をなそう。暗赤褐色。216は球形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつくものであろう。217は倒卵形の胴部に厚く小さな底部がつく甕で、底径は4.8cm。内外面に炭化物様の黒色物が付着している。いずれも口縁部がヨコナデのほかはナデで内面には押圧痕が残り、胎土には砂粒と雲母を含んでいる。218は口径3.2cm、器高2.9cmのミニチュア土器。口縁部は直口して立ち上がる。調整は指頭押圧ナデ。色調は黄赤褐色。219～221は高坏。219は底径11.8cmの脚部。脚は短くラッパ状に外反し、裾部は小さく上方に摘み上げている。内外ともナデ調整。内面上半には指頭押圧痕が残る。220は口径12.6cm。口縁部は外方に小さく摘み

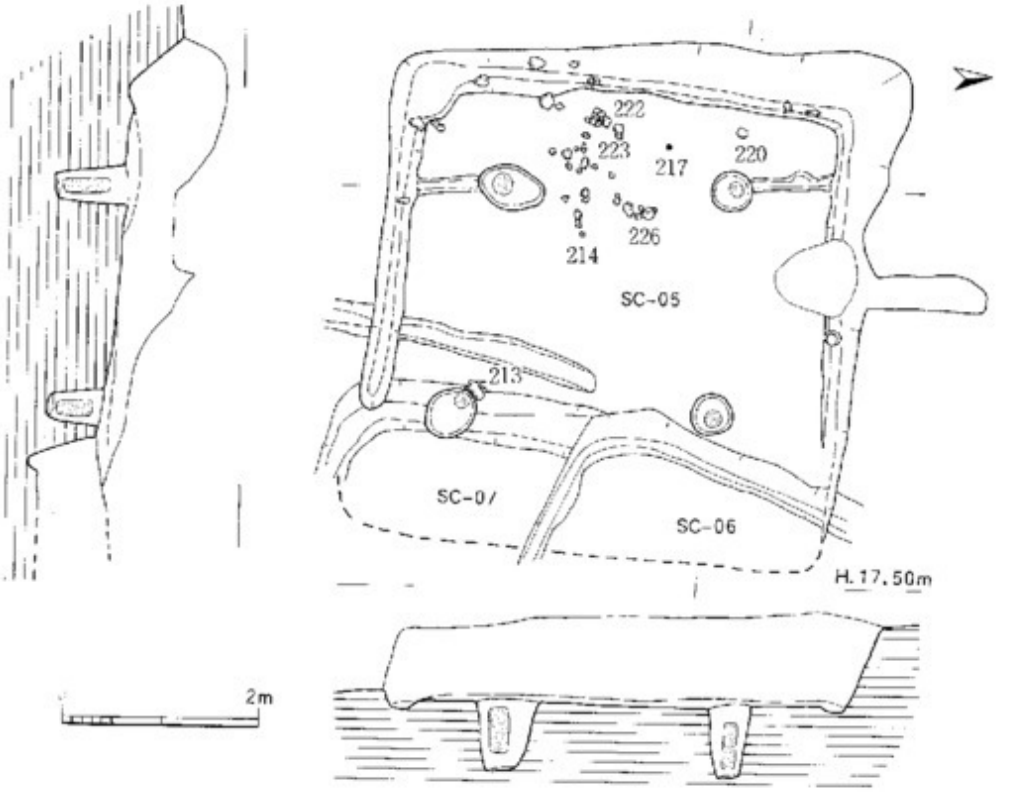


Fig. 74. 5号住居跡実測図（1／80）

出し、細目の脚がつく。221は口径15.4cm。口縁部は扁平な半球形の体部から短くストレートにのびる。いずれも口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整。胎土は精良で小砂粒を含む。

222～227は須恵器である。222～226は坏蓋。口径は13～15.2cm、器高は4.2～5.7cm。口縁部は内弯ぎみにストレートに立ち上がり、223・226は内唇に弱い段を作る。225は端部を外方に小さく摘み出す。体部との境には浅い横凹線を巡らして稜を形成する。調整は口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外面はヘラケズリで224・225の内底面にはタタキ目痕が残る。226の天井部にはヘラ記号がある。胎土は精良で、灰青色～灰紫色。227は坏身。口径10.8cm、器高

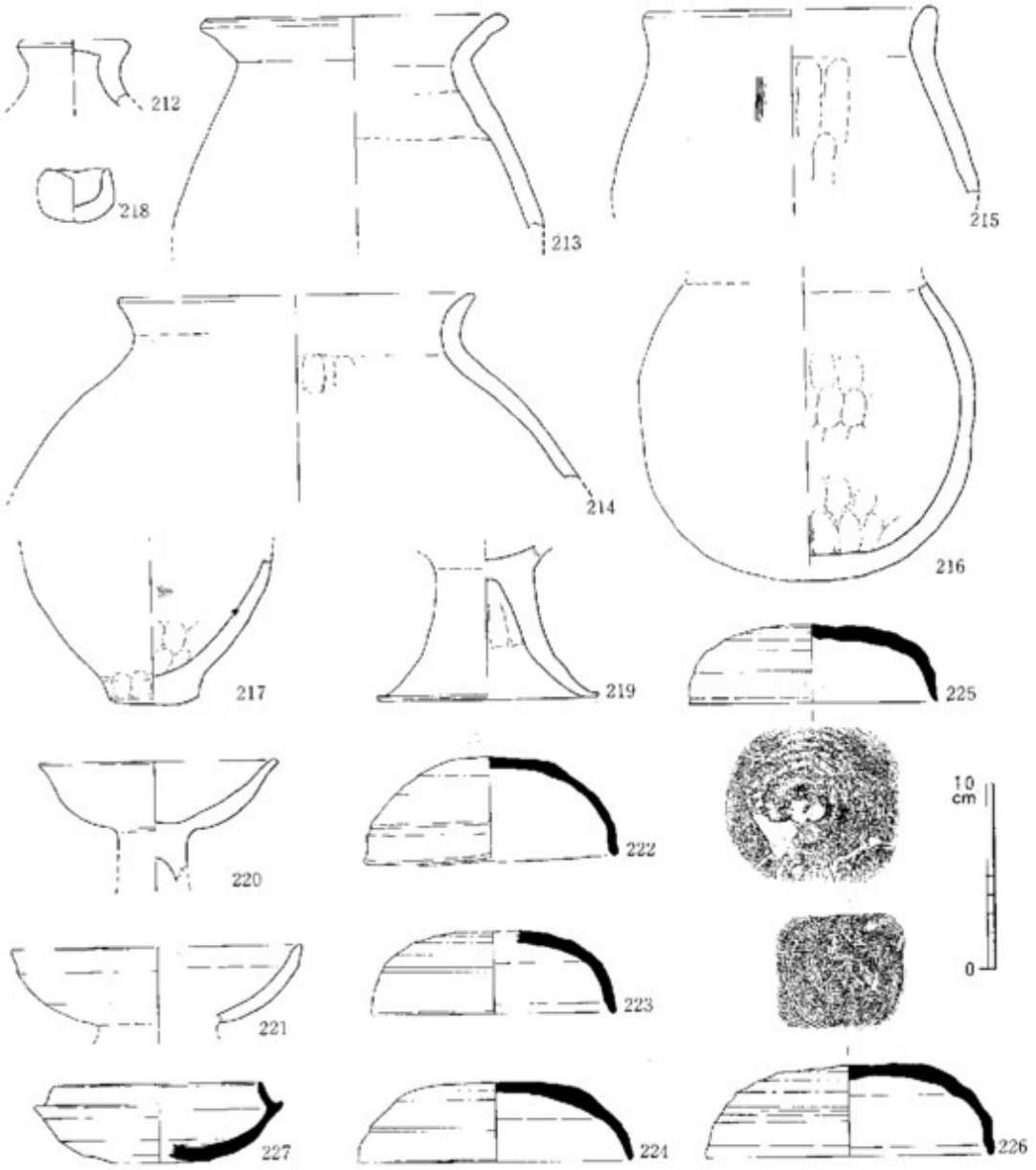


Fig. 75. 5号住居跡出土土器実測図（1／4）

4.3cm。立ち上がりはストレートに内傾する。調整は口縁部～体部上半がヨコナデ、内底面はナデ、外面はヘラケズリ。胎土は精良で、灰青色。

236は滑石製の紡錘車である。直径は4.5cm、厚さは1.5cm、孔径6mmで断面形は台形をなす。

237・238は砥石である。237は半月状をなす。238は安山岩製。砥面は小口を除く4面に残る。

239は鍵棒状の土製品である。長さは7cm、幅は6.3cmで先端部は扇状になる。胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色。

6号住居跡（Fig.76. PL.18）

東側緩斜面の最下段に立地する住居跡で、7号住居跡より新しく5号住居跡よりも古い。平面形は一辺が4.8～5mの方形プランになろう。壁下には幅15cmの周溝が巡り、壁高60の壁面は垂直に立ち上がる。柱穴は40～50cm、深さ50～60cmのしっかりしたもので、径15cm程の柱痕跡が確認された。主柱穴は柱間が1.9m程の4本柱であろう。床面は真砂土を10～15cmの厚さで突き固めて貼床としている。遺物は土師器と須恵器片があるが量的には少ない。

出土遺物（Fig.77・81）

228は弥生中期の甕で底径8.4cm。外面はハケ目、内面はナデ調整。胎土は砂粒と雲母を含む。

229・230は土師器である。229は口径は18.2cmの甕。口縁部は「く」字状に外反し、端部は外方に小さく摘み出す。胴部は倒卵形になろう。口縁部はヨコナデ、胴部はナデ調整。胎土は砂粒と雲母を含み、色調は明黄橙色。230は高坏である。脚部は短くラッパ状に開き、坏部は鉢状をなそうか。胎土は良質で細砂粒と雲母を含む。色調は外面が淡茶褐色、内面は灰白褐色。

231は須恵器の坏蓋である。口径は14.6cm、器高は4cm。口縁部は端部を小さく外方に摘み

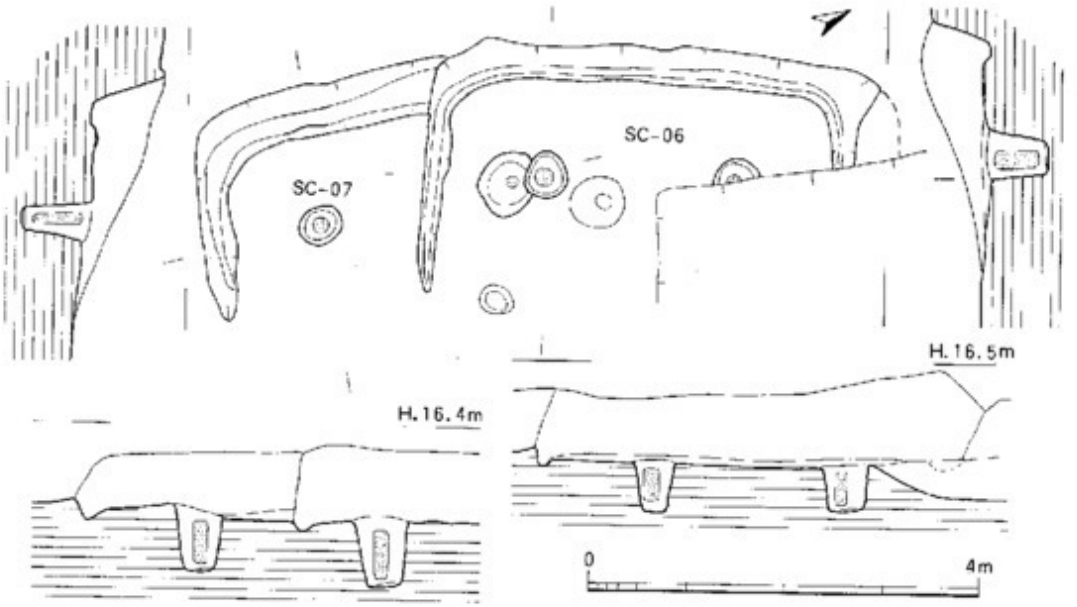


Fig. 76. 6・7号住居跡実測図（1／80）

出し、内唇には弱い段を作る。体部との境には稜を形成する。調整は口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、天井部はヘラケズリ。胎土は精良で、色調は灰色。

240は砥石。側縁と上面に砥面が残り、柱状をなそう。

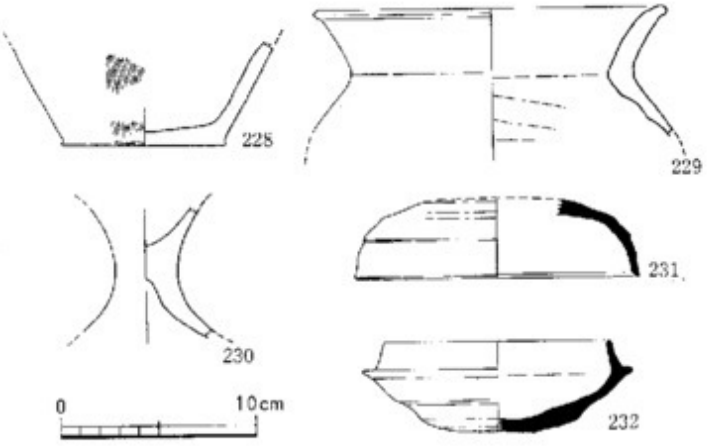


Fig. 77. 6・7号住居跡出土土器実測図（1／4）

7号住居跡

（Fig.76・81. PL.18）

東側緩斜面の最下段に立地する住居跡で、重複する5～7号住居跡中で最も古い。平面形は一辺が4.5mの方形プランに復原できよう。壁面は垂直に立ち上がり、深さは70cm。壁下には幅20cm、深さ5～8cmの幅広の周溝が巡り、床面は真砂土を敷き詰めて貼床を造る。柱穴は西側に2本あり、4本柱となろう。柱間は2.4mで、柱穴は40～50cmの円形をなし、深さは60～70cmで深くしっかりしている。遺物の出土は少ない。

出土遺物（Fig.77. PL.30）

232は須恵器の坏身である。口径11.8cm、器高は4.6cm。受け部は水平で、立ち上がりはストレートに直口する。調整は口縁部がヨコナデ、外底面はヘラケズリ、内底面はタタキ目後にナデ。胎土は精良で細～中砂粒を少量含む。色調は淡灰色。

241は方形の滑石製品。長さは2.2～2.4cm、厚さは3mmで長辺に寄って孔径1.5mmの円孔がある。

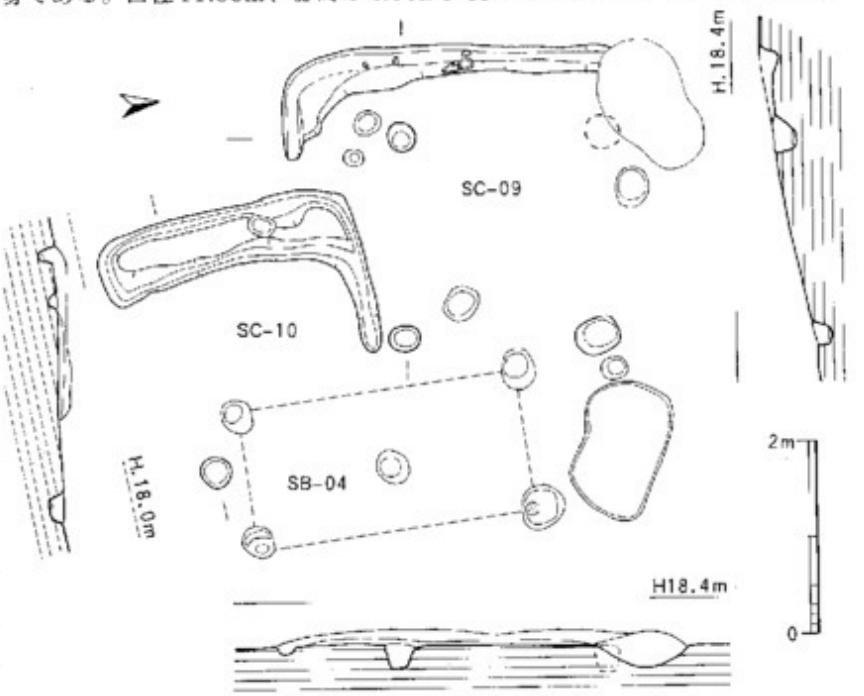


Fig. 78. 9・10号住居跡実測図（1／80）

9号住居跡

(Fig.78. PL.19)

東側緩斜面中段の南側に立地し、10号住居跡と重複している。消失が著しいが、平面形は一辺が4mの方形プランに復原される。壁下には15～20cmの浅い周溝が巡る。柱穴は北西隅が消失するが、柱間が2.0～2.1mの4本柱である。西壁側の床面では貼床は認められなかった。遺物の出土はきわめて少ない。

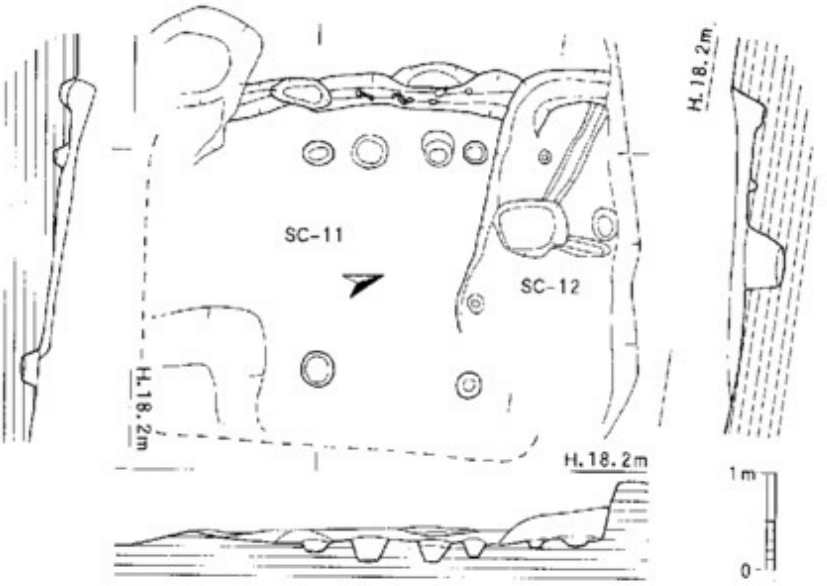


Fig. 79. 11・12号住居跡実測図 (1／80)

出土遺物 (Fig.80)

233は土師器の甕である。口径は15.2cm。肥厚した口縁部は大きく外反し、端部は丸く納める。胴部は卵形をなそう。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土はやや粗く多くの砂粒と雲母を含む。色調は内面が暗灰褐色、外面は暗橙色。

10号住居跡 (Fig.78. PL.19)

東側緩斜面中段の南側に立地し、9号住居跡と重複している。平面形は明らかでないが、遺存する柱穴等から2.8×3.5mの長方形プランに復原されよう。壁下には15～20cmの周溝が巡り、西壁下には周溝に挟まれた幅30cmのベット状の空間がある。柱穴は南東を除いては確認できなかった。遺物は未出土。

11号住居跡 (Fig.79. PL.19)

東側緩斜面の北側中段に立地し、12号住居跡と重複している。平面形は遺存する柱穴から東西4m、南北4.5mの方形に復原されよう。壁下には幅15～20cmの周溝があり、周溝内からは土師器片が出土した。主柱穴は径25～35cm、深さ15～20cmの4本柱で、柱間は東西が2.2m、南北が1.6mであ

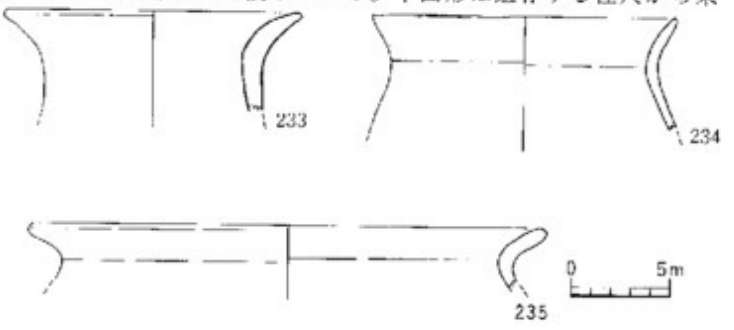


Fig. 80. 9・11・12号住居跡出土土器実測図 (1／4)

る。床面は消失しており、貼床等は確認できなかった。

出土遺物（Fig.80）

234は土師器の甕で、口径は15.6cm。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は倒卵形になろう。口縁部はヨコナデ、内面は押圧ナデ調整。外面には二次焼成による赤変がある。胎土は多くの砂粒と雲母、赤褐色粒を少量含む。外面は赤褐色、内面は淡黒茶色。

12号住居跡（Fig.79. PL.19）

東側緩斜面の北側中段に立地し、11号住居跡と重複している。平面形は一辺が3.5～4m程の方形に復原できようか。壁下には浅い周溝があり、南壁側には60×70cm、深さ30cmの方形の土壙がある。この土壙からは西壁下と中央にむかって浅い溝が「L」字状にのびている。遺物は土師器と須恵器片がわずかに出土した。

出土遺物（Fig.80・81）

235は弥生土器の甕で、口径は26.6cm。口縁部は「く」字状に短く外反する。胴部は倒卵形になろう。胎土は良質で、砂粒と雲母微細を含む。色調は黄褐色。

242は大型石錘で、円孔部の中心部のみで円孔は2.2cmになろうか。滑石製。

13号住居跡（Fig.82. PL.19）

東側緩斜面の下段南端に立地する小型の住居跡で、5号住居跡の南2mの距離に位置する。平面形は一辺が3.5m程の小さめの方形プランに復原されよう。壁面は消失しているが、壁下には幅広の周溝が巡る。西壁側の中央には浅い柱穴が1本あり、主柱穴は2本柱であろうと考えられる。床面は消失しており、貼床は観察されなかった。遺物は未出土。

14号住居跡（Fig.82. PL.19）

丘陵尾根東縁の南端に立地する住居跡で、弥生中期の15号住居跡を切っている。北壁を残すのみであるが、平面形は一辺が5～6mの方形プランに復原できようか。壁面は急峻に立ち上がり、壁下には25cmの幅広の周溝が巡る。北壁には竈が付設されていた。竈は床面を凹レンズ状に浅く掘り、その両脇に真砂土混じりの灰白色粘土で袖部を築いている。

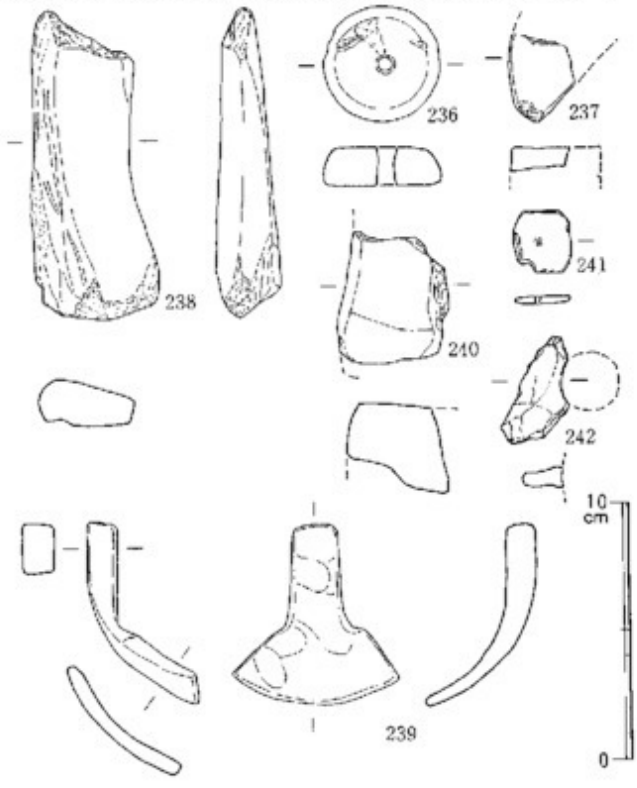


Fig. 81. 5～7・12号住居跡出土石製品・土製品実測図（1／3）

火床には最下層に焼土塊が薄く堆積し、その上層には焼土粒と炭片の混入土が厚く堆積していた。煙道は検出できなかった。遺物は竈周辺から土師器や須恵器片が出土した。

出土遺物（Fig.83・84，PL.30）

243・244は弥生土器である。243は甕で底径は7.4cm。底部はやや上げ底状をなす。内面は押圧後にナデ調整。胎土は小～中砂粒を多く含む。色調は外面が明黄褐色、内面は赤褐色。244は口径19.6cmの蓋である。体部はストレートに開く。調整は摩滅により不詳。胎土は良質で、細～小砂粒と雲母微細を含み、色調は淡橙色。

245～248は土師器である。245は鉢。口径12cm、器高は5.5cm。口縁部は直口して立ち上がり、体部は半球形の碗状をなす。口縁部はヨコナデ、内底面は押圧後にナデ、外面はナデ調整。口縁部には二次焼成の赤変がある。胎土は精良で、細砂、赤褐色粒をわずかに含む。色調は明橙色。246は口径13.2cmの甕。肥厚した口縁部は小さく外反し、端部を丸く納める。二次焼成痕がある。胎土は粗く細～中砂粒を多く含み、色調は暗黄橙色。247は甑である。口径31.6cm、底径12cm、器高は25.4cm。胴部は内弯して立ち上がり、小さく屈曲して外反する口縁部は端部を水平に摘み出す。調整は口縁部がヨコナデ、外面は縦ハケ目、内面はナデで穿孔部には指頭押圧痕が残る。胎土は多量の細～小砂粒と雲母を含み、色調は明赤褐色。248は高坏の脚部。底径は18.4cm。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は下方に小さく摘み出している。脚中位には三角形の透かしが3ケ所に穿孔されている。脚裾はヨコナデ、内面はナデ調整。胎土は精良で、細～小砂粒、雲母、赤褐色粒を含み、色調は明黄橙色。

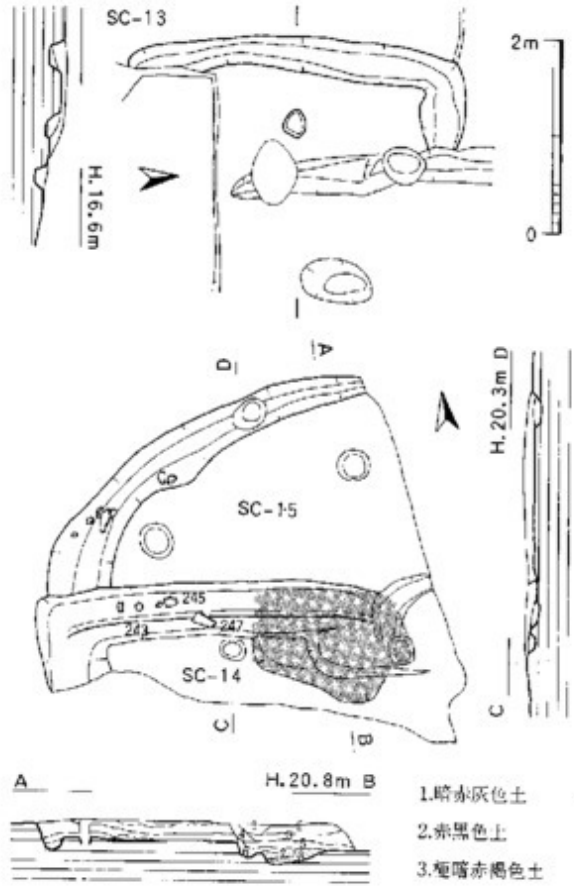


Fig. 82. 13・14号住居跡実測図（1／80）

249～251は円盤状の滑石製品。いずれも円～楕円形をなし、中央部に円孔を穿つ。249は径2.02～2.34cm。250は径0.89～1.31cm。251は径2.6～3cm。厚さは2.3～3.4cm。表面は丁寧に磨き出す。

16号住居跡（Fig.85. PL.20）

丘陵尾根上の南端に立地する住居跡で、17号住居跡より新しく、1号火葬墓よりも古い。平面形は、東西5m、南北4.8mの方形プランをなす。壁面は急峻で、北壁西側のみに周溝がある。床面は固く絞まり貼床は観られなかった。主柱穴は4本柱で、柱間は2.2～2.4m。柱穴は30～45cmの円形で、深さは約40cm。南と西側の柱間にも柱穴があり、補助柱としての機能も考えられなくもない。北壁の中央には竈が付設されている。竈は床面を浅く凹レンズ状に掘り込んで火床を造り、その両脇に弧状の厚い袖部を巡らせている。

出土遺物（Fig.86. PL.30）

252～255は土師器である。252は甕で、底径は10cm。胴部はストレートに立ち上がる。外面はナデ、内面は指頭押圧ナデ調整。外面には二次焼成による赤変がある。胎土は細～小砂粒と雲母微細を含む。内面は淡黄褐色、外面は明赤桃色。253は坏蓋。口径は14.2cm。口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、天井部は浅い球形をなす。口縁部と体部の境に弱い稜を形成する。口縁部はヨコナデ、内底面はナデ、天井部はヘラ調整。胎土は良質で砂粒、赤褐色粒を含み、淡黄褐色。254は口径10cmの瓶。ラッパ状に外反する頸部は上位が屈曲し、口縁部はストレートにのびる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ。胎土は細～小砂粒、雲母微細、赤褐色粒を含み、明橙色。255は高坏の脚部で底径は8.8cm。脚は短くラッパ状に外反する。調整は裾部がヨコナ

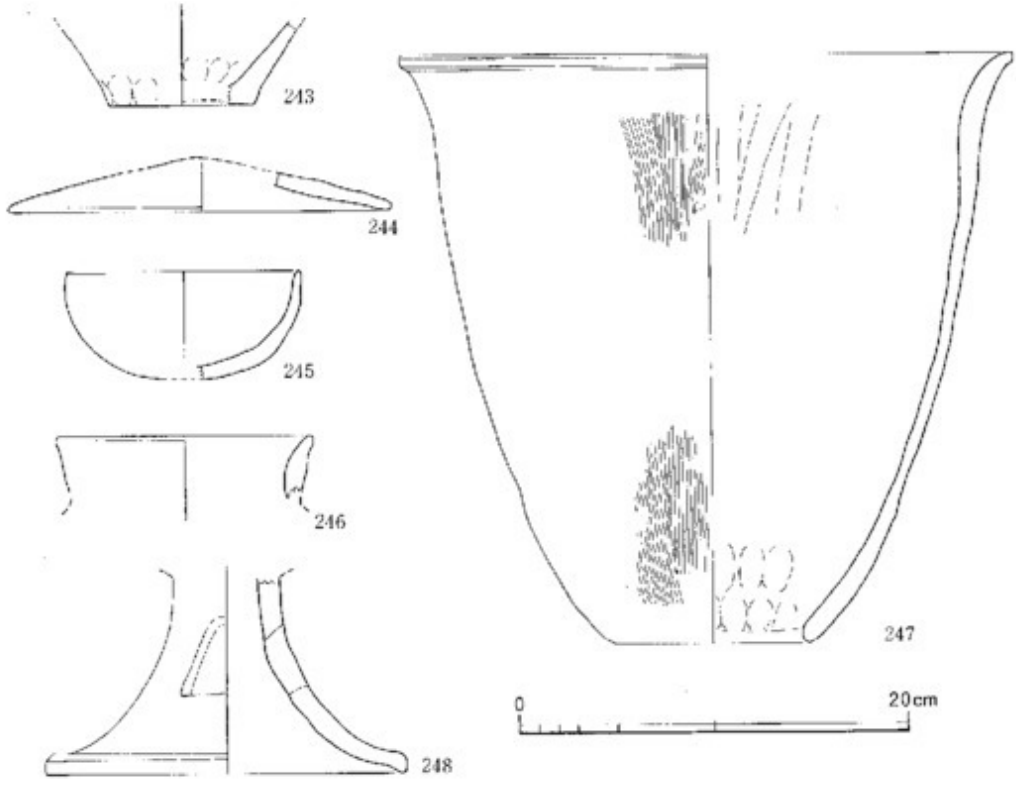


Fig. 83. 14号住居跡出土土器実測図（1／4）

デ、内面は押圧ナデ、外面は丁寧なナデ調整。胎土は砂粒と赤褐色粒を僅かに含み、明橙色。

17号住居跡（Fig.85. PL.20）

丘陵尾根の南端に立地し、東壁は16号住居跡と1号火葬墓に切られている。西壁が消失しているが、平面形は南北が5m、東西が4.7mの方形プランをなそう。壁面は急峻に立ち上がり、壁下には幅10～15cmの周溝が巡る。主柱穴は4本柱で、柱間は南北が2.8m、東西が2.2mを測り、やや菱形に歪む。柱穴は径30～50cmの円～楕円形をなし、深さは25～50cmを測る。床面は固く絞ま

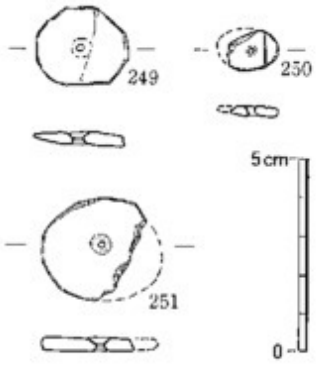


Fig. 84. 14号住居跡出土石製品実測図（1／2）

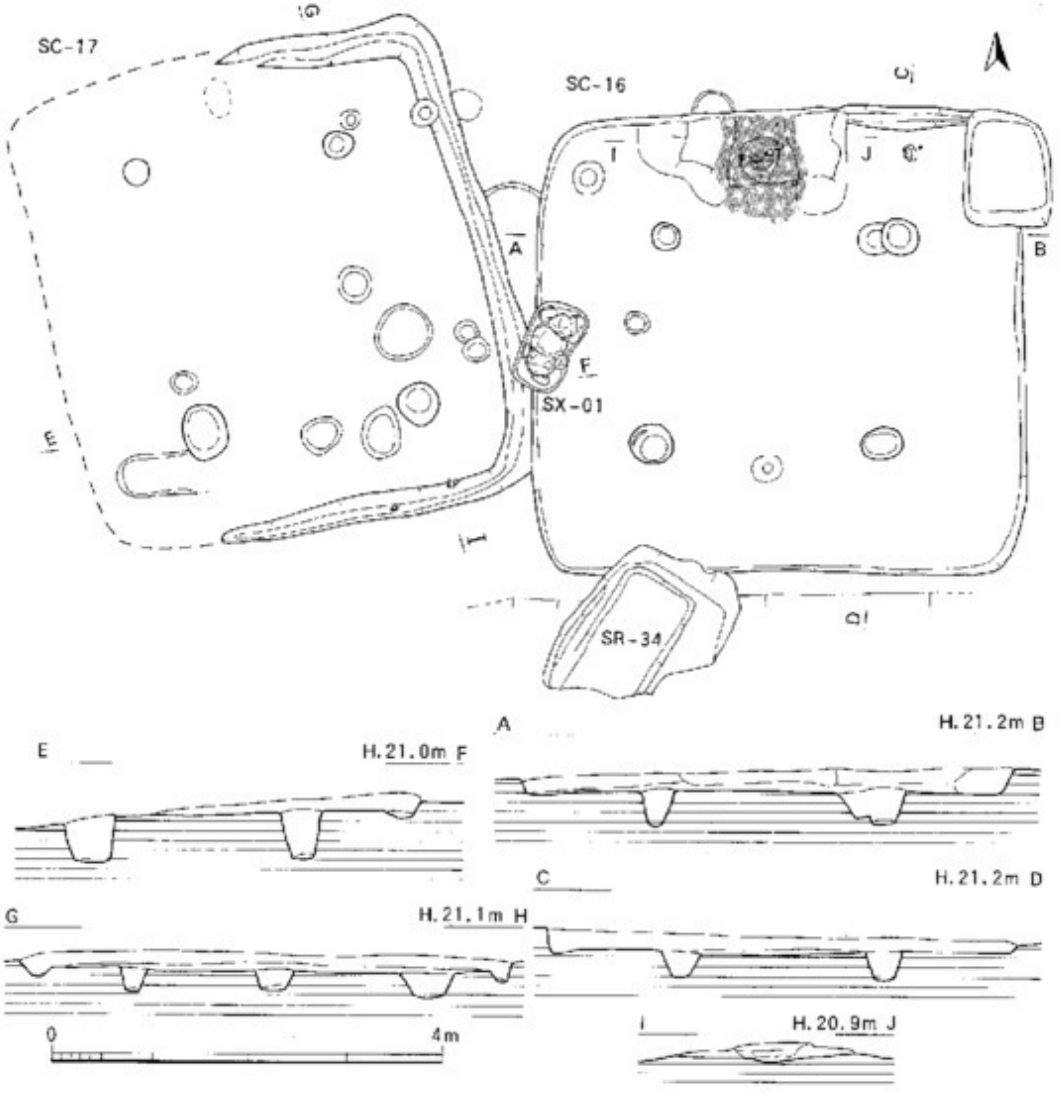


Fig. 85. 16・17号住居跡実測図（1／80）

り、貼床は確認されなかった。北壁中央の床面上には浅い凹レンズ状の焼土床があり、ここに竈が付設されていたと考えられる。遺物は土師器と須恵器片が少量出土している。

出土遺物（Fig.86・87）

256は弥生前期の小型壺で、底径は4.6cm。胴部は内弯して立ち上がり、肩の張った扁球形をなそう。調整は外面は丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土は良質で、細～小砂粒と雲母を含む。色調は黄橙褐色。

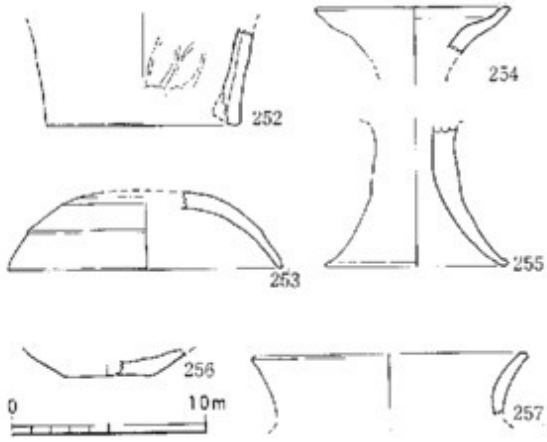


Fig. 86. 16・17号住居跡出土土器実測図（1／4）

257は土師器の甕である。口径は14.2cm。口縁部は「く」字状に外反する。調整はヨコナデ。胎土は細～小砂粒と雲母を含み、色調は乳灰色。

258はポイント状の安山岩の打製石器で、先端部を欠く。現長は4.4cm、幅は1.3cm。基部は直線的で、身は細く、横断面は凸レンズ状をなす。

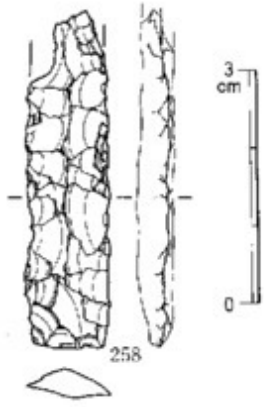


Fig. 87. 17号住居跡出土石器実測図（1／1）

18号住居跡（Fig.88. PL.20）

西側緩斜面南端の上段に立地する住居跡で、17号住居跡の西4mの距離に位置する。平面形は遺存する柱穴から推して東西4.7m、南北4.3mの方形に復原できよう。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁下には幅広の周溝が巡る。床面は東壁側で薄い貼床状の粘土塊が観られた。主柱穴は4本柱で、柱間は東西が2.2m、南北が1.5mである。柱穴は径30～45cmの円形で、深さは35～70cm。北壁下からは4個のミニチュア土器がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.89）

259～265は土師器である。259・260は高坏である。259は口径13.8cm。体部は半球形をなし、口縁部は小さく外反する。口縁部はヨコナデ、内面は押圧後にナデ調整。胎土は良質で、微細砂、雲母微細を含む。色調は暗赤褐色。鉢の可能性もある。260は口縁部を欠く。胎土は多くの細～小砂粒と雲母微細を含み、色調は暗赤褐色。261～265はミニチュア土器である。261は口径4.3cm、器高は3cm。体部は半球形で、口縁部は小さく外方に摘みだす。淡褐色～赤褐色。262は体部が内弯ぎみに外反する。263は底部が大きく、体部は短く直口する。264は口径3.8cm、器高3.7cm。器壁は厚く、体部は直口して立ち上がる。黄褐色～赤褐色。265は底部が厚く、口縁部は短く外反する。暗赤橙色。調整はいずれも指頭押圧による手捏ねで、胎土には細～小砂粒を含む。

19号住居跡（Fig.88. PL.20）

西側緩斜面中央の上段に立地する住居跡で、西側は20号住居跡に削平されている。平面形は一辺が4.7mの方形プランに復原されよう。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁下に周溝は巡っていない。床面は固く絞まり、貼床は観られなかった。また、竈を示唆する床面上の焼土塊もなかった。遺物は少なく甕棺片等が混入していた。

出土遺物（Fig.89）

266～269は弥生土器である。266は壺の口縁部で、口径は39.4cm。如意状の口縁部は外唇に粘土紐を貼りつけて段を形成する。胎土は多くの砂粒と雲母微細を含み、淡黄褐色。268は壺の底部で、底径12.4cm。分厚い底部に扁球形の胴部がつこう。内面は押圧ナデ、外面はナデ。胎土は多量の砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。267・269は甕。267は底径8.4cm。胴部は内弯ぎみに立ち上がる。胎土は良質で、砂粒と雲母微細を含み、黄橙色。269は底径14cm。胎土は砂粒と雲母を含み、赤褐色。

270は土師器の甕である。底部は厚い丸底状で、胴部は長胴形になろう。調整は内外とも指頭による押圧ナデ。胎土は粗く石英粗砂粒と雲母を含む。内面は淡灰褐色、外面は黄灰褐色。

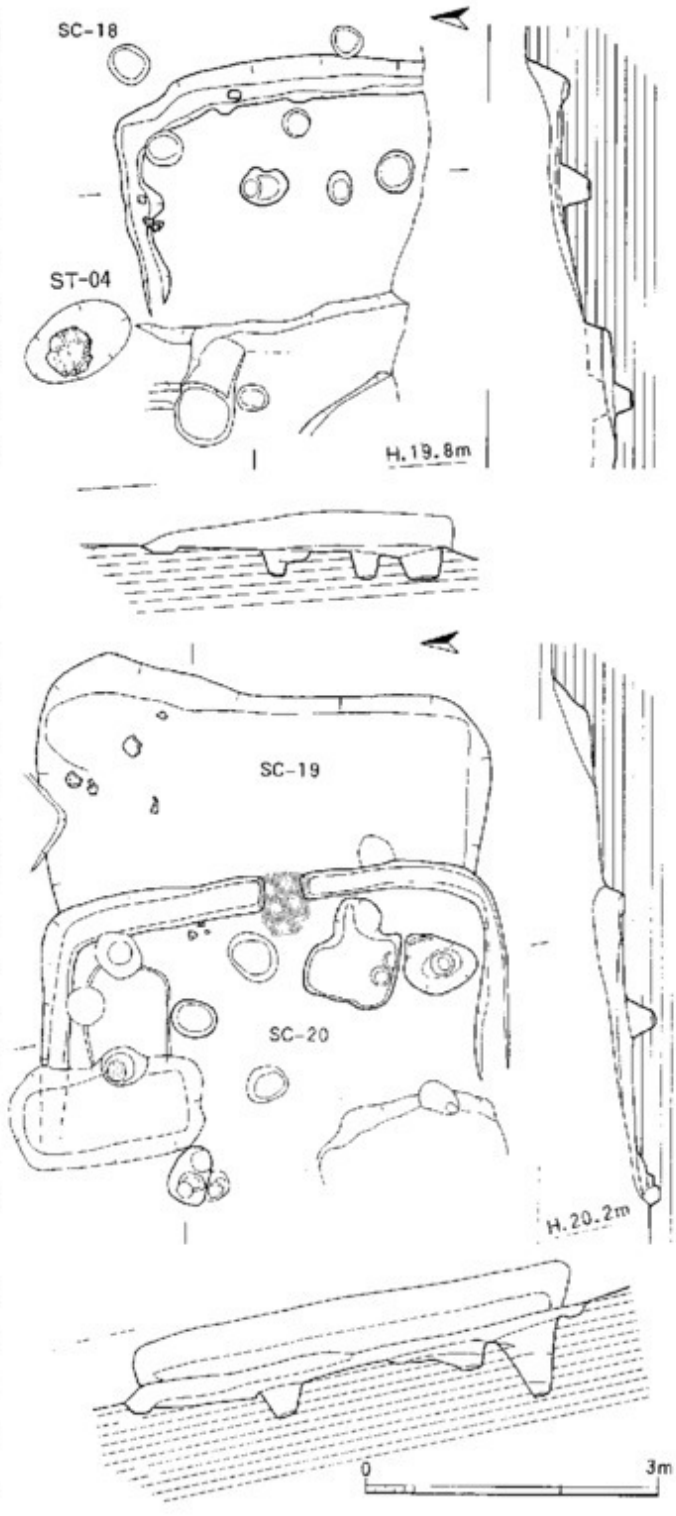


Fig. 88. 18～20号住居跡実測図（1／80）

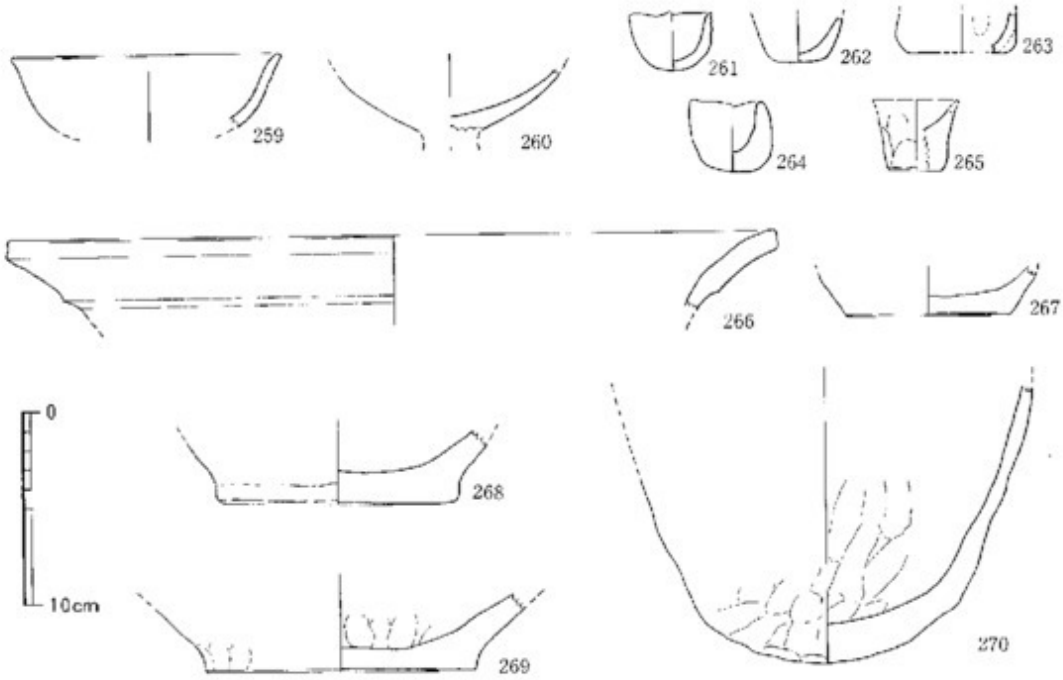


Fig. 89. 18・19号住居跡出土土器実測図（1／4）

20号住居跡（Fig.88. PL.20）

西側緩斜面の中央部上段に立地する住居跡である。5号建物跡や19号住居跡と重複し、5号建物跡よりも古く、19号住居跡より新しい。また、西側床面下には21号甕棺墓や9号土壙墓がある。平面形は一辺が約4.7m程の方形プランに復原され、壁下には幅広の周溝が巡る。柱穴は南西柱が9号土壙墓上にあるが、主柱穴は4本柱となろう。床面は褐色粘土を厚く敷き固めて貼床を造っている。東壁の中央部には床面上がかすかに赤く赤変しており、ここに竈が付設されていた可能性がある。遺物は土師器、須恵器片が少量出土した。

21号住居跡（Fig.90. PL.21）

西側緩斜面北部の上段に立地する住居跡で、北側は22号住居跡と重複し、これよりも新しい。西壁は削平され、住居跡内は撹乱による床面の消失が著しい。平面形は残る東壁から推して一辺が3.2m程の小型の方形プランに復原されよう。壁面は垂直に立ち上がり、壁下の周溝は確認されなかった。東壁際には固く絞まった床面が残っているが貼床は確認できなかった。柱穴は東壁寄りの中央部に1ケ検出され、2本柱を主柱穴とした可能性も考えられる。遺物は混入した小片がわずかに出土したに過ぎない。

22号住居跡（Fig.90. PL.21）

西側緩斜面北部の上段に立地する小型の住居跡で、南側は21号住居跡に切られ、床面の西半部が撹乱を受けて消失している。平面形は東西2.8m、南北3.3mの長方形プランをなそう。壁

面は急峻に立ち上がり、深さは25cmを測る。壁下には幅15cmの浅い周溝が巡る。床面は固く絞まり、貼床は観察されなかった。主柱穴は4本柱で、柱間は西壁の棟側が1.7mのほかは1.3mである。柱穴は住居跡内のやや東に偏している。遺物は土師器と須恵器小片が少量出土した。

出土遺物（Fig.91）

271は土師器の甕である。口径は17.2cm。口縁部は「く」字状に外反し、倒卵形の胴部がつこう。内外面ともナデ調整。胎土は良質で多くの細～小砂粒と雲母微細を含み、赤橙褐色。

272は花崗岩質の敲き石。長さは14cm、幅は10.1cm。側縁部には敲打痕がわずかに残る。

23号住居跡（Fig.92. PL.21）

西側緩斜面下段の南端に立地する住居跡で、24～28号住居跡と複雑に重複しているが、斜面上に占地することからその前後関係は明らかではない。平面形は東壁の両コーナーから復原すると一辺が約3.7mの方形プランになろう。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁下の周溝は検出できなかった。床面は消失が著しく、貼床等は確認されなかったが、北東隅には焼土粒と炭片を含む灰層が拡がり竈が付設されていた可能性も考えられる。柱穴は未検出。遺物は土師器や須恵器と弥生土器片が出土した。

出土遺物（Fig.93）

273は弥生前期の壺で、口径は19cm。口縁部は如意状に外反し、肩部には2条の横凹線下に無軸の羽状文をヘラ描きで施文する。胎土は小～中砂粒を多く含む。

24号住居跡（Fig.92. PL.21）

西側緩斜面南端の下段に立地する住居跡である。23～28号住居跡群と複雑に重複し、その最上段に位置する。住居跡は消失が著しく、全容は明らかでないが遺存する東壁とその北東隅角から推して一辺が4m程の方形プランに復原できようか。壁面はやや緩やかに立ち上

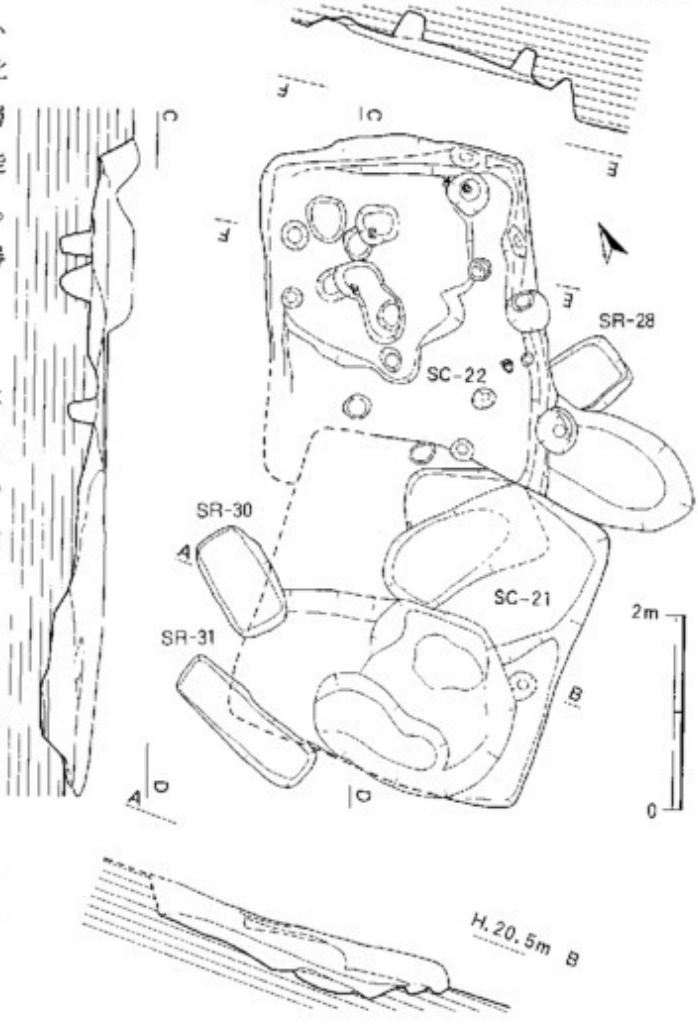


Fig. 90. 21・22号住居跡実測図（1／80）

がり、周溝や柱穴等は確認できなかった。遺物は土師器や須恵器小片が出土している。

出土遺物（Fig.93・94）

276～280は土師器である。276～278は甕。276は口径11.8cm。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は肩の張った球形をなそう。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。277は口径12cm。278は口径18.8cm。胴部上半は頸部状に直口し、口縁部は小さく外反する。内面は押圧ナデ、内面はナデ調整。279は口径は15.4cmの鉢。胴部は半球形で、口縁部は小さく外反する。内面は押圧ナデ調整。外面には二次焼成による赤変がある。280は高坏の脚部で、底径は9.6cm。裾端部は下方に小さく摘み出し、中位には透かしを穿つ。内面はナデ調整。いずれも胎土は細～小砂粒と雲母を含む。

286は円盤状の土製品である。短軸は3cm、長軸は4.5～5cmの楕円形をなそう。器表面には二次焼成による赤変がある。

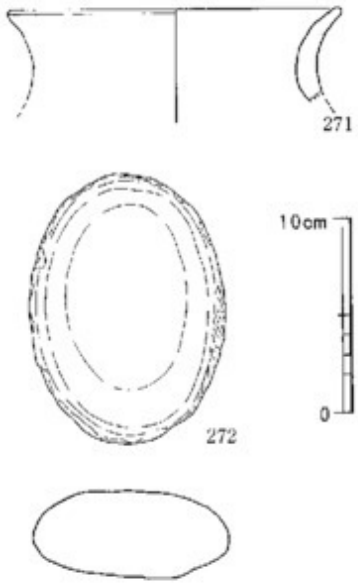


Fig. 91. 22号住居跡出土土器・石器実測図（1／4）

25号住居跡（Fig.92. PL.21）

西側緩斜面南端の下段に立地する住居跡で、23～28号住居跡と複雑に重複している。平面形は東壁とその隅角から推して一辺が4mの方形プランをなそう。壁面はやや急峻に立ち上がり、

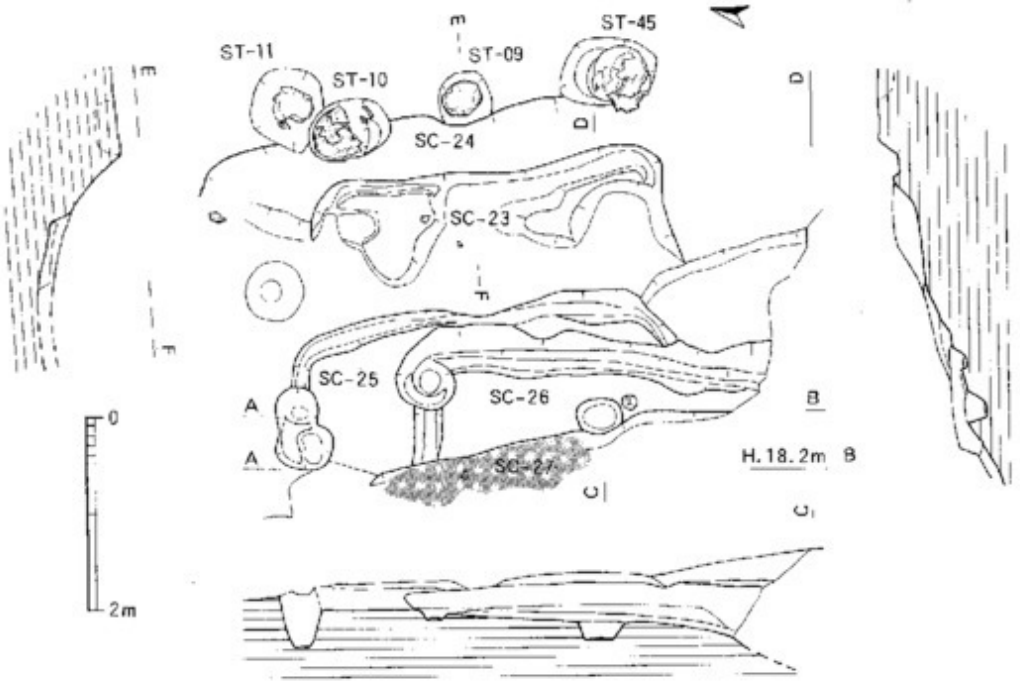


Fig. 92. 23～27号住居跡実測図（1／80）

壁下には幅約15cmの浅い周溝が巡る。床面は固い真砂土で貼床は観察されなかった。柱穴は26号住居跡の北東コーナー上で1本を検出した。

26号住居跡（Fig.92. PL.21）

西側緩斜面南端の下段に立地する住居跡で、23～28号住居跡と複雑に重複している。住居跡はその大半が消失しているために全容は明らかでないが、平面形は一辺が4m程の方形プランに復原できようか。壁面は急峻に立ち上がり、壁下には15～20cmの幅広の浅い周溝が巡る。床面は固い真砂土で貼床は観察されなかった。東壁側の中央には径35×45cm、深さ25cmのしっかりした柱穴があり、主柱穴は2本柱であった可能性が考えられる。

出土遺物（Fig.93・94. PL.30）

281は土師器の鉢である。口径は14cm、器高は5.2cm。体部は扁平な半球形をなし、口縁部は小さく外方に摘み出す。内面はナデ調整。胎土は小～中砂粒を多く含み、色調は赤褐色。

287・288は滑石製臼玉。287は径5.3mm、厚さ2.5mm、孔径1.7mmで丁寧に整形、研磨する。

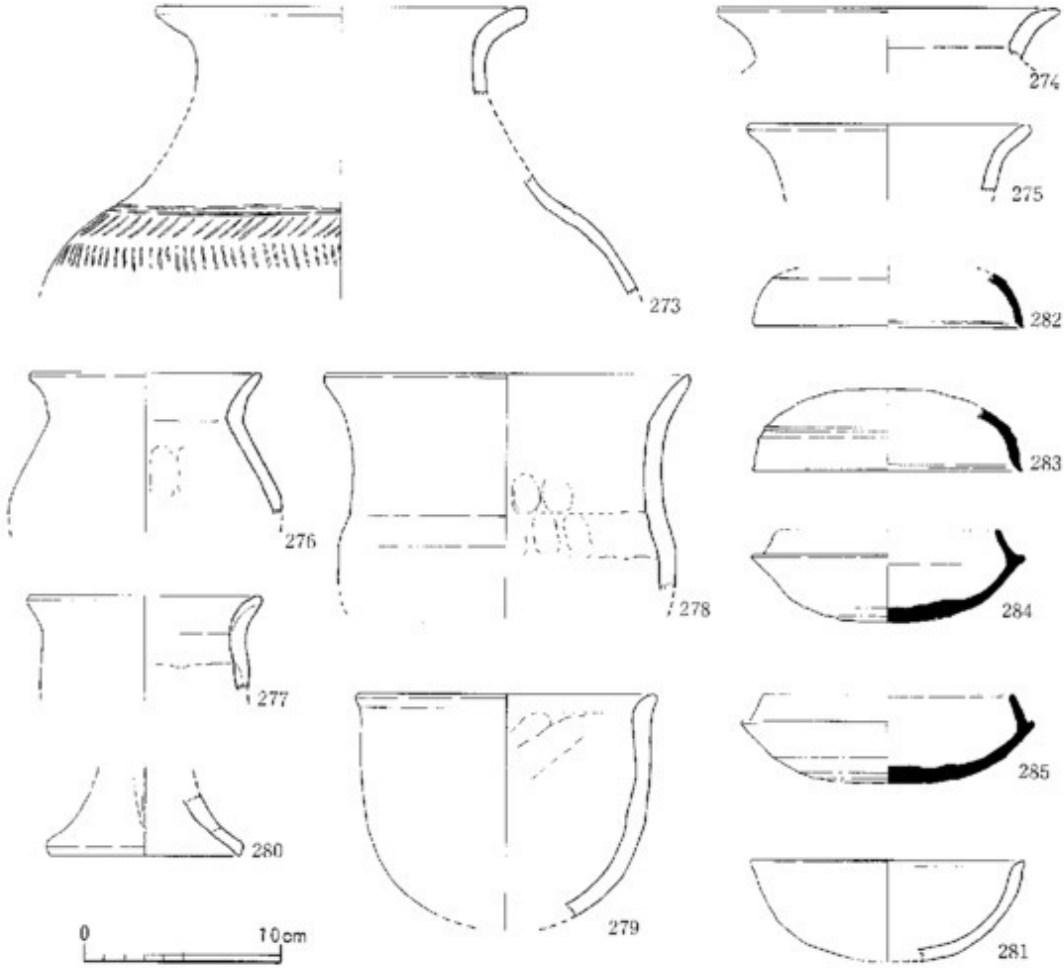


Fig. 93. 23～27号住居跡出土土器実測図（1／4）

288は径5.9㎜、厚さ2.1～2.5㎜、孔径1.6～2.2㎜で整形は粗い。

27号住居跡（Fig.92. PL.21）

西側緩斜面南端の下段に立地する住居跡である。23～28号住居跡と複雑に重複し、その最下段に位置する。住居跡は東壁を残してほとんどが消失しているために全容は明らかではないが、一辺が5m程の方形プランをなそうか。壁面は急峻に立ち上がり、壁下の周溝は観察されなかった。床面は固い真砂土で、東壁下の床面上には焼土粒と炭片の混入土が広範に拡がり竈が付設されていた可能性がある。25～27号住居跡の覆土中からは土師器や須恵器片が出土しているが、切り合い関係が判然としなかったので一括して取り扱った。

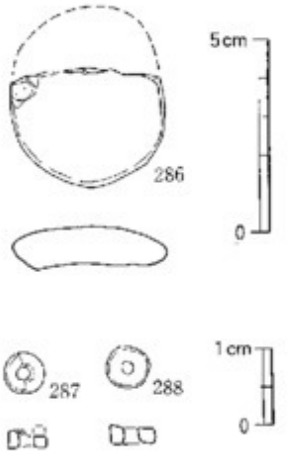


Fig. 94. 24・26号住居跡出土土製品・玉実測図（1／2・1／1）

出土遺物（Fig.93）

274・275は土師器である。いずれも甕で、274は口径17.6cm。口縁部は「く」字状に外反する。色調は明橙黄色。275は口径が14.6cm。いずれも胎土には細～中砂粒と雲母を含む。

282～285は須恵器。282・283は坏蓋。282は口径13.8cm。283は口径13.8cm。口縁部は内弯ぎみに立ち上って内唇には段を作り、体部との境には横凹線状の稜を形成する。284・285は坏身。284は口径11.4cm、器高4.7cm。285は口径12.8cm、器高4.5cm。口縁部はストレートに内傾して立ち上がる。調整は口縁部～体部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。285の底面にはヘラ記号が刻まれている。蓋身ともに胎土は精良で、色調は灰色～灰紫色。

29号住居跡（Fig.95. PL.21）

西側緩斜面中央部の最下段に立地する住居跡で、25号住居跡の北側に隣接して位置する。住居跡は東壁と北、南壁の一部を残して消失しているが、平面形は一辺が5.5～5.7mの方形プラ

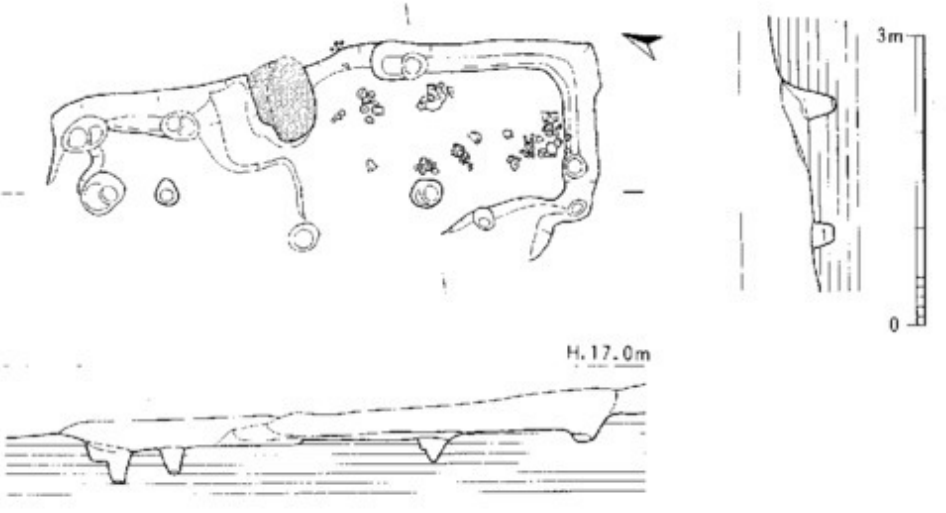


Fig. 95. 29号住居跡実測図（1／80）

ンになろう。壁面は急峻で、壁下には幅広の浅い周溝が巡る。床面は暗黄褐色粘土が貼床状に強く踏み固められていた。東壁中央の床面上には凹レンズ状の焼土壁があり、その上層には焼土粒に炭片と灰白色粘土の混入層が堆積し、竈が付設されていたと考えられる。住居跡南側の床面上には土師器片がまとまって散乱していた。覆土からは滑石の石製品やチップ片が出土した。

出土遺物

(Fig.96・97. PL.30)

289・290は弥生土器である。289は壺で底径8.6cm。調整は胴部外面～底面がナデ、内面は押圧ナデ。290は甕で底径は8cm。外面には二次焼成による赤変があり、内面は指頭による押圧ナデ調整。

292～299は土師器である。291は口径7.6cmの小型丸底壺。口縁部は小さく外反し、胴部は扁球形をなす。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土は細砂、雲母微細と赤褐色粒を含む。292～295は甕。292は口径10.8cm。胎土は精良で赤褐色粒をわずかに含み、明橙色。293は口径19.4cmで、口縁部は短く外反する。胎土は砂粒と雲母、赤褐色粒を含み、明赤橙色。294は鉢状の手捏ね土器で底径は5.8cm。底部は厚く、体部は内弯ぎみに立ち上

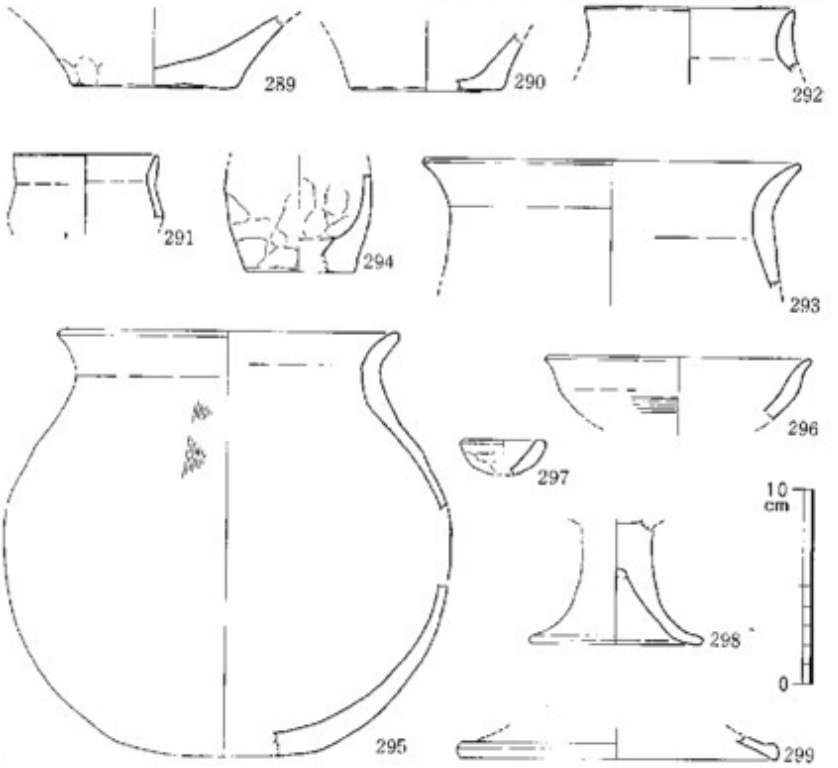


Fig. 96. 29号住居跡出土土器実測図（1／4）

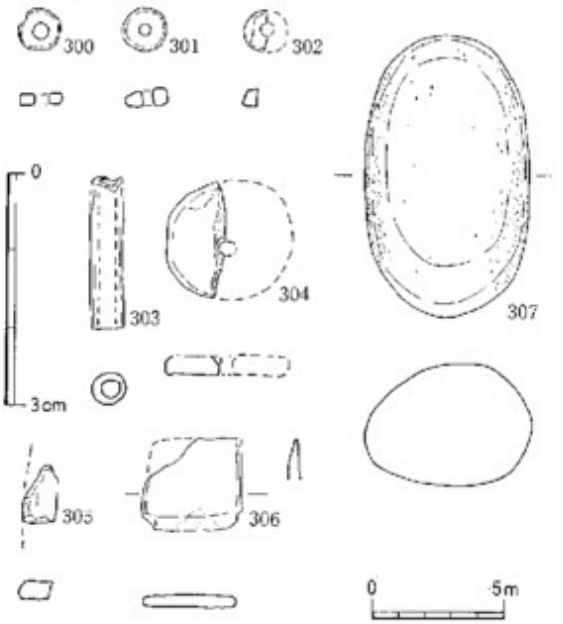


Fig. 97. 29号住居跡出土石製品・石器実測図（1／1・1／3）

がる。内外とも押圧ナデ調整。胎土は砂粒と雲母を含み、淡黄橙色。295は口径17.6cm、器高は21.9cmになろう。口縁部は短く外反し、球形の胴部には小さな平底の底部が付く。調整は口縁部がヨコナデ、内面はナデ、外面はハケ目後にナデ。胎土は砂粒と雲母、赤褐色粒を含む。明黄橙色。296は口径13.8cmの鉢。口縁部は小さく外反し、体部は扁平な半球形をなす。外面は横ハケ目、内面は押圧ナデ調整。胎土は細～小砂粒と雲母を含む。内面は茶褐色、外面は赤橙色。291は口径4.4cm、器高1.9cmのミニチュア土器。体部は半球形をなす。胎土は良質で細砂粒を含み、淡灰黒色。298・299は高坏の脚である。298は底径8.8cm。脚は短くラッパ状にのび、裾部は小さく屈曲して外方に開く。調整はナデ。胎土は砂粒と赤褐色粒を含み、明橙色。299は底径16.4cm。脚裾は端部を平坦に整えて上方に摘み上げている。

300～306は滑石製品である。300～302は白玉。300は径5.7mm、厚さ1.2～1.5mm、孔径2mm。301は径5.9mm、厚さ1.6～2.2mm、孔径1.8mm。乳白色で丁寧に整形、研磨する。303は管玉。径4.2mm、長さ2cmで孔は下方が幅広になる。304はボタン状の有孔円盤。径は1.6cm、孔径は2mmに復原される。306は1.18×1.24cmの方形品で長辺側は尖りぎみに研磨する。305は細片であるが、306と同形状になろう。

307は敲打石である。短辺側に敲打痕が残る。長さ10.9cm、幅6.3cm、厚さは4.7cm。

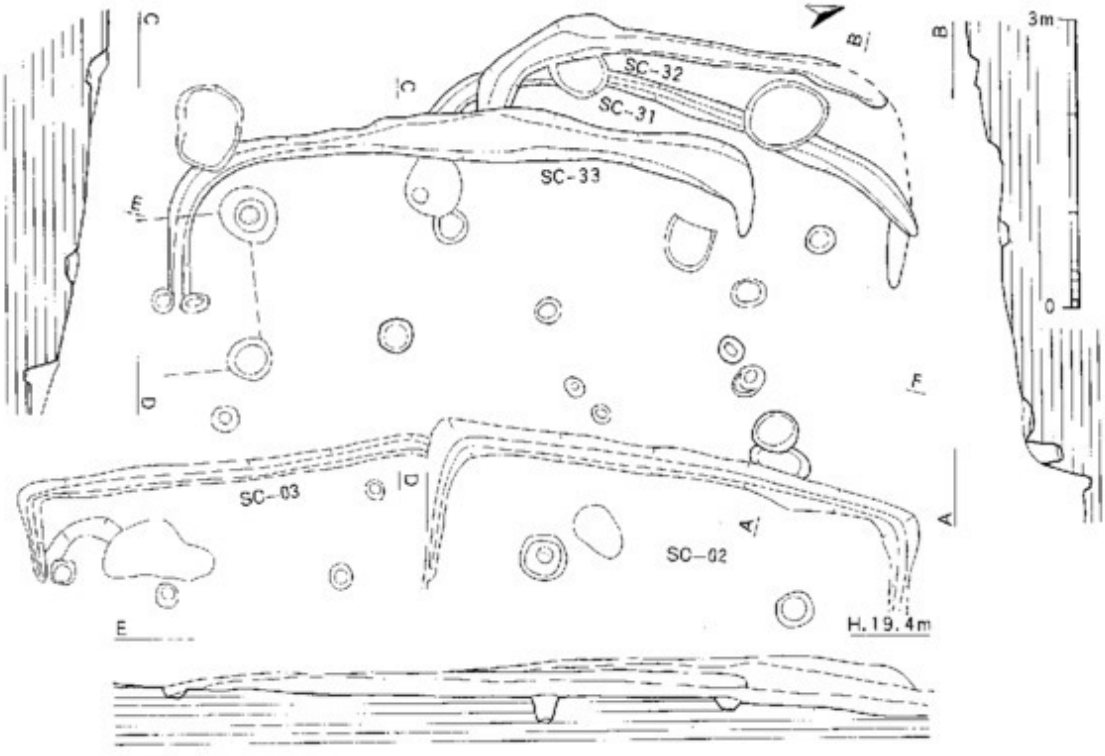


Fig. 98. 31～33号住居跡実測図（1／80）

30号住居跡（付図）

西側緩斜面南端の上縁に立地し、18号住居跡の東に位置する。平面形は遺存する東壁から推すと一辺が5.5～6m程の方形プランになろうか。床面上は撹乱が甚だしく、主柱穴も特定はできなかった。従って住居跡としては断定しかねるが、ここでは一応住居跡として取り扱った。

出土遺物（Fig.99）

308は弥生土器の甕で、口径29.4cm。口縁部は逆「L」字状に外反する。胴部はナデ調整。

309は高台付の土師器坏で底径8.2cm。高台はヨコナデ、体部はナデ。胎土は細砂と雲母を含む。

31号住居跡（Fig.98. PL.21）

東側緩斜面の上段北側に立地する。32・33号住居跡と重複し、32号住居跡より新しく、33号住居跡よりも古い。平面形は「コ」字状に遺存する周溝から一辺が4.5m程の方形に復原されよう。周溝は幅15～25で、主柱穴は特定できなかった。遺物は土師器と須恵器小片が出土した。

32号住居跡（Fig.98. PL.21）

東側緩斜面の上段北側に立地し、重複する31～33号住居跡中で最も古い。平面形遺存する西壁下の周溝から一辺が約5～5.5mの方形プランに復原されよう。周溝は幅15～20cmで、浅い凹レンズ状を呈する。住居内には数本の柱穴があるが、主柱穴は特定できなかった。

33号住居跡（Fig.98. PL.21）

東側緩斜面の北側上段に立地する。31・32号住居跡と重複し、最も新しい。平面形は「L」字状に遺存する西、南壁下の周溝から復原すると一辺が6m程の方形になろう。周溝は幅15～20cm、深さは5～8cmで浅い逆台形をなす。主柱穴は特定できなかった。

出土遺物（Fig.99）

311・312は弥生土器。311は高坏の坏で、口径20.4cm。内面には丹の痕跡が微かに残る。312は口径39.8cmの甕。「く」字状の口縁部下にはシャープな三角凸帯が1条巡る。内面は押圧ナデ。

310は口径16.2cmの土師器甕。口縁部は「く」字状に外反し、外面には二次焼成痕がある。

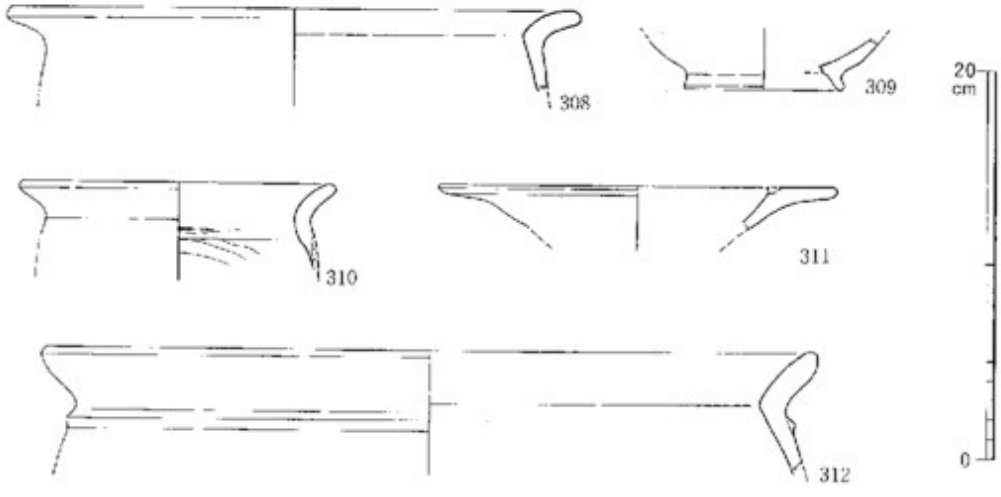


Fig. 99. 30・33号住居跡出土土器実測図（1／4）

掘立柱建物跡（SB）

古墳時代の掘立柱建物跡は、総てで7棟を検出した。しかし、ひとつの建物跡としてまとめきれなかった柱穴群があり、更に数棟の建物跡があったことも考えられる。これらの掘立柱建物跡は竪穴住居跡群と同じ在り方で丘陵上と東西の緩斜面上に占地する。丘陵尾根上に2棟、東側緩斜面上に3棟、西側緩斜面上に2棟が其々に一定の空間域を保ちながら棟を同じくして立地している。削平された南側の丘陵部を勘案しても竪穴住居跡群ほどの密な分布を示すとは考えがたい。数棟の竪穴住居跡に1～2棟の建物跡が付随して一単位をなし、それが幾つかまとまってひとつの集落を構成していたものであろう。時期を明らかにしうる6号建物跡は竪穴住居跡群と時間的に共有し、そのことを示唆している。

1号建物跡（Fig.100. PL.22）

丘陵尾根の中央部東縁に立地する1×2間の南北棟の建物跡である。1号住居跡の北東に位置し、6号土壙墓よりも新しい。梁行全長は1.4m、桁行全長は3.6mで、桁行柱間は1.8mである。

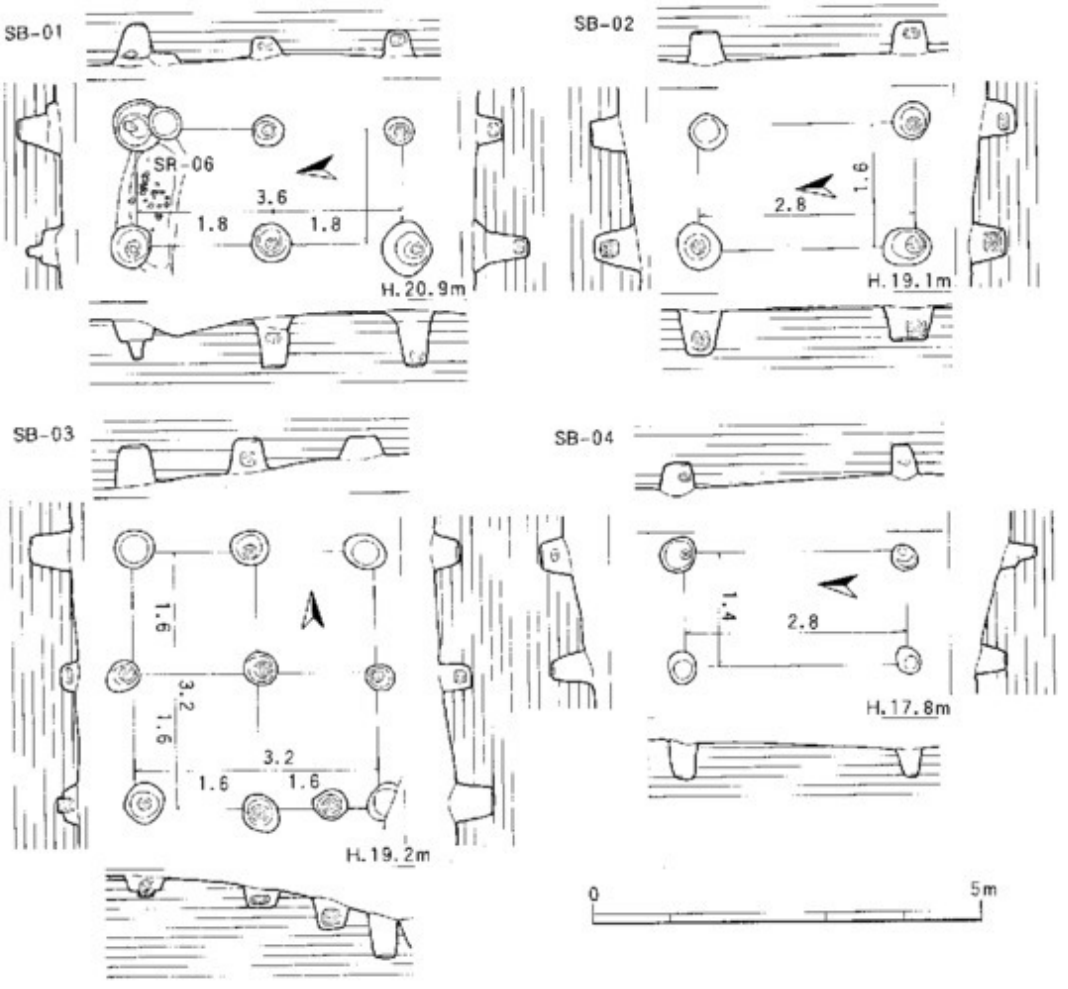


Fig. 100. 1～4号掘立柱建物跡実測図（1／100）

柱穴は径40～65cmの円形プランをなし、深さ30～75cm。柱穴内からは直径が約15cmの柱痕跡が確認された。

出土遺物（Fig.102. PL.30）

313は台形状の滑石製品。基部には凹基状の抉り込みがあり、上縁には小孔を穿っている。上縁幅1.2cm、基部幅2.4cm、長さ1.8cmで厚さは4mm。整形、研磨はやや粗い。

2号建物跡（Fig.100. PL.22）

東側緩斜面の上段に立地する1×1間の南北棟の建物跡で、3号建物跡のすぐ北に位置する。梁行全長は1.6m、桁行全長は2.8mである。柱穴は径が50～65cmの円～楕円形プランをなし、深さは45～60cm。柱穴内からは柱痕跡が確認された。遺物は弥生土器と土師器、須恵器等が少量出土している。

3号建物跡（Fig.100. PL.22）

東側緩斜面の上段に立地する2×2間の総柱の南北棟建物跡で、2号建物跡の南に位置する。梁行全長は2.9mで、柱間は1.4mと1.5m。桁行全長は3.4mで、柱間は1.5mと1.9mを測る。柱穴は径が30～60cmの円～楕円形をなし、深さは30～70cmを測る。緩斜面上に占地する所以か下段の柱穴が大きくしっかりしている。遺物は土師器や須恵器片が出土した。

4号建物跡（Fig.100. PL.22）

東側緩斜面の中段に立地する1×1間の南北棟の建物跡で、9・10号住居跡と重複している。梁行全長は1.4m、桁

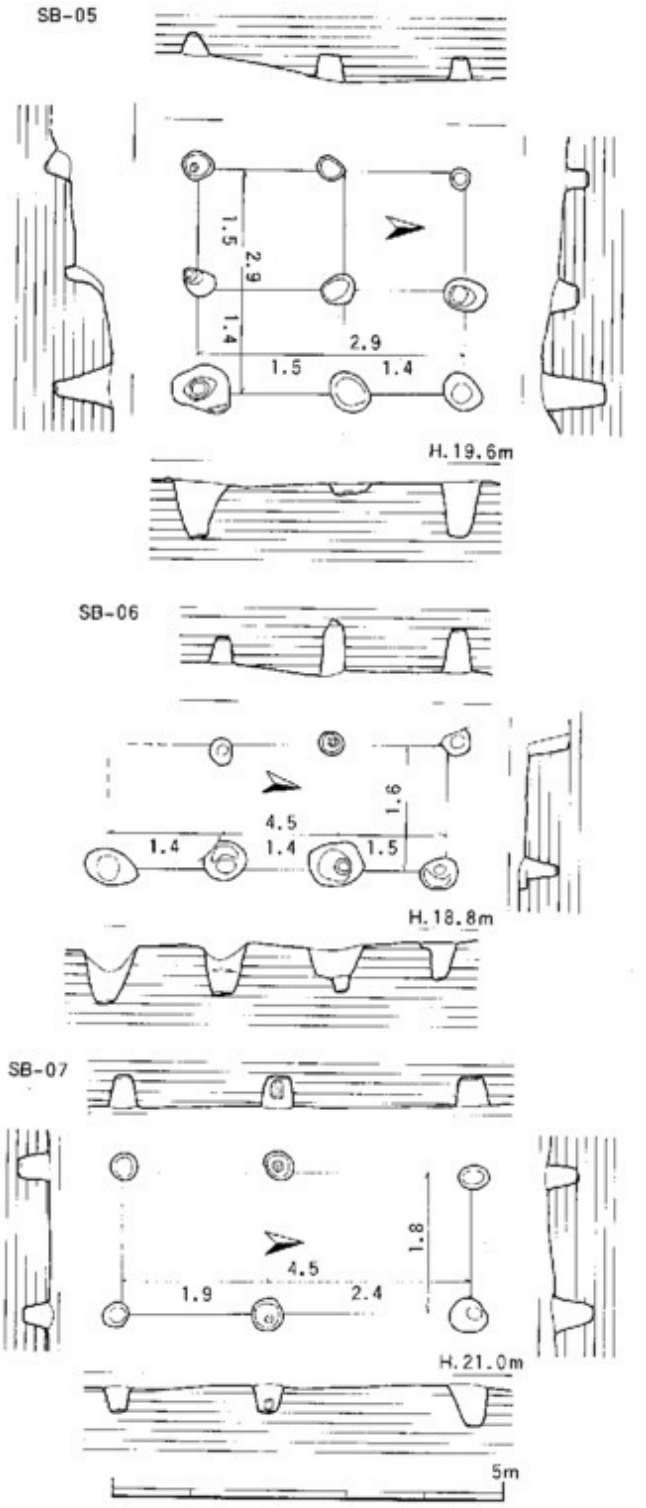


Fig. 101. 5～7号堀立柱建物跡実測図（1／100）

行全長は2.8mである。柱穴は径が35～50cmの円形プランをなし、深さは35～45cmを測る。遺物は未出土。

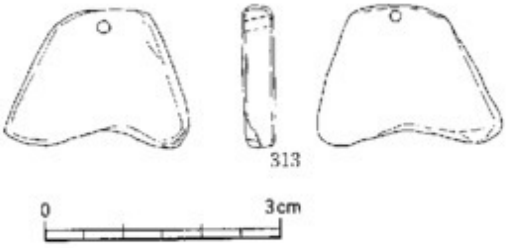


Fig. 102. 1号堀立柱建物跡出土石製品実測図（1／1）

5号建物跡（Fig.101. PL.22）

西側緩斜面北側の中段に立地する1×3間の南北棟の建物跡で、15・17号土壙墓と重複している。梁行全長は1.6m、桁行全長は4.5mで柱間は1.5mの等間である。柱穴は径が50～65cmの円形プランをなし、深さは50～75cmとしっかりしている。遺物は土師器と須恵器片等が少量出土した。

6号建物跡（Fig.101. PL.22）

西側緩斜面の中央部上段に立地する総柱の建物跡で、20号住居跡と重複している。梁行、桁行とも全長は3.2mで、柱間は1.6mの等間である。柱穴は径が35～50cmの円形プランをなし、深さは35～60cmを測る。柱穴内では径15～20cmの柱痕跡が確認された。遺物は弥生土器と須恵器、土師器が出土した。

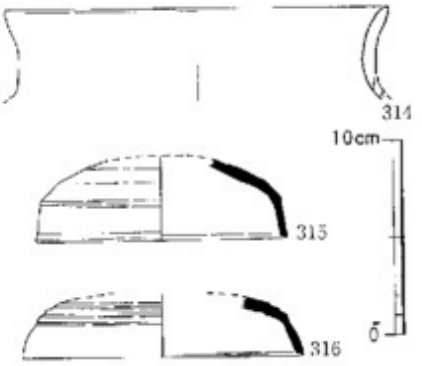


Fig. 103. 6号堀立柱建物跡出土土器実測図（1／4）

出土遺物（Fig.103）

314は土師器の甕である。口径19.8cm。口縁部は直口して小さく外反する。ヨコナデ調整。

315・316は須恵器の坏蓋である。315は口径12.8cm。口縁部は直口ぎみに立ち上がり、口唇部は小さく内傾する。体部との境には緩い稜を形成する。口縁部がヨコナデ、内面はナデ、天井部はヘラケズリ。316は口径14.4cm。口縁部は外唇を小さくのばして内唇に段を作り、体部との境にはシャープな稜を形成する。内外ともにヨコナデ調整。胎土はには小砂粒を含む。

7号建物跡（Fig.101. PL.22）

丘陵尾根の南側東縁に立地する1×2間の南北棟の建物跡である。1号建物跡の南8mの距離に棟を同じくして縦に並んで位置する。梁行全長は1.8m。桁行全長は4.5mで、柱間は西側が2.4mと2.2m、東側が2.6mと1.9mでやや異なる。柱穴は径35～50cmの円形をなし、深さは35～55cmでしっかりしている。

土　壙　墓（SR）

古墳時代の土壙墓は1基を検出した。土壙墓は丘陵の尾根上に弥生時代の土壙墓群と重複して立地し、同様の在り方を示す。古墳時代と特定できる土壙墓が1基を除いてはないために分布的にはどのような在り様を示すのかは明らかではない。

6号土壙墓（Fig.104）

丘陵尾根の中央部東縁に立地し、小口壁は1号建物跡に切られている。平面形は長軸180cm、短軸78cmの隅丸長方形をなし、主軸方位をN－83.5°－Wにとる。壁高は15cmで、断面形は逆台形をなし、壙底は東に緩く傾斜する。壙底からは土師器と須恵器がまとまって出土した。

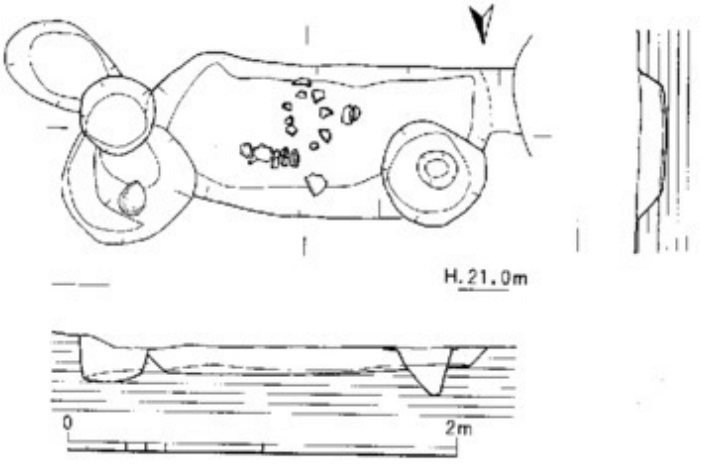


Fig. 104. 6号土壙墓実測図（1／40）

出土遺物（Fig.105）

317は土師器の甕。口径16.6cm。胴部はナデ調整。

318～322は須恵器。318・319は坏蓋。318は口径13.6cm、器高4cm。口縁部は内唇に小さな段を作り体部との境に稜を形成する。319は天井部にヘラ記号がある。320・321は坏身。320は口径11.2cm。口縁部は反りぎみに内傾する。底部はヘラケズリ、内面はナデ。322は甕の底部。

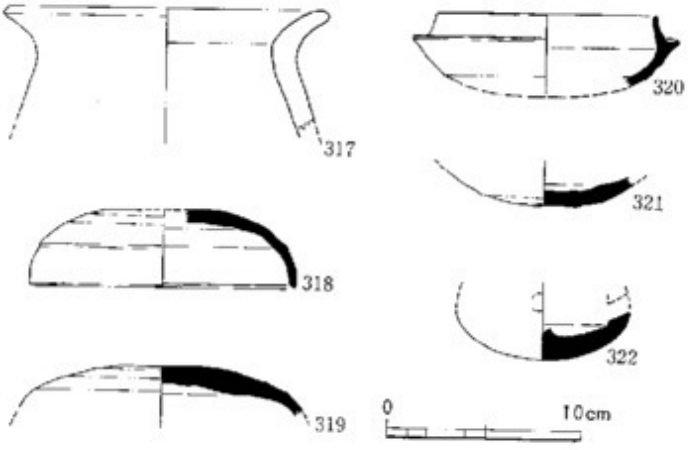


Fig. 105. 6号土壙墓出土土器実測図（1／4）

土　壙（SK）

土壙は丘陵尾根と緩斜面上で7基を検出した。これらの土壙は散漫な分布状況を示すが、竪穴住居跡群に隣接して占地してあり有機的に繋がりをもっていたものと推し量られる。しかしながらその機能については定かではない。また、調査時の混乱で所在の明らかでない土壙があり、その遺物はピット等の遺構と同章で扱った。

1号土壙（Fig.106）

東側緩斜面の上段に立地する土壙で、2号建物跡のすぐ西に隣接している。平面形は楕円形プランを呈し、短軸は100cm、長軸は約230cmになろう。壁面は緩傾斜して立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。深さは約10cm。覆土中からは須恵器や土師器片のほかに滑石製白玉とミニチュア土器等が出土した。

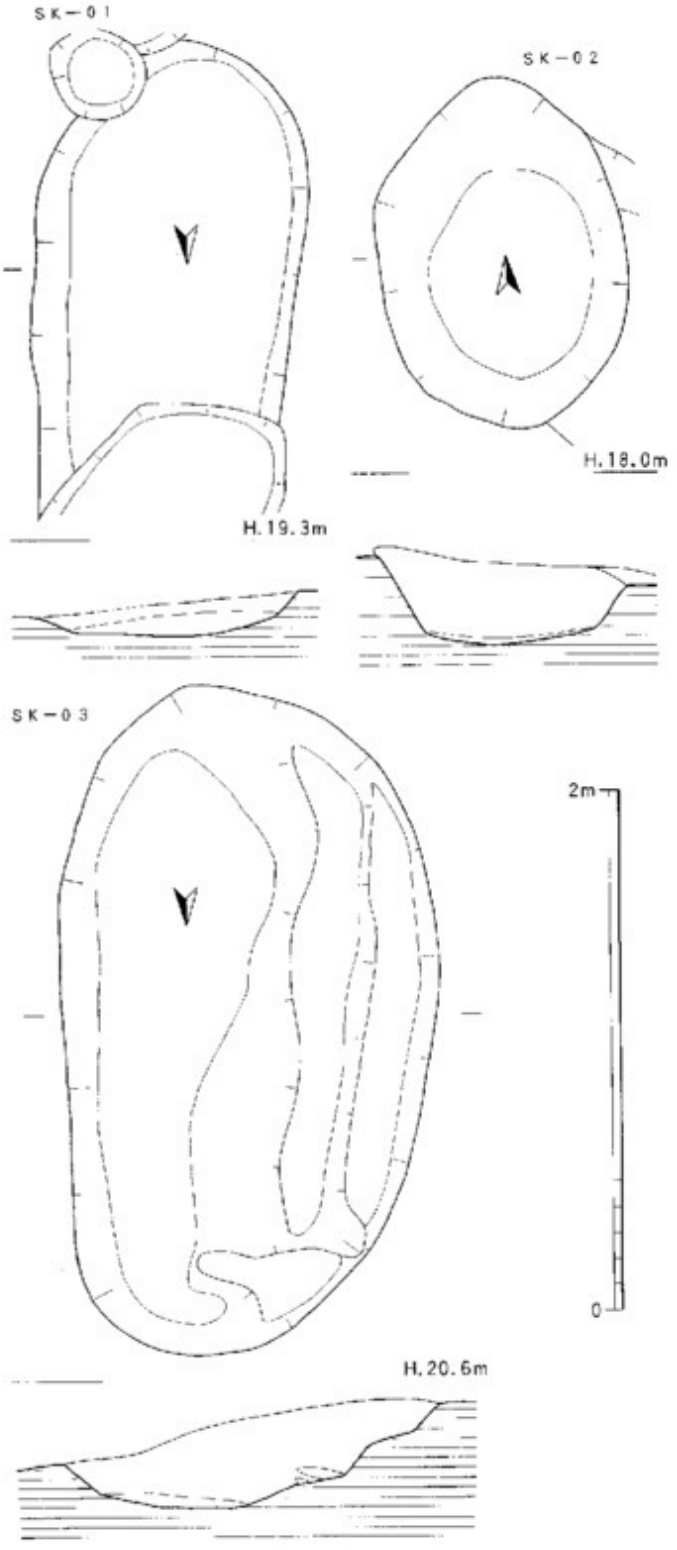


Fig. 106. 1～3土壙実測図（1／30）

出土遺物(Fig.107. PL.29·30)

323は須恵器の坏身である。口径は12cm、器高は4.3cm。受け部はほぼ水平に張り出し、内傾する立ち上がりは肥厚する。調整は口縁部～体部がヨコナデ、底面はヘラケズリ、内底面はナデでタタキ目痕がわずかに残る。胎土は精良で淡灰青色。

324・325はミニチュア土器の底部である。324・325ともに底径は1.4cm。耳栓状の脚部に盃状の体部がつく台付鉢になろうか。整形は押圧ナデ調整。胎土は良質で小砂粒を含み、色調は赤褐色。

326は滑石製の臼玉である。径は5.8㎜、厚さは3～3.5㎜、孔径は2㎜。整形、研磨はやや粗い。淡緑色。

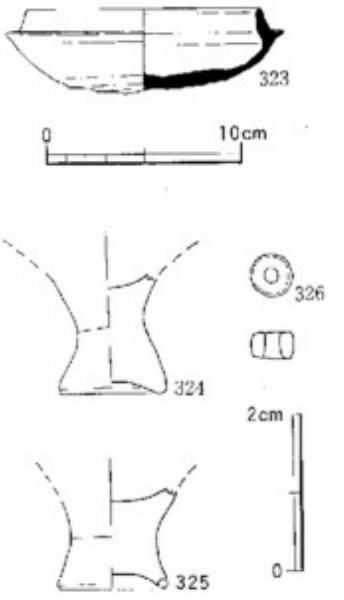


Fig. 107. 1号土壙出土土器・玉実測図（1／2・1／1）

2号土壙（Fig.106）

東側緩斜面北側の中段に立地する土壙で、11号住居跡と重複している。平面形は長軸136cm、短軸95cmの楕円形プランをなす。壁面は緩傾斜して立ち上がり断面形は浅い舟底状をなす。

3号土壙（Fig.106）

丘陵尾根の中央部東縁に立地する大型の土壙で、1号住居跡の東に位置する。平面形は長軸260cm、短軸148cmの楕円形プランをなし、南北に主軸をとる。東壁側には15～20cmのフラット面が2段ある。壙底は浅い円レンズ状をなす。遺物は土師器と須恵器片が出土した。

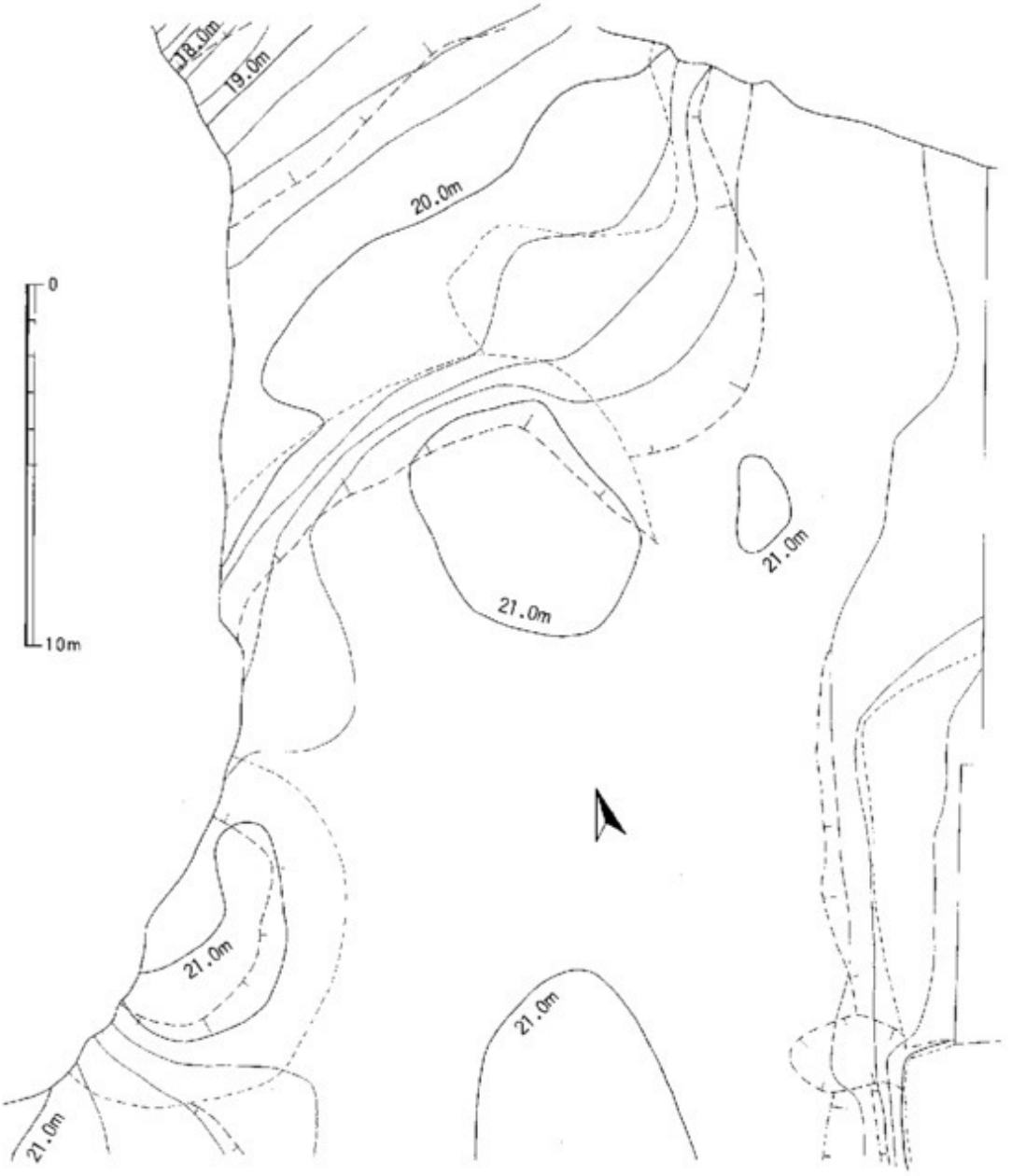


Fig. 108. 1～4号墳墳丘現況測量図（1／200）

古　墳（SO）

古墳は方墳3基と円墳1基の4基を検出した。古墳は丘陵北西部の丘陵が尾根から緩斜面へと移る丘陵の縁に弧状に占地する。この占地状況から推すと、既に消失した丘陵の北東部にも1～2基の古墳が存在した可能性もある。古墳のうち方墳は所謂低墳丘墳で、埋葬主体部の遺存するものは4号墳だけであった。円墳は方墳に後出して造営されるが、構築には既存の方墳をそのまま取り込んで、方墳の墳丘上に築いている。古墳の四周に巡らす周溝は丘陵側が浅く斜面側が深く掘り込まれ、平野側から望む景観を強く意識して占地、造営されたものであろう。

1号墳（Fig.109.　PL.23）

1号墳は丘陵北西の上縁に立地する円墳で、3号墳の真上にある。調査前は墳頂部に21mの等高線が巡り、北東側に70～80cmの段がL字状にあるだけで墳丘としての景観はなかった。

墳丘は3号墳の墳丘をそのまま整形して構築され、周溝を円形に巡らす。墳丘の直径は12～13mの円形で、溝幅を含めた全長は15mになる。周溝は幅2～2.5mの緩やかなU字状をなし、更にその溝底の中央に幅50cm、深さ15～25cmの細い溝を掘り込んでいる。溝底のレヴェルは東西断面が20m。南北断面は後背の南が20.1m、前面の北は19.25mで約90cmの比高差が

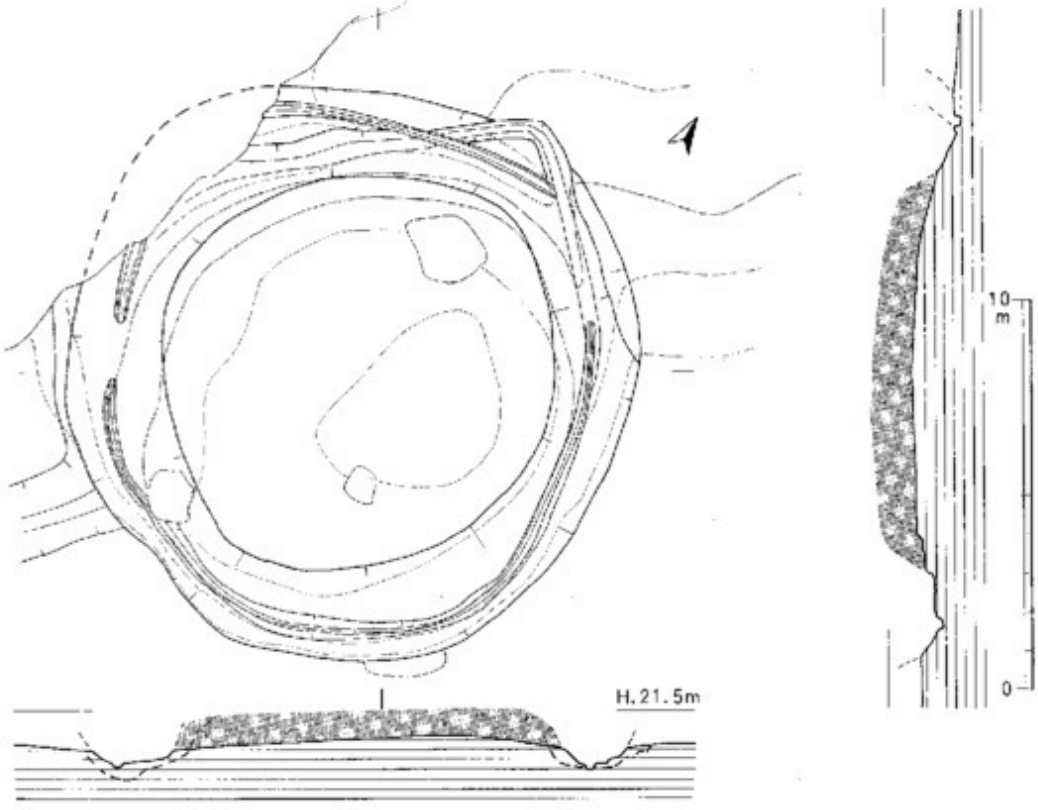


Fig. 108. 1号墳地山整形測量図（1／200）

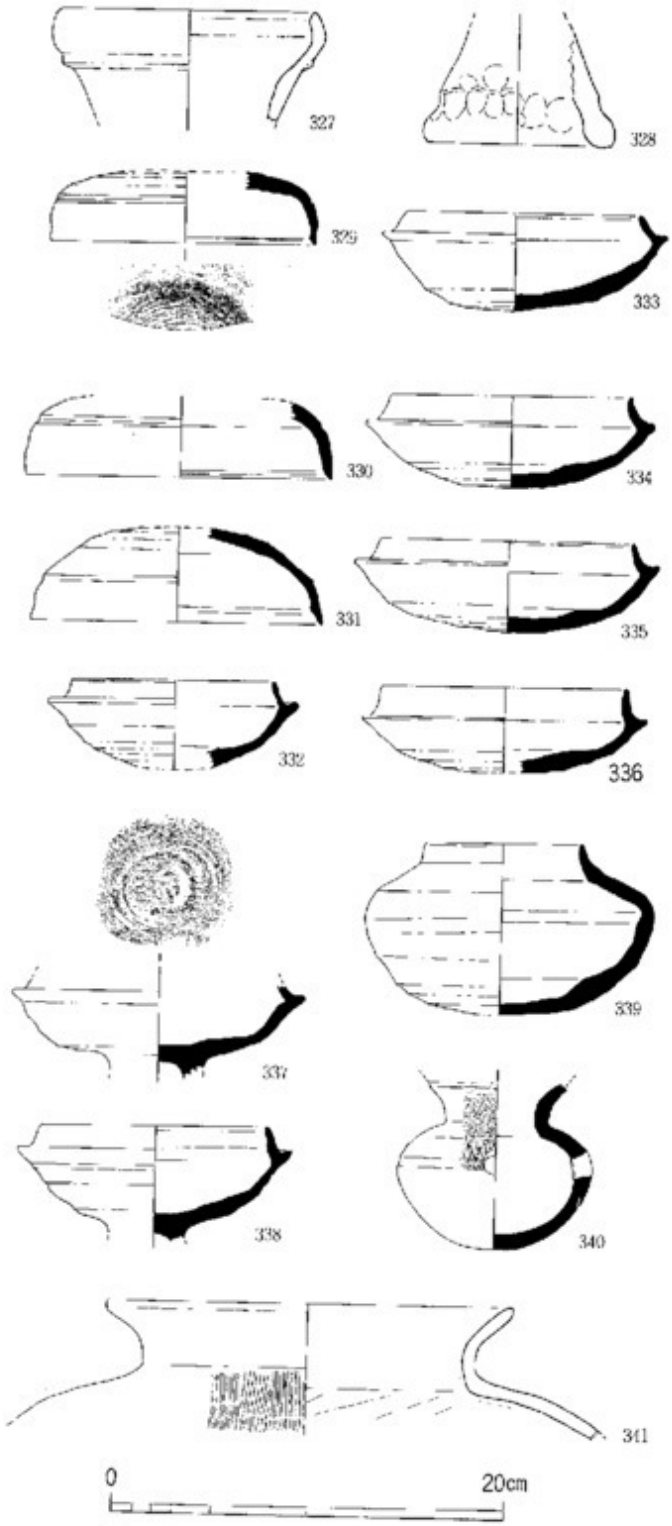


Fig. 110. 1号墳出土土器実測図（1／4）

ある。これに復原した墳丘を加えると斜面側からの見かけの高さは2mを越えるものになり、平野から見上げると墳丘は更に大きく見える。古墳の占地にあたっては平野からの景観を強く意識したものだろう。周溝内からは鉄鏃や土師器、須恵器等が出土している。

埋葬主体部は墳丘の流失により確認できなかった。

出土遺物（Fig.110·111.　PL.29）

327・328は弥生土器。327は袋状口縁の壷で、口径13cm。袋状の口縁端部は内傾し、直下にシャープな三角凸帯が巡る。凸帯部がヨコナデのほかはナデ調整。胎土は精良で若干量の細砂粒を含む。328は底径9.2cmの器台。脚部はストレートにのびる。内外とも押圧ナデ。胎土は砂粒を含む。

329～340は須恵器。329～331は坏蓋。329・330は口縁部は直口して立ち上がり、内唇に小さな段を作る。体部との境に横回線を巡らし、天井部は平坦になる。口径は329が13.6cm。330は15.8cm。331は口径15cm、器高4.8cm。口縁内唇は大きく抉り込

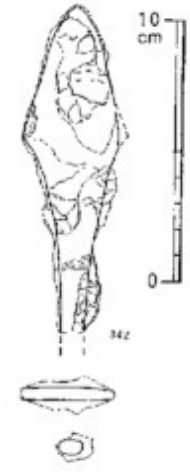


Fig. 111. 1号墳出土鉄器実測図（1／3）

んで段を作り、体部との境に稜を作る。天井部は丸みを帯びる。天井部はヘラケズリ、内面はナデ。332～336は坏身。口縁部がストレートに内傾するもの(332・333)と端部が直口ぎみに立ち上がるもの(334～336)がある。口縁部～体部上半がヨコナデ、体部下半はヘラケズリ、内底面はナデ。口径は332が10.4cm、333が12.8cm、334が12.4cm、335が13.1cm、336が12.6cm。337・338は高坏。337は内底面にタタキ目が残る。338は口径11.4cm。内傾する口縁部は中位で屈曲して直口する。体部はヘラケズリ、内面はヨコナデ、内底面はナデ。339は小型の壺で、口径7.9cm、底径8.8cm。扁球形の胴部は肩が強く張り、口縁部は小さく内傾する。内面がヨコナデ、胴部下半はヘラケズリ。340は甕。頸部は中位で屈曲して稜を形成する。扁球形の胴部上位には上方から円孔を穿つ。頸部下半と胴部上半には貝殻状工具による波状文が巡る。頸部～胴部上半はヨコナデ、下半はナデ調整。胎土はいずれも精良で細砂粒を含み、灰色～灰青色。

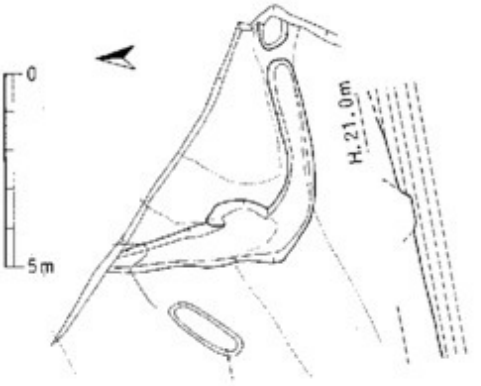


Fig. 112. 2号墳地山整形測量図(1／200)

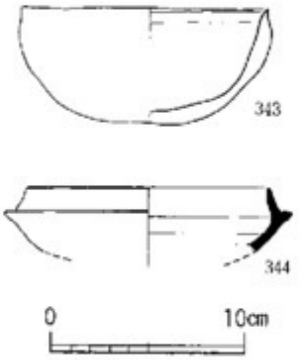


Fig.113 2号墳出土土器実測図 (1/4)

341は土師器の壺。口径は20.6cm。口縁部は大きく外反し、体部は球形をなす。胴部は内面がヘラケズリ、外面は縦ハケ目。

342は鉄鏃で、茎と関の一端を欠く。現長12.5cm、関幅は4cm。

345は無茎凹基の石鏃で、横断面は厚い凸レンズ状をなす。身幅は1.6cm。黒曜石製。

2号墳 (Fig.112. PL.23・24)

2号墳は丘陵の北東端に位置する低墳丘の方墳で、南西側の周溝を残して大半が消失している。墳丘は地山整形によって周溝を造り出し、墳丘上と周溝の比高差は60cm程ある。周溝は溝幅70～100cmで断面形は浅い逆台形をなし、南側周溝には幅の狭い陸橋がつく。墳丘は遺存する周溝から一辺が6～7m、溝を含めた全長は8～9mに復原されよう。

出土遺物 (Fig.113・114. PL.29)

343は土師器の鉢。口径12.8cm、器高は6cm。体部は半球形をなし、口縁部は上方に細く摘み上げる。内外ともナデ調整。胎土は砂粒を含み、内面が淡褐色、外面は淡赤褐色。

344は須恵器の坏身で、口径は12.6cm。立ち上がりはストレートに内傾する。調整は内底面がナデの

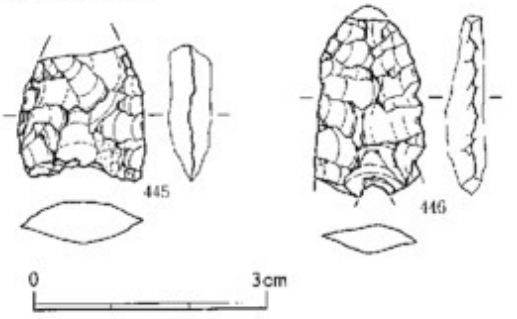


Fig. 114. 1・2号墳出土石器実測図 (1／1)

ほかはヨコナデ。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母微細粒を含む。灰色。

346は安山岩製の無茎凹基石鏃である。先端部と茎端部を欠き、基部の抉り込みは深い。

3号墳

(Fig.115. PL.23・24)

3号墳は丘陵の北西縁に立地する方墳で、1号墳の真下にある。南側周溝は4号墳に切られている。墳丘は地山整形によって造り出し、四周には方形に周溝を巡らす。墳丘は東西が21m、南北が18mの方形をなし、周溝を含めた全長は一辺が27～28mになろう。周溝の幅は2.2～3mのU字状をなす。溝底のレヴェルは後背面の東側周溝が20.4m、前面の西側周溝が19.3mで平野からの景観を意識した占地と構造をなす。墳丘の消失が甚だしく埋葬主体部は明らかでないが、盛土内からは粘板岩質の板材片が出土しており、箱式石棺の可能性もなくはない。

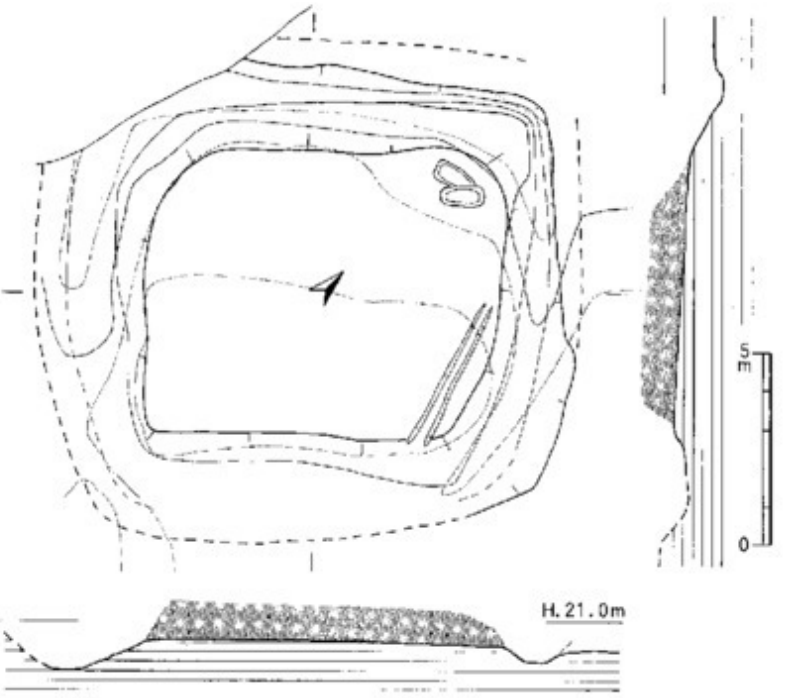


Fig. 115. 3号墳地山整形測量図 (1／200)

4号墳 (Fig.116・117. PL.23・24)

4号墳は丘陵中央部の西縁に立地する低墳丘の方墳で、北西側は宅造時の削平によって消失している。墳丘下には50・54号甕棺墓があり、南東側の周溝上には4号住居跡がある。調査前は墳頂部に21mの等高線が弧状に巡り、東側で10cm、南側の斜面が60cmの比高差で緩やかに傾斜し、僅かな高まりが観られる程度であった。

古墳は墳丘を地山整形で造り出し、四周に周溝を巡らす。周溝は北側は6m、東側が13.5m、南側

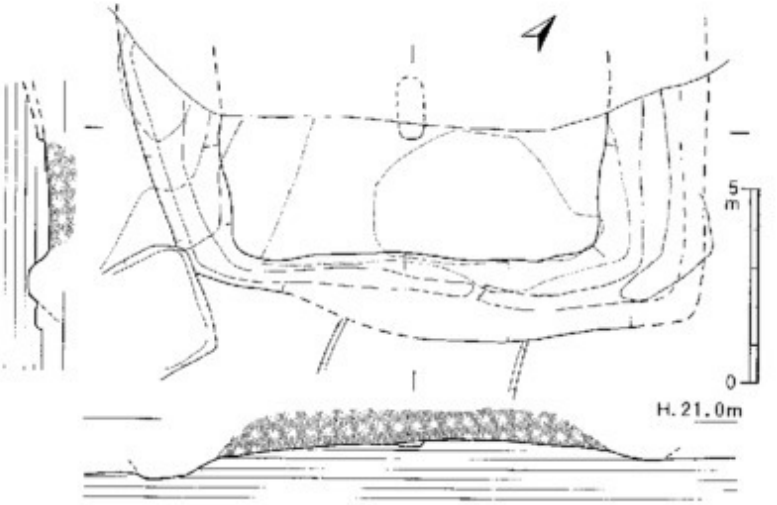


Fig. 116. 4号墳地山整形測量図 (1／200)

が7mあり、墳丘は一辺が10mの方形で、溝を含めた全長は一辺が13～15mにもなろう。周溝は幅2～3m、溝底幅0.5～1mの逆台形状のU字溝で、溝底のレヴェルは南東側周溝が20.1m、南西側周溝が19.4mを測る。後背面の周溝から復原した墳丘までの比高差は50～80cmであるが、斜面側からの見かけの高さは2mを越えるものと推察され、平野から見上げたときは実際よりも大きく見える。つまりは平野から望む景観を意識して丘陵の縁辺に占地したものである。後背面の南東側周溝の溝底には土師器の高坏や小型丸底壺が一括して供献されている。

埋葬主体部は土壙墓である。土壙墓は墳丘のほぼ中央部に東西に主軸をとって位置する。短軸幅は60cmで東小口側の30cmが遺存していたが、座面にあるために調査は断念した。土壙内には全面にベンガラが拡がっていた。

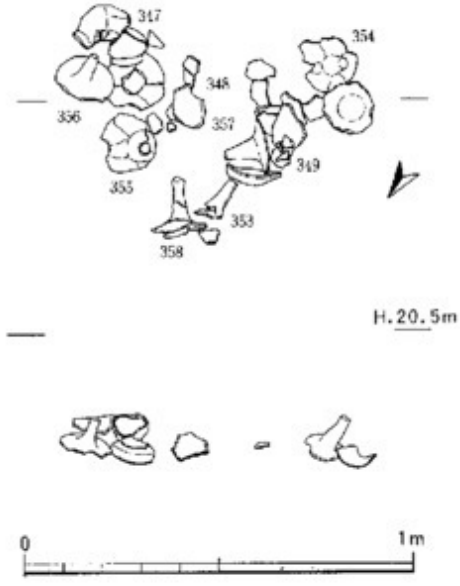


Fig. 117. 4号墳周溝内遺物出土状況図（1／20）

出土遺物（Fig.118. PL.29）

347～361は土師器。347・348は小型丸底壺。347は口径10cm、器高9.8cm。体部は扁平な半球形をなし、口縁部は内弯ぎみにのびる。口縁部はヨコナデ、体部は外面が縦ハケ目後にナデ、内面はナデ。348は口径13cm。口縁部はストレートに長くのびる。349は壺。体部は半球形をなす。外面は横方向の研磨、内面はナデ。350・351は甕。350は口径16.6cm。口縁部は小さく外反する。調整は外面がナデ、内面はケズリ。351は口径20.8cmで、口縁部は「く」字状に外反する。胴部内面は粗いケズリ、外面はナデ、口縁部はヨコナデ。352～358は高坏。352は口径17.8cm。353は口径17.6cm。坏部はストレートに外反し、底部との境には屈曲した段を形成する。355は口径11.2cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、中位に浅い横凹線状の弱い段を作る。脚部は内弯ぎみに細長くのび、裾部は屈曲して大きく外反する。353～356は脚部下位に2孔一対の円孔を穿つ。坏部は丁寧な研磨状のナデ、352は外面が細かい縦ハケ目。脚部は丁寧なナデ仕上げ。いずれも胎土は良質で細～小砂粒を含み、明褐色～赤褐色。359・360は小型の器台。脚部は359が内弯ぎみ、360はストレートに開く。内外面ともナデ。361は12.8cmの鉢。口縁部は半球形の体部からストレートに開く。内外ともナデ。胎土は良質で、赤褐色。

362～367は須恵器。362は坏蓋で、口径は12.8cm。口縁部は直口して立ち上がり、平坦に整えた端部は内外に小さく摘み出す。体部との境には強い稜を形成する。調整は内底面がナデの外はヨコナデ。363～366は坏身。363・364は口縁部が内傾し、端部は小さく直口する。365・366はストレートに内傾する。調整は内底面がナデ、外面はヘラケズリ。363は内底面にタタキ目が残る。口径は11～12.8cm、器高は4.1～4.8cm。367は口径11cmの高坏。口縁部は小さ

く外反し、体部中位には1条の横凹線が巡る。体部下半はカキ目調整。いずれも胎土は精良で少量の砂粒を含む。色調は灰色～濃灰色。

368は弥生土器の器台。口径8.8cm、底径10.9cm、器高18.3cm。受部は小さく外反し、細い筒部からのびた裾部は短くストレートに開く。調整は粗い押圧ナデ。胎土は砂粒を含み、赤褐色。

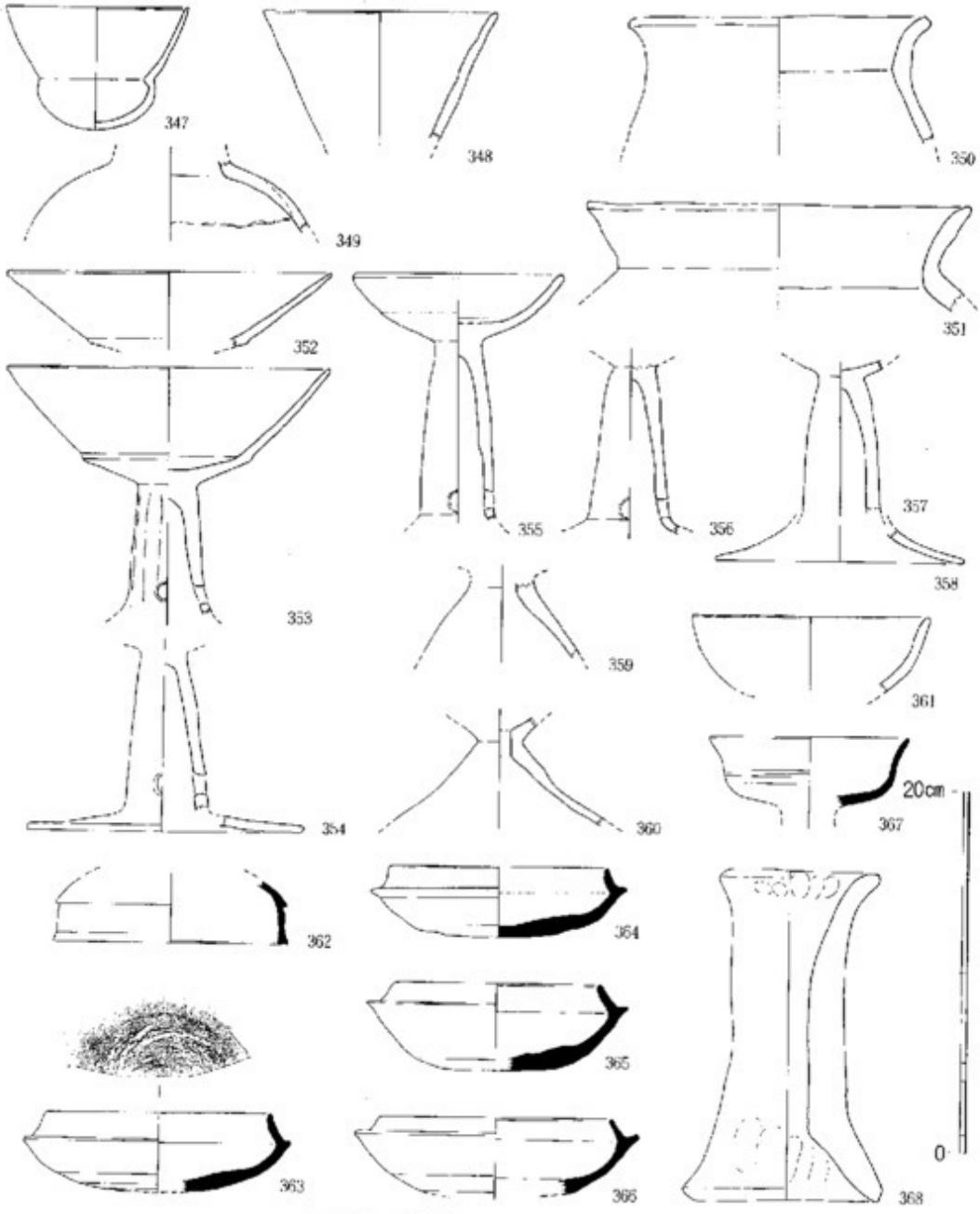


Fig.118 4号墳出土土器実測図 (1/4)

4．中世の調査

中世の遺構としては、土壙墓1基、火葬墓2基と集骨墓10基の合わせて13基からなる墳墓遺構を検出した。時期の明らかなものは3号土壙墓を除いてはないが、遺構の形状や骨片の埋納状況等から中世のものとして考えた。これらの墳墓は丘陵の尾根上に列して占地するが、やや中央部にまとまる傾向がある。墳墓のほかには明らかに中世と特定されるような集落に伴う遺構はない。このことからすれば中世には集落の拠点は平野部へと移行し、丘陵上は墳墓域としてわずかに利用されるに過ぎなくなり、墳墓の途絶以後はまったくの原野と化してしまう。

土　壙　墓（SR）

中世の土壙墓は1基を検出した。土壙墓は丘陵の尾根上に集骨墓群に隣接してあり一群をなして墓域を構成する。土壙墓は火葬墓や集骨墓に比べてかなり手厚く埋葬されているが、その埋葬形態の相違が何に起因するかは明らかではない。

3号土壙墓（Fig.120．PL.25）

丘陵尾根の中央部に集骨墓群の東に隣接して立地し、1号住居跡と5号土壙墓を切っている。平面形は長軸129cm、短軸57cmの長方形プランを呈し、N－20.5°　Eに主軸方位をとる。壁

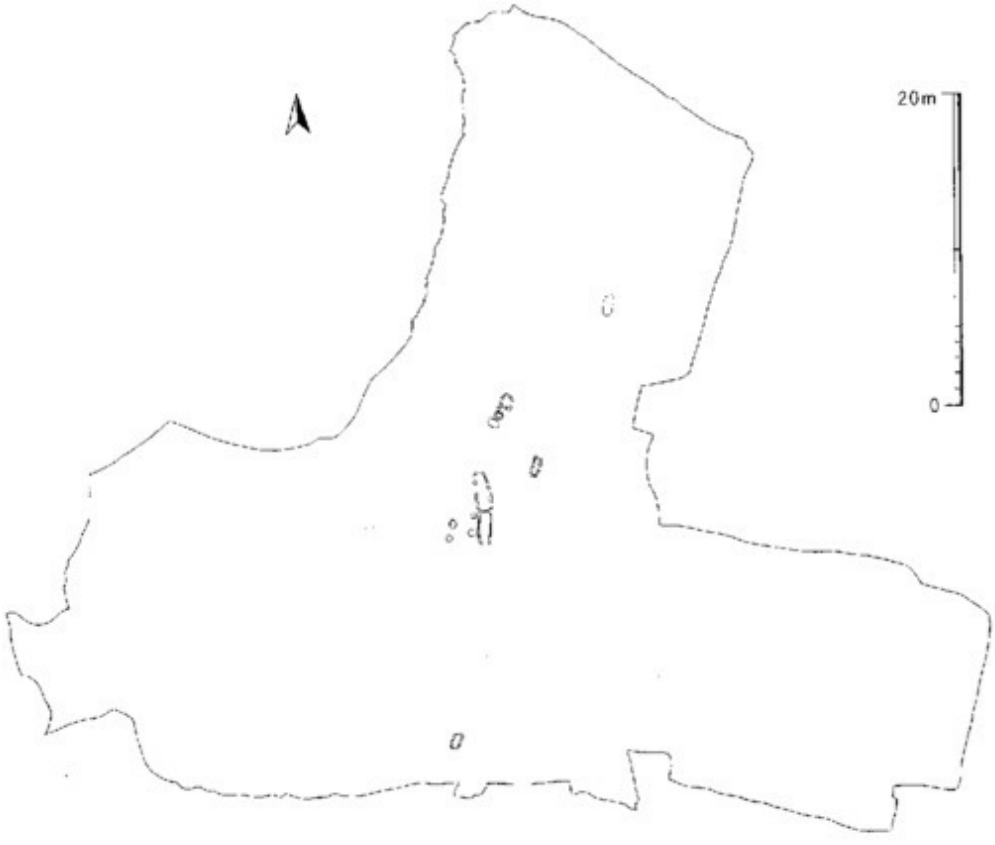


Fig. 119. 中世の遺構配置図（1／500）

面は垂直に立ち上がるが、南側小口は初めに緩く掘り込んだ後に垂直に掘り下げている。壙底は平坦で、その10cm程上には頁岩質の平石が2枚敷かれ、その上面には20×40cmの頁岩と花崗岩の転石6個が並んで折り重なっていた。このうち下面の平石上からは南北の小口に沿って鉄釘がまとまって出土し、北側の小口壁際からは釘と壁面とに挟まれた状況で6枚の土師器の小皿が出土した。これらから推察すると、本土壙墓は壙底に平石を敷いてその上に木棺を埋置し、その上面に墓標的な転石を敷き並べたものと考えられる。また、北壁際の土師器小皿はその状況からして木棺外に副葬されたものであろう。

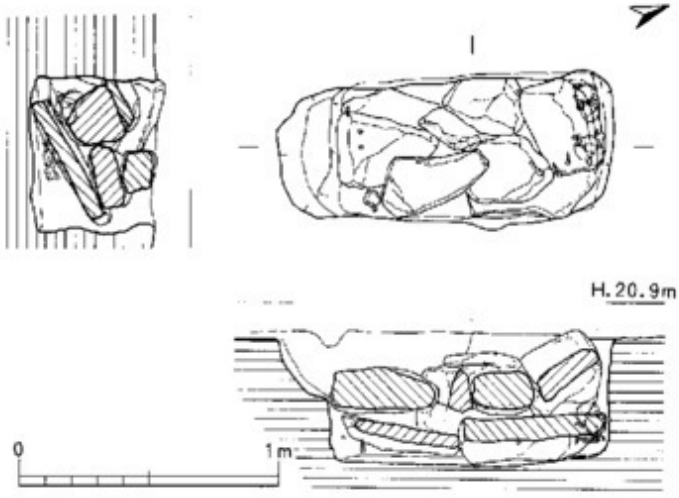


Fig. 120. 3号土壙墓実測図（1／30）

出土遺物（Fig.121・122. PL.30）

369～371は土師器の小皿である。口径は8.2～8.3cm、底径は6.6～7cm、器高は0.9～1cmである。調整は口縁部がヨコナデ、内底面はナデ。368は糸切り痕が残る。胎土は良質で微細砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。赤褐色。

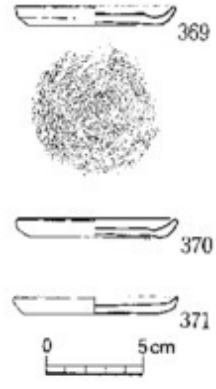


Fig. 121. 3号土壙墓出土土器実測図（1／4）

372～389は鉄釘である。釘の長さは5.2cm（380）～7.4cm（373）で、大きさから6cm未満のもの（377・378・380）と7cm位のもの（372～376）に大別される。釘には棺材が錆着しているために頭部の形状は明らかではないが、圧延して鍵状に折り曲げるものである。また、錆着した棺材の木目には、上下板材とも釘に対して横方向に組合わせるもの（378・384・385）。上下板材とも横方向に組合わせるが、木目がずれるもの（380・383）。上板材は横方向で、下板材は釘に平行に組合わせるもの（372・376・377・381）に3大別され、棺材の組合せも検討できよう。断面形は方形～長方形をなす。

火　葬　墓（SX）

丘陵の尾根上で2基の火葬墓と10基の集骨墓とを検出した。これらは中世の墳墓として尾根上に並んで墓域を構成するが、集骨墓は土壙墓とまとまって一群をなし、火葬墓はこの一群とは南北にやや隔絶して立地している。このことは火葬墓が集骨墓等とは明らかな意識のもとに占地されたと考えられよう。また、火葬墓は土壙内で火葬したものを、集骨墓は火葬された骨片を土壙内に埋納し、上面に礫石を墓標的に置いたものを指すが、一括して取り扱った。

1号火葬墓（Fig.123. PL.25）

丘陵尾根の南端に立地し、16・17号住居跡を切っている。平面形は長軸94cm、短軸57cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN－25.5°－Eにとる。壁面は垂直に立ち上がり、壙底の中央には相似形の掘り込みが2段あり、合わせて3段掘りの構造をなす。このうち1段目の壙底上には20×40cmの花崗岩の転石が3枚敷かれ、側壁との間には小振りの転石が詰められていた。敷石上と同レヴェル上の壁面は焼けて赤変し、壁際や敷石の間からは炭片と骨片が検出された。

2号火葬墓（Fig.123. PL.25）

丘陵北部の1号墳の周溝上に掘り込まれた火葬墓で、平面形は短軸63cm、長軸は140cm程の長方形プランになろうか。壙底から10cm程上に20×40cmのやや扁平な花崗岩の転石が3枚敷かれていた。東側壁と転石下は赤く焼け、壙内には焼土粒と炭片の混入した灰層が堆積していた。これらから推察すると2号火葬墓は1号火葬墓と異なり、土壙内で火葬した後に墓標的な転石を敷き並べたものと考えられる。主軸方位はN－13.5°－E。

3号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵尾根の中央部に立地する集骨墓で、南小口側は4号墓に切られている。墓壙は長軸260cm、短軸98cmの楕円形プランをなす。壙内には西側壁に沿って拳大の転石が散漫に散らばり、その縁辺からは骨の細片がわずかに検出された。

4号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵尾根の中央部に立地する集骨墓で、北側小口部は3号墓を切っている。墓壙は長軸218cm、

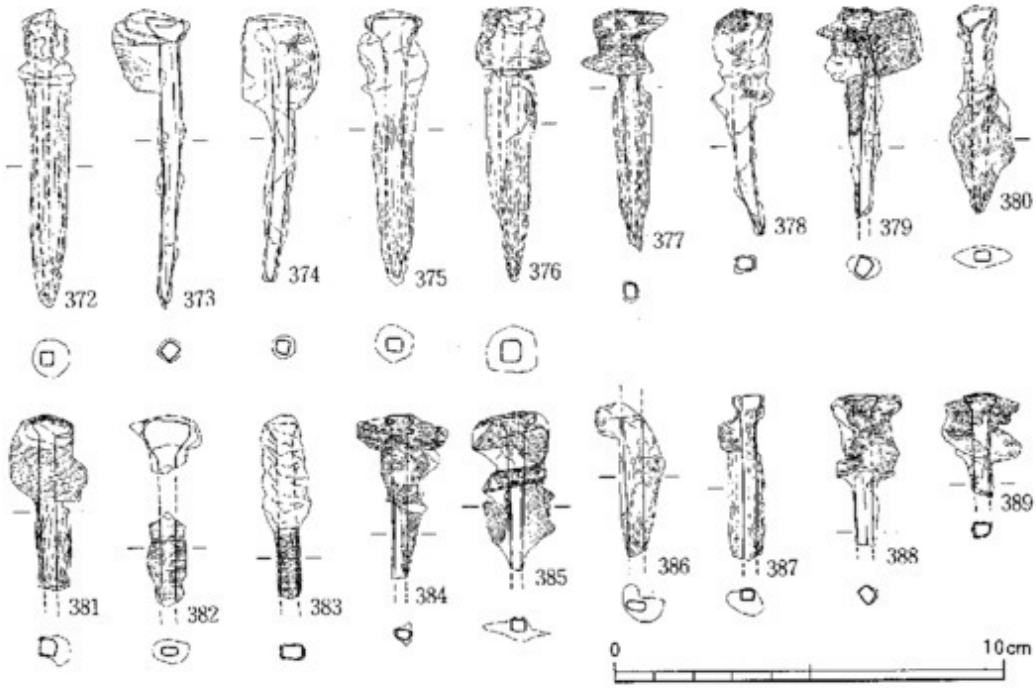


Fig. 122. 3号土壙墓出土釘実測図（1／2）

短軸90cmの楕円形プランを呈し、N－2°－Eに主軸方位をとる。墓壙上には5～10cm大の小石がやや密に拡がり、小石下からは骨の細片がわずかに出土した。

5号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵中央の東寄りに立地する集骨墓で、7号墓の西に位置する。墓壙は直径が40cmの浅い円形のピット状をなす。墓壙内には7～9個の小石が置かれていた。この小石下と墓壙の北側には骨の細片がまとまって拡がっていた。

6号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部にある集骨墓で、5号墓のすぐ北に位置する。墓壙は44×63cmの楕円形プランをなす。墓壙の西壁側には拳大の転石が2個配され、壙底の中央部からは骨片がまとまって検出された。

7号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部にある集骨墓で、4号墓のすぐ西に位置する。平面形は明らかでないが、浅い凹レンズ状の窪みの周囲に12～15個の小石を弧状に配し、配石下の中央から骨片が出土した。

8号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部に位置する集骨墓で、4号墓と6号墓の間にある。墓壙は30～35cmの円形プランをなす。浅い凹レンズ状の墓壙には小石が配され、その石下からは骨片が検出された。

9号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部に位置する集骨墓で、10～12号墓と一群をなす。墓壙は一辺が25～30cmの方形プランをなし、壙底からは骨片がまとまって出土した。この墓壙は10号墓の浅い1段目の墓壙内に位置している。

10号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部にある集骨墓で、一群を構成する9～12号墓中で

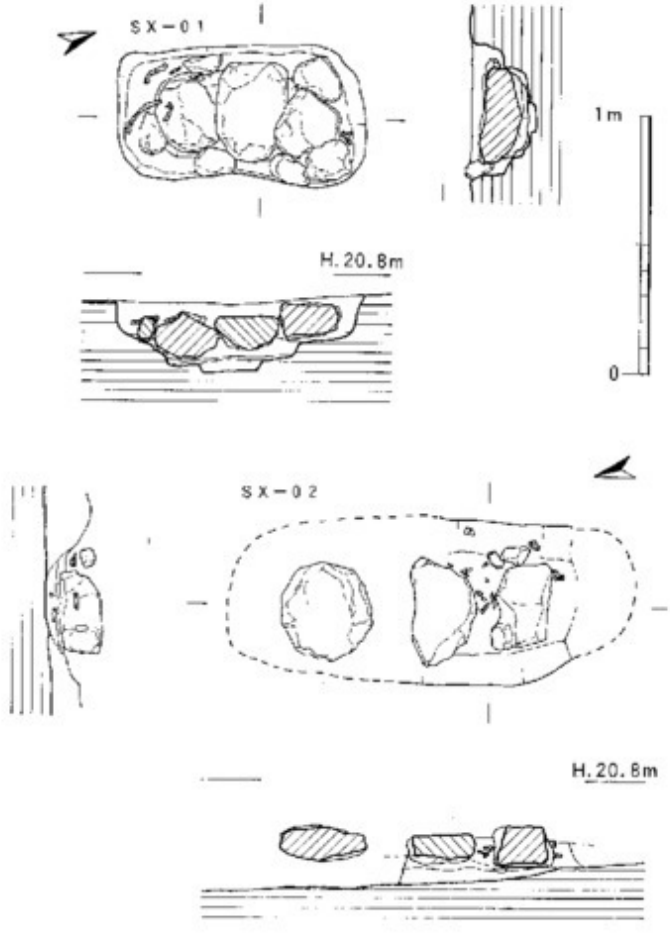


Fig. 123. 1・2号火葬墓実測図（1／30）

最も北に位置し、南側は11号墓に切られている。墓壙は初めに115～120cmの方形の竪穴を掘り、その北東に偏して一辺が約80cmの方形の竪穴を掘り込んでいる。2段目墓壙の中央部からは骨片がまとまって検出された。2段目墓壙の西壁上には25cm大の扁平な転石が置かれている。

11号火葬墓（Fig.124. PL.25）

丘陵の中央部にある集骨墓で、9～12号墓と一群をなし、北側は10号墓を切っている。墓壙は一辺が55cmの方形プランをなし、その中に一辺が35cmの2段目の墓壙を掘り込んでいる。2段目の墓壙の壙底からは骨片が検出され、1段目の墓壙の南壁側には転石が配されている。

12号火葬墓（Fig.124. PL.25）

11号墓の南にある。50×75cmの楕円形の墓壙内に転石を配し、石下から骨片が出土した。

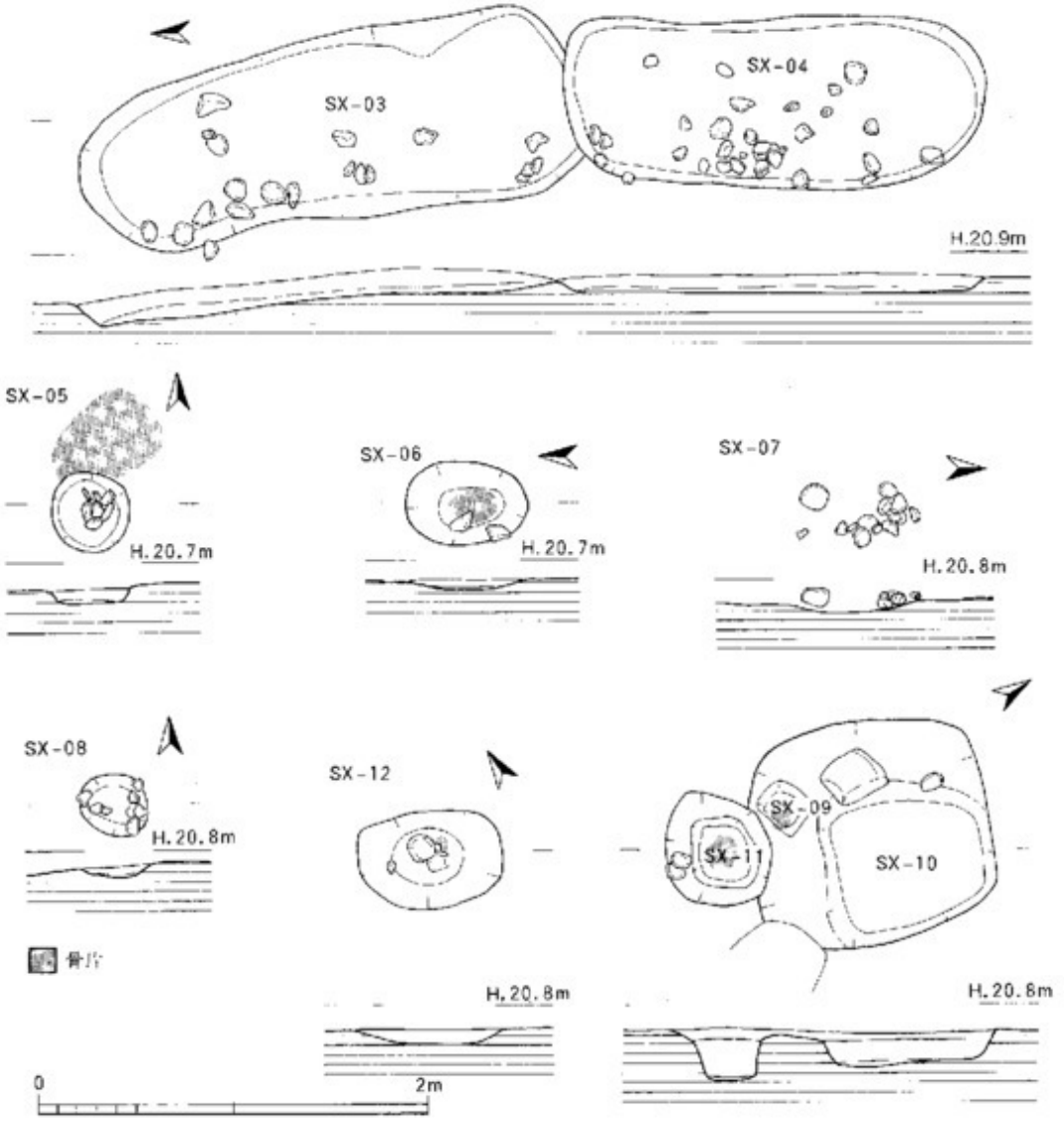


Fig. 124. 3～12号火葬墓実測図（1／40）

5．その外の遺構と包含層出土の遺物

調査では弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡や甕棺墓等のほかにピットや包含層からも遺物が出土している。遺物は削平された甕棺片や土師器、須恵器で30号住居跡出土の高台付の土師器坏を除いては古墳時代を降るものはない。これは丘陵上が古墳時代以降は中世に墳墓地が営まれるほかには機能しなかったことの証左となろう。また、調査時の混乱から遺物がありながらも遺構を特定できない土壙が4基（4～7号土壙）あり、ここでピット出土の遺物と一括して取り扱った。これらの土壙は出土した遺物から、4・7号土壙は弥生時代、5・6号土壙は古墳時代に比定されよう。

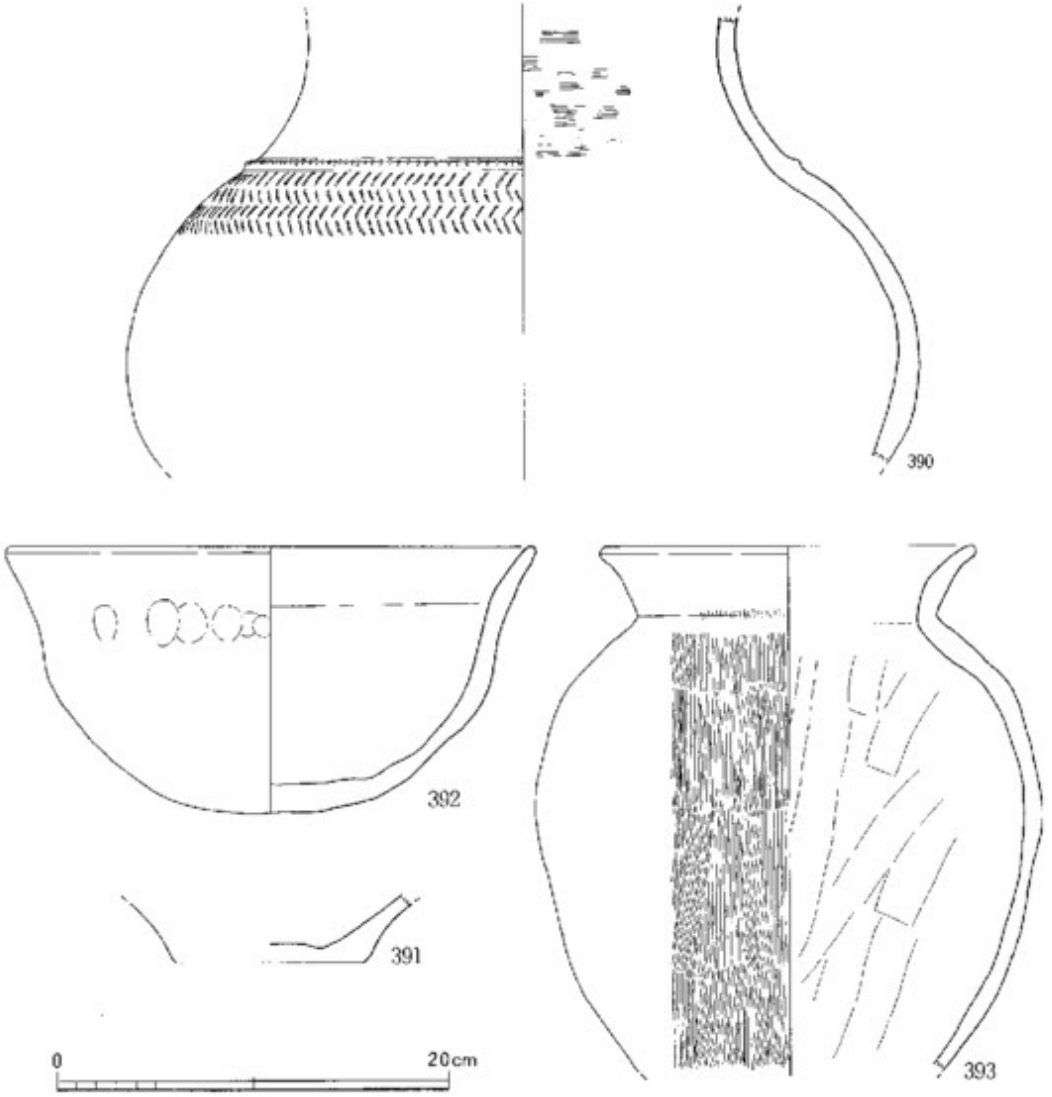


Fig. 125. 土壙・ピット出土土器実測図（1／4）

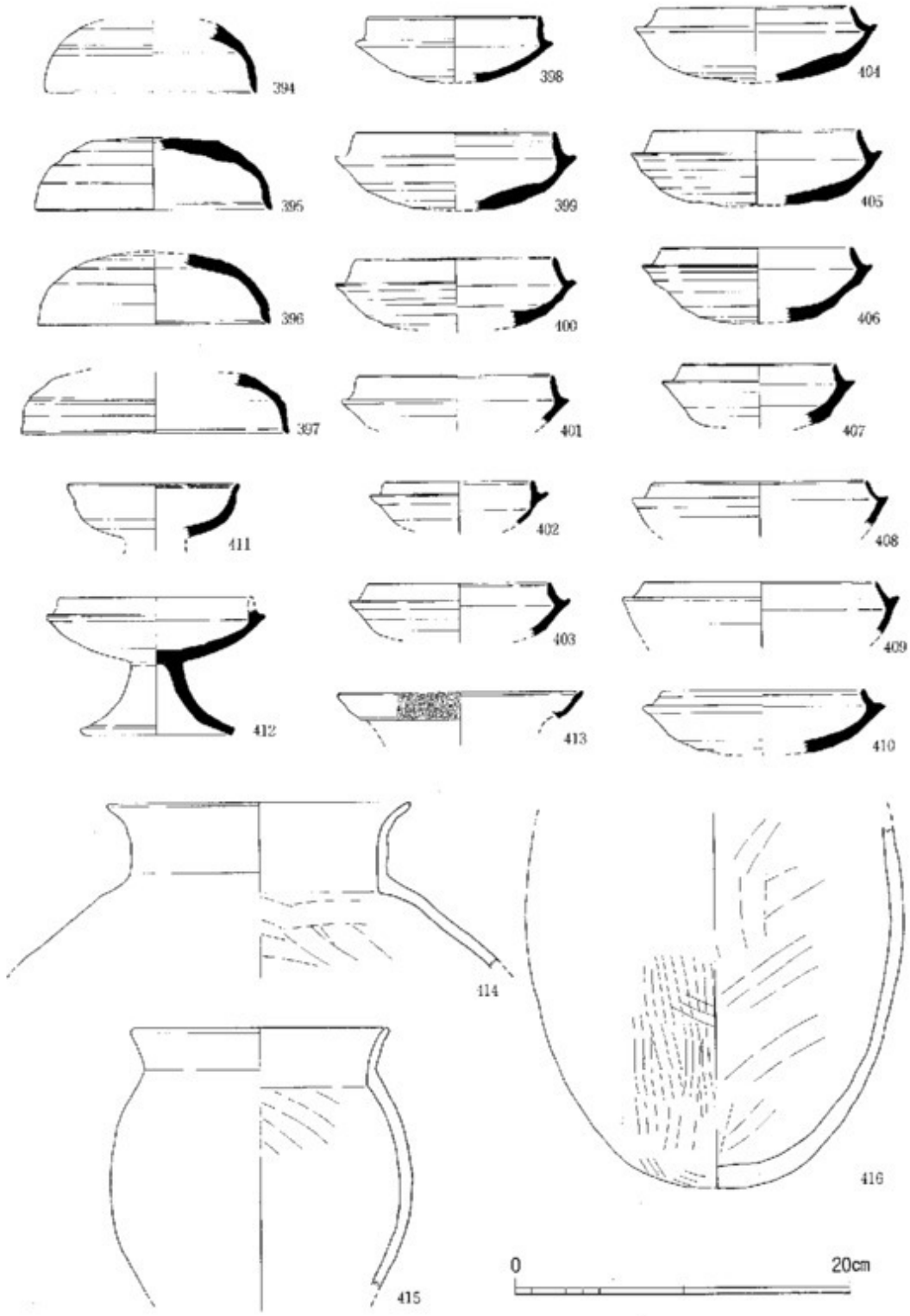


Fig.126 包含層出土土器実測図1 (1/4)

土壙、ピット出土の遺物

(Fig.125)

390は4号土壙出土の弥生土器壺である。扁球形の胴部と頸部の境には刻みHを施した三角凸帯が巡り、その下には貝殻施文による無軸の羽状文を2段に配している。外面は研磨状の丁寧なナデ、内面はナデ調整。胎土は石英と長石の砂粒を多く含み、色調は淡褐色。391は5号土壙から出土した弥生土器の壺底部で、底径は9.8cm。胴部は反りぎみに立ち上がる。胎土は石英、長石砂を多く含む。色調は内面が灰褐色、外面は淡褐色。392は6号土壙出土の土師器鉢である。口径は27cm、器高は13.5cm。体部は半球形をなし、口縁部は小さく屈曲してストレートに外反する。内外面ともナデて調整するが、器表の凹凸が著しい。胎土は石英砂を多く含み、色調は淡褐色。

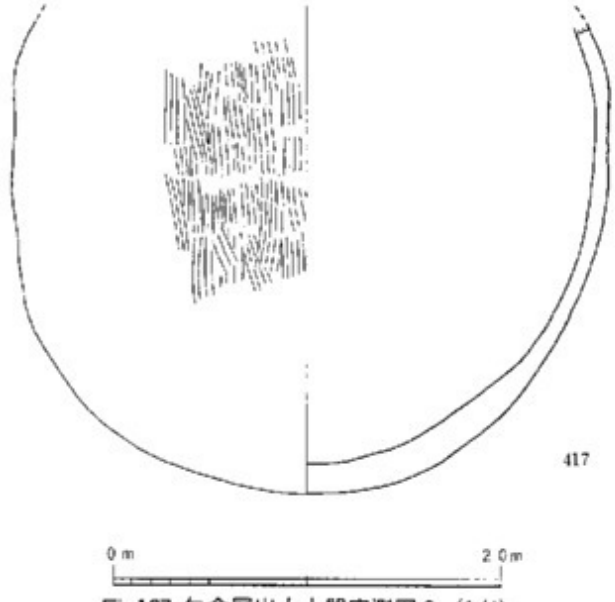


Fig.127 包含層出土土器実測図2 (1/4)

393はSP－45出土の土師器甕である。口径16.8cm。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は倒卵形をなす。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面は粗い縦ハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は粗砂粒を多く含み、灰黄色～灰白色。

418はSP－09より出土した無茎凹基の石鏃である。裏面は基部の加工を除いて素材の剥離面を残している。横断面は蒲鉾状をなし、鏃長は2.05cm、身幅は1.6cmの黒曜石製。

包含層出土の遺物 (Fig.126～128)

394～413は須恵器である。394～397は坏蓋。394は口径12.4cm。口縁部はストレートに立ち上がり、体部との境には凹線状にナデて弱い段を作る。395は口径14cm、器高は4.3cm。直口する口縁部は端部が細く、内唇には段を形成する。天井部は平坦になる。396は口径13.8cm、器高は4.4cm。口縁部は内唇に小さな段を作り、天井部は丸みを帯びる。397は口径15.8cm。口縁部はストレートに立ち上がり体部との境には浅い横凹線を巡らせて弱い稜を作る。調整はいずれも天井部はヘラケズリ、内面はナデ。398～410は坏身。口縁部が直行するもの(398～402)と内傾して立ち上がるもの(403～410)があり、其々は口径の大きさによって9cm前後の小型品(402・407)、11～12cmの中型品(399～401・403～406)、13～14cmの大型品(408・409)に分けられる。調整は内底面がナデ、外面がヘラケズリのほかはヨコナデ。405と406の内底面にはかすかにタタキ痕が残る。411・412は高坏。411は口径10.1cm。体部は内弯ぎみに立ち上が

り、口縁部は内唇に小さな段を作る。内底部はナデ、外面はヘラ。412は底径が8.8cm。口縁部は受部から内傾して立ち上がり、脚部は短くラッパ状に開く。調整は坏部内底面がナデ、外面がヘラケズリのほかはヨコナデ。413は口径14.6cmの鉢。内弯して立ち上がる口縁部は内唇に段を形成し、外面にはヘラ描きの波状文を施文している。いずれの器種とも胎土は精良で微細砂粒を含み、色調は灰青色～濃灰色を呈する。

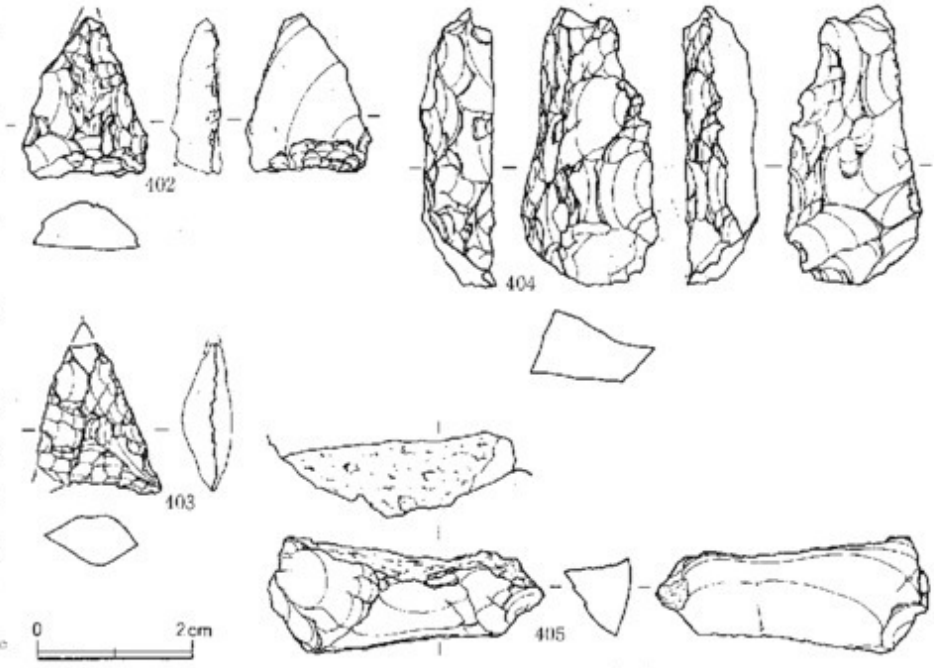


Fig. 128. 包含層出土石器実測図（1／1）

414～417は土師器である。414は口径18cmの壺。口縁部は短く直口する口縁部から小さく外反する。胴部は球形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ。胎土は粗砂粒を含み、淡明褐色。415～417は甕。415は口径15cm。口縁部は小さく外反し、胴部は倒卵形をなす。調整は外面がナデ、内面は上半がヘラケズリで下半はナデ。416は長胴の甕で、外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリ。417は球形の胴部をもつ甕で、外面はハケ目～ナデ、内面はナデ調整。いずれも胎土は砂粒を含み、淡褐色～褐色。

419～421は黒曜石製の石器である。419は無茎凹基の石鏃である。基部の一端と先端部を欠き、横断面は厚い凸レンズ状を呈する。420は両面加工の石器で、明確な尖端部を持たない。横断面は不整な四辺形状をなす。421は石核である。打面は平坦な原礫面を利用した単設打面となっている。長さ3.55cm、幅は1.5cm。

Ⅳ.おわりに

1963(昭和38)年、崩落した甕棺墓から副葬された細形銅剣が発見された。以来、飯倉唐木遺跡は早良平野における弥生時代社会の構造とその変遷を語る標準遺跡とされてきた。今回の発掘調査では、弥生時代の竪穴住居跡や甕棺墓と土壙墓、古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と方・円墳のほかに中世の土壙墓や火葬墓等を検出した。このうち弥生時代の甕棺墓には細形銅剣のほかに碧玉製管玉と素環頭鉄刀が副葬されおり、飯倉唐木遺跡の優位性を改めて印象づけるものであった。また、緩斜面を階段状に造成して構築した竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、平野に臨む丘陵上に占地する集落の在り様やその展開と消長を物語る。一方、時間的な差異は有りながらもこうした集落群を背景として低墳丘墓群は造営されたものであろう。これは前方後円墳群を頂点とする社会(支配)構造の確立が飯倉丘陵でも着実に進行していたことを物語る一証左となりえよう。ここでは発掘成果を整理して今後に備えたい。

1.弥生墳墓の構造と変遷

飯倉唐木遺跡は、弥生時代前期後半～中期後半にわたって造営された一大共同墓地としての姿を垣間見せてきた。その主体をなすものは54基の甕棺墓と36基の土壙墓であるが、既に消失している丘陵の北西縁や南縁を復原するとそれは相当の数になろう。これらの甕棺墓や土壙墓群は丘陵上や丘陵外縁の西側緩斜面上に立地するが、時期的にはその占地傾向がやや異なる。

丘陵上には、まず初めに土壙墓群が造営される。これらの土壙墓はそのほとんどが副葬遺物を持たない。そのために土壙墓の造墓時期は明らかではないが、Ⅰ類とした前期後半の甕棺墓に墓壙を削平されていることなどから前期中頃～後半にかけて営まれ、Ⅰ類の甕棺墓が埋納され始める前期後半には終焉を迎えていたものと思われる。これらの土壙墓はその主軸の向きによって東西方向の一群と、それに直交する南北方向の一群の二つのグループに分かれる。このうち東西方向に主軸をとる一群は、10基ほどが狭い丘陵頂部の方形(12～14m)の範囲にまとまって分布する。これに対して南北方向にむく一群は丘陵縁辺の緩斜面上に東西に其々に分かれて帯状に分布している。丘陵の東側には4基の土壙墓が、丘陵上縁に沿って1列に連なって一群をなしている。一方、丘陵頂部を挟んだ西側の緩斜面上には数基づつがコンターラインに沿って3～4列に階段状に連なって分布している。このような在り方の相違は、単に丘陵頂部と緩斜面と

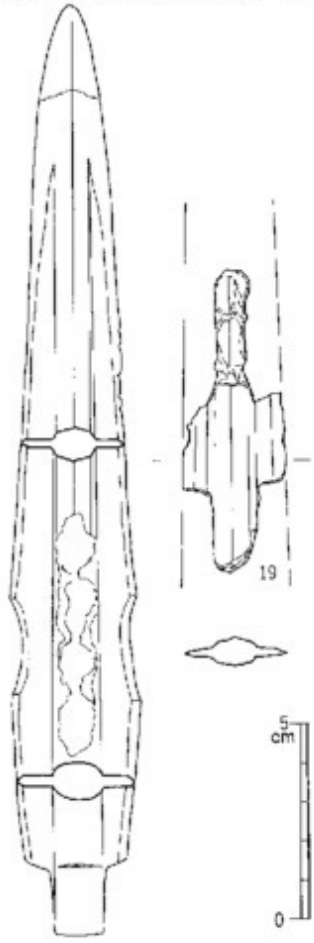


Fig. 129. 飯倉唐木遺跡出土銅剣実測図 (1/2)

云う占地上の制約によるものであろう。この占地上の制約は集落構成員間の差異に起因するものではなく、単に墓域の拡大による時間的な流れのなかで捉えうるものであろう。

土壙墓に続いて甕棺墓が、丘陵上縁から西側緩斜面にかけて埋納される。初めに埋納される甕棺墓は、西側緩斜面の中段に数基ずつのまとまりを作りながら分布している。これらの甕棺墓は、土壙墓の間隙を縫うようにして帯状に拡がっている。このことは甕棺墓の埋納に当たって前時代の土壙墓を明らかに意識していたことを示唆するものであろう。次に、中期中葉以降になると墓域は丘陵上縁から頂部へと移り、その分布も単基的な在り方を示して墳墓域としての明確な意識が次第に希薄になっていく。これらのなかで特筆すべきはⅢ類とした前期末の甕棺墓に細形銅剣と碧玉製管玉が、またⅥ類とした中期後半の甕棺墓には素環頭鉄刀が副葬されていたことである。このうち細形銅剣や碧玉製管玉を副葬するⅢ類の甕棺墓は、群集する甕棺墓中にあって特定の墳墓域を作らない。1963(昭和38)年に出土した細形銅剣を副葬する甕棺墓もこのⅢ類にあたろう。これに対して素環頭鉄刀を副葬するⅥ類の甕棺墓は丘陵頂部にあって単独墓的様相を示し、この間に集団を率いる小首長層の変容を観ることができよう。

いま早良平野において朝鮮系青銅器をもつ前期末から中期初頭の遺跡は、室見川上流域の東入部遺跡と中流域の吉武遺跡群、下流域の野方久保遺跡、有田遺跡と飯倉唐木遺跡がある。出土した朝鮮系青銅器は東入部遺跡が細形銅剣(2)と銅鈴、飯倉唐木遺跡が細形銅剣(2)、野方久保遺跡が細形銅剣(2)と把頭飾、有田遺跡が細形銅戈(1)で質、量ともに極めて少ない。これに対して吉武遺跡群では、吉武高木遺跡から細形銅剣(9)、細形銅矛(1)、細形銅戈(1)、多紐細文鏡(1)、翡翠勾玉(2)、碧玉製管玉(250)が、また吉武大石遺跡からは細形銅剣(5)、細形銅戈(4)、細形銅矛(2)、が出土し、飯倉唐木遺跡等をはるかに凌駕している。つづいて中期になると、吉武樋渡遺跡では墳丘墓が出現する。墳丘墓内には27基の甕棺墓と土壙墓があり、そのうち6基の甕棺墓と土壙墓には細形銅剣(3)と把頭飾や前漢鏡(1)のほかに鉄剣(3)、素環頭鉄刀(1)、素環頭刀子(1)や管玉、ガラス小玉等が副葬されていた。墳丘墓は中期初頭から後半のもので、周辺域に分布する

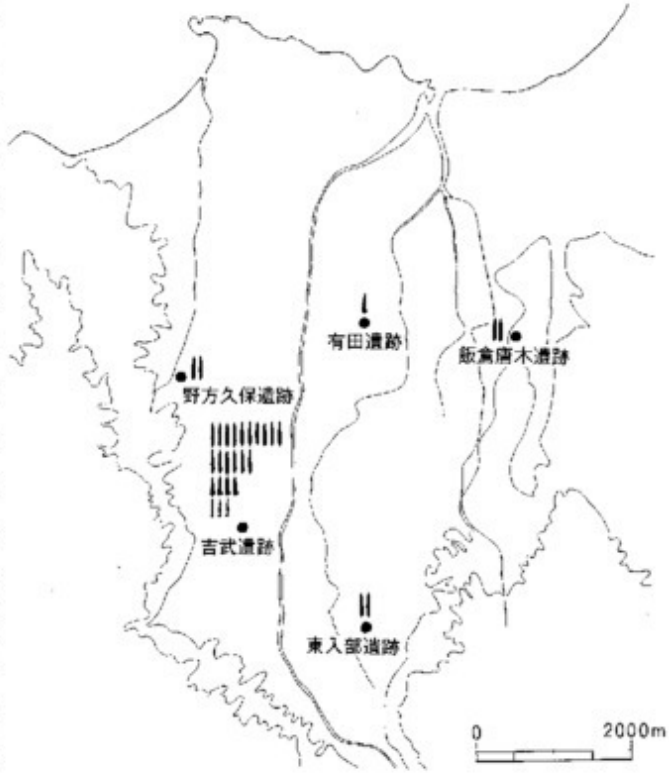


Fig. 130. 早良平野における青銅武器の分布状況 (1／100,000)

同期の甕棺墓や石棺墓等には何らの遺物も副葬されていない。一方、吉武樋渡遺跡を除いた中期から後期の副葬遺物をもつ墳墓遺跡としては、鉄矛(1)、素環頭鉄刀(1)と鉄刀(1)を副葬した東入部遺跡、内行花文鏡(1)や獣帯鏡片(1)と鉄刀(1)、素環頭刀子(1)、玉類を副葬した野方中原遺跡、素環頭鉄刀(1)を副葬した飯倉唐木遺跡がある。石棺墓に方格規矩鏡(1)を副葬した長垂遺跡を除いては総てが前期末が続く遺跡ばかりであり、このことからすると将来的には前漢鏡や鉄製武器を副葬した墳墓が有田遺跡周辺から発見される可能性もなくはない。いずれにしてもこれら各遺跡のもつ青銅器や鉄製武器は、吉武樋渡遺跡から出土した遺物群と比較したときはるかに見劣のするものであり、前期から続くピラミッド構造の流れの中で捉えられよう。

弥生時代に始まる稲作は急速に発展し、その生産力の増大による余剰生産物の蓄積は安定と人口の増加をもたらす。その人口の増加は更に新たな可耕地の必要性を引き出し、前期後半になると集落域は丘陵地帯から低湿地へと次第に増加拡大していく。そして集落の増加は小水系を基盤とした地縁的な結合関係による集団を生み出し、その中から集団を統率する指導者(首長層)が生まれる。細形の銅剣、矛、戈や鏡等の朝鮮系青銅器を副葬した被葬者は、正にこの集団の指導者であり、この被葬者の出現する前期末が首長層の成立期として捉えられよう。この首長層を生み出した経済的背景とこのような集団の拡大が、更に地縁的な諸集団の結合と強大な首長層の出現を促す。そうして生まれた首長層は富の集中と権力の拡大とともに次第に世襲化され、盟主的な首長層へ成長すると共により強力な地域統一体へと発展していく。

朝鮮系青銅武器を副葬した飯倉唐木遺跡や野方久保遺跡、東入部遺跡の被葬者はこの小集団の首長層である。一方、豊富な青銅器や玉等の装飾品を副葬する吉武遺跡群の被葬者は他集団を凌駕する感があり、この集団の首長層が地縁的な結合による共同体の盟主的存在であったと云えよう。つまり早良平野の支配と統一は吉武遺跡群の首長層が盟主として頂点にあり、その下に地域集団の首長層を平野の開口部や深部の重要拠点に配して支配と権力の集中化が進行していったと考えられる。しかし、吉武遺跡群の墳墓は青銅器類が等質的に副葬され、かつ墓域は一貫して集団墓で特定墓の成立を観なかった。このことは特定墓への青銅器や装飾具等副葬遺物の集中化によって想定される突出した絶対的首長層の析出を観なかった証左となる。

また、中期後半の甕棺墓に副葬されていた素環頭鉄刀は、東入部遺跡と吉武樋渡遺跡の同期の甕棺墓にも副葬されており、最古期にあたろう。この素環頭鉄刀は北部九州に集中し、その分布域は首長墓層のそれと重複する。この素環頭鉄刀のもつ意味は大きく移入されたその背景と展開に係る諸問題点については、紙面の都合上割愛せざるをえず稿を改めて言及したい。

2. 飯倉唐木遺跡出土甕棺の分析・考察

(1) 本調査出土甕棺の位置づけ

今回の発掘では、甕棺墓54基を発掘調査した。しかし、現状では、丘陵の北、西、南側が既に大きく削平されており、丘陵尾根部分にも削平が加えられている。本来は南北に広く連なる形で、さらに多くの甕棺墓が分布していたと思われる。ここでは、限られた範囲ではあるが今回調査した54基の甕棺墓を形態的に分類し、この甕棺墓群の変遷を考える一助としたい。

甕棺の形態について、本遺跡で出土した甕棺墓に使用された土器形式には、壺形土器、甕形土器、及び蓋として使用された鉢形土器が挙げられる。このうち、ここでは初期の甕棺に特徴的な壺形土器と、中期に広く分布が見られる甕形土器に対象を限定する。

出土した甕棺は、弥生時代前期中葉から中期前半に属するものである。この時期の甕棺の様相について若干述べてみたい。弥生時代前期の甕棺はほぼ日常土器における壺形土器の形態を踏襲したものであり、弥生時代の甕棺の源流が壺形土器にあることがわかる。この傾向が金海式まで継続し、金海式までは形態的な流れを追うのが容易である。その後日常土器での甕形土器に比較的近い形態を取る甕棺が出現する。甕棺の型式における金海式、城ノ越式はその両者の過渡期に相当し、時期的にも前期、中期の転換期にあたる。城ノ越式以降、汲田式や立岩式は日常土器の甕形土器の形態に近いものとなるが、系統的なつながりは直接には認められない。

また、甕棺墓の墓壙の切り合いから、以下の甕棺相互の前後関係が明らかとなっている。

ST－06(古)　(新)ST－05　ST－10(古)－(新)ST－11　ST　24(古)－(新)ST－23
ST－43(古)－(新)ST－23　ST－43(古)　(新)ST－42　ST－19(古)－(新)ST－17
ST－14(古)　(新)ST－15

以上のことをふまえて、今回の調査で出土した甕棺は6類に分類することが可能である。

I類には、ST－2・14・15・16・20・21・29などの甕棺が属する。この時期の甕棺は、大型の日常用甕形土器と同様口縁部、頸部、胴部に分けることができる。口縁部は如意形に外反し、一部の甕棺には外側に肥厚帯を持つものがあって、口縁直下に段を形成する。口縁部が打ち欠かれているものが多く、上甕、下甕の両方が口縁部打ち欠きである例も多い。頸部は直線的に立ち上がり、多くは内傾あるいは内反するため、頸部上部がすぼまった形になる。胴部はやや縦長の形になることが多く、胴部最大径は胴中央部やや上に位置し、肩部が張る。胴部には、ミガキ状の丁寧なナデが施されていることが多く、沈線を持たない、あるいは1～2本の沈線が施されることが多い。

II類には、ST－7・8・17・19・30・31・33・34・44・46などの甕棺が属する。やはり口縁部、胴部、頸部の区分が可能だが、次第に不明瞭になり、特に胴部と頸部の境界が不明瞭に

なる。口縁部は如意形に開くが、外反の程度はやや緩くなる。外側への肥厚はほとんど見られなくなり、多くはⅠ類と同様口縁部を打ち欠いている。頸部のすぼまりは小さくなり、頸部はほとんど直立する感じになる。胴部は膨らみ、最大径の位置は下がってかなり下ぶくれになる。胴部外面は磨き状の丁寧なナデが施されることが多く、胴部最大径位置よりやや上部に沈線を2～3本施文することが多い。

Ⅲ類には、6・10・11・12・18・25・26・27・28・36・40・45・49号などの甕棺が属す

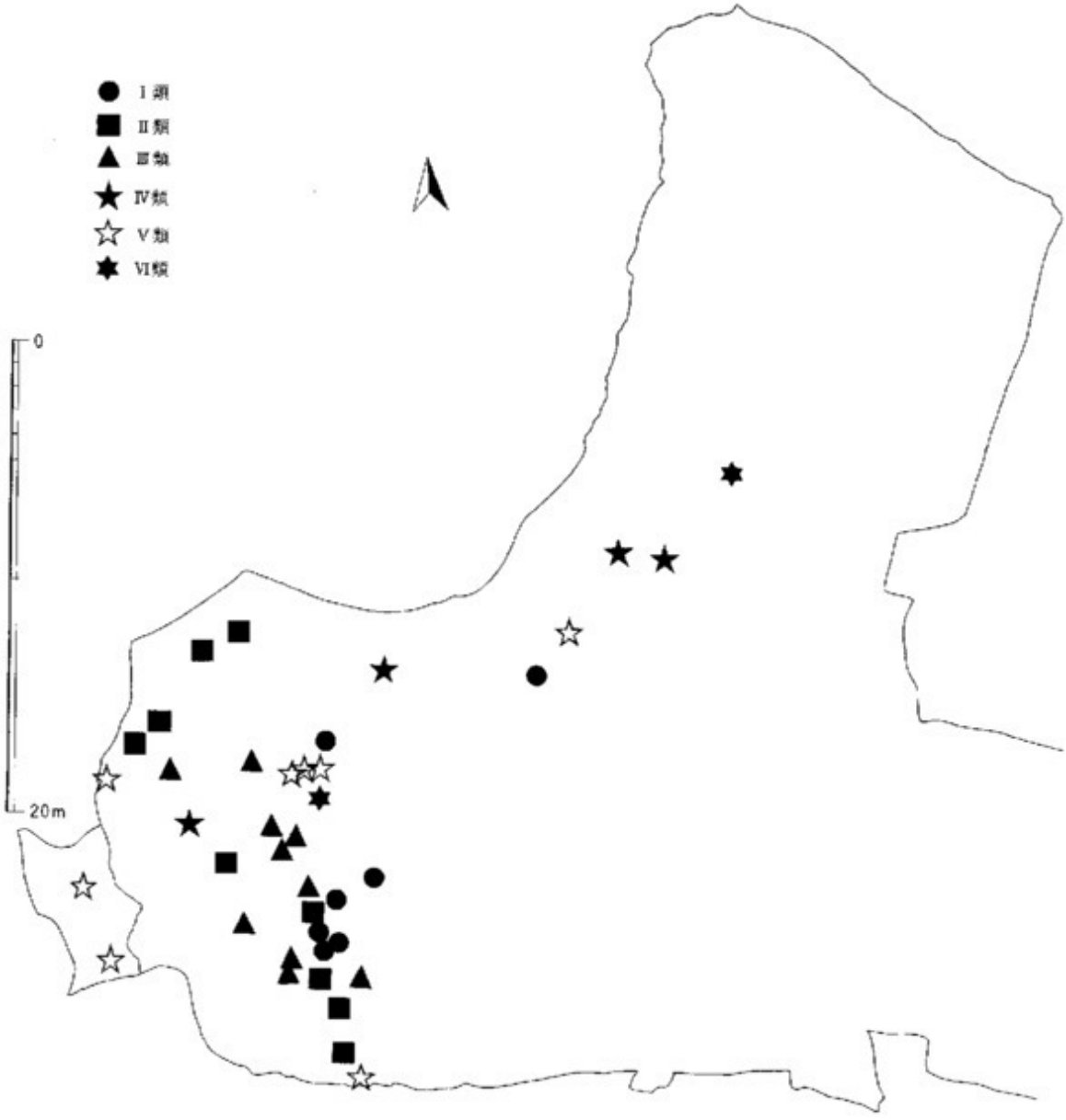


Fig. 131. 飯倉唐木遺跡甕棺分布図（1／300）

る。壺形土器の面影をわずかにとどめているが、胴部と頸部の区分はなく、頸部部分は胴部上半の延長として存在する。口縁部は短くなり、外反した口縁端部の上面に肥厚帯をもつ。口縁端部に刻目を施す例が多い。胴部上半（頸部）は直立もしくはやや内傾・内弯し、膨らみを見せるようになる。胴部は張るが、最大径位置はやや上昇する。外面はおもに横方向のミガキ状の丁寧なナデが施される。胴部最大径位置よりやや上に沈線が2～3本施文され、同時に口縁直下外面にも2～3本の沈線が施文される例が多くなる。

Ⅳ類には48・50・51・52号甕棺などの甕棺が属する。いわゆる城ノ越式甕棺とされるもので、Ⅲ類の壺形土器の系統をひいた器形と一線を画す。口縁部は外側にコの字状あるいは断面三角形状に突出し、逆L字形をなす。胴部は卵形に張り、丸みを帯びる。頸部と胴部の区分は完全になくなり、沈線も施されなくなる。胴部最大径位置よりやや下方に一条の突帯が付される。外面調整はほとんどがナデまたは縦方向のハケとなる。

Ⅴ類には、24・43・53号甕棺等が該当する。口縁部は外側に突出するだけでなく内側にも突出し、T字状をなす。内面への突出が24号甕棺のようにわずかに突出する段階から、53号甕棺のように外側よりも内側に大きく突出する形へと漸移的に変化する傾向がうかがえ、さらに細かく分離することも可能である。胴部は張り、丸みを帯びる。胴部最大径のやや下部に1～2条の突帯をもつものが多い。外面調整は多くが縦方向のハケ目である。47号甕棺は口縁部特徴では同類であるが、器形全体からみると一段階下った時期に属するものと思われる。小型棺のうち、23号甕棺はⅤ類と同時期のものと考えられる。

Ⅵ類には、1・42号甕棺等が該当する。いずれも中期後半の立岩式、及び同時期の須玖Ⅱ式の様相を強く持っている。1号甕棺はT字状口縁から内側突出部が退化したL字状の重厚な口縁部をもち、口縁下と胴部に突帯をめぐらしている。42号甕棺は須玖Ⅱ式の壺形土器を転用した小型棺で、1号甕棺とほぼ同時期であろう。以上の分類を従来の編年と比較してみると、Ⅰ・Ⅱ類は森編年の伯玄式で喬口編年のKⅠa・KⅠb式、Ⅲ類は同じく金海式でKⅠc式、Ⅳ類は城ノ越式でKⅡa式、Ⅴ類は汲田式でKⅡb・Ⅱc式、Ⅳ類は立岩式でKⅢb式に対応すると考えられる。また、同じ早良平野内の藤崎遺跡で出土した甕棺の編年例と比較すると、当遺跡のⅠ・Ⅱ類は藤崎遺跡のⅡ期と一致し、当遺跡のⅢ類が藤崎遺跡のⅢ期に相当する。藤崎遺跡のⅣ期は、上で分類したⅣ・Ⅴ類にあたるが、Ⅴ類の出土数が藤崎遺跡では比較的少ない。

また、7・10・17・28号甕棺に蓋として使用されている、口縁部に断面三角形の突帯を持つ鉢形土器は、下甕として共伴する甕棺の類型がⅡ・Ⅲ類であるものに集中しており、前期後半に属するものとすることができよう。

なお参考までに、甕棺数が集中しているⅠ類からⅣ類までの編年図を提示しておく（Fig.132）。

以上、本遺跡出土甕棺の分類を行い、従来の編年案との比較を行なったが、これを参考に本遺跡での甕棺墓の変遷を追っていくことにする。

本遺跡の甕棺墓はおよそⅠ類からⅥ類への順で変化していくものと考えられる。そのうち、上下の甕棺の類が異なるセット関係を調べていくと、以下のようになる。

ST－44（Ⅰ類－Ⅱ類）

ST－18（Ⅱ類－Ⅲ類）

ST－27（Ⅱ類－Ⅲ類）

ST－45（Ⅱ類－Ⅲ類）

ST－25（Ⅲ類－Ⅳ類）

ST－24（Ⅳ類－Ⅴ類）

ST－43（Ⅳ類－Ⅴ類）

異なった類型のセットは、そのまま両類型の同時期性をあらわすものと考えられる。この結果、Ⅱ類とⅢ類の間で同時期性が高く、Ⅳ類とⅤ類の間で同時期性が若干あり、Ⅰ類とⅡ類、Ⅲ類とⅣ類の間で同時期性がわずかに見られるということになる。Ⅰ～Ⅵ類は、基本的には、それぞれ単独で型式として設定し得るが、時期的な変遷を考えた場合、（Ⅰ類）（Ⅱ類・Ⅲ類）（Ⅳ類・Ⅴ類）（Ⅵ類）の4期区分による変遷を考えるべきかもしれない。ただし、その場合でも、異なった類型が全く同時に出現、消滅したのではなく、同類型が前後に重なる形で存在し、その範囲内で同時期に存続した時期があったと考えるのが適当であろう。

甕棺上下のセット関係で、異なった類型の組み合わせの埋葬時期については、古い時期の甕棺型式が次の時期まで残り、新しい甕棺型式と共伴して埋葬されたと考えられ、その場合埋葬時期は新しい甕棺型式の時期と想定できる。

また甕棺の出土地点と編年を対比すると、以下のことが言える。

丘陵尾根部に位置する甕棺墓は多くが中期初頭、Ⅳ類以降のもので、しかもそれらの甕棺墓は共通して大型の甕棺と広い墓壙を持つ。素環頭鉄刀が出土した1号甕棺墓（Ⅵ類）も丘陵尾根部の最も高い地点に位置している。一方、丘陵西側斜面に群集する甕棺墓は前期から中期前半のものが主体で、やや小型のものが多い。管玉を出土した36号甕棺墓（Ⅲ類）はこの丘陵斜面に位置しているが、他の甕棺墓と墓域において一線を画すことはない。副葬品を持つこのような甕棺墓について、36号甕棺墓の段階ではまだ他の甕棺墓と立地条件の格差は見られないが、1号甕棺墓段階では既に他の甕棺墓と立地条件、埋葬状況に明らかな格差がついている。

本遺跡での埋葬原理は、このように少なくとも2つの段階に分けられるようである。前段階のⅠ～Ⅲ類の時期には、副葬品による甕棺墓相互の格差は存在しても、墓域の構成では格差は見られない。その後Ⅳ～Ⅵ類の時期には、斜面に分布する甕棺墓と、副葬品を持ったり大きな墓壙を備えた甕棺墓が墓域構成上で分離するような、埋葬行為を多様化、階層化する動きがでてきたことを表している。言い換えれば、中期初頭の城ノ越式の段階に墓域においてそれ以前の甕棺墓と明らかな格差をもつ甕棺墓が出現し、中期後半に首長層墓としての甕棺墓が確立する

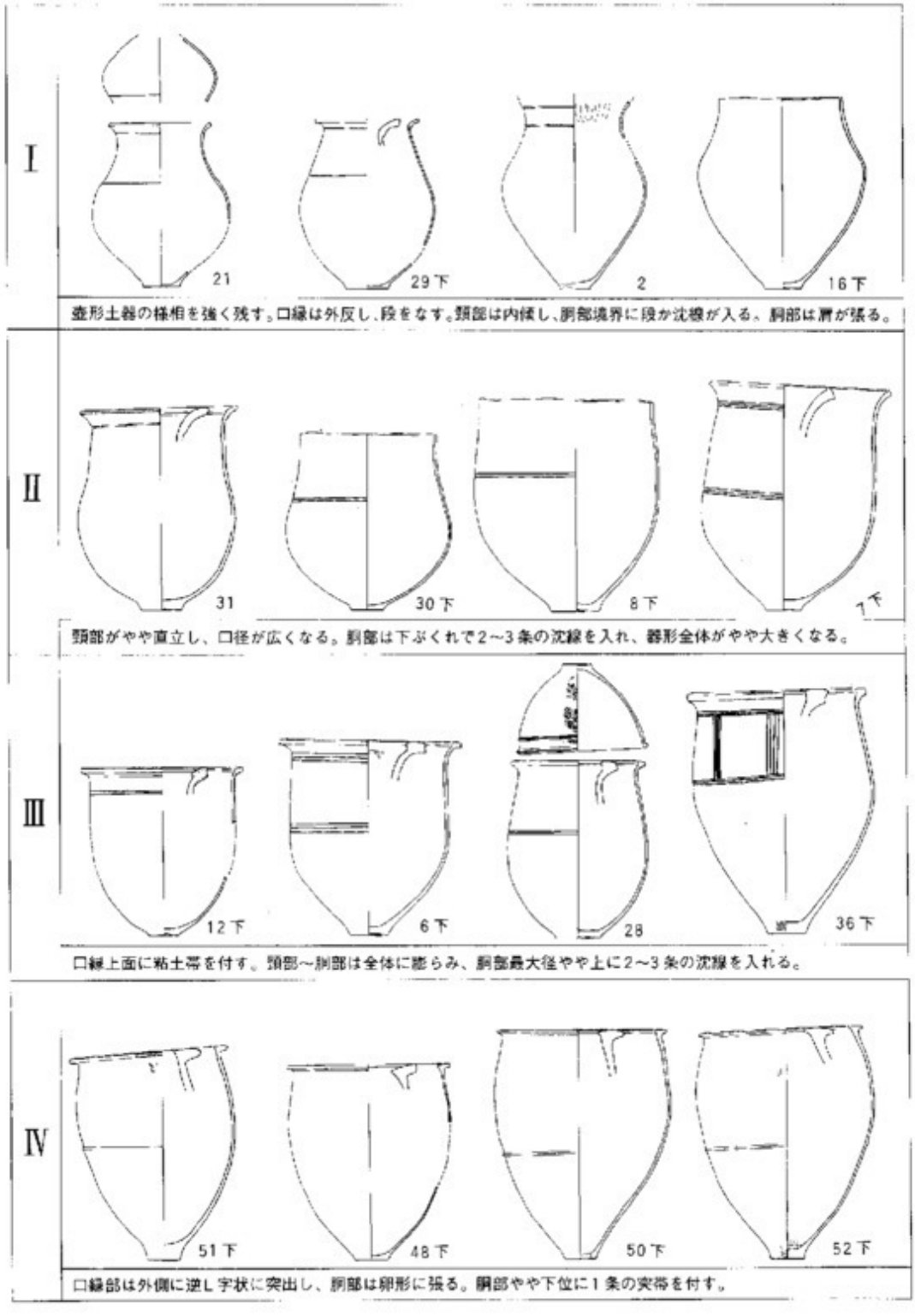


Fig. 132. 弥生前期～中期初頭甕棺編年図（甕棺縮尺は1／24）

といえる。墓域の変化と甕棺形態の変化を重ねると、やはりⅢ類とⅣ類の間に大きな変化が考えられる。

(2) 副葬小壷から見た甕棺編年の検討

一般に甕棺墓や土壙墓・石棺墓に副葬品として小型壷形土器を副葬するのは、夜臼・板付Ⅰ式から城ノ越式にいたる時期である。

本調査出土甕棺のうち、これらの時期に相当する甕棺は合計27基を数える。それらの甕棺と共伴する副葬小壷の出土は7例になる。これらの副葬小壷は時期的に板付Ⅱb式から城ノ越式の段階で、おおよそ甕棺の時期と矛盾しない。

副葬小壷についてさらに詳しく見てみる。当遺跡で出土した副葬小壷はその形態から大きく2つに分離することが可能である。1つは前期後半の板付Ⅱb式に属するもので、球形の胴部をもち肩部に有軸または無軸の羽状文を施文することが多い。(16号甕棺墓副葬小壷、30号甕棺墓副葬小壷)。もう1つは中期初頭の城ノ越式の影響をやや強く受けるもので、球形の胴部をもち、肩に1条の突帯を持つ。口縁部はさらに短く、強く外反する。肩部に施文することは一般に行なわれなくなるが、全体としては前期の様相にとどまっている(17号甕棺墓副葬小壷など)。両者は全体的な器形のプロポーションが近似するため、大きな時期差は考えられないが、ある程度の前後関係は想定できる。これらの小型壷が副葬されている甕棺はいずれも前述したⅠ～Ⅲ類の時期で、密集した甕棺墓群が形成されている時期にあたる。副葬小壷の中に、城ノ越式の影響のやや強い土器があることを考えると、日常土器における城ノ越式併行期に金海式の甕棺墓が形成されていることも考えられるが、出土例が少数であり、出土状況もあまり良好でないことから、ここでは可能性を提示するにとどめる。また、Ⅳ類に属する中期初頭の甕棺墓には小型壷の副葬例が見られないことから、この時期の甕棺墓には前期の小型壷副葬の習慣が廃れたものと考えられる。

(3) 甕棺口縁部の時期的変遷

弥生時代前期～中期の甕棺墓の形態的な変化で最も特徴的なのは、口縁部の変化である。本遺跡で出土・分類した甕棺のうち、口縁部について注目していくと、次のことが分かる。

まず、具体的な形態の変化を挙げると、Ⅰ類では口縁部外側に粘土帯を張り付けて肥厚させている。この特徴は板付Ⅰ・Ⅱ式の壺形土器に特徴的なもので、この時期の甕棺が日常土器の壺形土器の転用から派生し、未だ日常土器の範中にとどまっていることを示すものである。次のⅡ類では、多くが口縁を打ち欠いているため、詳細は不明である。

口縁部の打ち欠きが甕棺製作工程上の行為である、つまり製作する上で当初から意図されたものである可能性がある。その理由として、口縁部打ち欠き部分に沈線がめぐっている甕棺(8・

30・33号甕棺）を例としたい。これらは沈線に沿って口縁部を打ち欠いたと考えられ、甕棺製作工程の当初から、あるいは少なくとも焼成以前の段階であらかじめ口縁部の打ち欠きを予定し、その打ち欠きの設計線として沈線を施文した可能性がある。ただし、打ち欠き部分の沈線は本来この時期の甕棺の口縁直下に通常施文されている1条ないし2条の平行沈線であるとの見方も否定できない。いずれにしろ、この時期の甕棺の多くが口縁部を打ち欠いていることは、この類型を使用する甕棺葬にとって口縁部の打ち欠き行為がかなり重要な意味をもっていたことを物語るものであろう。

Ⅲ類では、口縁部の内面に粘土を張り付けて肥厚させている。このうち、古い段階のものは従来の如意状に開く口縁部の内面に肥厚帯を張り付けただけのもので、口縁上面が水平になるように厚く丈夫な粘土帯を内面に張り付けているものが比較的新しい段階のものと考えられる。Ⅳ類はコの字状に外側に張り出す口縁で、口縁部の厚さはⅢ類の厚さとほぼ同じである。Ⅴ類はこの口縁が内側にも発達したもので、口縁部全体はⅣ類よりもさらに大きく、丈夫になっている。このように前期から中期前半の口縁部の変化は、「より丈夫・より安定」という方向性を持つ。

この変化の方向性を考える一助として、合口式甕棺の埋葬形態を参考にしたい。合口式甕棺が確立するのは中期になってから、というのが定説になっているが、複数の甕棺を組み合わせて埋葬する形態は前期に既に存在している。しかし詳細に見ていくと、Ⅰ類の段階では組み合わせ式甕棺のうち、両方の土器の口を垂直に密着させる接口式甕棺は全く見られず、ほとんどが上甕を下甕にかぶせる覆口式か、上甕（蓋）が下甕の中に入り込む呑口式である。Ⅱ類でもほとんど同じ状況である。この方式では口縁部が水平方向に発達することはむしろ邪魔になり、外側に如意状に開く口縁部でもそれを両者ともが持つ場合には不都合になる。覆口式、呑口式の甕棺にとって好都合なのは、口縁部が欠け、頸部がほぼ直立するだけの打ち欠き口縁であるといえる。従って、この時期には埋葬形態において覆口式、呑口式の甕棺が採用され、それに応じて口縁が未発達、あるいは打ち欠き口縁の甕棺が選ばれたといえる。

前期後半以降に口縁部が発達した理由も、埋葬形態の変化という側面から説明できる。金海式の甕棺の口縁上部が水平になったことは、単に口縁を丈夫にするだけでなく、上甕と下甕の口縁部上面を密着させて封印する接口式甕棺を可能にした。ここには、それ以前の甕棺が壺形土器の範中にとどまり、大きさ以外の点では形態的に埋葬用の独自の機能をもっていなかったことと比較して、金海式の甕棺があらかじめ複数の甕棺を組み合わせることをめざして製作された埋葬用の土器であるという、当時の甕棺製作者の意識のもとで成立したという意義が認められる。この傾向はそれ以後も引き継がれ、中期後半の立岩式の時期まで接口式による埋葬方法が主流で、そのための口縁部が発達した甕棺が製作され続ける。

このように、埋葬形態から甕棺の形態を考えた場合、金海式から城ノ越式の時期に一つの大

きな画期を認められる。甕棺の発展過程を考える上で、口縁部の発達は、埋葬形態の変化、及び当時の人々の甕棺に対する認識を推し量るうえで重要な意味を持つものと考えられる。

(4) 前期末～中期初頭の甕棺編年への私論

従来から前期後半から中期初頭の時期の甕棺型式として設定されている金海式も城ノ越式も、どちらもそれぞれ抱えている問題がある。

金海式については、森編年では前期末に所属するとされている。しかし、三雲遺跡柿木地区で出土した金海式に属する3号甕棺の墓壙内に混入していた底部土器片の時期が中期初頭の城ノ越式にあたると考えられることから、金海式を中期初頭に下げるべきとの考えが示されている（註3）。

また、城ノ越式の位置づけについても、日常土器と同様に、城ノ越式に属する甕棺の数がこれまで少なく、城ノ越式単独で一時期を構成するのかという疑問が生じている。特に福岡市近郊の遺跡において城ノ越式の甕棺が少なかったことから、城ノ越式を一時期を画する型式として認められないとする意見が出されている。福岡市金隈遺跡から出土した甕棺は、編年上城ノ越式を欠いた形になっているため、城ノ越式を「形態変化のプロセスとして存在するものの、大型甕棺の編年から除かれるべきであろう」とする意見がある（註4）。

今回の類型分類でⅣ類とした甕棺の一群（48・50・51・52号甕棺）は、いわゆる城ノ越式甕棺に該当すると考えられ、今回の調査により、この型式の甕棺が少なくともある時期幅をもってまとまって存在したことが確認できた。同時に、Ⅳ類とⅤ類の連続性を示す、過渡期の様相を持つ甕棺（24・43号甕棺など）も出土し、この両者が漸移的に変化していく種類のものであることも確認できた。

城ノ越式の時期幅がどの程度であったかという問題に関しては、今回の調査に対する検討が不十分なこともあり、未解決のまま残る。吉武高木遺跡で出土した供献小壺の例から、金海式を中期初頭（日常土器における城ノ越式）におく意見が多いが、このような例が広範囲には見られないことから、金海式が中期初頭まで残ることは一つの可能性にとどめるべきであろう。金海式と城ノ越式とが同時並存していた時期があったと仮定することは不自然なことではなく、そのことで城ノ越式の時期幅が全否定されることも適当でないと思われる。

（註）

1．橋口達也　1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』31

2．森貞次郎　1968「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』

3．柳田康雄　1981『三雲遺跡Ⅱ』

4．高倉洋彰　1978「大型甕棺の編年について－ことに型式設定の手続きの問題に関して－」『九州歴史資料館研究紀要』4

3.飯倉唐木遺跡出土の赤色顔料について

飯倉唐木遺跡の甕棺墓および方墳主体部出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析、X線回折を行なった。出土例に関する今までの知見に寄れば、墳墓出土の赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、硫化第2水銀（赤）を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を考えて分析を行なった。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表に示した。

試　料

No.1は甕棺底部に残った土と骨に点々と赤色物が混じった状態である。この中に特に赤色物が凝集した小塊が少量認められたので、これを実体顕微鏡下で調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、針先に付く程度を採りプレパラートを作成し、残りをX線分析に供した。No.2は全体に赤く染まったように見える土砂である。全体を実体顕微鏡下で観察した所、赤色物の小塊多数を見い出したので、同様に試料とした。なお、No.2には赤色物に混じって赤味をおびた黒褐色の小塊が多く認められたので、これも同様に試料とした（No.3）。No.4は甕棺底部に残った土で調査時には赤色物は認められなかったが、遺物が出土したことから、赤色顔料の有無を精査するために採取されたものである。全体を実体顕微鏡下で丹念に観察した所、非常に僅かではあるが赤色物を見い出したので、同様に試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。No.1に、赤色顔料として朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢,透過光観察時の透明度及び赤色の濃淡の調子等である。そのほかに顕著なベンガラの特徴を持つ赤色顔料粒子は認められなかった。ただし、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか判断できなかった。粒度は、ほぼ0.5～20 μmの範囲であるが、10 μm以上の粒子は非常に少なかった。No.2には、赤色顔料としてはベンガラ粒子のみが認められ、朱粒子は認められなかった。大半が透明度の高い非常に細かい（1.2 μm以下）粒子から成り、いわゆるパイプ状粒子とは異なり透明感にかける太く短い棒状粒子が含まれるベンガラである。No.3はいわゆる褐鉄鉱（針鉄鉱など）の破砕されたものによく似てはいるが定かではない。但し、針先にとった試料の状態はNo.2に含まれる棒状粒子に似たものが多く、さらに研和した試料はほぼ同じ外観となった。No.4には極めてわずかのベンガラ粒子を見いだした。

蛍光X線分析

NO	試料の採取位置	顕微鏡観察	蛍光X線分析		X線回折		赤色顔料の種類
			鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂	
1	1号甕棺墓	朱	+	+	−	+	朱
2	4号墳	ベンガラ	+	−	+	−	ベンガラ
3	4号墳	?	+		+	−	ベンガラ?
4	36号墳	ベンガラ?	+	−	−	−	ベンガラ?

表　赤色物の分析結果と赤色顔料の種類

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電機工業製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°、走査速度；2θ8°／分、時定数；0.5秒の条件で測定を行なった。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。No.1は赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が、No.2,3,4からは鉄のみが検出された。この他主として混入の土砂部分に由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。No.1は、水銀に比べて鉄のX線強度はきわめて小さいので、赤色の由来となる主成分元素は水銀と推定される。全試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として実施した。理学電機製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；33～66°、走査速度2θ4°／分、時定数；2秒の条件で測定を行なった。赤色顔料の主成分鉱物としては、朱であれば辰砂、ベンガラであれば赤鉄鉱である。表には2種の鉱物の有無のみについて記した。No.1には辰砂（赤）が、2,3には赤鉄鉱が同定された。

まとめ

1．1号甕棺墓出土の赤色顔料は朱である。甕棺墓内出土朱は時期によりその粒度が異なる可能性があり、中期後半から後期初頭はその細かさ・均一性において傑出している。本試料も基本的にはこのタイプに含まれると考えられるが、やや粒度は大きい。

2．4号墳出土の赤色顔料は、ベンガラである。完全に磨り潰されていない「素材」と推定されるものが含まれている。出土ベンガラについては粒子の形状・大き化鉄含有量の多少等からその多様性が把握・整理されつつある段階であるが、本試料はその原料・製法を考える上で非常に良好である。

3．36号甕棺で今回確認された赤色顔料はベンガラ？であるが、極めて少量であるため、本来的に施されていたものかどうかは確定できない。

PLATES

(1) 調査区近景（南西より）

(2) Ⅱ区全景（北東より）

Ⅰ区全景（西より）

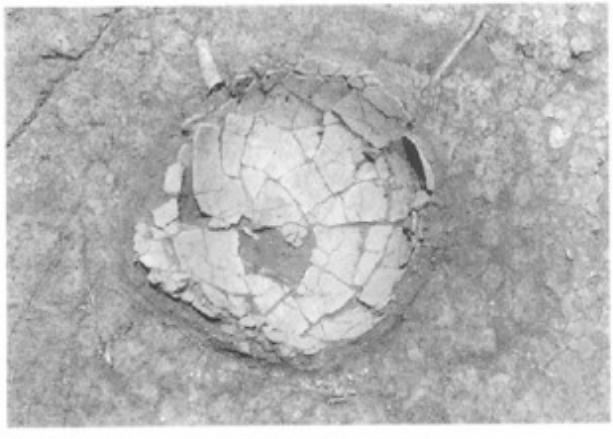
(1) 8号住居跡（東より）

(2) 14・15号住居跡（東より）

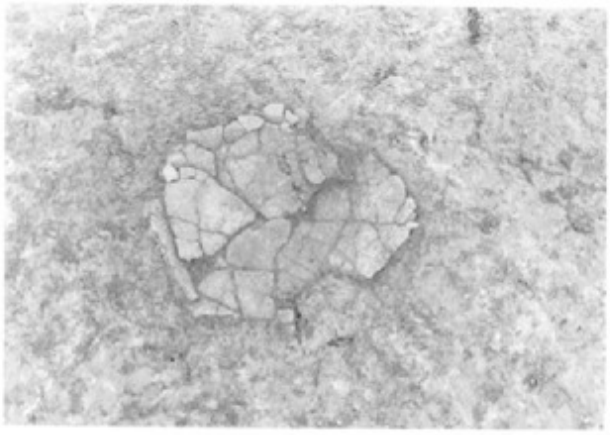
(3) 甕棺墓群全景（北より）

(4) 1号甕棺墓（東より）

(5) 1号甕棺墓鉄刀出土状況（東より）



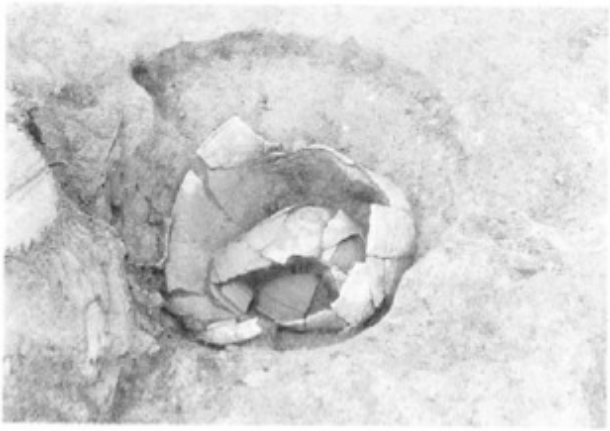
(6) 2号甕棺墓（北より）



(1) 3号甕棺墓（西より）

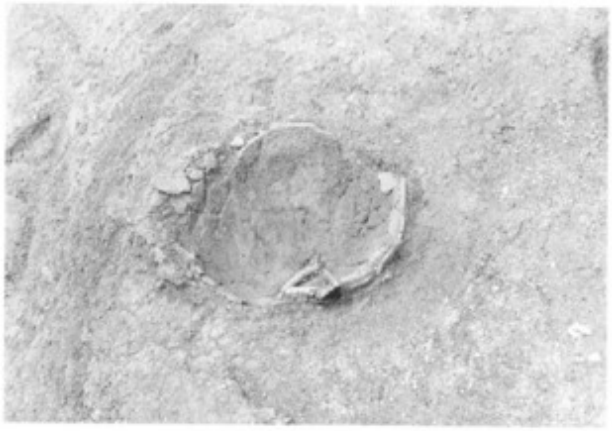
(2) 4～8号甕棺墓（東より）

(3) 5～6号甕棺墓（東より）

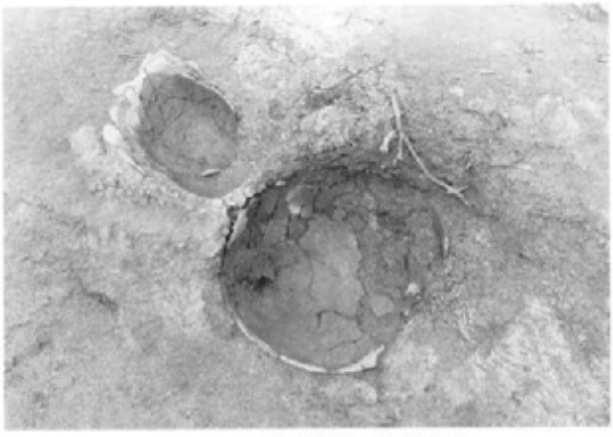


(4) 7号甕棺墓（東より）

(5) 8号甕棺墓（東より）



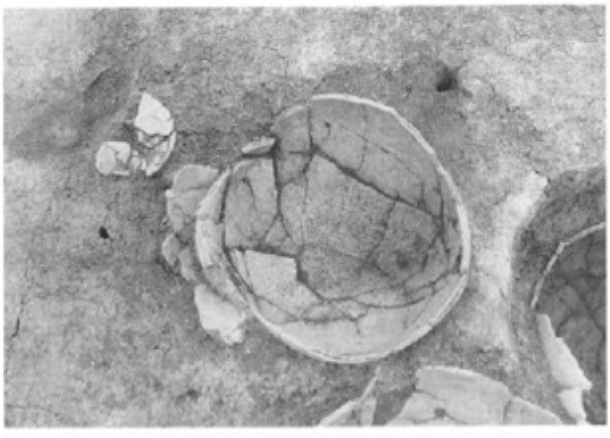
(6) 9号甕棺墓（南西より）



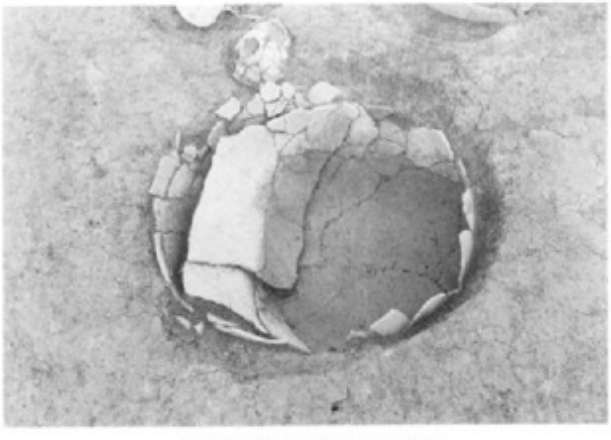
(1) 10・11号甕棺墓（西より）

(2) 12号甕棺墓（南より）

(3) 13～16号甕棺墓（北より）



(4) 15号甕棺墓（西より）

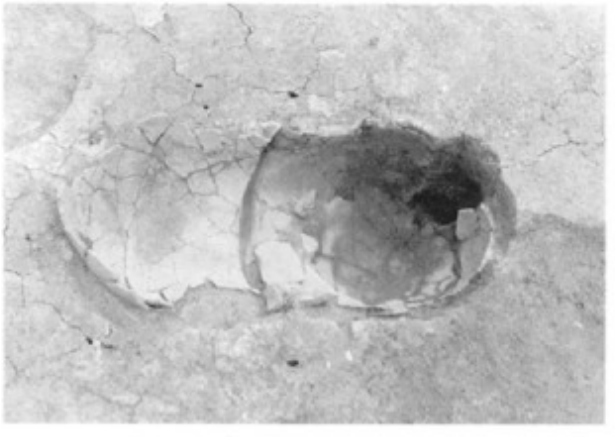


(5) 16号甕棺墓（東より）

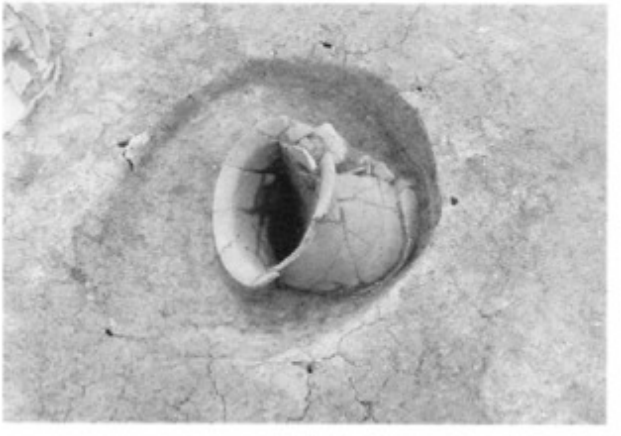
(6) 16号甕棺墓墓壙内副葬土器（西より）

(1) 17～20号甕棺墓（東より）

(2) 17号甕棺墓（西より）



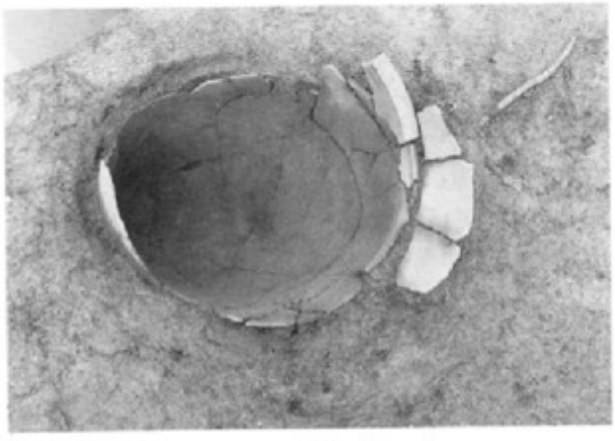
(3) 18号甕棺墓（北東より）



(4) 20号甕棺墓（東より）

(5) 21・22号甕棺墓（北より）

(6) 23号甕棺墓（東より）

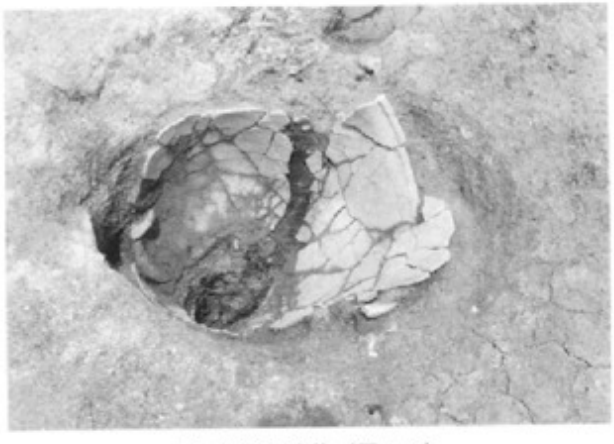


(1) 24号甕棺墓（西より）

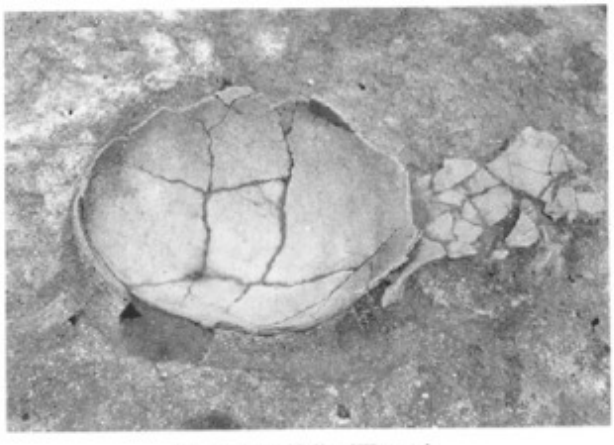
(2) 25～27号甕棺墓（北より）

(3) 25号甕棺墓（東より）

(4) 25号甕棺墓断面（西より）



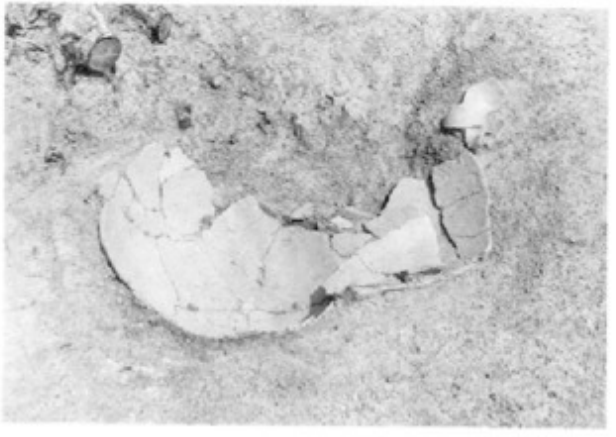
(5) 26号甕棺墓（西より）



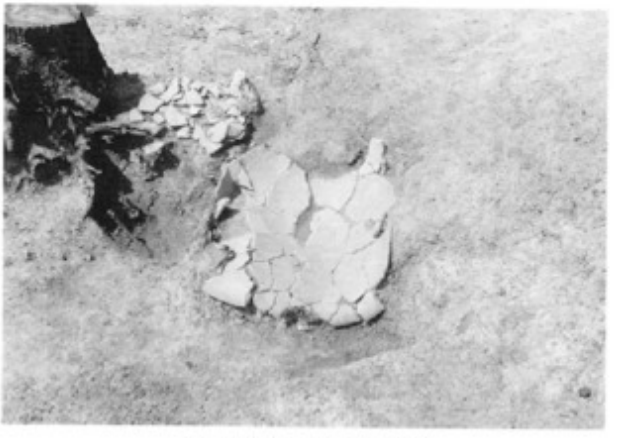
(6) 27号甕棺墓（西より）

(1) 28号甕棺墓（西より）

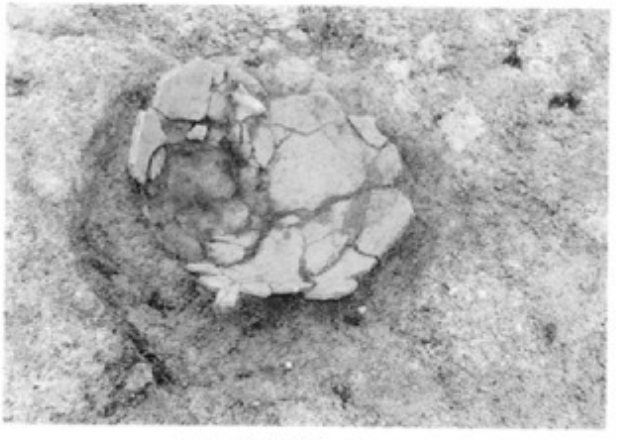
(2) 29号甕棺墓（北東より）



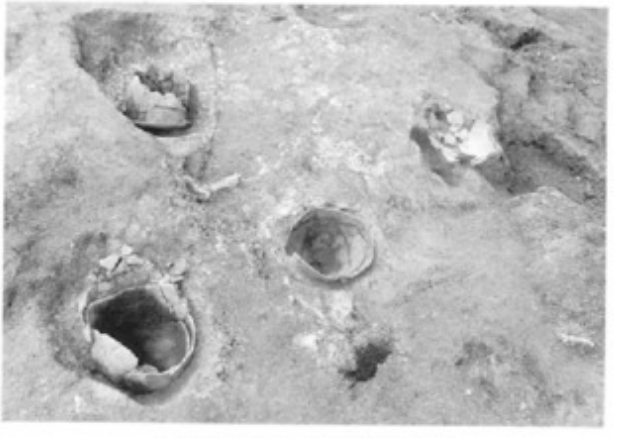
(3) 30号甕棺墓（西より）



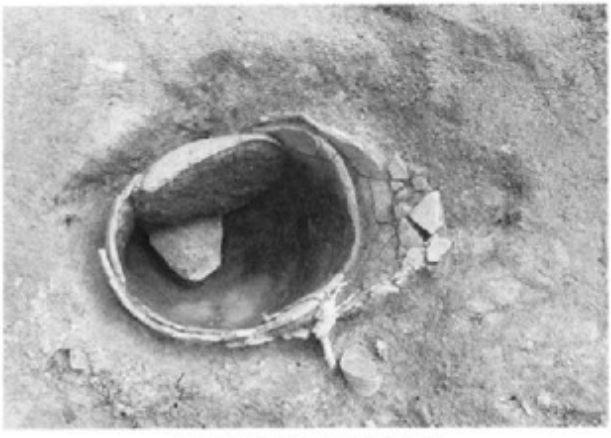
(4) 31号甕棺墓（南より）



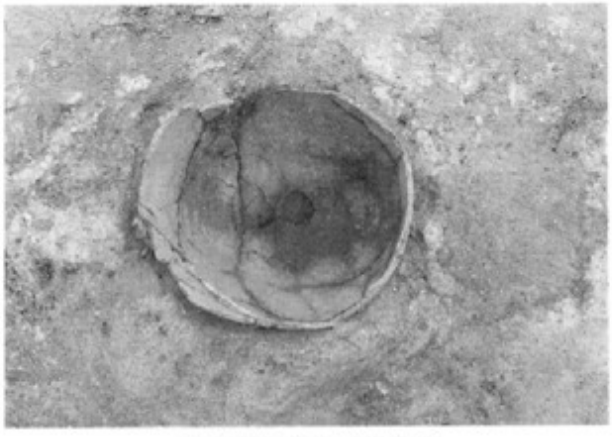
(5) 32号甕棺墓（東より）



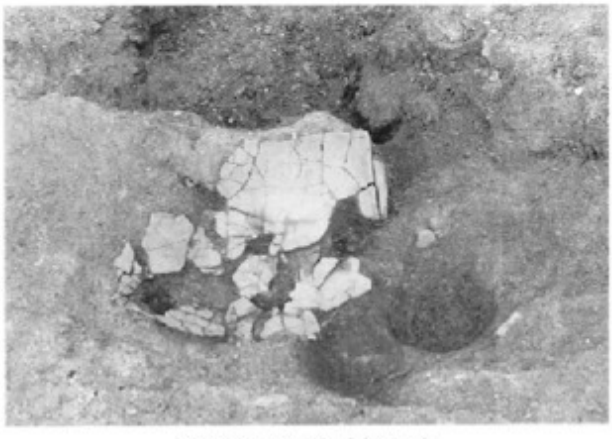
(6) 33～36号甕棺墓（北より）



(1) 33号甕棺墓（西より）



(2) 34号甕棺墓（西より）



(3) 35号甕棺墓（東より）

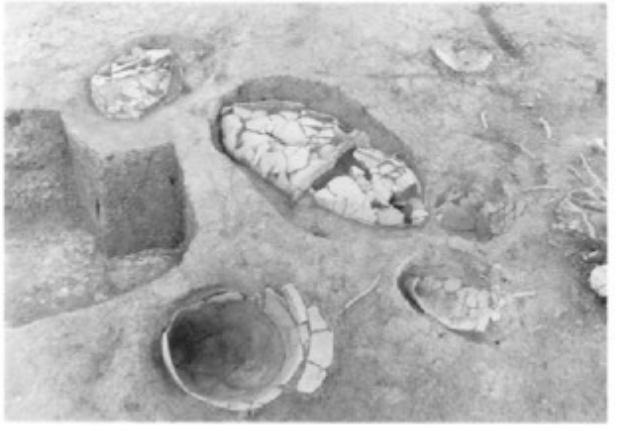
(4) 36・48号甕棺墓（北より）

(5) 36号甕棺墓（西より）

(6) 36号甕棺墓断面（西より）

(1) 37号甕棺墓（西より）

(2) 38号甕棺墓（東より）



(3) 23・24・29・41～43号甕棺墓（西より）

(4) 42号甕棺墓（東より）

(5) 43号甕棺墓（東より）

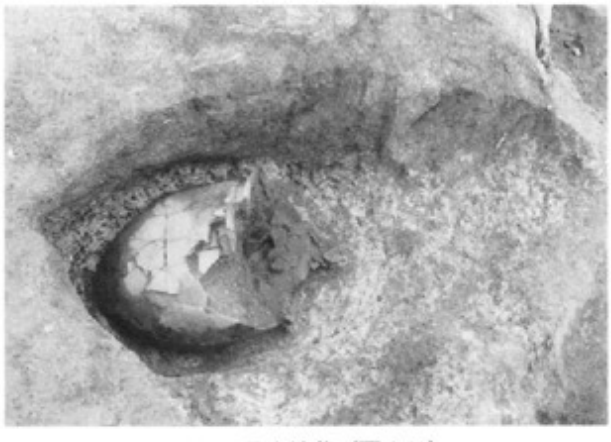
(6) 44号甕棺墓（西より）

(1) 7・45・46号甕棺墓（西より）

(2) 45号甕棺墓（西より）

(3) 46号甕棺墓（西より）

(4) 47号甕棺墓（東より）

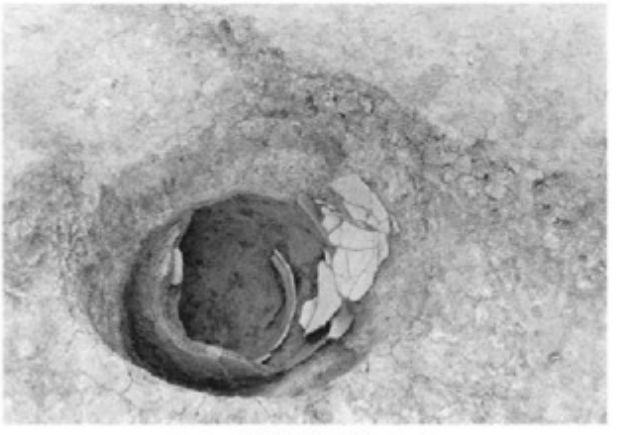


(5) 48号甕棺墓（西より）

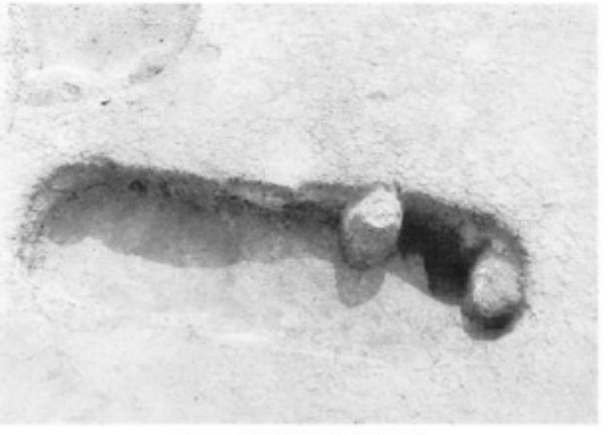
(6) 50号甕棺墓（東より）

(1) 51号甕棺墓（南より）

(2) 52号甕棺墓（西より）



(3) 53号甕棺墓（東より）



(4) 1号土壙墓（西より）

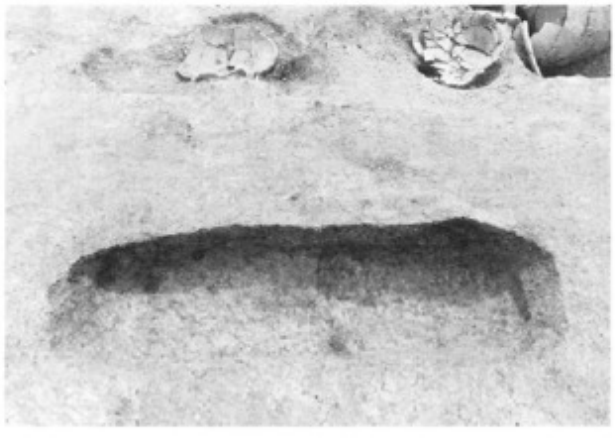
(5) 2号土壙墓（東より）

(6) 3～5号土壙墓（北より）

(1) 7・8号土壙墓（西より）

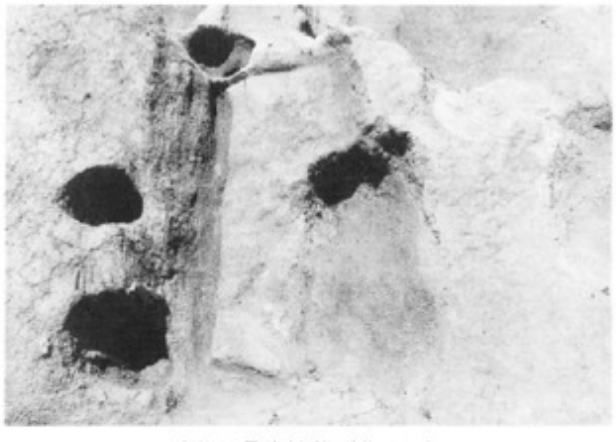
(2) 9・10号土壙墓（西より）

(3) 11号土壙墓（西より）



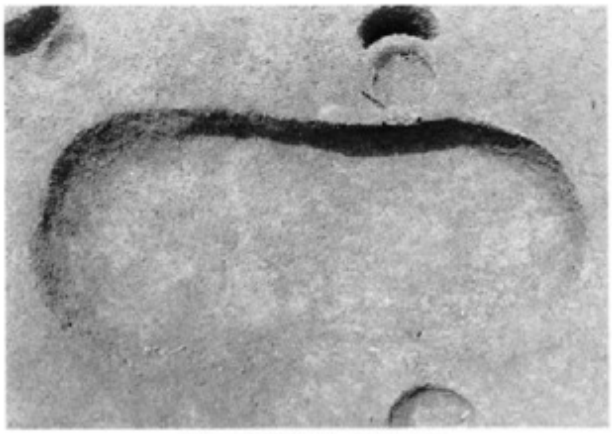
(4) 12号土壙墓（東より）

(5) 13・14号土壙墓（北より）

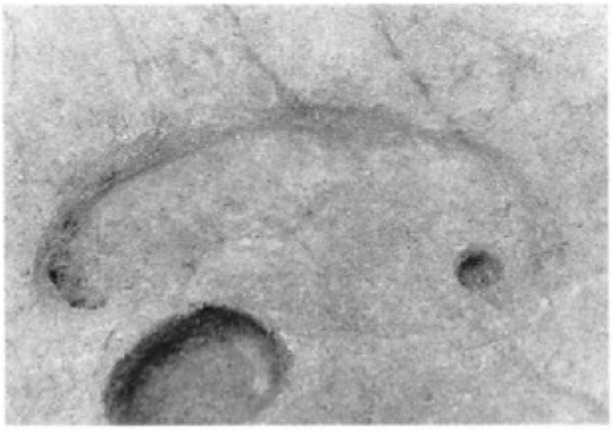


(6) 15号土壙墓（北より）

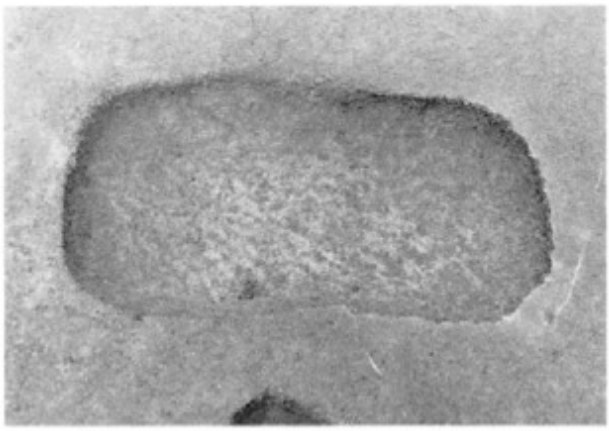
(1) 16・17号土壙墓（西より）



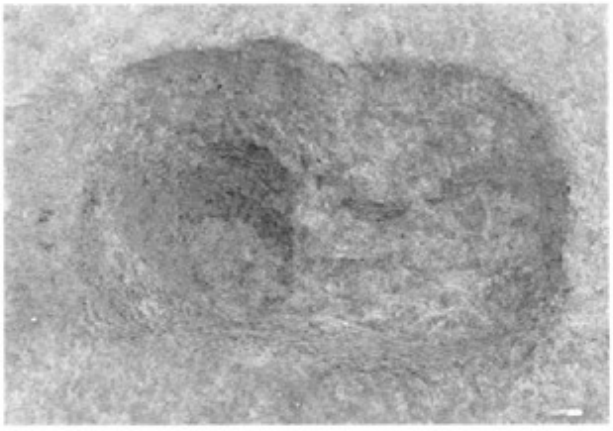
(2) 18号土壙墓（北より）



(3) 19号土壙墓（北より）



(4) 20号土壙墓（東より）



(5) 21号土壙墓（北より）

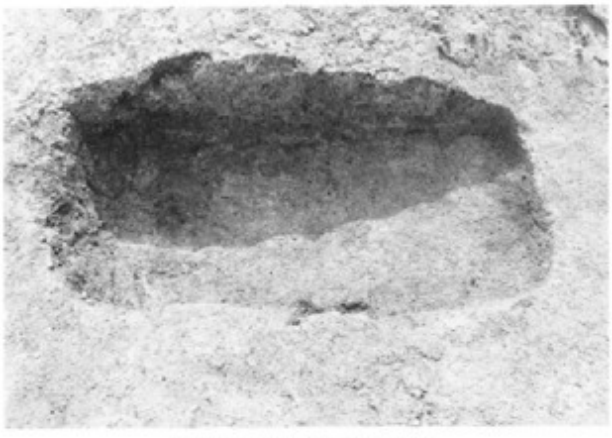
(6) 22～24号土壙墓（北より）

(1) 25～27号土壙墓（南より）

(2) 25号土壙墓（北より）

(3) 26号土壙墓（東より）

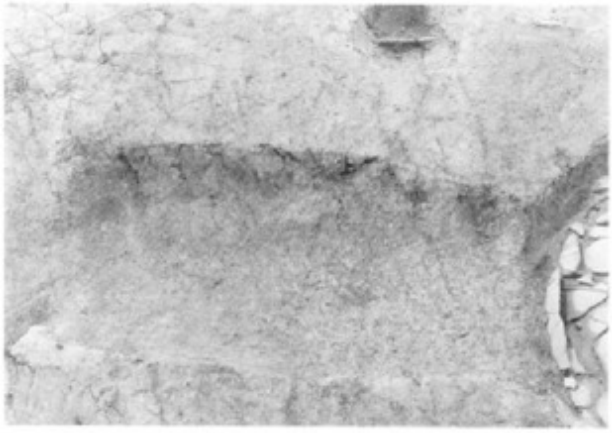
(4) 29号土壙墓（北より）



(5) 30号土壙墓（東より）

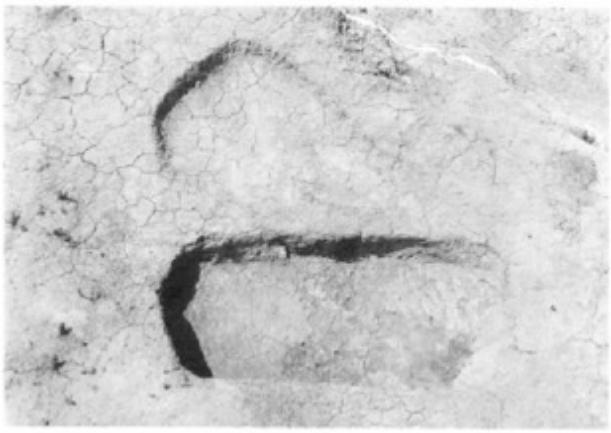
(6) 31号土壙墓（東より）

(1) 32号土壙墓（南より）



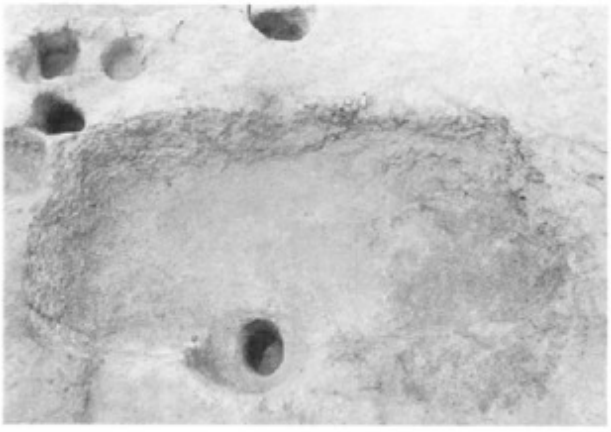
(2) 33号土壙墓（北より）

(3) 34号土壙墓（西より）

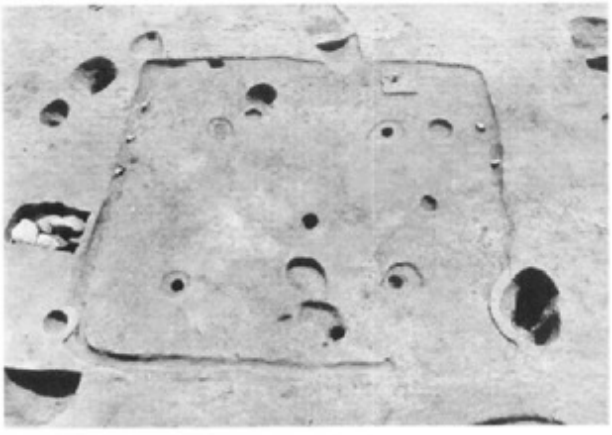


(4) 35・36号土壙墓（南東より）

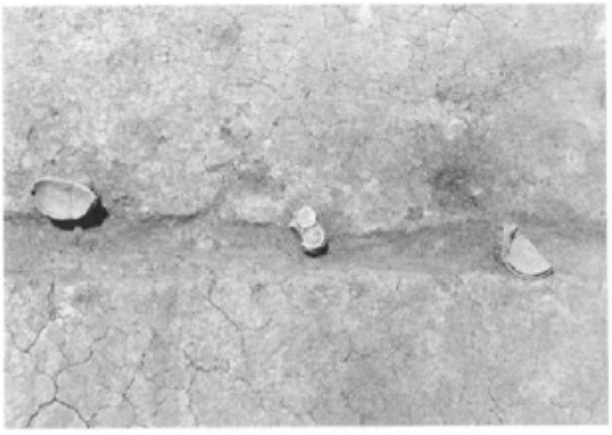
(5) 37号土壙墓（南より）



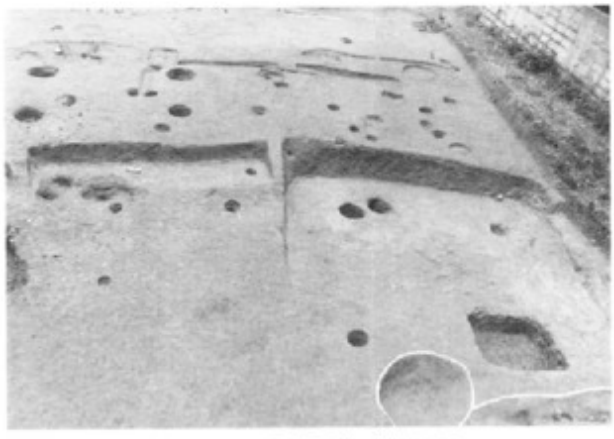
(6) 38号土壙墓（東より）



(1) 1号住居跡（西より）

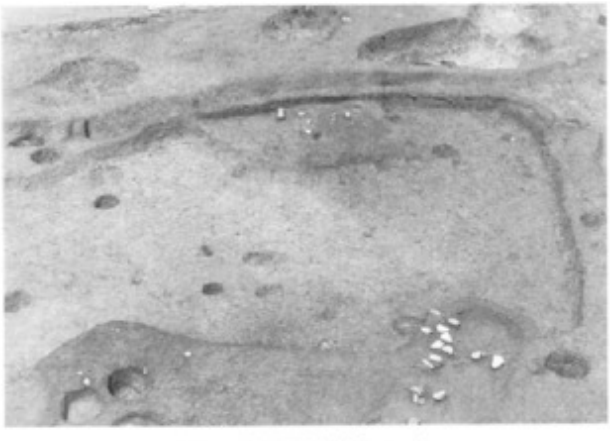


(2) 1号住居跡遺物出土状況（北より）



(3) 2・3号住居跡（東より）

(4) 2号住居跡（東より）

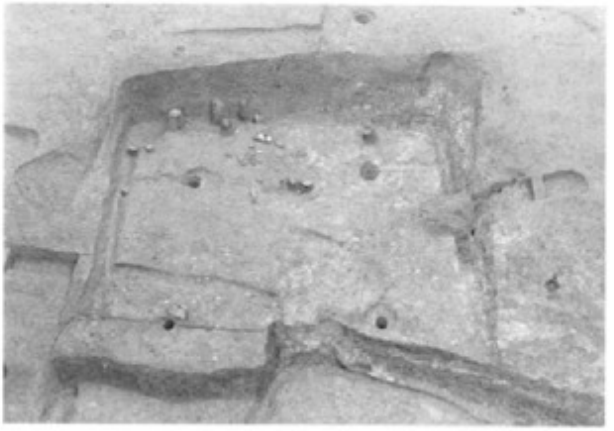


(5) 4号住居跡（東より）

(6) 4号住居跡竈土層断面（東より）

(1) 東斜面住居跡群（東より）

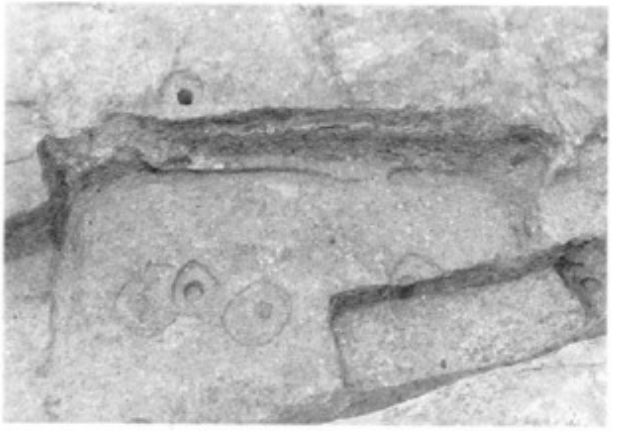
(2) 5～7号住居跡（東より）



(3) 5号住居跡（東より）

(4) 5号住居跡遺物出土状況（東より）

(5) 5号住居跡遺物出土状況（北より）

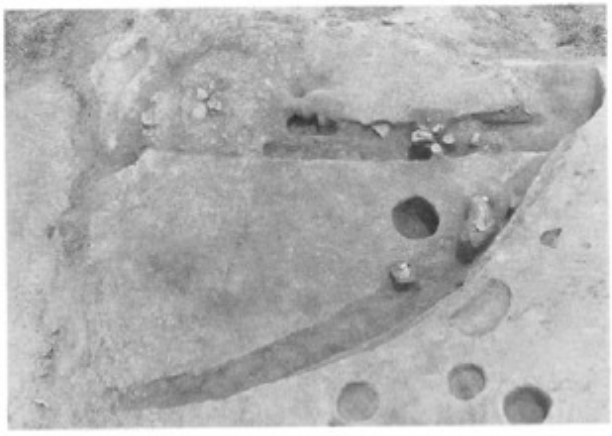


(6) 6号住居跡（東より）

(1) 8～10号住居跡（東より）

(2) 11・12号住居跡（東より）

(3) 13号住居跡（東より）



(4) 14・15号住居跡（北より）

(5) 14号住居跡竈（北より）

(6) 14号住居跡竈断面（南より）

(1) 16・17号住居跡（東より）

(2) 16号住居跡竈断面（南より）

(3) 17号住居跡（西より）

(4) 19・20号住居跡（南より）

(5) 18号住居跡（東より）

(6) 18号住居跡遺物出土状況（南より）

(1) 19～22号住居跡（北東より）

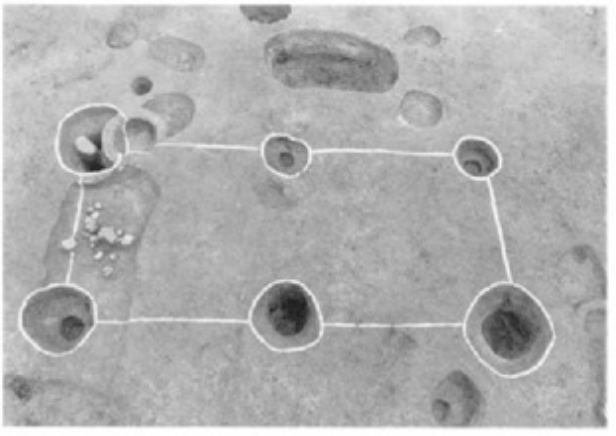
(2) 22号住居跡（南より）

(3) 23～28号住居跡（北より）

(4) 23～28号住居跡（西より）

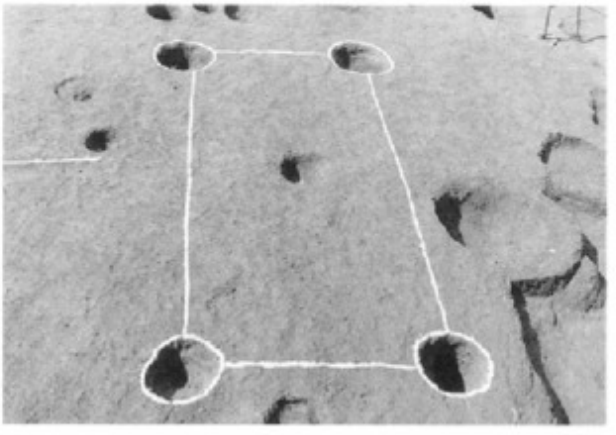
(5) 29号住居跡（北より）

(6) 31～33号住居跡（東より）



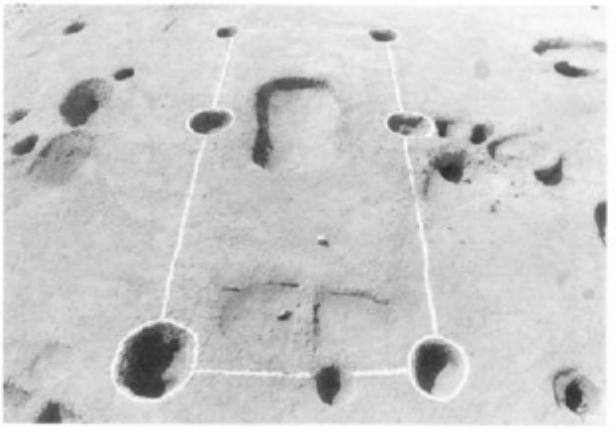
(1) 1号掘立柱建物跡（西より）

(2) 2・3号掘立柱建物跡（西より）



(3) 4号掘立柱建物跡（南より）

(4) 5号掘立柱建物跡（南より）

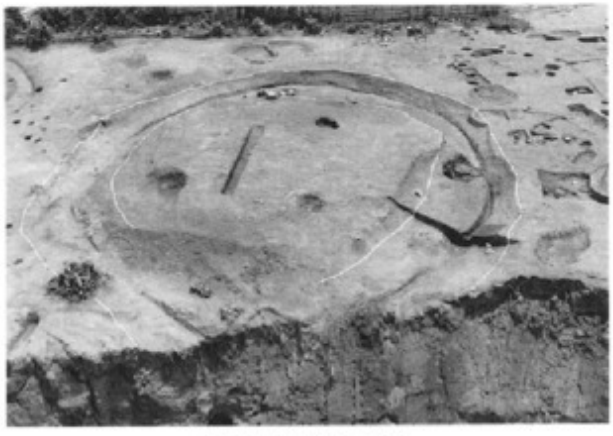


(5) 7号掘立柱建物跡（北より）

(6) 6号土壙（北より）

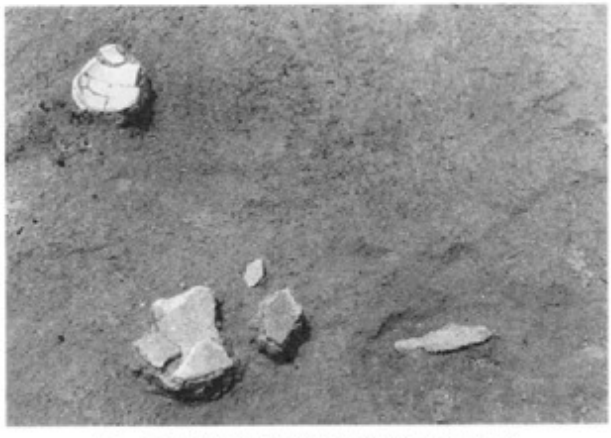
(1) 1～4号墳（南より）

(2) 1～4号墳（西より）



(3) 1号墳（西より）

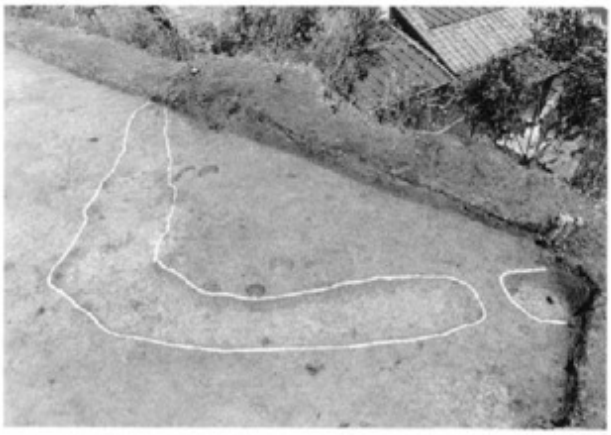
(4) 1・3号墳（東より）



(5) 1号墳周溝内遺物出土状況（北より）

(6) 1号墳周溝内遺物出土状況（南東より）

(1) 2～4号墳（西より）



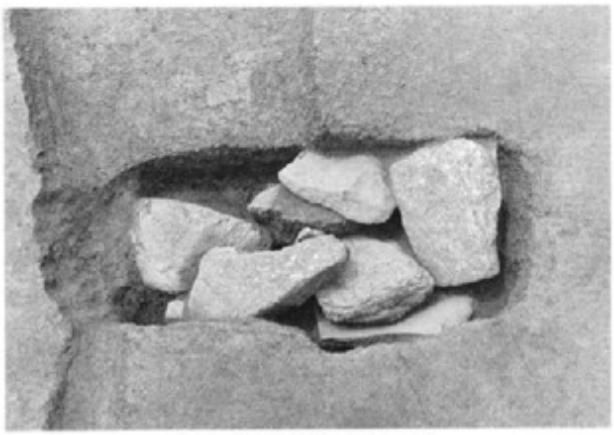
(2) 2号墳（南より）

(3) 3号墳（西より）

(4) 4号墳（西より）

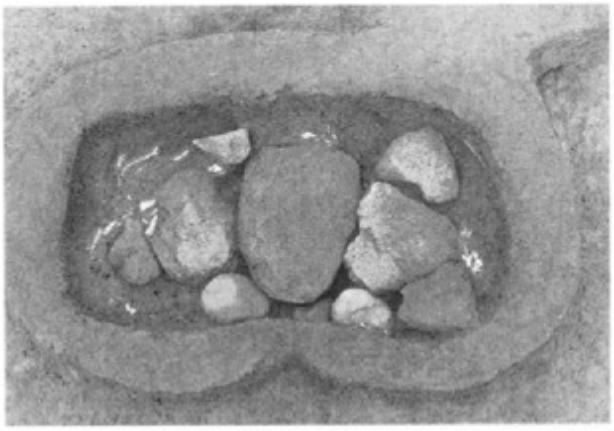
(5) 4号墳周溝内遺物出土状況（東より）

(6) 1・3・4号墳土層断面（西より）



(1) 3号土壙墓（東より）

(2) 3号土壙墓遺物出土状況（南より）

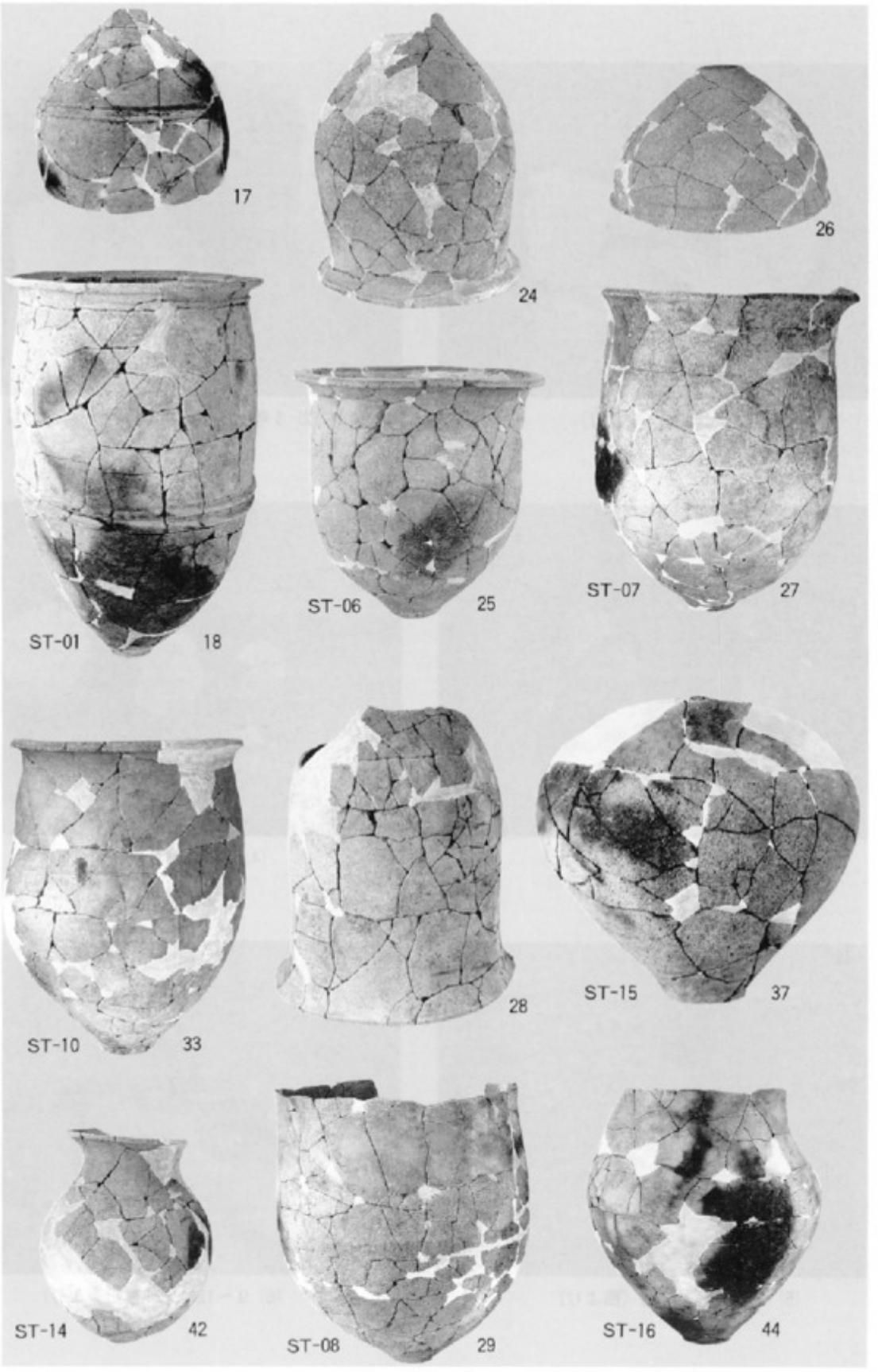


(3) 1号火葬墓（東より）

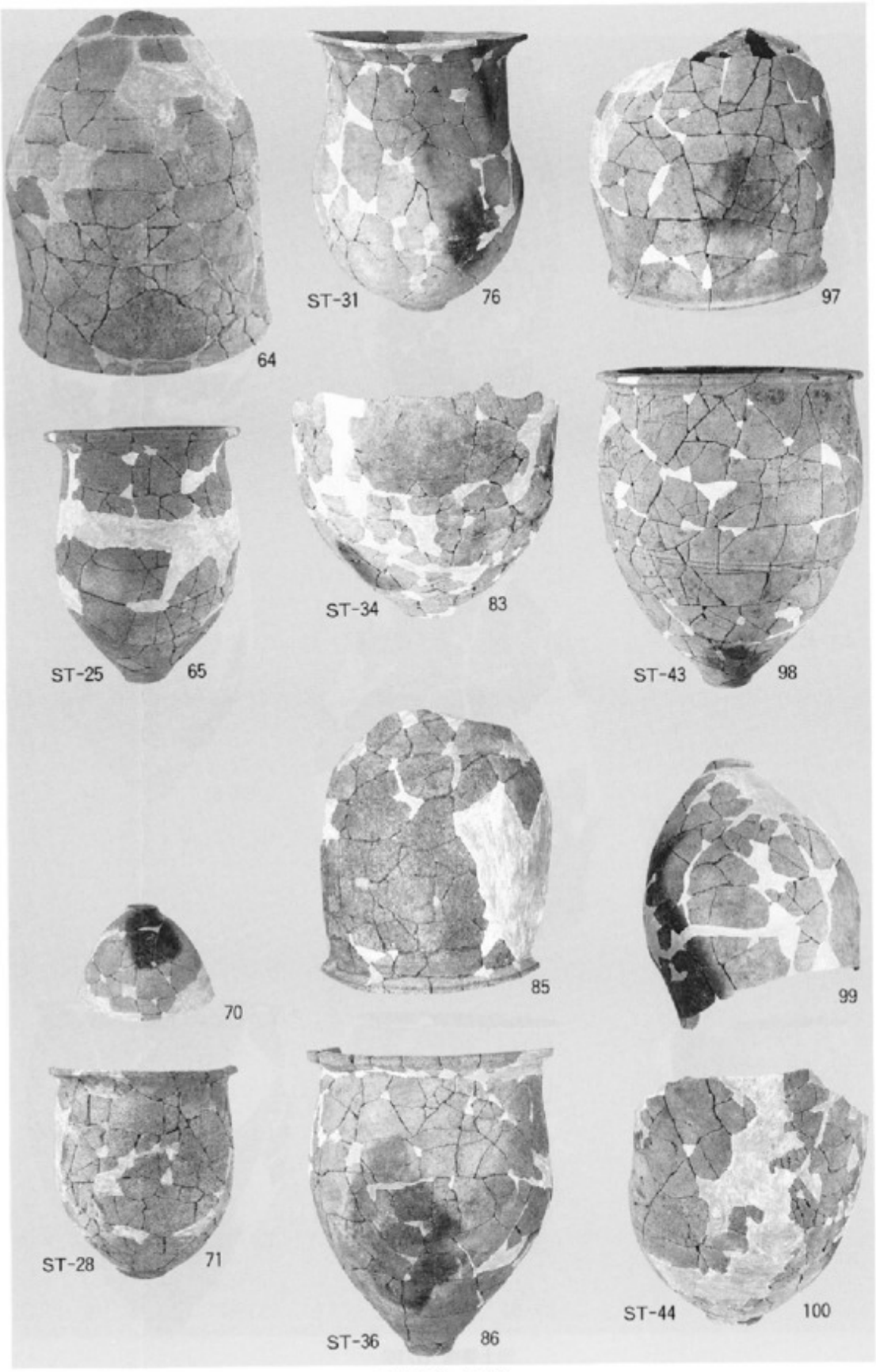
(4) 2号火葬墓（東より）

(5) 3～8号火葬墓（西より）

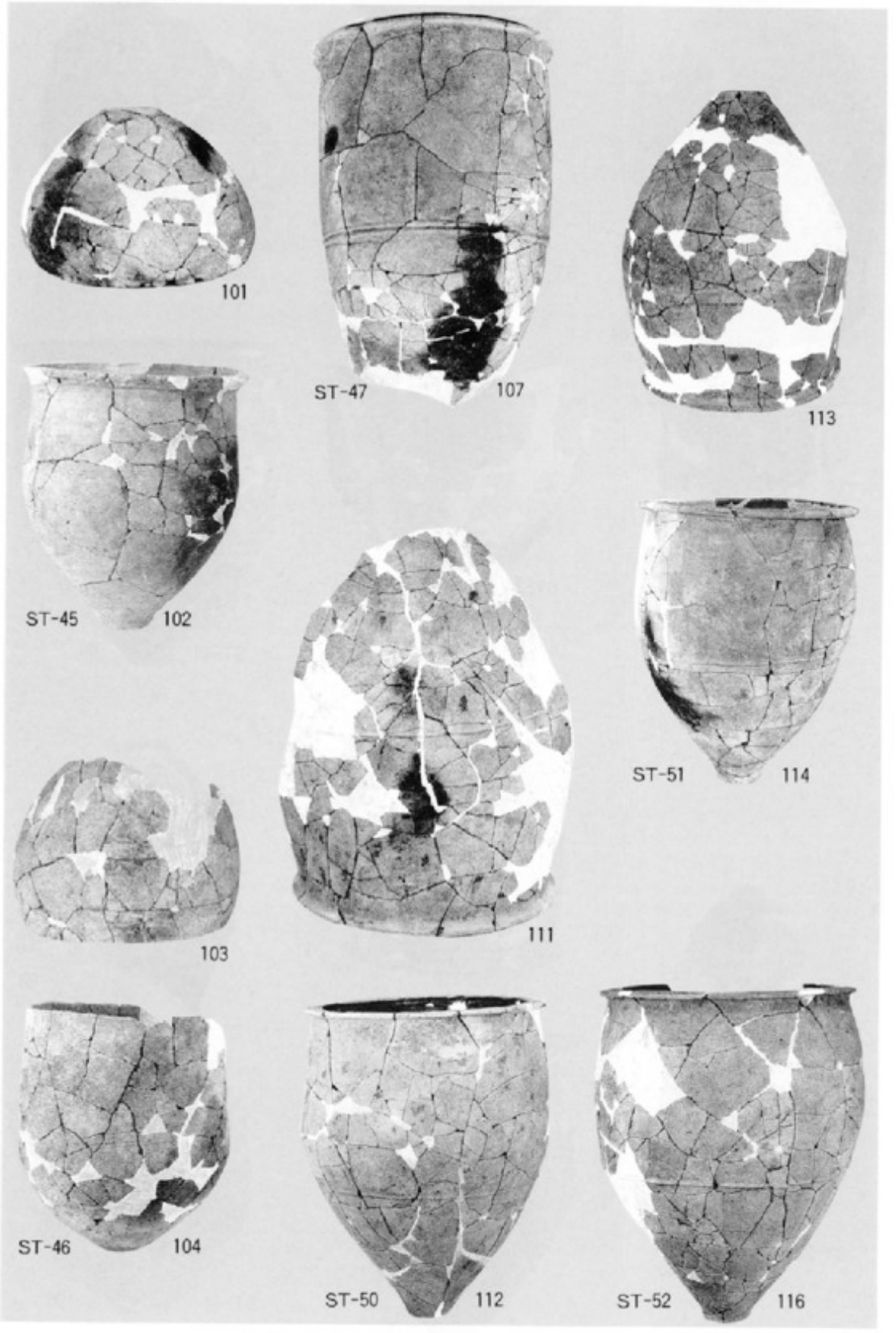
(6) 9～12号火葬墓（東より）


17
24
26
ST-01
18
ST-06
25
ST-07
27
ST-10
33
28
ST-15
37
ST-14
42
ST-08
29
ST-16
44

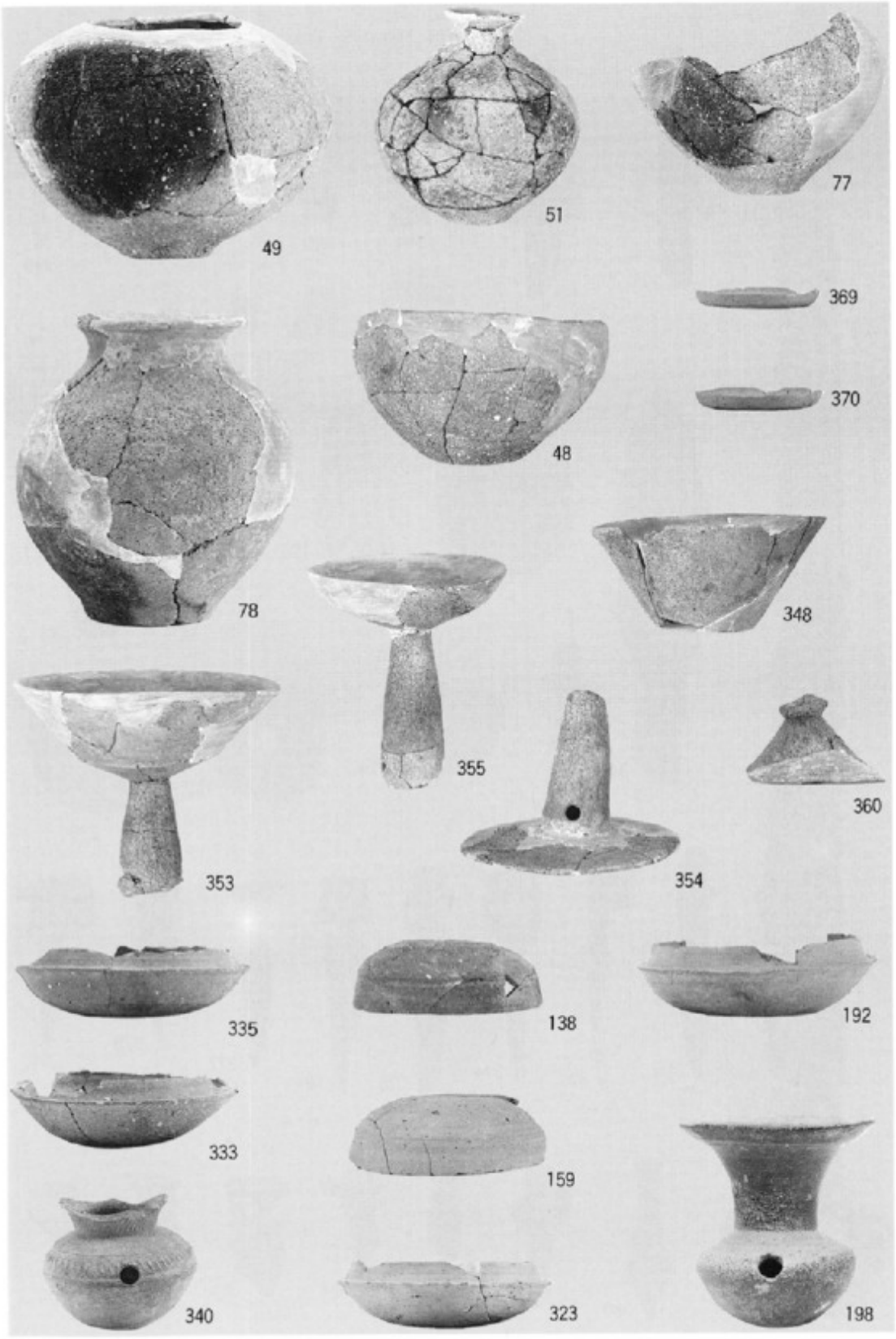
出土甕棺（1/8・1/16）


64
ST-31
76
97
ST-25
65
ST-34
83
ST-43
98
70
85
99
ST-28
71
ST-36
86
ST-44
100

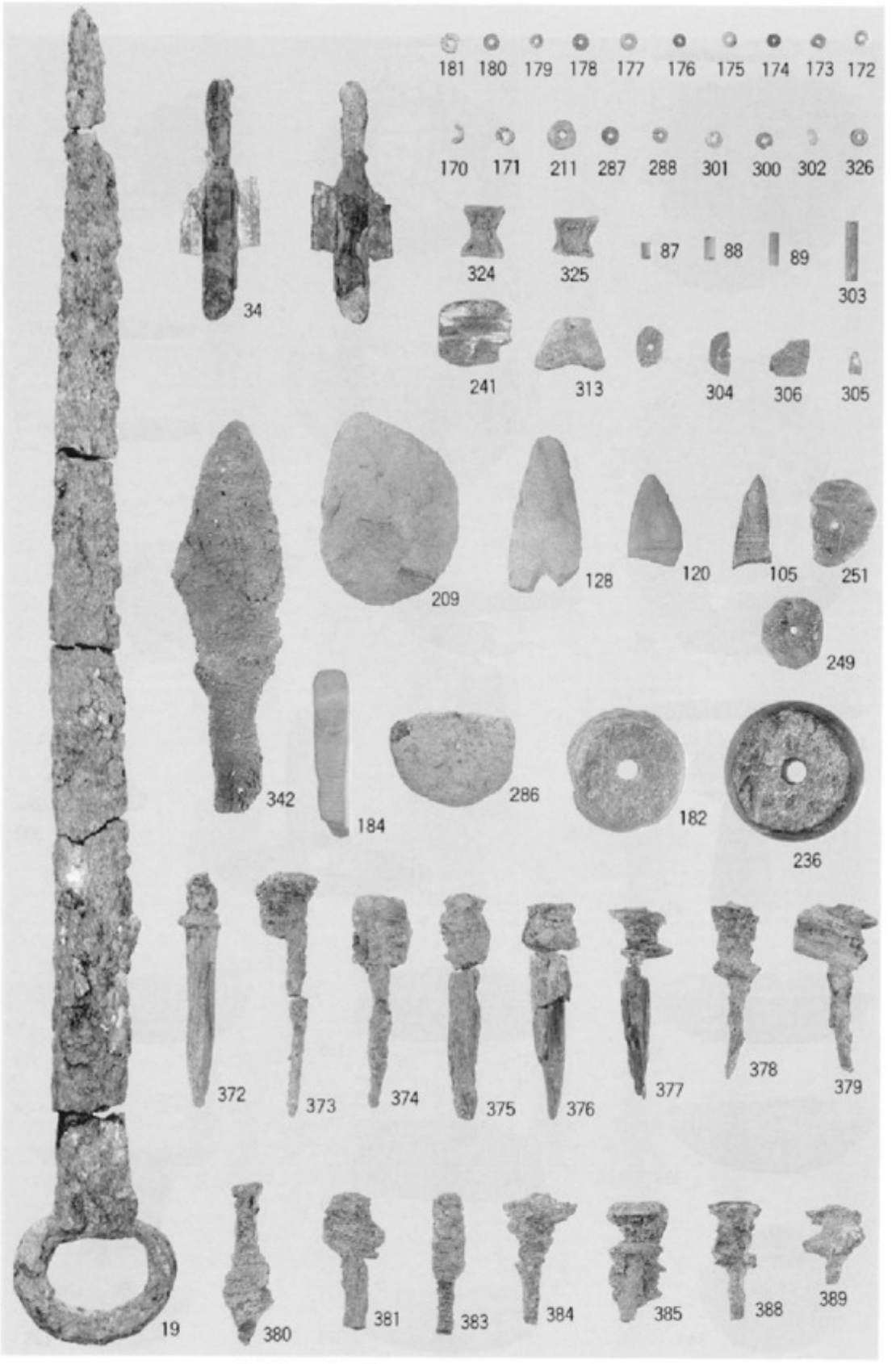
出土甕棺（1/16）


101
ST-47
107
113
ST-45
102
ST-51
114
103
111
ST-46
104
ST-50
112
ST-52
116

出土甕棺（1/16）


49
51
77
369
370
48
78
348
355
360
353
354
335
138
192
333
159
340
323
198

出土遺物（1/4）



鉄器（1/2）、青銅器（1/2）、石製品（1/1・1/2）

福岡市埋蔵文化調査報告書第387集

飯倉唐木遺跡

飯倉C遺跡第2次調査

1994年3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8－1

印刷　福博綜合印刷株式会社